
とある錬金術士と異世界の話

夏月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある錬金術士と異世界の話

【Nコード】

N4971T

【作者名】

夏月

【あらすじ】

とある転生者の工房物語のキャラ達が、異世界で暴れるお話です。一応とあるの本編終了後の話となっております。

封神演義がはじまらない！？（前書き）

封神演義小説版と漫画版がごちゃ混ぜになっています。

記憶のみで書いてますので色々とおかしな部分もあると思います。

封神演義がはじまらない!?

1

殷の国が反逆を起こしたとして、蘇の国へと兵を差し向けたのは、つい最近のことだった。

殷の兵は強く、瞬く間に蘇の都へを包囲した。

窮した蘇の国主は、娘を殷王の後宮へと納めることで争いを収めようとした。

殷の王は無類の女好きだといわれていたから。

そこに、一匹の狐が介入をした。

殷の王宮、謁見の広間での事であった。

「なあ、イヴァン。美人だと思っか？」

玉座に座り問い尋ねるのは、この国の王、子辛。すなわち、紂王。

「さーな。けど、それだけは外すなよ」

王に対する口調とは思えないほど、砕けた口調のイヴァンだった。反対側には肩を竦めるアスランの姿があった。

「これなー。フレイが絶対付けろっと言うから、付けてるけど意味あるのか？」

「あるんだろっな。たまに、不思議なほどナニカを知っているから

ね。フレイは」

そのナニカを感じて、フレイは紂王に首から下げられているペンダントを渡した。

くれぐれも、蘇妲妃が王宮に入ったらコレを手放さないように言い含めて。

「妲妃に何かあるのか？」

「さあ？フレイの頭の中のことなんて判るわけがないさ。けど、聞仲と約束した殷の存続には欠かせないんだろう」

3兄弟がこの国に来たのは、紂王が生まれる遙か昔。

まだ、この国が小国だった頃の事だ。

聞仲が国の太師となり、国を守り始めて100年ぐらいした時の事だ。

なぜ、ザールブルグにいた3兄弟がこの国に現れたかと言うと、フレイが新種のアイテムを作っているときに、ふとした弾みでアイテムが発動してしまったのだ。

アイテムに吸い込まれようとしたフレイ。それを留めようとしたアスランとイヴァン。

結局、三人ともアイテムに吸い込まれここに来たのだ。

最初に我に返ったのはアスラン。続いてイヴァンだった。

2人は違う世界での生活を送る事を決意し、商隊の護衛などをしてお金を稼いだ。

一番立ち直れなかったのは、フレイだ。

錬金術しか取り得がないと思っていたフレイは、自分の存在意義を失い落ち込んでしまった。

それを救ったのが聞仲だった。

出会ってから、フレイはここがどこだか知ったのだ。

<封神演義>と言う漫画の世界。

それか、ここだった。

そして、偶然出会った聞仲を拝み倒して道士となり、一つの宝具を作り上げた。

それが出来上がると同時に、フレイはいつものフレイに戻った。

そして、それ以降フレイ達は殷の王宮に居る。

アスランとイヴァンは太師の推薦で、王への従者として。

そして、フレイは王付きの薬師兼後宮の女官として、一応後宮に籍を置いている。

入室を知らせる銅鑼が鳴り響いた。

体の線を強調した薄い衣を着た一人の女が、頭を下げつつ入ってきた。

広間の視線が女一人に集中する。

「蘇妲妃と申します」

膝き、王に頭を垂れる美女。

玉座の主とそれに従う二人の侍従以外、美女に見蕩れている。

「余が紂王だ。頭を上げる事を許す」

蘇妲妃が頭を上げ、王を見て微笑する。

周囲から溜息が聞こえた。

それほどの美貌だった。

思わず見入る紂王の足を、アスランが踏んだ。
痛みで我に返った紂王は、手筈通りに妲妃に声をかける。

「蘇妲妃を美人とする。皇后に良く仕えるように」

蘇妲妃の顔が強張った。

自分の美貌に絶対の自信があつたのだろう。

皇后は無理だとしても、それに準ずる妃の位は授けられると思つていた筈だ。

それなのに、授けられた位は下から数えたほうが早い美人の位。

今まで数多くの権力者を魅了した千年の狐の妖怪の美貌は、紂王には通じなかつた。

「以上だ。下がってよい」

「はい…」

悔しさを隠すように、頭を下げ広間から出て行った蘇妲妃。

彼女が居なくなり、広間から妙な緊張感が消えた。

「確かに美人だったな、あれは。フレイのコレがなかったら、思わ
ずむしゃぶりついてた」

「アレが後宮に居る間は、ソレ手放すなよ」

「判っているさ。あれを見た時、心が鷲掴みにされたぞ。つかまれ
た瞬間、消えたが」

「ま、魅了されたら戻してやるから、安心していろよ」

イヴァンがにやりと笑った。

「後宮に関してはフレイがどうにかするだろう。とにかく、崑崙の
計画が終わるまで油断は禁物だ」

「ああ。全く、仙道が俗世に介入するなと言いたいな」

「元はと言えば、お前が馬鹿な事をしたせいだろう」

アスランに言われた紂王は、バツが悪そうにした。

「過ぎたことは言っても仕方ない。執務は溜まっている。さっさと処理するぞ」

敗戦国への処理はまだまだ沢山あるのだ。

いくら時間があっても足りない。

紂王は側に控えていた文官に、木簡を持ってこさせ目を通し始めた。

2

私は、許皇后陛下に跪き頭を垂れる女を、鏡越しに見ていた。

ちなみに、この鏡は私が錬金術で作ったアイテムで、鏡を媒介にしてその鏡がある場所を覗く事ができる。

ちなみに、音は聞こえない。

「うん、なんか陰のある美人だわー。漫画版じゃないのね。聞仲と紂王は漫画版だったのに」

アトリエシリーズと違って、今はもうほとんど記憶に残っていない
姫妃の姿を脳裏に思い浮かべた。

レオタードのような衣装を着た淡い髪の色的美女だった、筈だ。

今、私が見ている蘇姫妃と言う女は黒髪が艶かしい美女だ。

「うん、淫美ってこーいう女の事を言うんだね」

私の周りにはいなかったタイプだ。
街では評判の美女だったフレアさんは、穏やかな感じがする美人だった。

皇後も貴妃も美人だが、タイプが違う。

皇后は育ちのよさが前面に押し出した、両家の奥様風の美人だし、貴妃は凛とした感じの美人だ。

「仙人なのは確定しているから、絶対此処から出ないほうがいいだろうなあ」

ドラゴンボール風に言うならば、私の戦闘力は5だ。ええ、カスですとも。

ちなみに、此処と言うのは私の宝具である『フレイのアトリエ』だ。

この宝具は、私が所持している唯一の宝具だ。

俗に言う空間支配型の宝具で、能力はただ一つ。

私のアトリエを形成する。ただ、それだけだ。

アトリエの中には当然素材も含まれている。使用してもある一定の時間が経つと補充されるといふ至れり尽くせりの宝具だ。

この宝具が完成したとき、私は出来るだけここから出ないようにと誓った。

戦闘能力の低い私では、これから先に起こるであろう封神計画に巻き込まれたら確実に死んでしまう。

あんな人外ども相手に戦えるか。

飛び交う宝具を思い出し、体が震えた。

仙道の戦いと言うのは中々に危険度が高すぎる。

出来れば戦いはアスランとイヴァンに任せて、自分は後方支援に専念したい所だ。

魅了解除の薬を量産しつつ、私は深い溜息をついた。

3

妃が後宮に入り、動き始めたと同時に皇后と貴妃を病気休養と言う名目で、実家に帰した。

当然2人の皇子も皇后と一緒にだ。

皇后の親にはきちんとして事情を説明して、納得してもらった。

皇后は殷の北部最大の諸侯の娘なので、ここで関係をこじらせる訳にはいかない。

「貴妃も嫁さんも生存しているのに、なんで武成王は離反したのさ」

そう。封神演義では家族が殺された武成王の一族は殷から西岐へと亡命した。

今回は、家族の誰も殺されていないのに西岐へ行ったのだから、何に不満があったと言うんだ？

「どうも、貴妃が実家に戻されたのが不満だったみたいだよ」

武成王が残した書置きを見ながら、アスランが言った。

「そっちなよ。反乱って事で武成王の一族に追っ手をかけないといけなくなっただね、聞仲」

聞仲の方を見ると、可愛がっていた愛弟子の出奔に口から魂が抜けかかっている。

「聞仲が戻ってくるまでに、お前達に武成王の追撃を任せたいんだけど、頼めるか？」

紂王がアザミ茶を飲みながら行った。

ちなみに、皆が集まっているのは私のアトリエだったりする。盗聴の危険もない一番安全な場所って此処しかないんだよね。

「あまり目立ちたくないから四聖に頼め」

「それはもう手配した。四人は聞仲様のためならば、と了承してくれた」

「なら、問題ないでしょう？」

「ただな、崑崙が介入してきている。武成王の次男が道士の修行をしていたのだが、それを急ぎ下山させ、武成王一行に合流させた。さらに、西岐の太公望が動いた」

妲妃の影響力を抑えることに成功した殷は、封神演義の時のように荒れてはいない。

紂王の統治能力は高いし、聞仲や私達の補佐もある。荒廃する要因がないのだ。

けれど、崑崙は太公望を西岐へと派遣し、西岐は怪しい動きをしている。

直接的な証拠がないので、手出しが出来ていないのが現在の状況だ。

「崑崙が介入するなら、四聖だけでは戦力に不安が残ると言う訳ね」

「そうだ。こちら側最強の道士はこうだからな」

ツツと紂王の目が聞仲に向けられた。

なんか、困ったものを見るような目だ。

「子供時代から可愛がっていたからな！。落胆が大きかったんだろで、頼めるか？」

「しょうがないな。フレイ、今武成王はどこらへんだ？」

イヴァンに言われて、私は鏡を起動させる。

貴妃には鏡の破片で作った耳飾りをプレゼントしていたので、場所の確認は出来る。

「どこら辺よ、ここ？」

地理に疎い私では写った風景で場所を特定することなど出来ない。

「大分、西岐に近いな。ああ、太公望とも合流しているな。道士が増えてる」

道士は独特な服を着ていることが多いので、一目でわかることが多い。

「九竜島からの距離を考えると、そろそろ四聖が来るな。それと同時にこちらにも仕掛ける。紂王、聞仲を連れて部屋から出る。入り口を王宮からそちらに移す。イヴァン、フレイ、戦闘準備だ」

うげ、私も行くのか。

戦闘指揮が一番上手いアスランが指示を出す。

「よろしく頼む」

「あ、これ一応こっそりと姫妃の部屋の隅にでも設置しておいて」

効力最大の安眠香を渡す。

聞仲がコレだと王妃が自由に動けるので、私達がない間動きの制限をしておかないと面倒なことになる。

紂王は安眠香を受け取り、聞仲を引きずりながら、部屋から出て行く。

聞仲が使えなかったら私達の苦勞が増えるので、早目に復活をしてもらいたいものだ。

「それじゃあ、にゃん太ニヤン吉準備して」

「わかりましたにゃ、ご主人様！」

二足歩行をする猫型の妖精人形二体が敬礼をする。

ようするに、某狩りゲームのAILRの形をした妖精人形なのだ。

遊びでホムンクルスの技術を一部応用して、自我を持たせたのだが中々デタラメな人形になってしまった。

「っか、すでに『妖精』人形じゃねーな、アレ」

「いや、つい…」

作った妖精人形もといAILRが鎧と武器で武装してくる。

「ご主人様、バックだにゃ！」

バックの中身を確認すると、攻撃用のアイテムと回復用のアイテムが入っている。

まあ、ギガフラムまでは必要ないだろう。

メガシリーズと状態異常を起こすアイテムを詰めて準備が完了する。

「猫達、フレイを守れよ」

「了解にゃ！ご主人様には指一本触れさせないにゃ！」

ビシツと敬礼をしてアスランに答えるアイルー二匹。

最初は調合しか出来なかった二匹を、イヴァンとアスランが鍛えて私の護衛にしたのだ。

しかも、結構いい腕らしい。

鏡を見ると四聖の一人が宝具で大量の水を出していた。

「行くぞ、フレイ」

「了解」

私はアトリエの扉を王宮から戦場に移動させた。

封神演義がはじまらない！？（後書き）

オリジナルアイテム

遠見の鏡：鏡を媒体にして風景が見れる道具。子機と呼ぶ鏡があれば通信も可能。

妖精？人形：MHのアイルーの形をした人形。ホムンクルスの技術を流用して自我を芽生えさせることに成功した。調合能力のほかには戦闘能力あり。

封神演義がはじまらない！？ 2

4

ふわりと酒の匂いが充満する戦場に、私達兄弟は降り立った。

「酒の匂い？」

「うわ、水が全部酒だ」

自分達の足元にある大きな水溜りがすべて、酒なのだ。
ああ、あつたな。こんなシーン。

「お師匠様、新手です！」

向こう側にいた武吉が、太公望に向かって叫んだ。

「なんと!？」

さらに戦力を増強するのか？ 聞仲もソツがないのう」

いえ、聞仲は現在使い物になっていません。

紂王陛下が一人で奮闘中ですわよ。

「太公望、あの2人はヤバイ！

聞仲の腹心だ！」

武成王が叫ぶ。

そんな武成王の横には、私の姿を見て顔を青くする貴妃の姿があった。

「フレイ様…」

「のう、貴妃。なにものじゃ、あの三人は？」

「男の方については、詳しくは…。ただ、女性の方はフレイ様と言われ、陛下の薬師をしていらっしやいます」

「薬師、のう」

太公望の目が細められる。

私達はそんな太公望に目をやりつつも、二人しかいない九竜島の四聖に

「高友乾、楊森、あとの2人は？」

「えっと、西岐を攻撃に…」

「は！？何勝手なことやってるんだよ。イヴァン、止めに行くぞ。フレイ、後は頼んだ」

ふわりと空飛ぶ靴を履いた2人は、宙に浮かび、西へと向かって飛んでいく。

「はいはい。期待はしないでちょうだい。私は戦闘能力ないんだから。楊森、高友乾、武成王の一族の確保。出来れば無傷で回収するわよ」

反乱に対する見せしめのためにも、確保をして処分をしてしまいたい。

まあ、反逆罪になるので良くて武成王の処刑、悪くて一族郎党の処刑になるのだが。

「ちっ、天化！」

「わかつてるさー！」

武成王と次男が飛び出して、楊森と高友乾の2人と戦闘を始める。

まあ、2人とも相手がオードソックスな戦い方をするのであれば、十分互角に戦えるだろう。
むしろ、太公望のような策士タイプを相手にさせるほうがマズい。
特に高友乾は真面目で融通が利かないから、翻弄されてペースを崩す可能性がある。

「えっと、はじめまして、かな？」

私は滅多に外に出ないから、知らないと思うけどフレイ・ローゼン。紂王陛下の薬師をしております。私達は、殷を出奔した武成王一族の捕獲の任を受けて行動しております。西岐の方はどうぞ、ご遠慮くださいな」

むしろ、面倒だから帰れ。

「そうはいかぬ。武成王が朝歌に帰ったら処刑じゃ。それをさせるわけにはいかぬ」

「国の重責にあるものが、それを放り出して別の国に逃げるなど許されないことです。って言うかさ、あんた達のやっている事は、殷への反旗になるのは理解してるよね？」

「いまさらじゃ」

まあ、軍備の増強など結構なグレーゾーンに踏み込んでいるからな。

「ワシも聞いたことがあるぞ。聞仲の弟子の女道士の話を、な」

「あら、有名人」

「あの聞仲の弟子で、不可思議な宝貝を使うとな」

「そんな話になってるのね」

錬金術のアイテムって言うのは、とりようによっては宝貝に見えるらしい。

けど、実際には宝貝は私が持っているフレイのアトリエのみだ。

「戦闘力が欠片もないことも分かっておるわ！行くぞ、スーピー！」
「はいです、ご主人！」
「にゃん太、にゃん吉、迎撃せよ！」
「わかりましたにゃー！」

戦いが始まった。

5

太公望と私の戦いは、私が何かをする前に終わった。

ええ、お猫様無双でございました。

太公望が、打神鞭を振ろうとした瞬間、猫様の姿が消えて次の瞬間には、太公望が真横に吹き飛んでおりました。

そして、今お猫様が何かをやり遂げたように額の汗を拭っていました。

その手にあるグラセン鉋製ピッケルには、べったりと血が付着しておりました。

「なんて身も蓋もない」
「とどめにゃ」

ピッケルを振りかざし、壁にのめりこんだ太公望にトドメをさそうとした瞬間、上からロボットが降ってきて、太公望がのめりこんだ岩ごと掴み上げ、飛んでいった。

「あ、逃げた」

「逃げましたにゃー」

「逃げたにゃ」

トドメをさせなかったのは残念だが、これで私の身の安全は確保された。

後は…。

「武成王一族の確保のみ」

フラムを握り締め、振りかぶって

「一球入魂！」

投げた。

ちゅどーん！

フラムは交戦していた楊森や高友乾を巻き込み、爆発した。

後には焦げる武成王とその息子天化。そして、ズタボロになった楊森と高友乾の姿があった。

なぜ、楊森たちが武成王のように一発で戦闘不能にならなかったか
と言うと、ただ単に慣れである。

事あるごとにフラムで吹き飛ばしていたからなあ。

さすがに、フラムには慣れたのだろう。

ちなみに、メガフラムだとまだ簡単に戦闘不能に陥ることは言っ

おこつ。

ギガフラムなんて使った日には、多分生きてないだろうなあ…。
テラフラムなんて、考えるだけで恐ろしい。

とにかく、武成王一族の身柄は確保出来た。

今、全員生きてる縄で縛っている。

武成王の一族の人間は、皆優れた武人なのでなんとか縄から逃れようとするが、効力Sの縄だから当然無駄だった。

後は、アスランとイヴァンが王魔と李興覇を連れて戻ってくるだけだ。

今、西岐に喧嘩を売るより、西岐から喧嘩を売ってもらったほうが有利だから、戦争の火種になるような事態は避けたい。

アスランがなんとかしてくれたらいいけど…。

6

王魔たちを連れて戻ってきたイヴァン達の機嫌は最悪に悪かった。

「敵は倒したの?」

「トドメをさそうとしたら、逃げられたよ」

アスランは頬に血をつけており、笑っているけど怒っているのが良く分かる。

「あの、おかま。よくも、フレイの姿取りやがって…次は殺る」

うん、楊ゼン冥福を祈っておこつ。

アスランは攻撃能力はイヴァンに劣るけど、搦め手を使ってくるの

でタチが悪い。
ある意味一番太公望と似たタイプなのでは？
いや、漫画版妲妃か？

「俺の方もなんか変なロボットが出てきて逃げられた」

那托の方は大乙真人が出てきたか。
さすが、生みの親。過保護なことだ。

「まあ、目的は果たしたので朝歌に帰りましょうか、ねえ、武成王」
多分、朝歌に帰った武成王一族は処刑されるだろう。
殷を裏切り、亡命しようとした事実は重い。

「帰る頃には聞仲は元に戻っているだろうから、冷静な判断が下せるだろう」

例えそれが自分と共に戦った武成王だとしても。
聞仲は、殷を守るためなら犠牲に出来る事を私は知っている。

「家族は関係ねー。俺が、独断で…」
「申し開きは朝歌でお願いしますね。私は政治的にはノータッチなんですから」

難しい事は聞仲や紂王に任せるに限る。
私は所詮一介の錬金術士だ。
政治は範囲外だ。

「フレイ様…」

「こんな事になって残念ですよ、貴妃様。けどおそらく、貴妃様の

命は助かるでしょう」

おそらく貴妃位を剥奪され、監禁と言う事になるだろう。それでも、他の武成王の一族が処刑されるのに比べたら、命だけは助かるのだ。

「一人で命を永らえたとしても、嬉しくともなんとも……」

「それ以上は言わないほうがいいでしょう。静かに一族の冥福を祈られる事を願います」

もし、反乱なんて起こそうとした時は、彼女の命はなくなるだろう。貴妃でない彼女を守るモノはないのだ。

「さあ、四聖帰るわよ」

「西岐は放っておいていいのか？」

「あちらから宣戦布告をしてもらった方が都合がいいのよ」

非がない今の状態ならば、革命とまではいかずにただの反乱で終わらせることが可能だからだ。

「あとは、聞仲たちのお仕事」

私のここでの仕事は終わったのだ。

後始末は他の人間の仕事だ。

自分で後始末のことまで考えなくていいのって、楽だなー。

封神演義がはじまらない!? 3

7

武成王を朝歌に連行し、聞仲に引き渡した。私達が帰ると、聞仲はすでに元に戻っていた。そして、無言で武成王一族の処刑を執行した。

色々と考えることがあったのだろう。

数日の間は、顔色も悪く言葉も少な目であった。

連日アスランとイヴァンが、私から貰った酒を片手に夜な夜な訪ねていたようだが。

イヴァンはともかく、アスランと聞仲は酒が強いから当然度数の高いく冒険者の酒を山のように持っていくんだよ。

おかげで、一時期在庫が品薄になってしまった。

慌ててにやん太達と調合に勤しんだよ。

まあ、聞仲だけでなく珍しい酒が飲めると、紂王が乱入したせいもあるんだけどね。

そんな事をしていると、西岐方面の関所から早馬が届いた。

西の大諸侯姫昌の起兵。

北に攻め入り崇黒虎を下し、配下に加える。すなわち、殷王朝に対する謀反。

「アスラン、全兵の招集をしる。すぐに点呼を取り、出陣をする」
「了解」

「張奎、東と南の諸侯にも兵を出させる」

「わかりました！」

アスランと張奎が走って、聞仲の執務室を出て行った。

「フレイ、紂王様と王宮のことは頼んでいいか？」

「了解。後顧の憂いはないようにするから、安心して。王宮の魅了対策は終えたから」

そう。にゃん吉には、ガツシユの木炭を調合させてたんだよね。

それを明かりの松明に、一つずつ入れて魅了効果を常時打ち消すようにしているんだ。

魅了が無い王妃などクリープの無いコーヒーも同然！

いや、漫画版の策士王妃だと、これだけじゃあ心もとないけど、どうやら小説版らしいのでなんとかなるんだな。

いや、小説版でよかったよ。

「イヴァン、紂王陛下に奏上する。付いてきてくれ」

「はいよ。んじゃ、フレイ」

イヴァンが手を振り、聞仲に次いで部屋から出て行く。

さて、私もアトリエに戻りますかね。

8

アトリエに戻ろうと聞仲の部屋を出て、歩いていると廊下の柱から一人の美人が出てきた。

「ようやく、会えましたわね」

「姐妃…」

蠱惑的な笑みを浮かべる姐妃。

私は懐に手を入れて、じわじわと下がる。

「妾の邪魔をしてくれたのが、このような小娘だったなんて」

「そりゃ、1000年の狐と比べれば、誰だって小娘でしょうよ」

姐妃の瞳が、獣の瞳に変わり耳が生え、爪が鋭くなる。

「それも、今日でおしまい。さあ、覚悟を決めるのね」

その言葉が終わると同時に、私は懐から取り出したあるものを姐妃へ向かって投げた。

余裕を持ってそれを避けようとした姐妃だったが、いきなり方向転換をしてソレを口にくわえた。

「狐用に調整したく手なずけペンデルは、さすがの効果ね」

そう、私が姐妃に向かって投げたのは、手なずけペンデルと言うアイテム。

獣系の魔物が思わず食べずにはいられない、罌餌だ。

普通は睡眠状態にするのだが、今回はちよつと弄くって麻痺状態にするようにしている。

姐妃は、私の思ったとおりその場に屈んで、動かなくなる。

「さて、と。念の為に…」

私は、秘密バッグからアイルー人形を取りだす。

「さて、私の身を守ってね、にゃん吉」

「了解にゃー」

これで、私の身の安全も確保された。

後は、王妃の処分のみ。

「さようなら、王妃」

ラングレヘルンを取り出して王妃に投げる。

まあ、多少王宮が破損するが、王妃を始末する犠牲と思って諦めて貰おう。

ビュオオオオ

と一陣の風が吹きぬける。

「ご主人様、雉が狐を浚っていきましたにゃ」

「ちっ、王妃の妹か」

王妃は三姉妹で、妹が二人いたはずだ。

妹の一人が見ている、王妃の危機に助けたのだろう。

炸裂したラングレヘルンが目標を見失い、冷気を廊下にはら撒く。

「やべ、聞仲に叱られる」

廊下は見事に氷漬けになった。

王妃の始末が出来てないのに、廊下がこの有様じゃ聞仲怒るだろう

なあ。

どうやって言い訳しよう…。

9

あれから私は聞仲に叱られ、氷漬けとなった廊下の復旧を命じられた。

渋々私は、廊下を解凍した。

最初は面倒なので、フラムを使って解凍しようとしたら、聞仲に後ろから蹴られました。

全く。出陣前に何をやっているだけか。

聞仲は紂王陛下との話し合いで、戦場の選定などを済ましていた。

途中で東と南の諸侯との兵と合流しないといけないので、結局は朝歌に近い平野に決まった。

そこの地名は牧野と言う。

奇しくも小説と同じと言う訳だ。

聞仲達は、情報を集めながら何度も会合を開く。

私は完全に蚊帳の外だ。

いや、戦略や戦術は詳しくないからいいんだけどさ。

その間、王妃はと言うと、居るか居ないか分からないぐらいに大人しかったです。

もう一度ぐらい何かを起こしそうな気がするんですけどね。

数日後、聞仲たちは出陣して行った。

後に残るのは、私と紂王陛下と数少ない兵士のみ。

そんな時でした。

崑崙の道士が、朝歌を襲撃したのは。

「道士が人間の都を襲うって何よ!？」

にゃん吉とにゃん太を両脇に、私は王宮の中を走っていた。

私が守らなければならぬ紂王陛下は、何をトチ狂ったか最前線で槍を振り回して暴れています。

なので、私もそちらに向かわなければいけません。

私の後からは、唯一私が編成した医療小隊が付いてきて、兵士の傷の手当てをしています。

と、言っても私が調合した薬を塗るだけです。

閲兵を行う広場では、陛下が槍一本で道士と思いき人とやり合っていました。

「陛下生きてますよね!？」

「死んでないですよね? 返事してください」

「死んでいたら返事はできない…とお!」

私の言葉に応じていたら、その隙を付かれそうになったので、慌てて紂王陛下が防ぐ。

あれ、もしかしてやぶ蛇になっちゃった?

「師匠、来たさ!」

「ならば、こちらは任せておけ!

行け、天化!」

天化?

もしかして、黄天化?

え、確か処刑された筈。

「なんで生きてるの？」

「師匠が直前に俺たちだけ助けしてくれたさ！」

そんなのアリですか！？

ちよ、アスランそれならそうと報告してよおおおおお！！

封神演義がはじまらない!? 4

10

黄天化は私では到底見切れない速さで、剣で切りかかるのをにやん吉が受け止める。

そして、間髪入れずにやん太が天化に殴りかかっていく。

「ちっ、邪魔な猫さ」

大きく後ろに飛び、体勢を立て直す天化と睨み合う私たち。

紂王陛下だけは、道士達と互角に戦ってはいるが、他の一般人たちはそもいかない。

最低、紂王陛下だけは逃がさなければならぬ。

つて言うか陛下がいなかったら、く逃げ足のくつゝの力でさっさと逃げ出すのに。

なんで逃げないんだよ、陛下。

どうする、どうする、私!?

時間はあまりない。

徐々に傷が増えてくる紂王陛下を盗み見て、私は覚悟を決めた。

「あんまりいい手とは言い難いんだけどねえ……」

私は胸元にかけていたペンダントに、魔力を込めた。

これだけで物凄く防御が固くなるのだ。それこそ、亀が甲羅の中に潜ったかのように。

そして、ポーチから取り出した瞬間、天化が切りかかってくる。慌てて持っていたものを手放し、後ろへ跳ぶ。

キラリと光るライトセイバー（仮）が、私の居た空間を切り裂き慌てて手を離れたモノを切り裂く。

「あんたの爆弾は厄介さ。悪いけど使わせないさ」

戦場に舞う粉。

それが風に流れて紂王陛下の下へと流れていく。

まあ、本来の予定通りだからいいんだけどさ。

チラリと陛下と天化の師匠らしいジャージ姿の男を、チラ見する。その間、切りかかってこようとする天化を猫達が防御する。

さてさて、準備は万端って所ですか。

「ねえ、黄天化。確かに私は爆弾を良く使っけど、一番得意なのは爆発物などの攻撃系じゃないのよ？」

クスリと嗤って、黄天化に話しかける

今、私がすべき事は時間を稼ぐ事。

そして、紂王を守る事。

「なに言ってるさー！」

「私がねー、最も得意なのは……」

会話の途中で、天化に切りかかるジャージ男。

まさか味方から切りかかれるとは思ってもいなかったのか、慌ててライトセイバーで受け止めるも僅かながら傷を負う。

「状態異常を起こす事。まあ、爆弾は即効性が合って便利だけど、得意なのはこーいいう薬剤なのよ」

「師匠!?!」

「って、聞いてないか」

本来ならば陛下や周囲の兵士にもある程度影響が出てもおかしくないのだが、私が王妃の魅了対策として魅了防止の装備品（紂王所持）や、アイテムを使用させているから、味方には一切の魅了系の攻撃が効かない。

けれど、敵にはそういった挺入れが一切無いので良く効く。

奇しくも、私が漫画版の王妃と同じ事をしたって訳だ。

見事に引つかかった二人を嘲笑い、私は<ラングレヘルン>を取り出した。

「師弟共に逝け」

師匠に手一杯で私にまで意識を回していなかった黄天化達の頭上に浮かぶ無数の氷。

甘い甘い魅了の粉が乱舞する中、巨大の氷の塊が宮廷に降り注いだ。

11

リンと冷たい空気の中、傷だらけの黄天化と、それを守るかのよう

なジャージ姿の天化の師匠。

「師匠…?」

おそらく、私の攻撃前になんとか正気に戻り、弟子を攻撃から守ったのだろう。

淡くボケていく師匠の姿に、天化の顔が歪む。

一言、二言何かを言うのと魂魄が封神台の方へと飛んで行く。

ああ、あの邪魔な台だなあの台。

全てが終わったら、閻仲と一緒に壊しに行くか。

「あああああああっ!」

涙を流しながら号泣する天化の姿に、私は眉一つ動かさない。

さすがに、庇われたとは言えラングレヘルンは効いたのだろう。

傷だらけの体を押して、私の方へと少しずつ近寄ってくる。

「許さないさ、許さないさ。家族どころか師匠まで!」

「殺される覚悟が無いのなら、戦場にまで来るんじゃないわよ。死は誰の元にも平等でやってくるものよ」

それが道士と言う寿命から解放されたものでも、殺されれば死ぬのだ。

私は両手にメガフラム数発持ち、冷たく言い放つ。

「一人だけの残っていても辛いだけでしょ。さっさと逝きなさい」

「お前だけは殺してやるさあああああああ!」

「お前を殺すのは余だ」

ザシユリ

天化の胸に赤い華が咲いた。

それを成したのは、先程まで戦っていた相手を失った紂王子辛。

武技は国一番で、政治的にも有能な名君。

信じられない人からの攻撃に、天化の顔が歪み、私に届かないことが悔しいのか私を睨みつける。

「お前を殺すのは国王である余だ。フレイ・ローゼンではない」

トドメとばかりに、もう一撃天化へと槍を振るう。

天化はすでに避けられない。

気力だけで動いていた状態だったからだ。

「それを胸に抱いて死んでいけ」

天化の手から剣が落ち、光が消え転がる。

淡い魂魄の光が天化を包み込み、魂魄台へと飛翔した。

「すまん、余計な事をして」

私は何も言わなかった。

結局、どいつもこいつも私に過保護なのだ。

血だらけの手で、私の頭を撫でる手は優しい。

「まず、手当てだね」

そろそろ戦闘は終わるだろう。

巨大な力の持ち主が、朝歌に近寄っているのが分かるから。それは、私が良く知る力。すなわち、聞仲の気配。

「そうだな。それから、被害状況を調べて修復。その後、反乱を起こした西岐やその他の国の始末をつけねばなるまい」

西岐の国主である王を名乗った姫甕の一族郎党は処刑だ。

姫昌には100人の子供が居た筈なので、それを全て狩り出して殺さなければいけない。

直接的な戦闘が終わったとしても、まだまだする事はあるのだ。

それが終わった後、今回道士を西岐に派遣した崑崙への対応だろう。基本的に仙道が国に関わる事は禁忌なのだ。

聞仲も道士としてではなく、大師としてのみ関わっている。

道士としての能力は、仙道が絡むときにしか使っていなかったのだ。

それなのに、西岐は道士を大量に西岐に派遣して、今回の戦争となつた。

思惑はどうであれ、崑崙の行いは仙道としてのマナー違反だ。

今後このような事が起こらないように、キッチリと後始末をしなければいけない。

私はくアルテナの傷薬を紂王の傷に塗りこみ、傷を瞬く間に治してしまう。

「行くぞ、フレイ。聞仲と合流し、全てを終わらせる」
「はい、陛下」

今回の戦争で荒れた国を建て直し、敗戦国への処罰、そして狐の行方を探し出して捕縛。

やべー、する事沢山だし。

過労死しなきゃいいけど、皆。

私？

私はただの薬師ですから。

のんびりと薬を作りながら、みんなの帰りを待っていますよ。

それでは、この辺りで今回の殷周革命に関わった私達の話は終わりにしようと思う。

この後紂王は長く、この世を治め、次の国王も紂王までとはいかなかったが、過分なく国を治めた。

私達がこの国を離れたのは彼が死んでからだった。

なぜかと言うと、私がこの世界に来る事になった原因となるアイテムの材料が手に入ったからだ。

材料は崑崙の廃墟から、探し出して確保したものを細心の注意を払って調査した。

そのアイテムがようやく完成した。

老年に差し掛かり、死期の近い紂王を見取ってからこの世界から離れると決めたのは私達三人。

紂王が死んだその日、聞仲に国を離れる事を告げ、私達は世界を飛んだ。

聞仲の寂しそうな顔が印象に残ったが、それでも私達はザールブルグへの郷愁が捨て難かったのだ。

例え100%もこの世界に戻る保証が無くても、1%だとしても賭けたかった。

そして、その僅かな希望に欠けて私たちは世界を飛んだ。

飛んだ私達が一番最初に見たのは、見慣れたアトリエだった。持っていたアイテムがボロボロに崩れ落ちた。

「フレイ姉、とりあえずちよつと出てくるわ」

「俺も騎士団に顔を出してくる。どれくらい時間が経ったか知りたからね」

2人は慌しくアトリエを出て行く。

私は行く時に散らかってしまった室内を見て、大して時間が経っていないだけと言いたいけど言えなかったなあ。

「それにしても、得難い経験したわ」

うんうんと頷きながら、脳裏に浮かぶのは聞仲の顔。ぶんぶん頭を振ってそれを追い払うと、

「『フレイのアトリエ』便利だったなあ。こつちでも使えないかしら？」

いでよ！ なんちゃつ、て…」

私の前に見慣れた扉。

「マジかよ……」

私は引きつった笑いを浮かべながら、扉を開けた。

フレイと奈落の物語（前書き）

仲間に対するアンチが多大に入っています。

それが肌に合わない方は、読まない事をお勧めします。

フレイと奈落の物語

1

いつものように調査をしていたら、ふと風を感じたので辺りを見回してみたら、錬金釜が光っておりました。

「何か調査したかな？」

錬金鍋に近づいて中を覗いてみたら、透明な腕が現れて私を鷲掴みにして、錬金釜に引きずり込んだ。

引きずり込まれる瞬間、たまたま近くにおいてあった旅道具一式を掴めたのは、幸いだっただろう。

悲鳴をあげる間もなく、腕に引きずり込まれどんどん沈んでいく。

果たして私の錬金釜はこんなに深かったのだろうか？

重たい水のような空間の中で、私は必死に自分の状態を確認しようと、視線をめぐらす。

栗色の髪と、私より明るい赤い髪が目に入る。

そして、少し先には光があった。

(どこよ、ここ?)

ゆっくりとけど確かに動いている水の中私達は光へと進み、そして光へと飛び込んだ。

ドストドスト

鈍い音が三つして、私と他2人は地面に投げ出された。

「いたたたたた」

幸い私は一番上に落ちたので、怪我らしい怪我は無い。ちなみに、一番下になったのは栗色の髪の子だった。

「どうよ、こい」

辺りを見てみても、全く知らない場所だった。次に、私と一緒に落ちた人を改めて観察した。

明るい色合いの赤くて長い髪の少年と、栗色の髪のスレンダーな少女。

思わず少女の胸元に視線が釘付けになる。

「メロン並み…いや、違う。これ、知ってる」

少年の顔と少女の顔に見覚えがあった。

「テイルズだ。テイルズオブジァビス！」

私はプレイしていないけど、兄弟がプレイしていて横で見っていたので覚えていたのだ。

もう20年以上前なのに、よく覚えていたな私。ちよっとだけ自分を褒めた。

けど、このゲーム、正直私は大嫌いだった。

いや、主人公の赤い髪の少年のルークはいいんだ。

その仲間が大嫌いだったんだ。
どいつもこいつも責任感の無いエゴの塊だった。

私は弟によくプレイできるね、と聞いたら、やり始めて途中で投げ出すのは負けた気がして嫌だと答えてきた。
弟もムカついていたんだな」と、その時知ったよ。

「これ、一番最初に超振動起こしたときだ」

一番最初のイベントだったはずだ。

この時初めて、王命で軟禁されていたルークは外の世界を知るのだ。

「とりあえず、ルークを起こすか」

栗色の髪の女のティアは、以降無視する事に決めた。
関わったらロクな事になりそうにない女だからだ。

自分のせいで飛ばされたルークを、民間人のルークを、武器を持っているからと言って平然と前線に立たせるような女だからな。
拳句の果てに王族に対してタメ口はきくわ、ってこれは他の連中もか。

とりあえず、仲間とは係わり合いにならずにいききたいものだ。

とりあえず、ルークを起こしてさっさとこの場から逃げ出そう。

腕に引きずり込まれるときに、幸いにも武器と旅道具は持つてくる
ことが出来た。

お金や、お金代わりとしてコメントや猫目石もいくつがある。
最初の行動には困らないと思う。

「ねえ、ちょっと起きて。ねえってば」

優しくルークを揺ると、ルークが

「んんんっ……」

小さな声をあげて、目を覚ました。

2

「誰だよ、お前！」

初めて会ったルークに少し警戒されてしまったフレイです。

「えと、フレイ・ローゼンって言うんだけど……。なんで、ここに転がっているのよ？」

「俺、家に知らない女がいきなりきやがって、ヴァン先生に切りかかって…先生を俺がかばったんだ。そしたら、なんか変な音が聞こえて、ここにいたんだ」

ポツリポツリと自分に起きた事を話してくれるルーク。

「そっかー。私は家にいたらいきなりここだよ？」

「それも凄いな。って、この女！」

ルークがまだ寝ている女を指差して

「こいつが俺の家を襲ったんだ！」

その声に反応してティアの意識が戻り始める。
ゲゲ、ヤバイ。

「ちょっと、隠れよう!」

私はルークを引っ張って、一緒に茂みに隠れた。

ティアが目覚めれば、おそらくゲームと同じような展開になるだろう。

つまり、ルークを前衛にして自分は後衛で戦闘をすると言う道だ。

正直、いきなり人の家に押し入った人物が、事故だったと反省して家まで送ると言って、いきなり戦闘で前衛に叩き出すなんて、ありえない。

でも、ティアにとっては自分が後衛で木剣を持ったルークが前衛なのは当たり前のことなのだ。

彼女の中の常識がそうなっているのだ。

私が出自分の常識を説いても、彼女は納得しないだろう。

そもそも、人の意見をちゃんと聞いたり相談するのならば、人様の家に押し入って刃傷沙汰なんて起こさない。

私はルークの口を塞ぎ、茂みで息を殺す。

起きたティアは、自分の状況を把握するとあたりを見回してこの場から離れていった。

「行ったか…」

「ぶはっ!」

いきなり、なにすんだ!？」

「ま、まだ静かにしてよ。あの女が戻ってくるかもしれないんだか

ら

私が強い口調で言うと、ルークはようやくなんで隠れてたか納得してくれた。

「誘拐犯とご対面なんてしたくないでしょ？」

「当たり前だ。あの女、いきなり俺の家に譜歌とかいうの使ったんだぞ！」

確かティアが使える譜歌は、眠り状態にするんだったかな。うーん、私がプレイしたわけじゃないので、うる覚えだわ。

「うん。だから、私は犯罪者には会いたくないのよ。君は、自分がどこから来たか分かる？」

「俺、家で軟禁されてたからこんなとこ来たことねーよ」

「私もここは知らないし。さて、どうやって帰るか」

おそらく、話が一段落したら帰れるのだろう。前回封神演義の時は、話が終わったら帰れた。今回もその可能性が高そうだ。

「俺、バチカルってとこに住んでんだ。フレイは？」

「んー、私孤児ですつとふらふらしてるんだよね」

さすがにザールブルグで錬金術士してますなんて言えない。

この世界では、戦災孤児だという事にしておく。問題は色々あるけど、これなら身元が不確かでもどうにかなるだろう。

「そっかー」

ルークがちょっとだけバツの悪そうな顔をした。別に嘘だから気にしなくてもいいのになー。いや、ルークは知らないからしょうがないか。

「まあ、とりあえず今からのことを考えようか。とりあえず、君の名前を覚えてくれる？」

「いつまでも、君じゃ呼びにくいし」

「一体何度ルークと呼びそうになったか。」

「ルーク。ルーク・フォン・ファブレ」

「ファブレ!？」

「キムラスカの王族の!？」

「知っているけどびっくりしておく。」

「お、おお」

「うわー、敬語使ったほうがいいですよね?」

「別にいいよ。今更使われたって、背中が痒くなる」

「うん、ルークならそう言ってくれればいいよ。」

「じゃあ、誰もいないところなら敬語使わないでいかせてもらおうね。さすがに、ルークの事を知っている人がいる状態では、怒られちゃうから」

「実際は怒られるどころではないんですけどね。王族にタメ口なんて、処刑モノですよ。」

「それでいい。んで、これからどーすんだ？
ここから出るのか？」

まだ夜といってもいい時間帯だ。

「今動いたらモンスターの活動時間っぽくて危険だし、誘拐犯の女と会う可能性が高いので、一晩ここで夜を明かします」

幸い私が旅道具持っているしねー。

3

私がテントを張り、枯れ木を集めていたらルークも手伝ってくれた。基本的に優しい子なんだよね。ちよつと意地っ張りなだけで。

「これでいいのか？」

「うん、ありがとう。さ、火を起こして食事にしようか」

秘密バッグからポテトスープの材料と、デニッシュを取り出して食事の用意を始める。

火はハツカマンと固形燃料を使って、簡単に着火できてかつ長く火が持つようにした。

一応モンスターが来たらいけないので、見張りをしないとイケないしね。

「これがメシか？」

「うん。ルークの家で食べているような物はちよつと用意できないけどね。あ、お茶を入れようか」

やかんを取り出し、水を入れ火にかける。

「……よく、その鞆にそれだけ入ってるな」

「お、乙女のお秘密」

やっぱり怪しいよなあ、この鞆。

ルークだけなら誤魔化せるが、頭だけはいいジェイドなら絶対に怪しまれそうだな。

奴等がいたら使わないようにしないと…。

私はハーブティーをいれ、ルークに渡した。

「へー、初めて飲んだ。結構ウマーな」

「口に合ったようで良かったわ。こっちのパンは、保存食用だから口に合わなかったら無理しなくていいからね。あ、フルーツもあるよ」

ランドーを取り出して、渡してやる。

「始めて見る、こんな果物」

「あははは、辺境にしか生えていない野生の植物だからね」

うん、なんかどんどん墓穴を掘っているような気がするの私だけ？

「甘酸っぱいな」

「あ、苦手だった？」

「イチゴみたいな味だな」

ルークがランドーを食べている間に、食事の用意をしてルークに手渡す。

「これがポテトスープで、こっちがパン。ゆっくり食べていいからね。」

私はささっと食事をしてしまっ。

育ちの良いルークの食事は、私と比べると時間がかかった。

その間にテントで寝る為の準備をする。

下に毛布を敷いて少しでも快適に寝れるようにして、上にはくぬくぬく毛布>を使ってもらう。

ご飯を食べていると、ルークが眠そうに目を擦っていた。

「ルーク、眠たいなら寝てていいからね。」

頷いたルークがテントに入る。

さあ、私は寝ずの番だ。

秘密のバッグから取り出した<持続性栄養剤>を飲んで、私は焚き火の前に陣取った。

調査に慣れた私に一晚ぐらいの徹夜なんて軽い軽い。

賢者の石なんてほぼ不眠不休で30日だもんね！。

その時に比べれば！

フレイと奈落の物語（後書き）

簡単アイテム説明

秘密バッグ：アトリエから好きなアイテムを取り寄せたり出来る鞆。当然、アトリエにアイテムを送る事も出来る。

固形燃料：火を長く保つ事が出来る燃料。これ単独でも使えるが、薪があつた方が効果アップ。

デニッシュ：日持ちのするパン

持続性栄養剤：効果が持続する栄養剤。飲んでいる間は疲れ知らず。けど、あとで一気に反動がきそうだなあ…。

フレイと奈落の物語2

4

次の朝、予定通り私とルークはこの場所を出発した。
心配していた夜間の魔物の襲撃は無かった。

「昨日は夜だったからあまり分からなかったけど、綺麗な所だったんだな、ここ」

「だねえ……」

私達が居たのは、白い花が咲き乱れている花畑だった。
その一部分がポツンと開けている。

多分、その場所に私達が現れて花を吹き飛ばしたのだろう。

「んじゃ、行こうかルーク」

「ああ。俺は、後ろなんだよな？」

「そう。絶対に敵と戦っちゃ駄目だよ」

ルークに実戦経験は無い。

屋敷の中で、僅かに手ほどきされた剣が使えるだけだ。

いや、それでも私よりは強いとは思っただけだね。

私、テイルズ世界のビツクリ人間達に比べたら身体的にひ弱だと思っし。

けど、実戦経験がないというのが不味い。

私も初めて生き物の命を奪ったときは、手が震えたりした。

私の場合は、フォローが出来る人間が居たけど、この場にフォローが出来るのは私しか居ない。

しかし、私はフォローを入れながら戦えるほど強くは無い。

それに、王族に前線に立って戦えなんて言えないしね。
まあ、私が倒せなくてどーしようもなかったらルークにも戦っても
らうけど。

私は杖を構えて。ルークも、木剣を片手に握って獣道だろう道を辿
っていった。

おそらく、この道を辿れば出口につけるだろう。
辿っていく道は鬱蒼としていた。多分、森かなんかなだろう。
いや、地形的に渓谷か？

細い道を進んでいくと、モンスターに出会った。
小さな草みtainなモンスターは、なんとか杖で5発ばかり殴って倒
すことが出来た。

いや、数が多くて一匹ルークに向かったモンスターを、ルークが木
剣で一撃で倒していたけどさ。
いや、うん。分かってはいたけど、なんか切ないなあ…。

「まあ、なんだ。頑張れ」

私が落ち込んでいたのに気付いたのか、慰めなのかその言葉と共に
肩を叩いた。

「うん。モンスター、一匹そっちに行つてごめんね。ああ、お金拾
わないと」

この世界、モンスターを倒したらお金が手に入るんだよね。
どういう仕組みになっているんだか。

お金を拾っていると、茂みからイノシシ？が突っ込んできた。

「どわはっ!」

転がってなんとか避けると、ルークが木剣で殴りかかった。

「ルーク!？」

「早く体勢立て直せよ!」

ルークに言われて慌てて立ち上がり、腰につけているポーチからクラフトを取り出す。

「ルーク、下がって!」

クラフトをイノシシ?に向かって投げる。

パパパパン!

初めて作った時より、色々と改良を加えたクラフトは、中々攻撃力が凶悪なものになっていた。

いや、ただ単にリリーの時のメガクラフトを参考にしてニュースにストラデルの砂利を混ぜただけなんだけどね。

一発でイノシシ?を戦闘不能にし、イノシシ?が音素に帰っていく。この世界、魔物は死ぬと全て音素に帰るらしい。

おかげで、殺した魔物から食材になりそうな部分を取る事ができないんだよね。

「あ、なんか一部残ってる」

「豚肉、かなあ…」

そこは、豚肉ではなくイノシシ肉だろうと突っ込みたい。私は豚肉を拾い、袋に入れて秘密バッグに収納する。早目に使わないと生だから痛みそうだよね…。

そんな事を繰り返すうちに、森が開けて出口にたどり着いた。

5

出口に辿りついた所で、私とルークは信じられないものを見た。いや、私達よりかな先に出発した女が、出口で傷だらけで倒れている姿だった。

「多分、途中のモンスターとの戦闘で倒れたと言っ事なんだろうね」「だよな？」

どうしようかとルークとお互いに顔を見合わせる。正直、私は関わりたくないし、ルークも誘拐犯とは関わり合いになりたくないだろう。

「途中で拾ったアップルグミを置いて、行こうか？」

何もせずに見捨てるのは、後味が悪いので拾ったアップルグミを、彼女の近くに置いておいた。もう出口なので、敵もほとんどいないし、大丈夫だろう。

「んじゃ、行こうか」

ルークを促して、森を出る。

ルークは最後までティアを気にしていたが、結局はついてきた。

しばらく歩き、ようやく開けた場所に出た。

「さて、と。んじゃ、ここからはちょっと移動スピードを上げるよ」

そうじゃないと、あの女に追いつかれるし。

私は、秘密バッグから魔法のじゅうたんをを取り出し広げた。

「なんだこれ？」

「んー…譜業？」

「なんで疑問系なんだ？」

「あはははは」

そりゃあ、錬金術で作りましたなんて言っても分からないからね。

下手したら、危ない人を見るような目で見られるし。

私は、ルークにじゅうたんに乗るように促す。

「立ってたら危ないからね」

それだけ言うと、ルークの返事も待たずにじゅうたんを起動させる。

「うおっ！」

ふわりと浮くじゅうたん。

高さにして10メートルほどの所でいったん止める。

「えーと、もう少し登ったら近くの町が見えると思っただけど…」

「ちょ、これ以上上がるのか？」

ルークが私の服をギュッと握っている。

「うん。もうちょっと上がるよ。まあ、場所確認したら降りるけどさ」

「お、おお」

「上空はもつと風が強いからしっかり握っていてね」

私はそう言つと、じゅうたんを更に上昇させた。

上空に行けば行くほど風が強くなる。

髪をしっかりと結んでいた私はともかく、長くたなびかせていたルークの髪は、強い風で横に流れている。

「どつちかなー。よし、見えた。んじゃ、ルーク行こうか」

「すげー…」

「ルーク？」

ルークが感極まったような声で言った。

「こんな景色見たことねー…」

「そつか。でも、危ないから少し高度を下げるよ。このまま移動したら風圧が凄いから」

「そつかー…」

「まあ、乗る機会なんて、バチカルに帰るまでに山ほどある訳だし」

「バチカルまで送ってくれるのか？」

「ん？」

ああ、迷惑じゃなかったらだけど」

私の言葉にルークは嬉しそうに笑った。

確かルークは預言で、公爵邸に軟禁されていたんだよね。

彼が見る事の出来た景色は、切り取られた空と遠く離れた街の景色

のみだった筈だ。

その中で、この雄大な景色は、彼の記憶に無かったものだろう。

「だったら、俺の家に来いよ！」

「あー、公爵家でしょー……」

正直、身分が高い家と言うのは色々と面倒なんだよな。
特に礼儀作法が。

「……いやか？」

ルークの声が一気に沈んだのを感じて、私はルークの頭をくしゃくしゃと撫でた。

なぜか捨てられた犬を想像してしまったのだ。

「ちょっとだけなら。あと、あまり行儀作法に自信が無いから、そこら辺は見逃してくれたらありがたい」

「おう！」

任せとけ！」

「んじゃ、行きますか。目指すは一番近い町だよ！」

そこで、バチカルまでの旅装を調べよう」

私は少しだけ高度を下げて、魔法のじゅうたんを前へと進ませた。

ふと、後ろを振り返ると私達が出てきた場所に一台の馬車が止まり、その側に女が立っていた。

何事かを馬車の御者相手に交渉しているようだ。

なんとか、間一髪の所で女との鉢合わせは回避できたって事か。

私は、魔法のじゅうたんのスピードを少しだけあげた。

6

最初、私はエンゲーブを素通りして、カイツールに向かおうと思っていた。

けど、魔法のじゅうたんに乗って3時間もして頃、ルークの顔色が悪いことに気付いた。

よくよく考えれば、ルークは公爵邸から出たことが無く、野宿の経験なんてしたことがない。

そりゃ、地べたではなく毛布などを敷いて寝やすくしたと言っても、貴族の使うベッドではない。満足に寝れるはずがないのだ。

しょうがないので、予定を変更して一度エンゲーブに立ち寄りことにした。

おそらく、馬車とのスピードの差で半日程度は早く着くはずだ。早目に宿を取ってかち合わないようになってしまうえば、問題はないだろう。

その前に…。

「フレイ、なんで村の手前で降りるんだ？」

村までいけばいいじゃねーか」

「こんなので行ったら目立つし。あと、ルークちょっと髪触るね」「うわー!」

私はルークの髪を<ガラスの櫛>を使って丁寧に梳いた。流石によく手入れをされていて、絡まりも痛みもほとんどなかった。うん、さぞかし高級なシャンプーを使っているんだろうな。

「ルークの髪は目立つからね。特に、ここマルクトだし」

「ここ、マルクトなのか!？」

「うん。だから、ルークの髪から素性がバレたら困るでしょう?」

<フォルメル織布>をルークの頭にかぶせ、髪を入れてしまう。

毛染め粉でもあれば良かったんだけど、私が持っている染め粉って布用だけなんだよね。

白髪染めかカツラでも用意しておくんだっ…。

「敵国だから、基本的に目立たずに行動しようね。下手にバレて軍にでも拘束されたら、面倒なことになるし」

ただでさえ、もうすぐしたら非常識軍人ご一行がこの村に来るのだから。

やっぱり、ルークにに多少頑張ってもらってセントビナーまでいくべきだったか。

明日の朝、さっさと出発しよう。

「それと、私とルークの関係は姉弟って事で」

「……フレイが姉なのか?」

「あ、私のこといくつだと思っているの?」

「16ぐらい」

「うん。それとつくの昔に過ぎてるわ」

封神演義の世界に行った時間も合わせたら、100歳越えだよ、私。道士だとほぼ不老だし。その前に<若返りのエリクシル>で若返

ってるし。

いやさ、この薬嫌いなんだよね。

せつかく、僅かながらでも成長した胸が、この薬を飲むと…くっ。

「くれぐれも、この注意を念頭においてね」

私もくフォルメル織布で髪を包んでしまっ。

いや、私の髪も赤毛だから目立つんだよね。

しかも、私つてば瞳も緑だから、キムラスカ王家の特徴バツチリだし。

この世界では、赤毛翠目は、本来ならば王家の血を引く人間にしか出ない特徴なんだよね。

しかも、王家の血が濃いほど、鮮烈な赤になるらしい。

私、見事な赤毛なんだよね。

人前に出るときは、注意しないと…。

「じゃあ、今からルークは私の弟のルーク・ローゼンって事で」

「おう」

「よし、村で新鮮な食べ物を補給して、次の町を目指すぞ！」

ここは、世界の食料庫って言われてる場所だから、さぞかし美味しい物が食べれるわよ！」

うおおおお、漲ってきたあああああ！

フレイと奈落の物語2（後書き）

感嘆アイテム説明

魔法のじゅうたん：空飛ぶじゅうたん。スピードは馬車よりいくぶんか速い。

ガラスの櫛：ガラス製のクシ。今回は本来の用途以外で使っているが、本来は攻撃力を上げる装備品。

フォルメル織布：手触りの良い高級な布。ある程度の厚さも兼ね備えている。

フレイと奈落の物語3

7

村は、シグザール王国で見た村とあまり変わらなかった。

けれど、ルークは始めてみた村の風景に興奮しているのか、キヨロキヨロと落ち着きが無い。

「ルーク、先に宿を取ろうか」

「うん、フレ……姉上」

「……え？」

「きよ、姉弟なんだろ！」

「なんだよ、俺が言つと変なのかよ!？」

「う、ううん」

いや、ちょっとびっくりしたんだ。

イヴァンは私の事はフレイ姉と呼ぶから、どうしても普通に姉上なんて呼ばれると、ちょっと照れる。

ちくしょう、可愛いじゃないか！

見てみると、ルークも顔が赤いし、多分私も顔が赤いだろう。

私は、近くにいた人に宿屋の場所を聞いた。

どうやら、入り口から少し奥に行った所に宿屋や食材屋等が、纏めて建っているらしい。

典型的な農村なので、肥料などの臭いや動物の臭いがする。

私は何度か農村に行ったことがあるし、自分でもこやしを扱った経験があるので、大して気にならないが、ルークにはちょっとキツイ

だろう。

「ルーク、大丈夫？」

「ちよっとクセーけど…」

どうやら、我慢する様だ。

臭いをカットするアイテムが、何か無かったかな…。

宿屋の立っている場所の臭いが薄いのを祈るばかりだ。

しばらく歩くと、言われたように宿屋が見えてきた。

「すいませーん」

「はいはい。すいませんね、ちよっと今掃除中ですよ」

「えーと、2人なんですけど、一部屋お願いできますか？」

「こちらに名前を書いて貰えますか？」

「……すいません、私は字が書けない」

「いい、俺が書いてやる」

ルークがペンを持って固まった私から、ペンを取るとさらさらと名前を書いてくれた。

いや、多分私とルークの名前んだけど、全然読めない。

「フレイ・ローゼンさんとルーク・ローゼンさんね。関係は…姉弟？」

あまり、似てないね。いや、目の色は似ているか」

「あははは、よく言われます。それで、いつぐらいになったら部屋に入れますか？」

「そうだね。30分もあれば、一部屋ぐらい準備は終わるね」

「それじゃあ、お願いします…っていくらですか？」

確か宿屋は基本前払い制の筈だ。

「100ガルドだね」

私は、持っている硬貨を見て、愕然とした。
どれを使えばいいのか分からない。

私は持っていた硬貨の中から、一番大きな硬貨を出した。
宿屋の主人の顔を見ながら、一枚一枚追加していく。
そして、大きなコインを丁度十枚置いた所で、主人がお金を受け取った。

なるほど。このサイズのコインが一枚10ガルドって事が。
準備の間どうするかと聞かれたので、買い物に出かけると伝えた。
いやさ、せつかくの農村なんだから、新鮮な食べ物を買って入れておきたいじゃないか。

確か、エンゲーブって食材が豊富なんだよね。
楽しみだわ。

8

食材屋への道の途中で、ルークが妙に嬉しそうなのが気になった。
なんで、そんなに嬉しそうなのか聞くと

「フレイでも知らないことがあったんだな」

「まあ、私は生まれてからほとんど人里には近づかなかったし」

「なんでだ？」

「ま、いろいろあつて」

人里どころか、この世界にすらいませんでしたよ。

そういえば、国の国境を越えるのには確か通行証が必要なんだよね。それには、身分証が必要な訳で。

私、この世界の戸籍なんて持つてるわけ無いし。どうしようかね。不法侵入しかないのか？

食材屋が建っている辺りに行くと、やはり食料の仕入れに来た人がかなりいた。

早めに宿を取って正解だったな。

観光地ではないエンゲープでは、宿もそんなに大きくは無い。

そもそも、宿自体が農作業の片手間に経営している程度のものみたいなんだよね。

おそらく、食材屋にいる商人の数と宿屋の大きさから考えて、今日は空き部屋はないだろう。

三軒だと思っていたが、一軒は準備中と言う札がかけられてあった。うん、どうやらまだ開店してないようだ。

他の二軒に行き、食材を吟味していると、ルークが林檎を手にとった。

「なに、ルーク。それ欲しいの？」

「ウマソーだなと思ったただだよ」

「あ、じゃあお金あげるね」

戦闘で手に入れたお金は全て私が管理していた。

財布を覗くと、うん林檎を買うぐらいのお金はあると思う。確か40ガルドぐらいだったと思うし。

「?」

「どうしたの？」

「金は後で払うんじゃないのか？」

あ、ルークってば買い物をした事がなかったんだ。

「普通は、商品と引き換えにお金を払うの」

「へー。んじゃ、これで払えばいいんだな？」

ルークの言葉に私は頷いた。

ルークは、手に持ったお金で会計をする。

「これで、この林檎はルークのものだよ。食べてみたらいい」

「おう！」

初めて自分で買い物をして、ちょっとテンションの上がっているルークが林檎にかぶりつく。

「うめえ！」

「フレイ、コレ家で食うよりウメエ！」

「当たり前よ！」

褒められた店の主人も嬉しそうに言った。
サービスだと、私にも林檎を一つくれた。

「ああ、店主さん。ちょっとお金を作ってくるので、今から言う品を用意してもらえますか？」

ここは野菜を多く扱っている店らしく、野菜が豊富だった。

なので、一通りの野菜とエンゲープパンやライス、それにヌードルも頼んでおく。

「さてと、ちょっとお金作ってきますかね」

確か宿屋の中に武器を扱っている行商人がいたはずだ。

私は、宿屋に戻り行商人相手に国宝布を数枚売り払った。

国宝布を手を取った行商人は驚いた顔をして、一つ15000枚と言う金額を提示してきた。

私はその値段で、3枚ほど売りちよつとした金額を手に入れた。

ちなみに、今までの金額とあまりに違う額に、ちよつとガクブルとしてしまった。

だって、コインでうん万枚と言ったら、どれだけの重さになるんだ？

そう思っていたら、渡されたのは紙幣。

そうか。この世界は紙幣があるんだ。

「ルーク、これなんて書いてあるか読める？」

「ん？」

ああ。これが一万。こつちが千つて書いてあるぞ」

計算してみると、ちゃんと合ってる。

よしよし。これが一万ガルドと千ガルドね。

そして、食材屋に戻り食材を買う。

別の食材屋にも行き、肉を買おうとしたのだが、名前が凄かった。

イケテナイチキンに、イケテナイビーフ、ブウサギ。

イケテナイって事は不味いのか？

ルークに聞くと、あまり美味しくないらしい。

公爵子息が食べたことがある事自体驚いたが、どうやら好奇心から

使用人の食事を食べたことがあるのだと言った。
その分、イケテナイシリーズは値段が安いのだが。

美味しくないのを無理に食べさせる訳にはいかないの、普通のチキンとポークとビーフを二三日分買ってしまおう。
よしよし、後でフレイのアトリエを起動して氷室にでも入れておこう。

取り出すのは、秘密バッグを使えばいいしね。

それにしても、海がそんなに近くないのにタラがあつたのが驚いた。
買い物を全て終えて、宿に帰ろうとすると何か視界の端を緑色の小さい物が通り過ぎた気がした。

>9

その緑色が入っていったのは、多分作りからして食料を入れる倉庫だろう。

なんか、さっき私達が食糧を買った店の辺りが騒がしかったが、無視して来て見たのだが…。

「ルーク、ちよつと人を呼んできて」

「なんで俺が…」

「後で甘いものあげるから」

「分かったよ。チツ、めんどくせー」

ルークは渋々ながら人を呼びに言ってくれた。

私は、扉に手をかけると、意外なことに扉は開いていた。

普通大事な食料庫と違って、鍵をしているものじゃないのかな？

それとも、誰でも取れるようになっていいのかしら？

中を開くと、小さな緑色の物体達が林檎や野菜などを持って行くこととしていた。

「みゆ！？」

私がいることに気付いて、慌てて逃げ出そうとする緑色。

私は一匹の耳を持って捕まえ、手なづけペンデルを口の中に入れて込み、眠り状態にさせて、秘密バッグに突っ込んだ。

これって、アレだよな。

ルークに最後の最後まで付き従った、ペット。

確か、チーグルだっけ。

「フレイ、こいつでいいか？」

そうやって、ルークが連れてきたのは緑色の髪の少年。片手には、音叉の形をした杖を持っていた。

あれ、この子って確か…。

「食料庫に泥棒が入ったと聞いたのですが…」

「はい」

私はチーグルの特徴を、イオンに伝える。

そう、この子はこの世界の宗教団体のトップの導師イオン。ただし、レプリカと言う複製人間なのだが。

「チーグルですか…。これは、ローレイ教団として、どうにかしなければいけませんね」

「あの、もうよろしいですか？

導師イオン」

「どうして、僕が導師だと…」

「その杖の形。それを持っているのは、導師だけでは？」

「確かにそうです」

「導師イオンって誘拐されたって聞いたぞ、俺！」

「誘拐？」

「いいえ、僕は僕の意味でここに…いけません。先ほど、泥棒と勘違いされて一人捕まっしてしまいました。この事を言いに行かなくては」

導師イオンは、証拠なのか残っていたチーグルの毛を拾い、一番大きな家へと行ってしまった。

「ねえ、ルーク。導師って誘拐されたの？」

「師匠はそー言ってた。だから、俺の修行、今日までだったんだ」
「なるほど」

確か、ジェイドが無断で連れ出したんだっけ。

正確には、イオンは書置きを残したんだけど、大詠師側のスパイがそれを破棄したんだっただけだ。

それで、誘拐なんて騒ぎになったのだろう。

「まあ、私達には直接関係ないし。宿に戻るのか？」

「そろそろ、部屋の準備も出てくるだろうし、おなか減ったでしょう」
「う」

「おー。もうぺこぺこ」

「宿のご飯楽しみだね」

ルンルン気分で、私とルークは宿に帰ったのだった。

フレイと奈落の物語4

10

宿屋に帰ると部屋の準備が出来ていたので、食事をお願いした。予想通り、エンゲーブの新鮮な野菜をふんだんに使った料理だった。

最初に対応してくれた宿の主人は、なんでも村のまとめ役の所に、盗人を突き出しにいったらしい。

ああ、ゲーム本編のルークが泥棒と間違われるイベントか。誰が間違われたんだ？

この場合は、やはりティアなのか？

まあ、私には関係が無いので問題ないのだが。

「エンゲーブの野菜には焼印が押してあるのに、馬鹿な事をするもんだねえ。あ、坊やの方はお代わりはどうだい？」

「ぼ、ぼうや!？」

俺は坊やじゃぬえー!」

「そういう反応が坊やだって言われるんだよ。あ、朝食は何時ですか？」

「ああ。7時からだね」

「分かりました。ルーク、おかわりどうする？」

「…食う」

「あいよ!」

おばさんが、ルークの皿に野菜と肉を挟んで焼いたものをのせてくれた。

食事が終わると、余計な人間に会わないうちに部屋に引っ込むことにした。

部屋に入り、被っていた布を外す。
通気性はあるように作っているけど、やはり暑いものは暑い。
ルークも一緒に乱暴に布を取り去った。
あーあ、髪が凄いことになってるよ。

私は自分の髪を梳き終わると、ルークを呼び髪を梳いてやる。
すると、疲れていたのかルークがコクリコクリと舟をこぎ足した。

「ルーク、眠たいならベッドに行つてよ」
「んー」

ルークがふらふらとベッドに行き、倒れこむように布団に入る。

しばらくすると、部屋の扉がノックされた。

「はい？」
「あの、すいません。宿の主人ですが」
「こんな時間に何のようですか？」

うん。時間的には人が寝ていてもおかしくない時間だ。
こんな時間に、一体何のようだろう？

私は、少しだけ開けて外を確認すると、確かに店の主人ともう一人いた。

「あの、相部屋をお願いしたいお客様が…」
「相部屋？」

私の取った部屋はツインルーム。

まあ、床で寝れない事はないけれど、まず使用人数は2人のはずだ。

「すいませんが、ベッド埋まっているんですけどー」

「ですよね？」

ほら、無理ですよ」

「そもそもあなた達が私を泥棒扱いしたから！」

宿の主人と一緒にいたのは、誘拐犯もといティアだった。

ああ、やっぱり泥棒と間違われていたんだ。

一体何をやったんだ？

「あの、弟はもう寝ているので少し声を小さくして貰えませんか？」

「ああ、すまないね。ほら、そういう事だから。下の食堂は開いているんだ。一晩そこを開放するから、そこで寝るか、ローズさんの家にも頼んでおくれ」

なるほど。

到着の遅かったティアは、宿の部屋が満室になってしまい、今夜泊まる所がないわけだ。

「あんな所で寝れるわけないでしょう!？」

「あの、いいですか？」

私、旅で疲れているので早く寝たいんです」

「ああ、すまないね」

ティアは相手にせず、宿の主人とだけ話をして、扉を閉めた。

さて、邪魔が入ったけど、これから私の時間だ。

私は、ルークがよく眠っているのを確認して、フレイのアトリエを

起動させた。

11

アトリエに入ると、アイルーがチーグルを押し倒しもといマウントポジションを取っていました。

「なにしてるの？」

「暴れるので、取り押さえておきました。ご主人様」

「あ、そ。そのまま押さえてなさい」

私はコンテナから、たまたまの思いつきで作ったアイテムを取り出しました。

「翻訳こんにやくー」

うん、某青狸の未来道具を再現してみました。

どれだけ力入れて再現したかと言うと、こんにやく作りましたよ。

いやあ、苦労したわ。こんにやく作るの。

作ったはいいが、普通の動物に使っても知能レベルの関係で単純なことしか分からないんだよね。

そののお蔵入り化したアイテムの一つだ。

「ほら、お食べ」

アイルーにチーグルの口を開かせて、中に突っ込む。

「みゆ、みゆうううううう」

悲惨な声をあげるな。なんか、動物虐待をしている気分になるでは

ないか。

そのまま口を閉じて、咀嚼するのを待つ。

咀嚼しなかつたら、アイルーに言って無理矢理咀嚼させるか、液体にして流し込んでやるう。

私の思いが通じたのか、チーグルはアイテムを食べた。
よしよし。

「テスト。分かりますか？」

「みゆう、みゆうこゆうみゆう…殺さないで欲しいのですの！」

「お、成功。安心しなさい、殺しはしないわ。まずは、名前ね」

「ミュウですの！」

ミュウかよ！

気を取り直して、質問を続けるか。

「なぜ食糧倉庫に？」

「実は…」

ミュウが喋るとミュウミュウ煩いので、私がまとめた事を言つと、
ミュウがライガが住んでいた森で、火事を起こし、森を焼いてしま
ったのだ。

怒ったライガたちは、ライガクインと共にチーグルの住む森へと
居座り、賠償として食料の供給を命じたと言う事が、今回の食料盗
難事件の原因だった。

「あんた達、なんでエンゲープから取ってるのよ。森の中にも食べ
物は生えているでしょ？」

実は、肉類以外にもチーグルが好むフルーツや野菜なども取られて

いるのだ。

実際、チーグル以外にも様々な魔物がすんでいる森なので、食べ物が無いと言う事は有り得ない。

「みんな、少しだけ余分に持って行って自分で食べているのですの」「……」

本当に聖獣か？

「で、いつまでもそのままって言う訳にはいかないでしょ」

事実、ゲームではライガが人間の生存範囲内にいたら、狩られる定めみたいだし。

ライガと言うのは、基本肉食で、人間は彼らの餌の一つなのだ。

「出来れば、女王様には僕らの森から出て行って欲しいですの」

「どうやってよ？」

別の森でもあるの？」

確かこの近くに程よい森は無かったはずだ。

もしあったならば、ライガはチーグルへの復讐もあるが、人間の近いこの森には来ないだろう。

確か、ライガクイーンは出産を控えていたはずだ。

そんな大事な時期ならなおさら、敵になりうる人間の勢力範囲内には近づこうとしないだろう。

何より、狙われるのは卵なのだから。

ああ、もしかしたらチーグルが食料を盗んだのは、こーいう事か。人間を関与させて、自分達の手を汚さずに、ライガを森から排除する。

このミュウは、そんな事を思っていないだろう。

一途にルークだけを思っていた忠獣だ。

ライガが死んだのは自分のせいだと思っていたフシもあったし。

「ミュウのせいですの。ミュウが大人でもないのに、火を吹きたがったから……」

「まあ、子供の責任は親の責任。引いては群れ全体の責任だから、あなたの一人の責任じゃないんだけどね」

さて、どうやってカタをつけるか。

朝になったら、守られるという自覚の無い導師が動いて、ライガクイーンの死亡フラグが立ってしまう。

はてさて、どうしたものか。

もし、解決する気があるのならば、今動かないといけない。

放っておいても、私には何の影響も無いんだけどね。

むしろ、無視していったら非常識一行と距離が置ける分、お勧めしたいぐらいだ。

けど、なあ…。

私はチラリとミュウを見た。

大粒の瞳か涙を零して、ミュウのせいだと連呼して嘆く子供の獣を見て、そのまま放っていくほど、人間駄目になっていない。

「ご歓談中失礼しますにゃ。ご主人様にお手紙が来てますにゃ」
「ダレからよ？」

にゃん吉が、手紙の裏を見て名を確認し、

「ローレイ様と言う人からですよにゃ」

なんですと!？

12

手紙の封を開けると、まず私の目に飛び込んできたのは、薄い金属の板。

そして、もう一枚、便箋が入っていた。

とりあえず、金属の板は横に置いて置き、私は手紙を開いた。

<ハロー、>

バシッ!

私は思わず、手紙を床に叩き付けた。

なんだ、このハイテンションな出だしは!？

いかん。私、冷静になるんだ。

気を取り直して、手紙を拾い再び読み始める。

<ハロー。気付いてはいると思うけど、君をこの世界に引き込んだのは私ことローレイです。

なぜ、君をこの世界に引き込んだかと言うと、頼みがあったからです。

ルーク・フォン・ファブレのレプリカを救って欲しい。

何度か救おうと時間を戻したりしたのだが、結局結末はいつも同じだったんだ。

だから、勝手なお願いだが君にお願いする。

どうか、ルークを救って欲しい。

中に同封されていた板は、君の身分証明書です。

君は、ケセドニアにある砂漠の少数民族の出身と言つ事になっています。

では、健闘を祈る。

PS・困つたら大譜歌を詠えばいい事あるかも？

ローレライ>

「……………」

いや、なんとなく想像はついてたけれど、今回のトリップはローレライの仕業か。

どうせなら、イヴァンかアスランも一緒に連れてきてくれれば良かったのに。

そもそも、どうして私なんか白羽の矢を立てたのだけか。

「それにしても、大譜歌なんてうる覚えでしか覚えてないよ……」

横で見ていただけなので、大して覚えてはいない。

大譜歌って鼻歌でも、効力発揮するのかなあ。

フレイと奈落の物語5 (前書き)

今回は導師までもがアンチ気味。
読む人注意。

フレイと奈落の物語5

13

ミュウとの話し合いと言うか尋問が終わった後、私とミュウは宿の部屋に戻って眠りについた。

とりあえず、ライガの住んでいた北の森に行き、植物用栄養剤を撒いてみようと思うのだ。

ついでに、大譜歌を試してみる。

大譜歌は第七音素を使う。

第七音素は、癒しを司っている。

もしかしたら、何かしらの効果があるかもしれない。

そう思ったのだ。

翌朝、朝日が登ると同時に起きる。

ザールブルグでは朝日が登ると同時に起きる生活なので、目が覚めてしまうんだよね。

ルークはいまだに夢の中。

ミュウも宿屋のあまり上等ではないシーツに包まって眠っている。

窓ガラスから外を見ると、緑色の髪の毛の導師が森へと向かっていた。

緑色の髪は私を知る限りで導師だけみたいなんだよね。

なので緑色の髪＝導師になるんだ。

それに、導師は音叉の形をした杖を所持しているので、一発で分かるんだな。

導師守護役は何をしているのだ？と言いたい。

それどころか、和平の死者もとい使者として死霊使いが導師を連れてきているのだが、マルクト軍は導師の護衛はしないのか？
それとも必要ないとも思ったのか。

ダアトと言う一国の代表なのになあ、導師ってさ。

もうしばらくしたら、ルークを起こすか。

1時間後、私はルークを起こしてミュウの紹介をした。

そして、ミュウの頼みで北の森に行き、森を再生する旨を伝えた。

「んな事できんのか？」

「まあ、試してみるよ。別に失敗しても私は困らないし」

困るのはチーグルだけだ。

「てきとーだな」

「人間出来ない事を無理してする必要はないわよ。出来る事を頑張ればいいのよ」

出来ない事の方が多いしね。

私とルークは再び髪の毛をフォルメル敷布で隠した。

「どうして髪を隠すのですの？」

「あー、目立つからだよ。誰にも言つなよ」

「わかったですよ！」

さて、チーグルを連れて朝食に行きますかね。

食堂にはあの女はいなかった。

なんでも、女が朝に窓から外を見ていたと思ったら、慌てて出て行ったらしい。

どうやら、導師が一人で外出しているのを見たようだ。

なので、私とルークはのんびりと朝食を堪能した。

新鮮な卵を使ったふんわりオムレツに様々な野菜を使ったサラダ、そしてふつくらと肥えたブウサギの肉のスープ。

どれも、絶品でした。

いや、素材の良さが生きているね！

ミュウも野菜を分けて貰い、嬉しそうに食べている。

食堂の人もチーグルが珍しいのか、色々と林檎やフルーツを分けてくれた。うわ、贅沢にもメロンまであるよ。メロン、高いのになあ

…。

これは、ちょっと惜しいけどミュウのおやつだな。

食後のお茶までゆっくりと飲んで、私達は宿を出た。

まだ導師がいないことに気付いていないのか、マルクト軍がいるあたりは静かなものだ。

私とルークとミュウは、村外れから魔法のじゅうたんに乗って北の森を目指したのだった。

北の森は無残な焼け野原となっていた。
いくらかは緑が残っていたが、ほとんどが焼け跡だった。
逃げられる小動物は多分逃げただろうが、彼らが戻ってくることは
ないだろう。
なぜならば、小動物の餌になる草がないのだから。

「ルーク、これ撒くのを手伝って」

私は秘密バッグから、現在あるだけの植物用栄養剤と植物の種を取り出した。

これを撒いて、大譜歌鼻歌verを歌ってみようと思うのだ。
通常でも二ヶ月で収穫が出来る優れものだ。

まあ、譜歌が効力を発しなくても、植物用栄養剤を撒いたら植物の育ちも早くなるので、一ヶ月ちょっとで収穫が出来るだろう。

「おう！」

「ミュウも手伝うですよ！」

2人と一匹で、種と薬を撒いてしまふ。

さて、ここからだ。

「んっんっ」

ルークとミュウの注目の中、私は覚えているメロディーを口ずさむ。
と、言っても歌詞はうる覚えなんだけどね。

私の歌と共鳴したのか、光がクルクルと踊りだす。

これが第七音素なのだろう。

ルークの体も若干光っている辺りが、ちょっと怖いけど。

予想では、大譜歌はローレイとの契約の証。

ルークはローレイの音素共同体であるアッシュのレプリカだ。レプリカは第七音素のみで出来ているので、私の予想だがルークはアッシュよりよりローレイに近いのだろう。

その、ローレイとの契約の歌が何らかの反応をルークに起こしているのだと思うけど…。

これは、人前ではあまり歌えないな。

ルークは置いておいて、光が森に広がりそれと同時に焼け野原から植物の芽が出る。

歌に合わせるかのように成長し、歌が終わるか頃には焼け野原だった森は元の森かどうかは分からないが、緑溢れる森に戻っていた。問題は、そこらかしこに人参やヒヨコ豆が生い茂っている事なんだけどね。

やっぱり、エンゲーブで普通に種を仕入れるべきだったか？

「今のなんだったんだ…？」

発光の終わったルークが、自分の両手を見つめた。

さすがに真実を言うわけにはいかないので、ぼやかすことにする。

「多分第七音素と反応したんだと思う。もしかして、超振動の副作用じゃないの？」

体に調子の悪い所とかある？」

「特にぬえーな。逆にちよっと疲れていたのがふつとんだぐらいだし」

悪影響ではなくて、普通に回復したのか？

現状ルークに対しては何も出来ないので、とりあえず置いておくことにする。

何かあったら、そのつど対処するしかないだろう。

今私に出来る事は、鼻歌大譜歌を極力使わない事だけか。

ルークは確かローレイの音素共同体だから、多分大譜歌に反応しただけだと思うのだけれど…。
確実なことが言えないのが怖い。

色々な心配事を抱えながらも、ミュウと一緒にチーグルの森ライガ滞在地へとやってきたのですが、そこには修羅場が展開されておりました。

「あ、あなた!？」

はい。導師イオンと共に誘拐犯ティア・グランツがいました。

怒れるライガ・クイーンの命令で、襲ってくるライガから懸命に導師イオンを守っていました。

足元には大怪我をしたチーグルの子供が。

「ミュウウウウウ！」

ミュウが悲痛な声をあげて、同族に駆け寄ります。

どうやら、私達がミュウと一緒に居たために、違うチーグルが通訳

として一緒にきたようです。

「シャアアアア」

「ミュウ、通訳して」

翻訳こんにやくを食べてもらえば一番なのだが、こんな得体の知れない相手からの食べ物なんて食べやしないだろう。
なので、ミュウに通訳を頼む。

「『お前達も導師と同じことを言いに来たのか？』と言ってますの
！」

どうやら、導師はすでに交渉に失敗したようだ。

まあ、それにも頷ける。

チーグルから受けた被害で、住む地と食べ物を無くしたライガに
んの補償もなく、この地を動けと交渉したのだ。
こんなに相手を馬鹿にした交渉はないと思うよ。

なので、ここからは私が仕切らせてもらう。

世間知らずは引っ込んでいて貰おう。

フレイと奈落の物語6 (前書き)

アンチ成分大目です。

フレイと奈落の物語6

16

私は、ライガクイーンの前に進み出た。

クイーンと名がつくだけあって、流石に大きかった。

さすがに、フラウシュトライトとまではいかないけれど、ウォルフの王ぐらいはあるかな？と言った大きさだ。

「ライガクイーンよ。私は交渉を希望します。私の用件は、チーグルの森から元の森へと戻って欲しいのです」

面倒なのでミュウの同時通訳と言うことで、余分な言葉は省くことにする。

そうじゃないと、ミュウミュウ煩いんだよね。

何でか知らないけれど、チーグルって語尾にミュウがつくんだよ。

普通に喋れないのか？

「それは、私達に死ねという事か？」

「先程森は再生できました。けれど、木々は再生できても、森の獣達は一朝一夕には戻ってこないでしょう。なので、提案です。居住は元の北の森に移せばいい。けれど、チーグルの森を狩場にしてはどうか？」

この森は、チーグル以外にも獣は多いと思います。チーグルは基本的に草食ですから、問題はないでしょう。運悪くライガに食べれたとしても、それは預言と思っただら諦めるでしょう」

実際教団の聖獣なのだ。

予言と言う名の運命に従ってもらおうではないか。

「みゅうつうつ」

「そんな！」

「なんて酷い…」

導師と誘拐犯とが声をあげる。

若干一匹ばかり、私の通訳が声をあげたが、視線一つで黙らせておく。

うんうん。私の視線を受けたミュウは口をつくんだ。

問題児2人組は後で相手にするとして、今はライガクイーンを優先だ。

そうしないと、もう一人の問題児が来襲するからね。

「そもそも、あなた達が人間の居住区に近いこの森にいるのが問題なのです。人間は繁殖期のライガは狩り尽くすと言います。一族の無事を願うのならば、どうか元の森へと移住をして下さい」

私はそう言つて、ライガクイーンに深々と頭を下げる。

きちんと知能がある獣ならば、礼を尽くすのが知能ある獣として当然だ。

私は人間だからといって、全ての種族の頂点に立っているとは思えない。

むしろ、多民族の方が人間より優れている所があるぐらいだ。

要するに一長一短なんだよね。

『そなたは、チーグルを保護しようとはしないのだな』

「彼らもまた野生の獣です。ならば、掟に従い弱肉強食でよろしいのでは？」

『そうか。そなたの提案は考える所も多い。けれど、まずは森が元に戻っているかの確認だろう』

その通りですね。

ライガクイーンは、私では分からない言葉で配下のライガに何か言った。

すると、何匹かのライガが走っていった。

おそらく、私が言った森の再生を確認しに行ったのだらう。

いや、ちょっと過去の森とは違う所も多々あるけど、そこは勘弁してもらおう。

17

ライガが去り、クイーンが卵の元に戻りどっしりと座り込み卵を温め始めたのを見て、犯罪者ティア・グランツがツカツカと私達の方へと寄ってきた。

「あなた達、どーいうつもり!？」

「どーいうって何がよ?」

「チーグルを餌にするなんて、一体どういうつもりなのか聞いているのよ!」

「餌につて、野性の掟に従ってどうぞと言っただけよ?」

そもそも、本来ならば人間が彼らの営みに首を突っ込むほうがおかしいのではないのかしら?」

そもそも、貴様の存在自体がおかしいと声を大にして言いたいよ、私は。

導師は、自分が救いに来たチーグルを結局最後まで救いきれず、顔色が少々悪い。

「そもそもあなた達かどういふ交渉をしたかは知りませんが、私達よりいい案があるのならば人に文句を言わずにライガクイーンに提案してみては？」

そんなのある訳がないと思うけどね。

移住地の提案もせずに、群れの移住を求めたぐらいですもの。

「導師のご意向に従えないと言うの！？」

私が導師を見ると、縋る様に私を見ている。

正直、一国の指導者としてその態度はどうなんだと小一時間説教をかましたいです。

「私は教団の人間ではないので、必要以上の敬意を持つてはおりません」

「なんて傲慢な！」

人を傲慢呼ばわりしたティアを、冷たい目で見てやる。

そもそも私に敬意を持ってもらいたいのならば、それに相応しい態度を取れと言いたい。

こんなオドオドと人の顔色を伺っているような子供に、進んで敬意を持つてと言う方がおかしい。

「失礼ですが、導師イオンとお見受けいたします」

私はティアを無視して、イオンと向かい合った。

「はい、そうです」

「失礼ですが、どうしてこちらに？」

ここでようやく私は、イオンたちがライガの元に来た理由を知ったのだった。
恐ろしいことに、ルークとミュウがいなくても粗筋の大本は変わっていないかった。

これって修正力って言うやつなのだろうか？

よく、チーグルの森で無事だったなあ、イオン。

「導師イオン。一言よろしいですか？」

「はい。かまいませんよ」

「チーグルに利用されましたね」

「え？」

やはりイオンは全然分かっていなかった。

なので、説明しておくことにした。

「チーグルはライガに食べ物を持ってくるように言われましたよね。けど、エンゲーブで盗まれた品物のほとんどが野菜でしたよ。なぜでしょう？」

「それは、お肉を運ぶのが大変だったからでは？」

「そもそも、先程通りましたチーグルの森は恵みが豊かな所です。頑張つて探せば、ウサギやオオカミなどを狩ることも出来るでしょう。なのに、どうしてチーグルはエンゲーブからの窃盗と言う手段に出たと思いますか？」

「……………」

何かに思い当たったのか、イオンが口に手を当てて呆然としている。どうやら、思い当たったようだ。

「そういうことですよ、導師イオン。チーグルはローレイ教団的

には聖獣と言われている、立派な魔物なのですから」

今回の一件は、チーグルがうまく人間を利用した末の出来事なのだ。人間の村から窃盗をして、自分達が窮地に陥ってる事を認識させ、さらに人間の手を使ってライガの排除を試みたのだ。なかなか極悪である。

それにひっかかったのが、イオンとティア・グランツだ。可愛らしい姿にまんまと騙されたのだ。

人は見かけによらないとはまさしくそうだったと言う訳だ。

18

私とライガクイーンがライガの報告を待っていると、いきなりルクが後ろから体当たりしてきた。そして、そのまま押し倒される。

「ルーク!？」

びっくりした私が目にしたのは、私が直前までいた場所を襲う水の奔流。

慌ててライガクイーンを見ると、その水の奔流は彼女さえも襲っていた。

とんでも軍人マルクト代表の来襲だった。

私は奔流　スプラッシュと言う譜術　の向こうに、見た目だけは若い男軍人の赤い瞳を見た。

あの野郎、私を巻き込む気満々だった。

私は水の奔流が収まると、ルークと一緒に立ち上がり慌ててライガクイーンの元へと向かった。

幸い、私達と戦闘状態になかったライガクイーンはスプラッシュの前に傷を負っていなかったのが幸いして、死んではいなかった。

私は秘密バッグの中から、慌てて<アルテナの傷薬>を取り出しライガクイーンの手当てをする。

その間、ルークは木刀を構えて赤目軍人を睨みつける。

私を庇ったときに、髪を隠していた布が取れたのか、赤い髪を靡かせてルークは軍人と対峙していた。

「折角クイーンを倒したのに、なんで手当てなんかするのよ！」

ティア・グランツが喚き、導師が青い顔をして私達と赤目軍人を見ている。

導師、この馬鹿を止めてくれたら非常に嬉しいのですが…うん、無理だよ。

そこまで導師に要求しても、今までの行動からしてみても難しいのは分かっていたよ。

私は手早く手当てを終え、側に居たミュウを引っつかんで通訳をさせる。

「今は引いて下さい、ライガクイーン！」

私の言葉にライガクイーンはよたよたと起き上がると、一吼えして撤退する。

ソレと同時に殺気立っていた周囲から、殺気が遠のき始める。

おそらく殺気は、森の中からこちらを伺っていたライガ達だろう。私は肩の力を落として、軍人を睨みつける。

「私を巻き込むとはどういうつもりでしょうか？」

答えやがれ、ジェイド・カーティス！

「いえ、ライガクインに襲われていると思ったのですよ」

そう言っつてルークの髪と私の髪を凝視する。

あまり気にしなかったけど、私のも取れていたのか。

「戦闘中ではなかったのは見て取れたのでは？」

それとも、それも分からないのですか？ 軍人が？」

嘲笑うかのように鼻で笑ってやる。

「折角助けてもらっつて何を……っつて、あなた、どうしてここに!？」

ティアが、ルークを指差して叫んだ。

いやはや、やはり赤い髪でルークの判別をしていたんだな。

まあ、目立つ特徴だしね。赤髪っつてさ。

アトリエ世界では普通にいるから、あまり特徴っつて感じはしないのだが、この世界では赤い髪はキムラスカ王家の血を引くもののみ現れるからね。

「導師イオン。勝手に行動されては困りますね。アニスが困っていませんよ」

ジエイドは、話は終わったと私達から導師へと話を移した。

「すみません、ジエイド。教団の長として、聖獣であるチーグルの苦境を見過ごせなくて……」

いや、それはいいけどもう少し考えて行動しようね、導師。

そして、護衛対象に簡単に撒かれる導師守護役ってどうなんだ？
実は役立たずじゃないのか？

導師に対してジエイドは色々と言教染みた事をしていたら、導師守護役特有の制服に身を包んだ少女がやってきた。

「大佐！。言われた通りに連れてきましたあ」

ヤバイな、この状況。

場所は違うけど、ゲーム通りの展開ではないか。

「兵士達。その2人を捕らえなさい。タタル渓谷で第七音素を発したのはこの2人です」

ジエイドがそう言うと、兵士達数人がジャキンと剣をこちらに向け
た。

フレイと奈落の物語7（前書き）

全体的にアンチ成分入ります。

フレイと奈落の物語7

19

私は怯える振りをして、ルークにこっそりと耳打ちをした。

「ちょっと、息止めてて」

ルークの返事も聞かず、ジリジリと距離を縮めてくる兵士達に、私は懐からく貴婦人のたしなみ>を取り出す。
これ、結構使えるんだよねー。

プシュリと兵士達に向かって一吹き。

すると、たちまち兵士達はピクリとも動かなくなる。

魅了しても楽しそうだったけど、その場合上司の命令を遵守した兵士達が眼鏡の攻撃譜術を食らうことになるからなあ。

それはあまりにも気の毒だったので、麻痺で留めておいた。
睡眠でも良かったけど、手近にあったのが麻痺用だったんだ。

たったの一吹きで、兵士を無力化した私に、ジェイドの瞳がうつすらと細められる。

私は使い終わった貴婦人のたしなみを懐に戻すと、ニッコリとジェイドに向かって笑いかけてやった。

「さて。どうやら昨今のマルクトでは、いちゃもんをつけて人を拉致するのが当たり前の用ですね」

「あなた達が不明な第七音素を出したのは分かっているのですよ？」

「さてはて。私達がその第七音素を出したという明確な証拠は？」
「なにを……」

実際、超振動による第七音素はタルタロスで測定はされただろう。けれど、その人物の特定は果たして可能なのか？

「私から微妙に第七音素が出ているからなんてベタな説は聞きませんよ？」

先程、私は大規模な第七音素を使った術を行使しましたからね」

大譜歌もどきによる第七音素は、タルタロスでも観測されているだろう。

私の予想だが、私の大譜歌もどきは超振動より譜力は少ないかもしれないが、それなりの譜力だっただろう。

「何を言ってるの!？」

大佐、確かにそのルークは私と超振動を起こしました！

隣の少女については知りませんが」

ちっ、誘拐犯の事を忘れていた。

さっきの麻痺に巻き込んでおくんだった。

導師が近くにいたから、一吹きで済ませたのは失敗だったな。

ティアの言葉に、ジエイドがニヤリと唇を歪ませる。

おーおー、極悪そうな面だ事。絶対悪役だね。

「貴女は違つかもしれませんが、どうやらその少年は当事者のようです。詳しい事情を聞かせて貰いましょうか」

「そうですね。事情説明だけならこの場でしてしまいいましょかね。

私達にはまだ用事がありますから。逮捕、もしくは捕縛ではないの

でしょう?」

私は正式な逮捕ではなく、任意同行である事を盾にタルタロスへの同行を拒否の構えだ。

バチバチと私とジエイドの間で見えない火花が散る。

タルタロスに連れ込まれたら、問答無用に和平に仲介を頼まれ、そのまま一緒に行動することになる。

そんな私の胃にダメージを受けるようなことは、断固としてお断りしたい!

何か歌が聞こえた。

え、これって……。

私は無視していた誘拐犯を見た。

「ルーク、逃げて……」

あの女、譜歌歌いやがった。

疫病神か、あの女!

私は途絶えていく意識の中、ルークのことだけを心配した。

ルーク、頼むから事情聴取までには起こしてね。

ギッタギタのメッコメコにしてやる……。

私がそう思ったのも無理はないだろう。

20

私が目を覚まして一番最初に目に入ったのは、心配そうに私を覗き

込むルークとミュウの顔と、無粋な金属製っぽい天井だった。

「あ、フレイ起きたんだな！」

「うん。ルーク、ここもしかして……」

「あの眼鏡がフレイと俺をタルタロスとか言う軍艦に連れてきたんだ」

やっぱり、タルタロスか。

私は固いベッドから起き上がり、周囲を確認する。

別に牢屋と言う訳ではなく、少し狭いがごくごく普通の個室と言った感じだ。

窓ははめ込み式で、どうやら開け事は出来ないようだ。

窓からの脱出は無理か。

いよいよの時には、壁をメガフラム辺りでぶち破るか。

固い金属でも、氷と火を使ってやれば簡単に壊れるはずだしね。

「ルーク、事情聴取は終わった？」

「フレイが寝ている間にやりたがったけど、フレイが目を覚ますまでずっとーやらねーって拒否してやった！」

おお、偉いぞルーク。

思わず私が拍手すると、照れたようにルークが笑った。

それにしても、譜歌って使われたら目が覚めたときは最悪だね。

頭痛はするは、吐き気はあるわで、あの女後で絶対報復する。

「じゃあ、名前も名乗っていないよね？」

「けど、俺の服のボタンをジロジロ見ていたからなー。俺の名前、多分想像ついてんじゃないの？」

確かに、注意してみると、ルークの服のボタンには何らかの紋章が刻まれている。

恐らく、ファブレ公爵家の紋章だろう。

アクセサリーの類をつけないルークの為に、ボタンに身分証明用の紋章を施しているのだろう。

まあ、ルークの場合はその身一つで、どこの誰だか分かるようになってるんだけどね。

ガチャリ

ノックすらしに入ってきた兵士から、眼鏡大佐が私達を呼んでいる旨を告げられた。

このまま、取調室まで案内するので、付いてきてくださいとの事。

「オツケーオツケー。んじゃ、行きますかね」

ルークが心配そうな顔をするので、笑いかけ手を握ってやる。

イヴァンが子供の時に良くやってやった事だ。

私とルークは手を？いだ状態で、眼鏡とおそらく誘拐女のいる部屋へとやってきた。

さあ、バカ軍人どもとやりあいますかね。

21

私とルークが通された部屋は、大して広くも無い部屋でその中に椅子が二つばかりポツンとあり、椅子の一つにあの誘拐女が座ってい

た。

「ああ。やっときましたね」

カチン

「ええ。いきなり譜歌なんてもので意識を奪われましたからね」

そう言つて、ティアを睨んでやる。

けど、ティアは私は当然の事をしましたと言つ様な顔で、パイプ椅子に座つてる。

そう、パイプ椅子。

私達に用意されたのはパイプ椅子だ。

なぜか導師イオンもこの場に同席していて、導師イオンは立ったまままだ。

まず、眼鏡軍人ジエイド・カーティス。

この場で一番身分が高い導師に椅子を用意しないとは何事だ。

次に誘拐女ティア・グランツ。

なに、当然のような顔をして椅子に座っている。

導師が立っているのに、なんでお前は椅子に座れるんだ？

そして、導師守護役未満アニス・タトリン。

お前、導師守護役なんだろう？

導師守護役の仕事とは、敵と戦うだけなのか？

導師の体調管理は任務外なのか？

体の弱い導師の為に椅子も用意しないとは何事か！？

ヤバイ。まだほとんど喋っていないのに、胃が痛くなってきた。後で特製胃薬でも飲んでおこう。

思わず胃に手を当ててしまった私に、ルークが心配そう見ている。うん、心配をかけたね、ルーク。

「その椅子にかけてください」

「一つしかないようですか？」

三人に対して椅子二つはありえない。

「貴女は立ってればいいでしょう。あなたの寝ている間に、あなたの鞆から身分を証明する書類が出てきましたから」

勝手に人の鞆を漁ったのかい。

まあ、私以外が使ってもただの鞆だからね。

一応、一般的なものしか入ってないし。

「なので、取調べをするのは、あなたのツレですよ」

「そうですか」

だから、お前は気を利かせてこの部屋から退出しろと言外に匂わせってくる眼鏡。

そして、それをあえて無視する私。

さて、では私がすることは決まっていますね。

私はルークを扉の前に置いて、ツカツカと誘拐女の所に歩み寄り、椅子から蹴り落とした。

私の行動はさすがに予想外だったらしく、もんどりうつて倒れるテイア。

倒れたまま私に対して文句を言っているが、聞き流して椅子をたたみ導師の元へと持っていく。

「？」

導師の前で椅子を開き、

「顔色が悪いです。どうぞ、お使いください」

と言つて、導師イオンに椅子を差し出す。

導師イオンは確か体が弱かったはずだ。

チーグルの森に行つてあまり時間が経っていない状況での取調べ。

それは、体の強くないイオンにとっては負担だろうと思つたのだ。

出来れば、疲労回復のアイテムの蜂蜜などを取らせて疲れを回復してあげたいが、眼鏡達の手前堂々と錬金アイテムを使うわけにはいかない。

なので、譲歩してこの椅子を使って貰う。

椅子に座っていれば、少しはマシだろう。

「ありがとうございます」

テイアを気にしながらも、やはり疲れていたのだろう。

イオンは椅子に座ると、ふーと溜息をついた。

「ホント、イオン様顔色が悪いですよー。キツイならちゃんと行ってください」

「……………」

導師守護役なら言われる前に気付け。

そして、言葉遣いになっていない。

一応、導師守護役としての教育はおざなりとは言え受けたよね？
まさか、それすらも受けていないのだろうか？

そして、私が蹴り倒したティアは私の行動にブツブツ言いながらも、
もう一つの椅子に座ろうとするが、その前に私が椅子を奪取した。

「ルーク様はこちらに」

多分ティアは下士官の筈だ。

ユリアの子孫と言う事は秘密なので、ティアはただの譜歌を使う音
律士だ。

役目的に重要な導師守護役のアニスがく奏長＞なので、ティアのく
響長＞はそれより下だろう。

多分、響長く奏長く響手く奏手く響士く謳士く謳将く奏将だと思う。
途中に他の階級が入ってくるだろうが、ゲーム内に出てきた階級は
これだけの筈だ。

長がつくのは多分、下士官だろう。

手がつくのは尉官。士が佐官。将が将官クラスだろう。

アニスは思ったより階級が低いんだな。もしかして、見習いって事
なのかもしれないね。

とにかく、下士官のティアに一つしかない椅子に座らせる謂れなど
無いのだ。

この場で一番身分が高いのは、導師イオン。その次がルークだ。

身分の高いルークを差し置いて、椅子に座ろうなんておこがましい事この上ない。

私も立っているんだ。お前も立っている。

ルークはティアの視線を気にしつつ、それでも椅子に座る。

さて、ちょっとゴタゴタしたけど、これでようやく話が出る状態になったよ。

なんで、話をする前にこんなに疲労するんだろうね？

フレイと奈落の物語 8 (前書き)

厳しめ成分アリ。

フレイと奈落の物語 8

22

ようやく、取調べになりました。

私は椅子に座らせたルークの後ろに立ちます。

ミュウはルークの肩の上。いつの間にか、そこが彼(?)の低位置になったんだよね。

ルークはうぜーとか言っていたけど、振り落としたりしなかった。

結局、なんだかんだ言ってもルークは優しいね。

「さて、第七音素の超振動はキムラスカ・ランバルディア王国方面から発生。マルクト帝国領土タタル溪谷付近に収束しました。これは、当タルタロスで観測された事象です。これについて何か質問は？」

「私は特にないかな」

「俺もねーな」

「私もありません」

上から私、ルーク、ティアの順番だ。

「では、続けさせてもらいますよ。もし、超振動の発生源があなた方なら、不法に国境を越えて侵入してきたと言う事になりますね」

「ネチネチとした奴だな。何が言いたいんだ？」

ルークが頭の後ろで手を組み、嫌そうにジェイドを見た。

私は、ルークの肩に手を置いて首を横に振る。

「ルーク様、退屈なのは分かるけど少し我慢してください」

「……わーっただよ。続けてくれ」

「ティアが神託の盾騎士団だと言う事は、イオン様に聞いたことと、彼女自身の服装から判断しました。では、ルーク。あなたのフルネームは？」

「ルークだよ。ルーク・フォン・ファブレ。お前らが7年前、誘拐に失敗したルーク様だ。全く、二回も誘拐されるなんてついてねー」

誘拐と言う言葉を口にした時に、ルークの顔が少し歪んだ。

誘拐された後、国の方針で軟禁にされて、不自由な生活だったので無理はないと思う。

レプリカだったから記憶が無くて、周囲から色々と言われて嫌な思いもしただろうし。

「キムラスカ王室と婚姻関係にあるファブレ公爵家ですか」

ジェイドの顔が嬉しそうになる。

これは、あれだ。飛んで火に入る夏の虫とも思っていそうだ。

それとも、鴨が葱背負ってか？ どちらにしろ、意味は同じだけど。

「公爵……素敵……」

ゲームではアニスの瞳がハートマークになっていたが、実際に見てみると獲物を狙うハイエナの目と言ったほうが正しいかもしれない。ジェイドは、にこやかな猛禽類といった感じが。

「誘拐とは穏やかじゃないですねえ」

「ええ、穏やかじゃないですよ」

「……誘拐のことはともかく、今回の件は私とルークの第七音素が超振動を起こしただけです。ファブレ公爵家のマルクトへの敵対行動ではありません」

色々と端折りやがった、この女。
自分の罪をつやむやにする気か？

「大佐。彼女の言葉に偽りはないように思えます。彼に、ルークに敵意は感じられませんか？」

「失礼ですが、発言してもよろしいですか？」

「……どうぞ」

私はコホンと一息ついて言葉を発した。

「では。私がルーク様と出会ったのは、タタル溪谷でした。彼は、私に家に居たら突然その女が歌を歌って人を眠らせながら入ってきて、剣の師匠に切りかかっていったと言いました。その時に、おそらく超振動が発生したのだと思います」

「そうですね？」

「はい。ですよ、ルーク様？」

「ああ」

ブスリとして返事をしたルーク。

「なので、ルーク様は不法に国境を越えたと言うより、その女に誘拐されたと言う事を主張させていたいただきます」

「ちよつと、あれは偶然よ!？」

私はティアの方をチラリと見ると、言葉が続ける。

「超振動が発生した時の状態が不自然でしょう？」

神託の盾騎士団所属の人間が、襲撃の為にわざわざ教団のあるパ
ダミヤ大陸から、キムラスカの王都まで来るなんてありえませんか。

距離もそうですが、警備の厳重さが段違いです」

「何言ってるのよ!？」

「ダアトだって、警備は嚴重よ。だから、私は……」

「あなたこそ何を言っているんですか。キムラスカの他の部分ならともかく、王位継承者が2人も居るファブレ公爵邸の警備は、王城に次ぐ嚴重警備な筈ですよ。」

大佐、少しお聞きしますが、マルクトの王宮警備はダアトの警備よりゆるいんですか?」

「それはありませんね」

何を言っているんだと言わんばかりの返事だった。

うん、その女によ……く言っただけです。

「ほら、ごらんなさい。王位継承者が居る屋敷と言うものは、警備が嚴重だと決まっています」

「だって、ヴァンがファブレ公爵家に入り浸っていたから、仕方なく!」

「仕方なくて他人の家に襲撃を仕掛けしないで下さい。しかも、あなた屋敷の人を無差別に眠らせたんでしょ?」

「テロですか?」

「違うわ!私の行動を一切悪意のある見方をしないでちょうだい!」

「いや、悪意のある見方と言うより、あなたの行動には悪意しか感じられないのだけだ」

人の家で無差別に住民を眠らせて襲撃した挙句、超振動を起こしましたなんて正直ありえない事だと思うのですよ。

ヴァンを襲撃するなら、わざわざ屋敷ではなくて屋敷の外に出た時じゃダメだったのか?

それよりも、ダアトで食事に毒を盛った方が楽じゃないの?とか、色々思ったし。

「だって、私はマルクト軍があまりにも都合の良い場所に居たから、てつきりこの女とマルクト軍が結託してルークを誘拐したと思いましたがし」

「酷いですねえ」

「いや、状況的にそう取っても仕方が無いかと。誘拐した女が属していた組織の長が一緒でしたし」

そこで、イオンを見る。

イオンは、ティアから何も聞いていなかったのか、ティアがファブレ邸を襲撃したと聞いて真っ青になっている。

どうやら、多少政治的な判断は出来るみたいだ。

3歳児だから無理かもと思っていたが、その辺りの刷り込みはきちんと出来ていたのか？

「ティア、早くルークに謝って許してもらってください」

どうやら、刷り込みに大して過大な期待をしていた模様。導師に対しても説明が要るようです。

23

謝って許して貰うか……。

王族を誘拐した場合、謝罪しても許してもらえないような気がするけど。

むしろ、犯罪を犯した場合は謝っても許してもらえないほうが稀だろう。

「失礼ですが、導師イオン。謝っても許してもらえないと思います」

むしろ、ふざけんなと言われる可能性の方が大きいです。

「なので、教団側としての対応を決めておかれる方がよろしいかと思えます。彼女は、おそらくはその格好で、ファブレ邸に襲撃したと思われるので」

神託の騎士団の軍服着用で襲撃したから、身元も簡単に割れるだろうしね。

それに、ヴァンが居るし。

「あとさー、なんで導師がここにいんだよ？」

俺、ヴァン師匠から導師が行方不明になったから探さなきゃいけないーって聞いたんだけど」

会話が一段落着いたと思ったルークが、口を挟んだ。

確かに、ゲームを見ていた私と違い、ルークはなぜ行方不明となったイオンがこの場に居るか分からないだろう。

「それは……」

イオンは、伺うようにジエイドを見た。

ジエイドは頷き、口を開く。

「私の任務に協力して貰っているのですよ。それより、フレイは随分とルークに入れ込んでいるんですね。ケセドニア出身と身分証には書かれていましたのに」

「ああ。いきなり家に押し入られて右も左も分からなくて、お金も無いルークを見ていたらなんとかしてやらなきゃって思っただけですよ？」

どうやら、キムラスカ出身と疑っているみたいですけど」

「いえいえ。身分証はきちんとした正規の物ですからね。一応」

私とジエイドの間に、剣呑な空気が流れる。

さて、一応ティアはこれでいいとして、次はこの陰険眼鏡か。

「ならば、構わないでしょう？」

それとも、私に何か疑うべき所がありますか？」

「どうして、ルークを救ってあなたはエンゲーブに来たのですか？
ルークを送るだけならば、あなたのいたケセドニアの方が近いの
に」

地理感がありませんでした。では、通らないか。

あまり地理に詳しくない私は、たしかこっちだったよな感覚で魔法のじゅうたんを飛ばしたんだ。

なので、エンゲーブになったんだけどね。

私は、ふうと溜息をついて

「私の目的地はご存知ですか？」

「いいえ。そう言えば、あなたの目的地を聞いていませんでしたね」

「セントビナーに薬草の仕入れをしに行く所でした。まず、セントビナーで仕入れをした後に、ケセドニア経由でキムラスカへ送る予定でした」

出来ればあんた達と遭遇したくなかったけどね！

「なるほど。筋は通ってますね」

「納得していただけたら、ルークと私を解放していただけますか？」

「あなたは構いませんよ。けど、ルークはダメです。一応隣国の人間ですからね」

ちっ、やっぱり開放する気はないか。

「ルークは被害者ですよ？」

もしかして、不法侵入の罪とか問うわけじゃないですよね？」

もし、その罪状をルークに被せたら、ここからすぐさま脱出して、王都に乗り込んでやる！

「……まさか。私達もキムラスカに用事がありましたね。ルークに少々協力していただきたいのですよ。ねえ、導師」

その妙な間はなんだ、間は。

「そうですね。ルークなら信頼出来ると思います」

どこで、ルークを信頼できると判断したんだ？

「私達はある目的で、キムラスカに向かっている途中です」

「ま、まさか戦争！？」

ティアが大きな声で叫んだ。

「戦争！？ この艦、戦争に行くのかよ！」

ルークは、自分の居た国が攻められると思い、顔色が変わる。

「まさかー。その逆ですよー。ねー、大佐ー」

「あはは。ダメですよ、アニス。バラしては」

ごめんなさーいと全然謝意の無い謝罪をするアニス。

うん、全然悪いと思っていないな。

「私達は和平を結ぶ為に、キムラスカに向かっていている途中です。そこで、ルーク。あなたの力を貸して欲しい」

あー、聞きたくなかったよ。

完全にゲーム沿いの展開になってしまった。

どこで、狂ったんだ？

あれか。チーグルか？

ミュウをチラ見して、思わず見捨てておくんだっと思ったってしまう私だった。

24

「いやだ」

ルークの返事は、私が驚くぐらい即答だった。

「ルーク！」

ティアがルークを責めるかのように声をあげた。

イオンも悲しげな顔をしてルークを見つめている。

「理由をお伺いしても？」

「お前、チーグルの森でライガクインに術ぶっ放しただろう！？
近くにフレイが居たんだぞ！」

そんな事をする奴がいる軍なんて信用出来る訳ねーだろ！？」

興奮して立ち上がり、ジェイドを責めるルークに、当のジェイドは
と言つと、やれやれと言つた風情で、

「そんな事ですか。大丈夫ですよ。味方識別をしていましたから」
「味方識別？」

そんなことも知らないのですかと、笑いながらジェイドが説明して
くれた。

どうやら、混戦の最中でも譜術を問題なく使うために、味方にはマ
ーキングをして術が勝手に避けてくれるようにするものらしい。
へー、さすがにそんな所までは覚えていなかったよ。

「なので、避けなくてもフレイは何も問題なかったですよ」

「そもそも、交渉中に術ぶっ放している時点で信用できませんよ。
あなた、アレでしょ。私達が交渉している時点で覗き見してたでし
よ？」

そうじゃないと、兵士がアレだけ都合良く来るなんてありえませ
んから」

半分はハツタリだ。

そうでもないよと、出るタイミングが絶妙すぎた。

ライガクイーンが緊張を解いている一瞬を狙つての譜術攻撃なんて、
偶然通りかかったと言つても信用できないだろう。

「それで？ 何か問題が？」

所詮は魔物ですよ」

「交渉相手にいきなり攻撃をするような輩は信用できないと言つたの
でしょう、ルーク様」

「そつだ！」

うちに来た途端、攻撃しないなんて誰が言えるか！」

「そもそも、死霊使いが和平なんて何の冗談ですか？」

あれですか。預言ですか？」

そもそも腹心だからと言って、軍人を、しかもただか佐官を和平の使者に抜擢するほうがおかしい。

普通は文官で、軍人を使うにしても将官レベルだ。

出来れば、キムラスカに敬意を表して元帥であったマクガバン元帥の起用が妥当だと思う。

それに、預言にしても預言重視のキムラスカと違い、マルクトは脱預言が国の方針だった筈だ。

まあ、皇帝が預言を重視しない理由の一つが、失恋と言うのは笑えるが。

それまでにも、預言で国土の一部が欠落したりと色々あったからなら。

預言に対する不満は大きかったのだと推察できるけどね。

「けれど、協力していただけないならば、軍事機密を知られたと言う事で捕縛しなければいけないのですよ」

「軍事機密と言うならば、そう簡単に他国の人間に明かさないう欲しいのですけど」

「あなた達を信頼したんですがね！。やれやれ、信頼に応えていただけませんか」

「信頼と言うよりか信用では？。わら、信頼だと信じて頼るですけど、信用だと信じて利用でしょ？」

あなたの場合だと、ルークの地位を利用しようとしているじゃないですか」

「それ以外に、彼に……」

「それ以上言われると、和平以前の問題になりますよ?」

言われたときのルークの心情を慮って、釘を刺す。
むしろ、本気で釘を刺したい。

「そもそも、俺の地位を利用するとか言っておきながら、礼の一つも出来ない奴を叔父上に紹介なんて出来るかよ」

確かに。

ゲームでも不敬三昧だったな、この眼鏡軍人。

フレイと奈落の物語9 (前書き)

当然のようにアンチやヘイト成分がてんこもりです。

フレイと奈落の物語9

25

ルークの至極当然な言葉に、ティアが非難の言葉を口にしようとする。

それを、ジェイドが制して、片膝を付き、

「お願いします、ルーク様」

と言った。

その態度に、ティアやアニス、さらにイオンまでが尊敬の目をジェイドに向けた。

それと同時に、ルークに対しては非難の目を向ける。

うん、確かにジェイドにしては礼を取ったのだろう。

そう、ジェイドにしてみれば。

けれど、表情は未だにルークを馬鹿にしているのを隠そうともせず、頭すら下げない。

この男、頭を下げたら負けとも思っているのではないのか？

敵国との和平なんて、和平を申し出たほうが頭を下げてなんぼだと思っただけだね。

当然、ルークはジェイドの形だけの礼に気付いたようだ。

今までの家庭環境から、ルークは人の心の動きに敏感なんだよね。

正確には、人の負の感情に敏感なのだろうが。

それを感じ取ったルークは、

「やだね」

とにべもなく、和平の取次ぎを断る。

当然だよな。馬鹿にされての和平なんて、取り次げる訳がない。

「あなた、何様のつもりなの!？」

「その前にお前が何様だ、ティア・グランツ」

ティアの非難に間髪いれず、私が叫ぶ。

私の大声に、一度だけビクリとなり非難対象をルークから私に変えるティア。

「大佐はルークに礼を尽くしてまで、和平の取次ぎを頼んだのよ!？」

「礼ねえ……。頭も下げずに、更に相手を馬鹿にした態度を隠そうともしていないのに、礼を尽くしたって言えるの?」

「それは…けど!」

「礼を尽くしていない状況の下、ルークが断るのは当然じゃない。多分、頭を下げたのだから、わがままな貴族の坊ちゃんに膝を付く位では、私のプライドは傷つきませんよってか!」

それに、あなたは何の権利があつてルーク様とジェイドもしくはイオンの取次ぎ交渉に口を挟んでいるのよ?

王族、導師、そしておそらくジェイドは和平に対しての全権を持つている立場なのでしょう。あなたは、導師の交渉に口を挟めるくらい偉いのかい? 響土つて言う下士官の分際で。身の程を知れ」

私の指摘に、ティアは顔を真っ赤に染め、ジェイドは一瞬だけ片眉をあげた。

おそらくティアの反応に目がいつて、私ぐらいしか気付いてないと思うが、確かに彼の表情は一瞬だけ変わった。

「これだけ礼を尽くしても分かって貰えませんか」

「礼なんて尽くしてないですよ！」

とうとうチーグルのミュウにすら突っ込みを入れられる始末。

マルクトってロクな人材いないのかな。

さつきから、ジェイドの部下達は誰もジェイドを止めようとはしない。

まあ、何人かの顔色が凄いことにはなっているが。

そう。牢に入れる云々辺りから。

やれやれとジェイドが肩を竦めて、傍らにいたマルクト兵に私達を牢に入れるように指示をした。

「はっ、てめーらの顔を見るより、牢の壁を見る方がマシだ！」

「右に同じ」

「……早く連れて行きなさい」

拘束はされないまでも、私たちは兵士に連れられて取調室を後にした。

次は脱獄かな。

錬金術士が本気になったら、どんな場所からでも逃げ出せるというのを証明してやるわ！

私とルークは、土下座している軍人達を見て、どう彼らに声をかければいいのか悩んでいた。

始まりは、私とルークとミュウが牢屋に入れられた事から始まる。幸い私のバッグは取り上げられなかったので、錬金アイテムの補充は可能だ。

まあ、基本的な爆弾や薬剤は体の至る所に隠しているし、アトリエを展開すればアイテムの補給は可能だしね。秘密バッグの予備はアトリエにあるんだから。

ルークの荷物にも手はつけられていない。

だって、ルークの武器って買い換えてないから木刀のままだし。

木刀なんて、真剣を振り回している連中からしてみたら、玩具みたいなものだからね。

幸い牢には私達の他には誰も入っておらず、私達も同じ牢に入れられた。

私は少し顔色が悪いルークの為に、秘密バッグから敷物とティーセツトを取り出す。

「そのバッグのどこに入ってるんだ？」

「ぜってー、スペース的に無理じゃ……」

「乙女のひ・み・つ」

「……………」

ルークを黙らせてから、お湯を沸かし始める。

ここでは焚き火用の薪もないので、<火炉>を使って水を沸かす。

本来は武器に炎の力を付与するための鍛冶道具なんだけど、実はお湯も沸かせるんだよね。

品質を落としまくつたら。

おかげで我が家は簡易の竈として使用しています。

いやー、燃料がいらないから便利なんだよねー。調合が面倒だけど。

私が秘密バッグからヤカンを取り出した辺りで、ルークの表情は諦めと言うものを学びましたって感じに変わっていた。

人間、諦めが肝心と言ついい勉強になったと思う。

ハーブティーの葉を多目に入れておいて、お茶の量は多く作っておく。

これから、一騒動あるのでゆっくりお茶を淹れる時間がなくなりそうだからね。

一応くグランツ銀>とアイヒエとポットウォーマーで現代で言う所のステンレスポトルを作ってみたりもしたし。

いや、これが中々便利なんだよね。

ちゃんとミユウ用も入れてやる。

人間のティーカップだけど、大丈夫かな？

ルークは、始めて見るハーブティーに興味津々だ。

まあ、家ではお高い紅茶しか飲んでいなさそうだからね。

今度、私が作ったトーン茶を飲ませてみたいものだ。どーいう反応するんだろ？

「ルーク、ゆっくり飲んでね。それ、一応精神が落ち着く効果があるから」

「おう」

「それと、お茶菓子は何がいい？」

カステラ、タルト各種、クランツとかあるけど。あ、クランツってドーナツの事ね」

「……なんでもいい」

「んじゃ、昼食取ってないでおなか減っただろうし、ミートタルトにしようか？」

私はミートタルトを取り出して、ルークの皿に置いてあげる。

「ホント、何でも持つてるんだな」

「まあ、時間と設備があればちゃんとしたご飯を作ってもいいけどね」

敷物の上でちょっとだらけた感じで食事を取っていると、なにやら慌しい。

ドアが開けられ、取調室で眼鏡大佐の横に居た人と、それ以外の軍人で階級章が高い人が来ていた。

おそらく、取調室の時に横に居たのは大佐の補佐官か副官だろうな！。

「ルーク様、申し訳ございません」

ルークの姿を牢屋で確認した彼らは、冒頭の見事な一斉土下座を披露したのだった。

27

実際ルークなんて土下座なんてされるのは初めてだろう。

さすがに公爵邸で土下座が横行している訳はないと思うし。

それに、土下座って日本風の文化だからね。

確かホドが日本風の文化だった筈だ。ならば、ホドを所有していた

マルクトは知っていてもおかしくないか。

「すみません、ルーク様が困っているのですレ、止めて貰えませんか？」

「決してマルクトは、陛下は和平の事を真剣に考えて…」

聞けよ、人の話。

クドクドとマルクト皇帝が今回の和平にどれだけのつよい思いで望んでいるか、語られました。

私もルークもげっそりです。

うん、皇帝ってすっつつごい国民の人気があるのは分かった。

「えーと、ルーク様。私が相手をしまししょうか？」

「うん。俺、すっげー疲れた」

うん。朝起きてライガの森とチーグルの森をハシゴして、さらに事情聴取だもんね。

少し精神的に辛いかもしれないね。

私はルークを座らせてお茶の残りを入れてやる。

ついでに私も飲む。

さて、クドクドとした話が一段落したのが、相手が土下座をやめて私達を見る。

そこには、茶を啜っている私とルークの姿があった。

「フレイ、終わったみてーだぞ」

「ですね。まあ、最初の5分以降は大体が同じ話でしたしねー。でもさ、ルーク様が報告しなくても、眼鏡…じゃなくてカーティス大佐がこのまま和平の使者を続けたら、どっちにしる怒らせますよ？」

「それは……大丈夫かと」

うん。その間はなんだ、軍人？

そして、どうして視線を私に合わせようとしなないんだ？

「じゃあ、カーティス大佐はルーク様が世間知らずの坊ちゃんだから、あの対応だったんですか？」

「世間知らず……」

あ、ルークにダメージがいった。

慌てて慰めるミュウに、ルークの事を心の中で頼んでおく。

「そうです」

なーんて嫌な奴。分かってはいたけれど。

「どっちにしろ、私たちが報告をしなくてもルーク様が捕縛されていたと知ったら、戦争になると思いますよ？」

「それは……越権行為ですが、私から帝都グランコクマの方に報告をいたしました。大佐は隠密行動の為に帝都への報告はしてはならないと言っていました。今回の一件は国に対して重要な事柄になると思いましたが」

それは、いい判断だ。

そして、眼鏡。報告ぐらい真面目にしろや。

そう言えば、タルタロスが奪取された後、特に報告をしたって言う描写がなかったよな……。

あれって、まさか隠密行動な事を盾にとって、報告しなかったんじゃない……いや、まさかね。

「おそらく数時間で、帝都からなんらかの指示が大佐の方に下ると
思います。それまで、ご不満ではありませんが……」

「ここにいればいいんだろ？」

「はい、本当に申し訳ございません」

ペこぺこと立ってから頭を下げ、さらに危険がないようにと兵士
を一人だけつけてくれた。

ちっ、脱走が出来なくなっただじゃねーか。

フレイと奈落の物語10

28

見張りが居るので、しばらくルークと2人でゆっくりとしていると、突然タルタロスが大きく揺れた。

「な、何事ですか!？」

扉の前で直立不動をしていた一般兵Aが、あまりに突然の出来事にびっくりして立ち上がった。

「フレイ、なんだよこれ!」

ルークも揺れるタルタロスに思いつきり動揺している。

まあ、それは当然だろう。

今までほとんど揺れのなかった陸艦が大きく揺れたのだから。

しかも、断続的にだ。

「兵士A。陸艦ってこんなに揺れるものだったけ？」

「当艦は軍艦ですので、道の整備されていない場所でも使用可能です。なので、余程のことがない限りこんなに激しい揺れは起きません」

動揺していても、きちんと私の質問には答えてくれた。

だったら、タルタロス襲撃のイベントが発生したんだろうなあ…。

「だったら、考えられることは一つね。敵襲よ」

「敵って、どこだよ!? まさか、キムラスカか？」

今回の襲撃者として一番考えられるのは敵国であるキムラスカだ。けれど、私はそれが違つと知っている。

「どちらかと言うと、導師を誘拐されたと思っっているダアトじゃない？」

「そんな！」

兵士Aが悲鳴をあげた。

ダアトの襲撃だとしたら、預言の可能性があるのだ。

ダアトは預言によつて行動をするのだから。

ダアトが戦争に絡むと言う事は、預言に読まれていると言う事だ。

兵士Aは今年の預言で、きつと生死のことは何も言われなかつたに違いない。

そして、その人の生死に関わる預言は、秘預言として公開されないことになっている。

だって、自分の死を知つた人間がそれを回避する方向に動く事は、簡単に想像つくからだ。

いや、そうやって守らないと達成されない預言なんて、意味あるのか？

まあ、多少の強制力はあるだろうけどさ。

それ以前に前もつて自分の未来を知れるのならば、ちゃんと対策をしようよと思わなくもないし。

特に災害系の場合は、預言で起こる事を知つたら回避できそうなものなのに。

わざわざ預言通りに行動するって、馬鹿だよなあ…。

「敵襲と言っても当艦は通常走行とはいえ、動いているんですよ？」

しかも、キムラスカから陸艦が侵入したとは報告に入っていないん！」

「いや、ダアトには魔物を手足のように使う人がいるって聞いたことがあるんだけど。えーと、六神将の妖獣のアリエッタだっけ？」

ゲーム内でも彼女は、グリフォンにライガを乗せて襲撃させ、それと同時に他の六神将がタルタロスに侵入したのだから。

「まさか…そんな…」

よろよろと一歩二歩ばかり下がって、扉にドンとぶつかる筈だった兵士A。
けれど、彼は扉にはぶつからなかった。

ドアが開き、兵士Aの腹から剣が生えた。

「ぎゃっ！」

「フ、フレイ！」

兵士Aが悲鳴をあげて、その場に倒れる。

ルークが私の肩の辺りの服をギュッと掴んだのと同時に、明らかにマルクト兵とは違う装いの兵士が2人入ってくる。

その手は初めて人の血を見た事で、微かに震えていた。

入ってきた兵士は倒れた兵士Aを邪魔だとばかりに蹴り飛ばした。

私はルークを背中で庇いながら、袋の中に手を突っ込んで心強い援軍を呼び出したのだった。

私が呼び出したのは最近調合用と言うよりか、戦闘用として特化してきた感があるにゃん太とにゃん吉のうち、打撃武器を装備しているにゃん太だ。

「な、なんだこれ!？」

ルークが、私を取り出したアイルー人形を見て驚きの声をあげ、凝視した。

ダアト兵も見慣れぬ人形を見て、剣を構える。

ダアト兵が扉横ボタンを押すと、私達と兵士の間を遮っていた光の牢が消えた。

その瞬間、にゃん太の姿が消え、兵士2人が床に突っ伏す。

少しだけ見えた動きから、鎧が厚い腹の辺りを殴打していたので、死んではいないだろう。

一時の間、固形物が取れなくなってしまっているだろうが。

私は素早く兵士の装備を取り上げると、一本をルークに渡す。

「使う機会はないと思うけど、一応持ってた」

「こ、これ本物の剣なんだよな？」

初めて真剣を持ったルークの声が、若干上ずっている。

「まあ、木刀ではないわね。出来るだけ戦闘は避ける予定だから、安心してね…ってマルクト兵の様子を見ないと」

助かるものなら助けてあげたい。

「い、生きてるのか？」

「ダアト兵は生きてるわよ。マルクト兵は…」

私は開いたままだった扉を閉めて、マルクト兵の側にかがんだ。胸は上下しているので、かろうじて生きてはいるだろう。

おそらく、このまま放置をすれば10分以内に死亡が確定されるだろうが。

私は、バッグからアルテナの水を取り出し、傷口にかけた。

傷が完全に治るとまではいかないが、これで止血をしよう。

さすがに、死ぬ一歩手前なせいで、アルテナの水では完治とまではいかない。

アップルグミも何個か拾っているのだが、意識のない状態では食べさせることは出来ない。

口に入れてだけで回復すればいいけど、やっぱり食べないと無理だろうし。

時間があれば更に常備薬を使ったり、最初からアルテナの傷薬で治してしまうんだけどね。

今の切迫した状況中では、これが精一杯だ。

「一応命は取りとめたわ。安全な場所で再度治療をすれば、元通りに回復するわよ」

「そっか」

ホッと、ルークが安堵の息をついた。

けど、時間的にはあまり猶予のある状況とは言えない。

ゲームとは違い戦力がジェイドとティアとアニスしか居ない状況下で、アニスがイオン救出の為に別行動を取ると、ジェイドとティアしか残らないことになる。

そうなる、ジェイドのことだから緊急時だからと私達を協力と言う名の強制を強いるのは想像に難くない。

私は絶対断るけど、そうなる、ツレのティアがキャンキャン煩い。

あの女の甲高い声は、脳みそに響くんだよ。

出来れば、そのような不快な状態になるのは避けたい。

ゆえに、私はさっさと脱出する事にした。

兵士Aは本来ならば足手まといなので、連れて行かないでおきたいのだが、ルークの態度からしてみたらそれは不可能に近い。

自分が逃げるために生きている人を見殺しにしたなんて、トラウマになりそうだしね。

助けられないって訳ではないので、助けることにする。

30

脱出に当たって、まず私がしたことは入り口の下の部分にロープを張ったことだ。

これで多少の時間稼ぎは出来るだろう。

次に魔法のじゅうたんを取り出して、兵士Aを乗せてしまう。

さすがに、無敵のアイルー猫でも持ち上げることは無理なので、飛ばしていない状態で引っ張らせてもらった。

多少痛みがあったのか、顔を歪めていたが命には代えられないので

我慢してもらおう。

ここまでして、ようやく脱出経路作りだ。

少しだけ通路を伺ったが、うじゃうじゃと神託の騎士の鎧を着た兵士達がマルクト兵と争っていたので、首を引っ込めた。どうやら、通路は使えないようだ。

「ルーク、下がって」

私はこの部屋に脱出経路を作ることにして、<レヘルン>を取り出した。

レヘルンは氷属性の爆弾で、敵を氷で攻撃したり、氷漬けにしたりすることが出来る。

夏に使うと涼しくていい爆弾なんだけどねー。

「雪だるま?」

今回取り出したレヘルンは、アーランド式の雪だるま形式のものだ。私ルークに何も答えずに、レヘルンを外部方向の壁へ向けて発射した。

パキンと音がして、壁が凍りつく。

「何してんだよ!?!」

「ここからよ」

次に私が取り出したのは、フラム。ようするに炎属性の爆弾だ。

氷と炎を連続して使う事によって、金属の収縮と膨張をあまり間をおかずにさせて、それによって金属の疲労を誘い、壊れやすくするのだ。

これでだめだったら、液化溶剤でも使って溶かしてしまっぐらいしか私に取れる手段はない。

もしくは、眼鏡に遭遇する事を前提で、お猫様無双に頼って正面突破か。

出来れば、正面突破は避けたいなあ…。
キツイし、何より面倒だ。

六神将を揃って撃破なんて序盤では考えられない難易度だ。
しかも、足手まといのルークを守りながらだと、なんて無理ゲー。

フラムを投げて最後に軽く衝撃を与える為にクラフトを投げてやる。

多少煩い音はしたが、まあ周り自体が剣戟や譜術で煩いからね。
多分、大丈夫でしょ。

事実、徐々にこちらに向かってくる譜術音があるし。
大佐！だのの音が聞こえるけど、無視無視。

「すげー…どうやったんだ？」

「論理は落ち着いたら説明してあげるわよ。それより、さっさと脱出しよう」

「どーやって脱出するんだよ？」

陸艦なので気軽に飛び降りたら怪我をすることは請け合いだ。
魔法のじゅうたんは兵士とそれを落ちないようにするために、にやん太を乗せたために余分スペースはない。

「大丈夫。まだ飛べる道具はあるから」

そう言つて、私は秘密バッグから2人乗り用の<フライングボード>を取り出した。

ザールブルグでも何度も作つた事のあるフライングボードだが、結局私はイヴァンのように立つたまま乗ることが出来なかつた。

しようがないので、据わつて乗る事を前提としたフライングボードを開発。

けれど、なぜかフライングボードとの相性が悪い私は、中々安定して乗ることが出来なかつたんだよね。

なので、私以外にも補助の為にもう一人乗れるようにしたのが、このフライングボードだ。

「ルーク、乗つて！」

私は横座りでフライングボードに座ると、ルークもそれに習つた。

「いくわよー！」

魔法のじゅうたんの操縦はにゃん太に任せて、私はフライングボードで空中へと飛び出した。

私達が飛び出した直後、背後で青い物体が紐に引っかかつてこけたのなんて見てないですわよ。

ええ、見てないですとも！

フレイと奈落の物語 1 1

3 1

外に出るとまず目に飛び込んできたのは、グリフォンのいかつい顔だった。

「急上昇おおおおおお！」

「うおおおおおおお！」

焦りのあまりフライングボードを急上昇させる。
おなかにむずむず感が走るが、それは我慢する。
すると、違うグリフォンが近づいてくるので、今度は急降下。

「みゆうつうつうつうつー！！！」

「馬鹿！しっかり掴まってるー！！！」

ミュウが飛ばされかかったが、ルークが間髪救い出す。
とにかく、小回りを駆使してグリフォンとの距離を取る。
ちなみに、魔法のじゅうたんはと言うと、にゃん太が不用意に近づいて来るグリフォンを血祭りにあげておりました。

いや、一撃で二匹倒すってなんて事やってるんだ。

こう、グリフォンを殴りで跳ね飛ばして、二匹もろとも叩き落とす。

兵士Aに血がドバドバかかっているんだよね。あれ、起きたら絶対びっくりするわ。

気付いたら服が魔物の血塗れー！。

心なしか、魔法のじゅうたんにグリフォンが近づいていないような

気が…。

その分、私たちの方にやってきてないか？

逃げていてもキリがないし、この状況を知って六神将のアリエッタが出てきても不味い。

今はまだアリエッタがいないせいで、ロクな連携が取れていないけど、アリエッタが参戦したら連携も入ってくるので捌くのが難しくなるし。

私は鍊金服のポケットから、星の形をした<メテオール>を取り出した。

一応ザールブルグ方式でもメテオールは作れるけど、可愛くないんだよねー。

いや、爆弾にデザイン性を求めてもどうしようもないって分かってはいるけど、どうせ持つなら可愛いほうがいいと判断したのだ。

私は、メテオールを掲げ魔力を込めた。

パキンと音がして、メテオールの星に一つひびが入った。

それと同時に頭上から石が降ってきた。

あれ、一応隕石が降るような仕組みにしていた筈だけど…。

私は運良く私の手元に落ちてきた石を見てみた。

エンゲープで見たのとは違う文字の羅列。

なんだ、コレ…。

「これ、譜石じゃねーか？」

ルークが後ろから覗き見て言った。

預言が詠まれると、第七音素で出来た譜石と言う石が生じる。

それには、その時詠んで貰った預言が記されているらしい。

確かこの世界の上空には、その譜石が浮かんでいるらしい。
多分、メテオールが隕石より近くにあるそれを隕石と認識して落下させているのだとは思っただけねど……。

隕石ではないせいか、いまいちダメージが通っている気がしない。
しかも、タルタロスの上に居る神託の騎士団の人間が怒り狂っている。

「なんか、すげー罰当たりな事をしている気分になってきた」
「……………だね」

ガゴンガゴンとぶつかっては壊れていく譜石を見ながらルークがぼやいた。

自分は信じていないけど、さすがに人の信仰している物を利用するのはいけないだろうなあ……。
また、あの女に絡まれそうだ。

32

グリフォンは、教団にとっては罰当たりアタックで大分数が減らせた。

メテオールはまだ残っているので、再び使えばいいのだが、なんか気が乗らないんだよね。

ほら、自分が信仰していない宗教でも、相手が信仰しているのならばそれを尊重しないといけないような気がしてさ。

ほら、元日本人の感覚として、宗教には寛容なんだよね。
私の生きていた時の日本って、宗教しつちやかめつちやか状態だったからなー……。

グリフォンたちは、出てくる神託の盾騎士団以外の人間への攻撃を命じられているのか、再び攻撃を仕掛けてきそうな感じだし。
けど、さすがにメテオールが怖いのか少し遠巻きにしてこちらの様子を伺いつつ、包囲網を狭めてきているって感じだ。
頭いいなー。よっぽどきちんと躡けられているのか？

まあ、メテオールは隕石以外にも色々と降ってこせされるから、その辺りはどうとでもなる。

きちんと分かるように、品質別にちよつとしたマークを入れているし。

戦闘中に品質を見分けるなんて時間的な余裕はほとんどないからね。

私は、もうバッグから効果の違うメテオールを取り出した。

ぷになんてこちらの世界には多分いないと思うので、それを降らせる訳にはいかないけどこれなら大丈夫だと思う。

「この屑……そ……おり……！！」

タルタロスの艦橋の上で、赤い髪をした黒い男が剣を振り回してなにやら怒鳴っているが、風が強いしグリフォンの鳴き声が煩くて途切れ途切れにしか分からない。

しかも、私は目があまり良くないんだよねー。

ルークとは違う赤い髪なのは分かるんだけど、顔はほぼ判別不能。
やっぱり、暗い環境下での調合って目が悪くなるよなー。

それでも、日本に居た時代は眼鏡が必需品だったけど、こちらでは

眼鏡が必要になるほどではない視力だ。

多分、あれ話的にはアツシユだとは思っただけだね。
タルタロスで確か出てきたから。

「なんだあいつ？」

「さあ、ですのー」

ルークも判別不能だったらしく、タ

ルタロスの上で跳ねて怒っている人物に向かって？って感じにな
っていた。

私は内心アツシユに合掌しつつ、メテオールを起動した。

そして、降り注ぐ巨大うに達。

それに潰されていくグリフォンと、艦橋にいた神託の盾騎士団。
その中には、アツシユの姿もあった。

うん、なんかアツシユ生きているといいなー。

いや、多分大丈夫だろう。

黒っぽいし、台所の害虫並みの生命力を期待してもいい筈だ！

でも、アツシユが死んだら大爆発阻止できるし、実は結果オーライ
なのだけどさ。

彼の人生も不幸だから、出来れば彼にも幸せになっ
て欲しいものな
んだけど。

目下の問題は、煙を上げて動かなくなったタルタロス
なんだけどね。
さすがにメテオール二連発は、グリフォンの襲撃と
あいまってかな
りのダメージだったようだ。

ま、まあ六神将には天才譜業学者がいるから、修理
自体は可能だろ
う。

さ、グリフォンも一掃出来たし、トンスラしますかね。
私は慎重にフライングボードを飛ばして逃げたのだった。

いや、だって六神将なんて面倒なモノ相手にしたくないわー。

33

さっさとタルタロスから撤収した私達は、そこから魔法のじゅうたんで1時間ほど離れた場所へと、一度着陸をした。

ルークとミュウがなんかぐったりしているんだよね。

「ご主人様の運転はデンジャラスにや」

失礼な。

確かにちよつと不安定な飛行で安定しないけど、一応飛べてはいるわよ。

「今度にゃん太が後ろに乗りなさい」

「簡便にゃー！ーっ！！」

ガクブルガクブルとするにゃん太を放っておいて、私は兵士Aの手当てをする。

ルークとミュウも心配だが、きっと命には別状はないだろう。

「あー、くそ、この服どうなってんのよ……」

私は無駄にボタンが多い作りになっているマルクト軍の軍服を捲り

あげながら、そうぼやいた。

綺麗なブルーの生地が血で染まっている。

なんとか、傷口部分を露出出来た私は、そこに取り出したく常備薬を塗っていく。

艦内でアルテナの水で応急手当はしたので、これで十分だけど念の為にくヒーリングスポアを傷口に埋め込んでおく。

この胞子は、ある素材の品質が余程高くないと毒状態になるので、同時に解毒薬も投与しておく。

これで、兵士Aの手当ては終わりだ。

捲り上げた軍服を元に戻して、さてルークとミュウの手当てだね。

酔い止めの薬は、アルコール成分が多いのでお子様のルークとミュウには恐らく不評だと思うので、ホップフェン水を取り出して与えた。ルークもミュウも水が欲しかったのか、一気にソレを飲み干して少々咽てた。

まあ、普通の水だと思っていたら、少々甘くてびっくりしたのだから。

「おいしいですよー」

ミュウなんて喜んでゴクゴク飲んでいる。

いや、健康的には何も問題がないと思うけど、一応薬なんだけども……。

「ルーク大丈夫？」

「あ、ああ。大分いい。これ、薬だったのか？」

「うん、そう。味は大丈夫だった？」

「昔、母上の薬を舐めた事があつたけど、それよりかなりいいな。母上の薬もこんな味だつたらいいのに……」

そう言えば、ルークの母親は病弱って設定だつたっけ。

普段はなんとも思っていない風だけど、やっぱり母親は大事だつたんだな。

そー言えば、母親の薬を取りに行くイベントがあつたな。ベニテングダケだつたか？

「一応兵士の人の手当は終わったよ。強制的に目を覚まさせてもいいけど……どうする？」

「タルタロスを襲つた奴が、ここにも来るのか？」

ルークの声が少し震えていた。

まあ、人が死ぬのは見ていなかったけど、死にそうになった人物がいたしなー。

恐怖心が出ても仕方ないか。私も昔は怖がりだつたから、ルークの気持ちは良く分かる。

今は、大分慣れちゃつたけどね。

人間、何事も慣れなのかもしれない。慣れたくはなかつたけど。

「なんとも言えないなー。神託の盾騎士団の目的が、導師ならば導師を確保したら撤収すると思うけど……。ほら、ルークが、誘拐されたつて言っていたでしょ？」

「おう」

「だつたら、まず導師の確保をしていると思う。それから、導師次第かなあ……」

さて、兵士Aとルークを連れてどこに向かうか。

ゲームでは、アニスとの合流場所であるセント・ビナーへと向かう

た。

けれど、私達はアニスと合流しなくていいので、別の場所へと向かえる。

ケセドニアは確か海を渡らないといけないので、少々怖い。方位磁石も持たずに海を渡るのって、ある意味自殺行為だよね。

だとしたら、陸続きでカイツール、もしくは戻ることになるがエンゲーブって言う手もある。

「ルークを先に送るかなあ……けど、兵士の人をどうするか……」

その時、小さな声が私とルークの耳を打った。

「……セント・ビナーへ向かって貰えませんか？」

小さくて少ししゃがれた声だったが、それは兵士Aが発した声だった。

兵士Aが意識を取り戻したのだ。

フレイと奈落の物語12

34

私とルークは、兵士Aの場所へと向かい慌てて兵士Aを起こした。傷は塞がっているのだが、多少痛みがあるのか顔を顰める兵士。

「セント・ビナーに向かえばいいの？」

「はい。本来ならば、艦に戻って戦線に復帰しないとイケないのですが、恐らくタルタロスは制圧されているでしょう。第三師団は通常は300人近い人数なのですが、極秘と言う事で大体半数の人数しかいませんでしたから」

「そんなにヤバイのか？」

「おそらく、今回の件は六神将が何人かで来ていると思います。グリフォンを使役していたのは妖獣のアリエッタでしょう。だとしたら、あと一人ぐらいは……。六神将はカーティス大佐と同じぐらいの手だれです。いかに、大佐と言えども軽くあしらうなんて真似は出来ないでしょう」

実際ゲームでは、ルークを人質に封印術かけられてたしね。

「鮮血のアッシュはあれだね。艦橋の上でなんか怒鳴っていた赤トサカ頭がいたから」

「赤トサカ……た、多分それだと」

「私一人が戻っても恐らくどうにもならないでしょう」

「そりゃー、悪名高き死霊使いでも敵わないのに、兵士Aじゃねー

…」

「あの、兵士Aってもしかして…」

「お前の事じゃねーの？」

「だって、俺らお前の名前知らねーし」

うん、ルーク。それ、トドメさしてる。

「兵士なんて竹の子の子のように出てくるモブAだしねー」

「モ、モブっ…。私、ちゃんと名前があるのですが」

「お、なんて言うんだ？」

ルークが身を乗り出した。

「エーリツヒ・エイベル、です」

「…なんだ、どっちにしるAだ（ですのー）」「…」

ガツクリとこれからも兵士Aと呼ばれることになった、エーリツヒ・エイベル。すなわち、兵士Aであった。

「それに、私は上の人からルーク様の安全を守るために配置されました。任を解かれてない今、ルーク様が動くのならば、私も動かなければなりません」

「なるほど」

「だから、身勝手とは思いますがセント・ビナーへ一緒に来てもらえませんか？」

「……ルーク、どうする？」

「いいんじゃない？」

「下手したらマルクト兵に捕縛される危険性があるわよ。ルークはキムラスカの王族だから」

「そんな事はありません！

陛下は今回の和平に賭けておられるのに、そんな事は！」

って言ってるけど、言ったら悪いが所詮彼は下っ端だしね。

「さて、ルーク。どうしたい？」

私は、一応旅の目的地がセント・ビナーだからね。後は、ルーク次第だ」

「俺もいいよ。どうせ、一人で旅なんてできねーし」

「んじゃ、決定だね」

目的地はセント・ビナー。

おそらく、そこからカイツールを目指すことになるろう。

だとしたら、神託の盾騎士団の封鎖前にさっさとセント・ビナーへと向かうか。

35

魔法のじゅうたんに兵士Aとルークを乗せて、にゃん太のたつての頼みで、私達はフライングボードではなく魔法のホウキに乗って移動した。

スピード的に一番遅いのが魔法のじゅうたんなので、それに合わせて飛ぶ。

「それにしても、あなたはすごいですね。空飛ぶ譜業を完成させるなんて」

「空飛ぶ譜業ねー。シェリダンには大規模な飛行譜業を開発中って言ってるじゃない。それに比べると、私の作ったコレなんて玩具みたいなものよ。連続稼動が難しいから、適度に休憩を取らないといけないし」

どっちにしろ、結構神経を使うからマメに休憩を取るにこしたことはない。

昔、調子に乗って木に突っ込んだもんなー。

「それでも、十分凄いですよ……って、もうそろそろセント・ビナーですね。ほら、見えてきました」

日が沈む前に、私達は無事セントビナーへと到着できた。

目立つのもなんなので、少し離れた場所に下りてセント・ビナーへと入る。

そろそろ夕方の時刻。

町は家路へと向かう人でごった返していた。

「先にマルクト軍の駐屯地に行ってもいいですか？」

「先にホテルを取りたかつたんだけど……」

「すいませんが、お願いします」

私とルークを顔を見合わせて、承知した。

結構薬草の買い付けの商人が多いみたいで、ホテルを早目に抑えて起きたかつただけだなー。

最悪広間にテントでも張るか。

下手な安宿より、そちらの方が安全性が高くなる場合もあるし。

特に、マルクと駐屯地前にテントを張れば悪さをする馬鹿もいないだろ。

私達は駐屯地へと向かった。

兵士Aは入り口で自分の所属と名前、階級を言い、至急報告したいことがあると告げた。

ちよっと偉そうな人がやってきたので、耳打ちでこっそりと何事か

を言うと、慌てて奥に入った。
そして、兵士Aについてこいとだけ言うと、私達はマルクト駐屯地へと足を踏み入れた。

途中で兵士Aが報告の為に別れ、私とルークは応接室らしき場所へと通された。

座り心地の良いゆったりとしたソファと、高そうなテーブル。テーブルの上には、お菓子が置かれていた。

どう考えても、ルークの素性がバレているっぽいなあ…。

まあ、Aに口止めしなかったし、口止めていても国の事を考えたら報告するよなあ…。

私は鞆から念の為にと、色々を取り出して必要であろうものは懐やポケットのすぐ取り出せる場所へと収納していく。

腰のポーチも時間がある時に、アイテムの入れ直しをしておいた方がいいなあ。

どんな時でも対応できるように、傷薬各種と状態異常回復アイテムがメインになっているし。

実際、イヴァンたちと一緒に行動していると、よほどのことが無い限り私に攻撃の機会が回ってこないんだよね。

「一体どれだけその鞆に入ってるんだ…って、アレその鞆さつき検査されていなかったか？」

軍の基地なので、危険物を持ち込んでいないかチェックはされているんだよね。

実際、私の杖とルークの木剣は預かられたし。

「これ、私しか取り出せないようになってるのよ。えーと…ルーク、

コレつけてみて」

そう言つて、私は鞆から取り出したガラス製の飾り物をルークへと渡した。

「なんだ、コレ？」

「一回しか使えないけど、攻撃を受けたときに力場を発生させて攻撃を防いでくれるアイテム。＜ガラスの護符＞って言うんだけどね」

ガラス製の調合品は多々あるけど、一番使い勝手がいいのはコレなんだよねー。

「へー、こんなのがねー。どうやってつけた？」

「コレ、マント留めとしても使えるように作ったんだけど、ルークはマントしてないしね。後で買いに行く？」

旅にはあったほうが便利だし。まあ、記念品にもなるし」

「いいのか？」

「うん。もっと早くに気付くんだったなあ……」

よくよく考えると、ルークの旅装なんて全然考えていなかったよ。

時間があれば、手持ちの生地を使うけど、仕立てるだけの時間はなから市販品で我慢してもらおう。

マントぐらいだったら調節も簡単だし。

服や下着は自分のサイズに仕立ててもらったほうが、着心地が雲泥の差なんだけどね。

まあ、農村のエンゲープよりこのセント・ビナーの方が上質な商品はあるだろう。

領収書を貰っていたら、後日公爵家から出るかなあ……。多分無理だよなあ……。

まあ、いいけどさ。

ガラスの護符も使う事が無かったら、記念品になるし。けど、カイツールで赤鷄が多分来るからなあ…。

ついでに、ルークには常備薬とアルテナの水のセットと、クラフトとフラムを渡しておいた。

ルークは珍しそうに、フラムとクラフトを手の中で転がして遊ぶ。

「クラフトは使ったことがあるから、威力はわかるよね？」

頷くルーク。

「フラムはクラフトより威力が高いから、気をつけて使ってね」

所詮はフラムなんだけどね。

けれど、私がブレンドしているから威力が結構シャレにならないレベルになってるものばかりだし。

クラフトもそーだし。

火系の爆弾以外にもあるのだが、獣とかだところの方が効くからなあ。

はったりにもなるし。

ルークにアイテムの使い方を教えていたので、それなりの時間が経っただろう。

扉が開き、眼鏡大佐が着用していた軍服とは少々違う格好のお兄さんが入ってきた頃は、それなりの時間が経っていた。

男は、ルークと私を一瞥すると私達の前の席に座った。
あ、ちゃんと立って出迎えるの忘れていたや。

「初めてお目にかかる。私はグレン・マクガヴァン。マルクト帝国から中将の位を戴き、この駐屯地を任されている」

「俺は……いや、私はルーク・フォン・ファブレだ」

「はい、伺っています。エイブル曹長からの報告があり、あなたの身分とマルクト帝国に来た経緯は伺いました。グランコクマの軍本部からも、ルーク・フォン・ファブレ様が来られた場合は身柄の保護をと命じられております」

どうやら、ギリギリでグランコクマへの報告はなされたようである。そこで一段落つけると、マクガヴァン中将は居住まいを直して、ルークへと向けて深々と頭を下げた。

「我が国の大佐の犯した非礼、お詫び申し上げます。カーティス大佐はこちらで処分と言う事でよろしいか？」

ううむ、一応被害者の意見もある程度聞くよという事か。

この場合、ルークが隣国の王族であるからこのような対応になっているのだろう。

ルークが、どうしたものかと私の顔を見た。

ううん、私が口に出してもいいものか……。

「フレイ、こうした場合ってどうしたらいいと思う？」

「……えーと、発言はよろしいでしょうか？」

私は、ルークやマクガヴァン中将と違つて身分や階級はない。なので、こゝという席の場合は発言を控えるのが普通なのだと思つて

いる。もし、発言が必要ならば上位者に許可を取る。

「君は、確かルーク様の付き添いで、いいのか？」

「付き添いと言うか、まあ誘拐されたルーク様を拾つたもとい保護した者ですけど……」

「そうか。君にもすまない事をした。旅券をきちんと所持しているのに、捕縛して牢屋に入れるなど……。一体カーティス大佐は何を考えているのか」

何も考えていないと思います。

いや、違う。目先の事しか考えていないのだ。

現在眼鏡大佐の頭にあるのは、皇帝から頼まれた和平をいかにして行つかただそれだけだ。

だから、導師を詠師達の許可も取らずに連れ出すなんて真似をしたのだ。

子供を保護者の許可も取らずに連れ出したら、一般的にソレは誘拐になります。

ダアトは大騒ぎになつただろうな……。――

マクガヴァン中将は、その地味目だが整つた顔の眉間に皺を寄せた。うん、実はちよつとだけ好みなんてお、思つてませんよ？

「私もルーク様のように国の政治に関わらない場所にいるので、詳しいことは分からないのですが、この場合はキムラスカに身柄を引き渡して処分、と言うのが妥当なのではないでしょうか？」

「……すまないが、それはできかねる」

すっごい苦虫をすり潰したような顔のマクガヴァン中将。

ああ、なんだアレか。

確か、眼鏡大佐は皇帝の幼馴染で、国の上層部とも顔馴染みなんだっけ。

どうやら、皇帝の意向が関与しているようね。

ゲーム内では、マクガヴァン中将は親のマクガヴァン元帥（元だっけ？）とは違って、眼鏡にいい感情を抱いてなかった筈だ。

まあ、眼鏡は国でも有数の譜術師だから早々手放したりは出来ないってこともあるのだけれど。

封印術がかかっていなければ。

今の段階では、ルークを牢屋にぶち込んだだけ…って王族を牢にぶち込んだだけでも不味いよなあ…。

いや、仮想敵国だからいいのか？

けど、和平を結びに行く相手国の王族を牢に入れたら絶対逆効果だよなあ…。

脅迫外交でもするつもりだったのか？

「そうですね。何度も言いますが、私はルーク様のように国の中枢部にいる人間ではございません。ただの、平民です。なので、ルーク様が家族にありのままを報告すればいいと思いますよ。多分、国が動くと思いますし」

預言に凝り固まったキムラスカが動くかどうかは問題だけど。

期待はせずにおこう。

私の予定としては、ルークの同調スロットは開きたくないんだよね。あれがあるから、アッシュに操られるわ、大爆発が進むで散々だったし。

「平民？」

その瞳と髪を持ちながら、貴族ですらないと？」

忘れていたが、現在私は頭の布を取っています。

タルタロスを脱出した時に取れてしまったんだよね。

それから面倒でそのままにしておいたんだ。

私の髪と瞳の色は、キムラスカでは王族のみに現れる貴色だ。なので、私は貴族の血を引いていると思われたのだろう。

「ええ。完全な平民育ちです（ザールブルグでは）。この髪はおそらく先祖帰りだと思っているのですが」

ザールブルグでの両親は、父が赤い髪に母が緑の瞳だった。

その2人の子供である私は、当然赤い髪に緑の瞳だった訳で。

「そうか。先祖帰りか」

幾分か腑に落ちないような顔をしているマクガヴァン中将だった。

私はなぜ彼がそんな顔をしているか分からなかった。

「それより、タルタロス襲撃の件はよろしいのですか？」

「今、軍を編成させている。それとは別に偵察を向かわせた」

「そうですか。六神将のうち二人までは確認していますので、注意してください」

「2人？」

「はい。魔物が襲撃に加わっていましたので妖獣のアリエッタと、艦橋に赤い髪の詠師服を纏った男がいましたので、おそらく鮮血のアッシュと思しき者を確認しています」

兵士Aの報告では、その辺りが報告されていなかったらしく、マクガヴァン中将の眉間の皺がさらに深くなった。

兵士Aは報告を忘れていたのではなく、気絶して見ていなかったのだけは言っておこう。
叱責されたらかわいそうだ。

でも、気苦労を増やして申し訳ないです。

フレイと奈落の物語 13

37

話が一段落すると、ルークが滞在する部屋が出来たと兵士が告げに来た。

「フレイ、行くか」

「え？」

私とグレン中将が、不思議そうにルークを見た。

「お、俺なんか変な事言ったか？」

「フレイ殿は、ルーク様のお付きではないのですよね？」

「……………」

ルークがなんかびっくりした顔をして、次に心配そうな顔で私を見て、ぎゅっと私の手を握った。

うん、なんだこの可愛い生き物は。

私がいるのが当たり前になって、それが実は当たり前じゃないと知って、けど付いてきてくれなんていいだせなかったって所か。

敵地に一人取り残されるのが心細いのだろうしなあ。

私はルークの安全が保障されれば、ここで別れてもいいと思っていたが、どうやらもう少し付き合うことになりそうだ。

私はルークが安心するように微笑みかけると、

「マグガヴァン中将、申し訳ないのですがこの基地の滞在の許可を願えますか？」

ルークの部屋にベッドは一つしかないけど、ソファぐらいはあるので寝る位はできるだろう。

旅は慣れているので、どこでだって寝れるのが私の自慢の一つだ。

「……ルーク様の希望ならば、隣室に部屋を用意させましょう。続きの部屋になっていきますから、ルーク様も心細くないでしょう」

「お心遣い感謝します」

私はグレン中將に一礼をする。

ルークも頭を下げた私を見て、軽く頭を下げる。

すると、グレン中將が狼狽する。

いや、王族に頭を下げられるとそうなるよね。

ルークは不思議そうな目で、中將を見ていたので、後で教えてあげよう。

かくして、私の基地滞在が決まった。

応接室の外に出ると、エイブル兵士もとい兵士Aがいた。

「ルーク様の護衛をすることになったエイブルです。よろしくお願
いします」

敬礼して挨拶するAに、ルークと私は顔を見合わせて笑いあった。

そんな私達をAが微笑ましそうに見ている。

「Aさん、ルーク様のこの姿では旅するのに支障があるので、購入したいのですが、外出許可は出ますか？」

「外出許可ですか？」

仕立て屋を呼び寄せるのではなくて？」

そう言えば、貴族の場合服は自宅に仕立て屋を呼んでから、仕立てさせるのが普通だっけ。

ザールブルグでも、そー言えばそーだったなあ…。

私は基本的に注文の時には出向いていたけど。届けて貰うことはしていたが。

「ルークはどっちがいい？」

私としては、外出はしてみたい。

セント・ビナーって確か、薬草類を豊富に扱っているんだよね。

「俺も、この町を見てみたいけど…」

「ちょっと待っててくださいね」

そう言うとAは、応接室へと入っていった。

どうやら、グレン中将に聞いてくるみたいだった。

少ししてから戻ってきたAが、気の毒そうに、

「申し訳ないですが、警備の関係上今日はお見合わせくださいとのことです。旅装に関しては、仕立て屋を呼び寄せるとのことです」

「そっかー。残念だったね、ルーク」

「でも、フレイは困るだろ？　なんか、薬草仕入れにきたって言うてたじゃねーか」

おおう、私の嘘八百を真に受けてくれていたよ。

確かに興味深い町ではあるが…。

「確かに私の目的はそうだけど、ここでルーク一人を残すわけにはいかないでしょ？」

「ミユウもいるですよー！」

ああ、正確には一人と一匹か。

一応現在は丁寧な対応をされているとはいえ、状況が変われば敵対してもおかしくはないからね。

私の意図を感じ取ったのか、Aは苦笑している。

もしもの時は、N/Aやテラフラムで木っ端微塵にでもしてやるが。出来れば穩便に終えたいところだ。

賢帝に期待と言うところだ。

けど、あまり期待はしないでおこつ。眼鏡大佐の親友だからな。

38

それからすぐに仕立て屋は来てくれて、ルークのサイズを測ってくれた。

フレイさんもどうぞ、と言われたが断ったが、マントだけでもと言われたので、じゃあマントだけと仕立ててもらった。

ちなみに、支払いは全部マルクト帝国が持つそうだ。

私のマントはタルタロスでの感謝料なのかもしれない。

持ってきたサンプルの布は、確かに旅用の厚いものなんだけど、手触りが一般レベルと全然違うんだよね。

「俺、フレイが持っていた布で服を作って貰いたい」

「えーと、どれ？」

出来ればある程度の防御力は持たせたいから、防具用の布の方がい

いよね。

私は脳裏に自分が作って溜めておいた、布を思い浮かべながら秘密バッグを漁った。

確か手触りが良いのは、シルケスだったよね。

<シルケス>の最上でいいかな。

<スケイルクロス>なんて竜の鱗が原料だから、下手な鋏が通らな
いってアマーリエさん嘆いていたし。

結局、それは<ゴルトアイゼン>製の鋏をレオンが作ることで解決
したんだけどね。

レオンは凄く複雑そうな顔をして、鋏を作っていました。

彼の気持ちも分からなくもないんだよね。

武器用としても最上の素材を、鋏にしているんだから。

結局、ゴルトアイゼン製の鋏は、以後アマーリエさんが死ぬまで使
用し、死んだら後継者に受け継がれ、アマーリエ洋服店の店長の証
になったと聞く。

そもそもゴルトアイゼンを作る事が出来る錬金術士は、ザールブル
グでは私一人だったから、ゴルトアイゼン製の鋏はこれ1本となっ
たのだが。

基本的にあまりに技術が違う品は、出回らせなかったんだよね。

食べ物以外。

私がシルケスを取り出して渡すと、仕立て屋は恐る恐る触ってきた。

「これは、防具用の生地ですか？」

「そうです。私が作ってます」

「手触りがまるで絹のようですね…。けど、防御力もありそう…。」

これ、使わせてもらってもいいですか？」

「構いません。ルーク様には出来る限り最高の防具を身に纏って欲しいのです」

「畏まりました」

生地一本じゃ足りないと思ったので、もう一本追加して渡しておく。ちなみに、この生地HP+30・技威力30%増・ダメージ還元大・炎ダメージ軽減がついています。

ルークが戦うことはないけれど、この特製だと絶対に役に立つ筈です。

微妙にHPが30増えたとしても、意味があるのかと思ってしまっただけ。

テイルズはHPがアトリエよりはるかに上昇するからな！。

それ以外にもルークの肌着用として、〈国宝布〉を一巻き放出した。これも、柔らかく光沢が良いとびっくりしていた。

下着に使うのが惜しいとかも言っていたけど、気にせずに使ってくださいと言っておいた。

私も使ってるし。

それから、夕飯を貰い私はルークをお風呂に入れた後、私もお風呂に入った。

いやあ、ルークが一人で風呂に入れてよかったよ。

貴族の中には、風呂に入るのに解除が必要な人がいるからね。そうならないで良かった良かった。

そう言うと、ルークから真っ赤な顔で

「バ、バカ。風呂ぐらい一人で入れる！」

と罵倒？されてしまった。
でも、その罵倒も顔を真っ赤にしていたらあまり意味がないと思うけどね。

一応念の為に、脱衣所ではん太に付いていて貰った。
そろそろにゃん太も洗わないといけないなあ…。
体が重くなるって言って嫌がるんだよね。

39

夜中、私は爆発音で目を覚ました。

跳ね起きた私は、周囲を見回し自分の状況を確認する。
どうやら、私達が襲撃された訳ではなさそうだ。

ルークも起きて、寝ほご眼で目を擦っている。
にゃん太は、ルークのベッドの隣に立ち、臨戦態勢だ。

「ルーク様、フレイさん、無事ですか!？」

Aがドアを開けて飛び込んできた。

「なにがあつたの?」

「伝え聞く所によると、信託の盾騎士団がセント・ビナーの城門の
検閲をしようとして、駐留隊と衝突したとの事です」

本編では、タルタロス壊滅の一件が知られていなかったので、マル
クトは面白くないとは思いますがも動かなかった。
けど、今の状況はゲームとは違う。

私が、タルタロス襲撃の生き証人を連れてきたことで、神託の盾騎士団がタルタロスを襲撃した事が知らされてしまっている。その状況下で、神託の騎士団が城門を閉鎖しようとしたらどうなるか。

それが現在の状況と言う訳だ。

「私たちはどう動けばいい？」

「マグガヴァン中将から、マグガヴァン元元帥と共に待機して欲しいと」

「マグガヴァン中将はどうするつもりですか？」

「おそらくは出撃する筈です。多分ソレが現状を抑えるには一番かと」

グレン中将だけで、六神将と相対するというわけか。実際、戦うかどうかは分からないが、グレン中将だけだと危険すぎる。

今のところグレン中将は出会った軍人上層部で唯一まともな人材だ。ここで彼を失うのは、私やルークにとっても痛手だと思う。

「ルーク、ちょっと城門の方に行って来るわ」

私はロッドを手に取り、ルークに行った。

「お、俺も行」

「駄目。人と人が戦うのよ？ 危険すぎる」

「それなら、フレイだって一緒だろ！

ピヨピヨですら苦戦する癖に何言ってるんだよー!!」

「あれはルークを守りながらだったから苦戦していたの！

私一人、きちんと距離を開けて戦えば、ピヨピヨぐらいフラムで

「発よ！」

私にはやん太にルークを守るように命じると、秘密バッグからやん吉を呼んだ。

うーん、二匹同時使用は久し振りだわ。

「ルーク、ミュウを守ってやってね」

「フレイ」

「大丈夫。ここでグレン中将を死なせるほうがはるかにやばいような気がするし」

下手したらあの眼鏡が軍のトップに躍り出るなんてなったら、目も当てられない。

ここで、それは防がせてもらおう。

靴の踵を三回鳴らす。ジャンプブーツの発動条件だ。

私は、窓からセント・ビナーの街へと飛び出した。

目指す場所は城門。するべき事は、グレン中将の援護。

待ってなさい、六神将！

フレイと奈落の物語 14

40

城門付近は、神託の盾兵士とマルクト兵士が小競り合いをしていた。グレン中將が居る地域は、なんとか剣を持ってにらみ合いが続いている。

相對しているのは、六神將のシンクとラルゴだ。

後の四人は居ない。

タルタロスでいまだ待機中なのかな？

多分、ゲーム内では全員居たから明日辺りには合流しているとは思うけど…。

「どういつつもりだい？ いきなり、教団に攻撃してくるなんて」

「その言葉はそのまま返させて貰おう。教団は何を考えてタルタロスを襲撃したのだ？」

「……………なんの事？」

「タルタロスから脱出して来た兵がいるのだ。あと偵察も出させてもらった。貴様たちは知らないだろうが、陸艦が何処にいるかある程度こちらでも把握できるのだよ」

ほー、そうなんだ。

まあ、音素を結構大量に消費して動いているだろうから、音素を大量消費して移動する物体を調べれば分かるのだろう。

戦争状態では、複数の音素が入り乱れているだろうから無理だとは思うけど。

陸艦って戦争か訓練でもないか動かないだろうし。

「チツ。全部始末しきれなかったか…」

そう言うと、シンクがラルゴに目配せをする。

構えるラルゴとシンク。相對するグレン中將と兵士の人々。

そして、劍と拳がぶつかり合う。

うおう、さすがシンク。素早い。

ラルゴは、一般兵相手か。フーか、一般兵が相手になるのか？

これは、兵士の方に援護したほうが良いだろうなあ。

私は、メガフラムを握るとにゃん吉に突貫の命令をした。

それと同時にメガフラムを、ラルゴ目掛けて投げる。

ズガン

と、メガフラムが弾ける音がしてラルゴが吹っ飛んだ。

そのラルゴに向けて、にゃん吉が突っ込み追撃をかける。

さすがに六神將。不意打ちはされたが直後には体勢を立て直し、防御に入る。

一撃、二撃、と連続した追撃にラルゴの防御が打ち破られ、クリーンヒットが入り始めた。

「援護つと」

今度はフラムを単体で投げて、にゃん吉の攻撃の合間にラルゴが手が出せないようにする。

そして、再びにゃん吉の連撃が入る。

フラムを何度も使ったせいだろうか。

何か場の雰囲気は最初とは変わった。

「火の力場が強くなった…？」

ロロナでも、確か火属性の技とかを使っていたら、場の属性が変わったよね。

それと似たようなものかな？

「火のFOF？

チャンス！」

詠師風の兵士が、ある一箇所です術の詠唱に入った。

先程までの詠唱と違い、少々長めの詠唱。

私のイメージ的には、必殺技って感じた。

「……来たれ、炎よ！ イラプション！！」

詠師風兵士がそう術を結ぶ。炎が地面から吹き出てラルゴを包む。

うおー、すっげー派手。

詠師風兵士は、かなりの魔力……こちらでは譜力か……を使ったのか、肩で息をしている。

けど、倒すまでには至らないが、十分痛手は与えられたようだ。

後はにゃん吉に任せておけば大丈夫。

私は、意識のメインをシンクの方へと向けた。

一応戦場なので、端の方だけは意識しておいたんだよね。グレン中將が不利になったら、すぐに介入できるように。

そこには、グレン中將がシンクと互角の戦いを繰り広げていた。

さすが、一軍の中將。強い。

私はフラムを取り出そうとして、フラムがポーチにないことに気付いた。
結構景気よく使ったもんなー。

さすがに、範囲が広いメガフラムを景気よく使うわけに行かない。
街中であんなアイテムを使ったりしたら大惨事勃発だ。

ここの譜術みたいに、味方認識なんて便利な機能ついてないし。
あれって、便利だよねー。

この状況下で、秘密バッグから取り出すのは無理っぽいので、他の
アイテムを使う事にした。

ゴソゴソとポーチを漁る私。

「あ、精霊石があるし」

これならば、ある程度の範囲の指定は出来た筈だ。

滅多に使わないアイテムだから、どんな効果か忘れてしまったのは
内緒だ。

いや、大体フラムとかで事が足りてしまっただよなあ…。

なので、作っただけいいが滅多に使用しないアイテムになってしまっ
た。

「来い、精霊！」

私が精霊石を掲げ、魔力を石に注ぐ。

石が光り、パキンと石が半分に割れ、割れた片方が砕け散った。

私の頭上の空間が歪み、精霊が現れた。

そして、戦場の視線が私の頭上に集中した。

「あれ…？」

膨大な視線を感じて、上を見てみると

「ウンディーネ？」

そこには、テイルズでお馴染みの精霊がいました。

41

ウンディーネは私と目が合うと、ニコリと笑った。

ウンディーネが手をシンクへ向けてかざすのと同時に、私の手もかざされる。

シンクロしてる…？

シンクがハツとして、グレン中将や私から距離を取ろうとするが、最早遅い。

頭上から水の奔流が、シンクへと向かい襲い掛かった。

ヒー、ガリガリ魔力が削られていくうううう。

私の少ない魔力は、ウンディーネの力を行使（多分そうだろう）している間、ガリガリと減っていく。

慌ててポーチから、＜琥珀湯＞を取り出し飲むが飲んだ端から削られていくのであまり意味はない。

私の魔力が切れたのと同時に、ウンディーネは消えた。

後には、戦闘不能になったシンク（これでも死なないのか）と、にやん吉をなんとか押しつけて駆け寄ろうとするラルゴ。

私は疲労のあまり、その場で座り込む。

いや、久し振りに魔力全開で戦ったよ。

まさか、精霊石がこんな事になってしまつとは思わなかった。

これは、暇なときに検証してみる必要がある。

多分、ランダムで召還だとは思うけど……。

けど、ランダムってことは下手したらローレライが召還されてないか？

いや、地脈に封印されている現在の状況ではさすがに無理か。

「助かった、フレイ嬢」

グレン中将が、シンクを捕縛するように周りの兵士に命令する。

周りの戦線も、六神将の一人が倒れたことにより、総崩れになった。

兵士への指示を終えたグレン中将が、私の元へとやってくる。

手を貸してくれたので、その手を使って立ち上がる。

膝がガクガクしているが、そこは根性でなんとかする。

「一つ聞くが、君はフリーなのか？」

「まあ、ケセドニアの人間ですし、傭兵って訳でもないのでフリーと言えばフリーですけど」

「ならば、是非とも我が軍への入隊を考えてはくれないか？」

精霊を召還できる者など、始めて見た」

「……カーティス大佐が軍からいなくなるのでしたら、考える余地はありますが」

私の答えに、グレン中将はすつごく嫌そうな顔をした。

うん、皇帝は幼馴染の彼を手放すなんて事は、余程のことが起こらない限りないと分かっているからね。

なので、私がマルクト軍に入る事は絶対にない。

だって、下手したらあの眼鏡の下に配備されて、無茶な命令されるんだよ？

絶対イヤだわ。

そもそも、軍人って柄じゃないし。

結局、フラフラで歩くことが出来なかったので、グレン中将が基地まで運んでくれました。

姫抱っこで。

知り合いがない状況下で良かったああああ。

42

私はグレン中将に入り口で下ろて貰った。

運んでもらわなくても、疲労回復のアイテムとMP回復アイテムを使えばよかったと思いつたのが、その辺りだったのだ。

MPと疲労を回復してしまい、元気澆刺状態になった私は、入り口で猛烈なタツクルを食らった。

「うげぶっ」

「フレイ、無事か？」

そのままベアハング。

やばい、中身出そう。きよ、今日食べたものがリバー…。

「ルーク様、フレイ嬢が死にそうですよ」

グレン中将が、私とルークを引き離してくれて事なきを得た。

いや、さすがにルークにゲ　ぶつ掛けは不味いと思うんだ。
7歳児にそれをやったら、トラウマになる。

そして、私の乙女のプライドもギリギリで守られた。
誰も好き好んで人前でリバーズはしたくない。

念の為に<酔い止め薬>を飲んでおく。

本来の使用法とは違う使用の仕方だが、構うものか。

「父上。無事六神将の一人を捕獲しました」

「ああ。譜術を封じ、牢に入れておくのじゃな。後日、引き取りに
来るじゃろ」

「はい」

「それにしても、よく六神将2人がかりを、兵が居るとは言え倒せ
たな」

老マグガヴァンの言葉に、グレン中將は私を見てから、

「彼女の助太刀がなければ不可能でしたよ」

「強そうには見えんのじゃがのう」

確かに、いまだに残る吐き気と微妙に戦っている私を見て、強者だ
と思う人はいないだろう。

「それよ、父上今後のことと相談があるのですが」

「ふむ。よかろう。よかつたな、ルーク殿」

「ああ。マクガヴァン元帥」

私が居ない間に、老マグガヴァンとの間に何があったんだろう？
後でにゃん太に聞いておこう。

「フレイ、怪我はねーのか？」

「ないない。後ろで道具を使っていたぐらいだし。ルークは何もなかった？」

「老マクガヴァンがお側に居ましたから、そうそう何も起こりませんよ」

そう言ったのは、兵士A。

「あ、いたんだ」

「冷たくないですか!？」

「いや、うん。ごめん。すっかりあんたの事忘れてた」

orzとなった兵士Aの肩を叩くにゃん太とにゃん吉。

何よ、二匹ともその顔は。

まあ、今晚はこれ以上何も起こらないように祈りましょうかね。

さすがに、二連戦は辛いわあ。

私は風呂に入りなおし、ベッドに倒れこんだのだった。

さすがに埃や泥、多少の血がついているからね。

あー、明日は別の服を着ないといけないなあ。

フレイと奈落の物語 15

43

カツンカツンカツン

私は牢の前で立ち止まった。

牢の前に居る筈の見張りは、夢の中。

「どーも」

「なんの用だい」

牢の中には仮面を嵌めた少年が居た。

「いや、ちょっと聞きたいことがあって」

「聞きたいこと？」

「うん。導師イオンはどうなったかって事よ」

もし、話がゲーム通りの流れを通るのならば、和平の使者ご一行様は明日、いやもう今日か　　ここに来る筈だ。

「逃げられたよ。援軍があったからね」

「そう」

ならば、明日には来るだろう。

「お前は、タルタロスにいたヤツだろ？」

「ええ。さっさと逃げさせてもらったけど」

一軍相手にドンパチなんて面倒だし。

さっさと逃げるに限る。

「お前のような術者が居たとはね。まったく、不覚だった」

そもそも、三歳児が作戦立てている時点で、なんかおかしいことに気付くと周囲に言いたい。

六神将は、シンクがレプリカだと言う事を知っている人が多いのだ。しかも、神託の盾騎士団総参謀長だ。

三歳児が総参謀長。よっぽど人材が不足しているんだな。

その事さえ聞いてしまえば、長居は無用だ。

私は、さっさと牢から退散することにした。

戦闘用に使える安眠香とは言え、いや、戦闘用だからこそ長時間は保たないだろう。

「まっ、あんたがどうなるかは知らないけど、息災で」

「旁に入っている奴に言う言葉？」

「どうせ、仲間が助けに来るでしょ」

シンクが捕まったことは、すでにラルゴによって報告されているだろう。

おそらく、近くに居る筈の六神将が脱出の手筈を整えるはずだ。

普通、軍隊の駐屯地に襲撃をかけるなんて、戦争勃発物だけこの世界ではちよつと違うんだよね。

預言に書かれていました。もしくは、預言にない出来事を看過できない、とかもあるわね。

これで、全て解決しちゃうんだよ。

嫌な世界だ。預言に支配されている。

ヴァンの気持ちがちよつとだけ理解できるわ。
彼の場合、取った手段が悪かったのだけ。

時間があれば、徐々に預言から離脱かせ良かったけど、崩壊予言があつたからなー。

ヴァンは果たして崩壊預言を知っていたとは思うのだよね。
そうじゃないと、浮遊大陸なんて作らないだろ。

あれは、地面が崩壊した後にレプリカたちが住む予定の土地だ。

でも、瘴気は一体どうするつもりだったのかなー？
機会があれば聞いてみたいけど、多分無理だよ。

「それじゃあ、頑張れ三歳児」

後ろ向きで手をヒラヒラと振って、私はその場を後にした。

シンクが息を呑む音が聞こえたので、おそらくびっくりした顔をしている事だろう。

私は、シンクから見えない場所でアトリエを起動して帰還した。
部屋では、ルークとミュウがベッドで仲良く眠っていた。

私は、にやん太に見張りを頼むと再びベッドへと横になった。
あー、疲れた。

44

次の日、私はルークを起こされた。

「今日は俺の方が早かったな！」

ぐちゃぐちゃの髪で得意げに笑っているルーク。

私は、それに笑い返して起き上がり、おもいっきり背伸びをする。

やはり、きちんとしたベッドでの熟睡はすつきりするなあ。

エンゲープでもベッドはあったけど、有事の際は起きるつもりで仮眠感覚で寝ていたからなあ。

幸いここは見張りも居るので、安心して眠る事が出来た。

ルークの場合仮想敵国ではあるが、あの眼鏡の言うことが真実であれば、今の段階で危害を加えられることはないだろう。

ルークと順番で顔を洗い、歯を磨き、髪を整える。

ルークは長髪で、髪を整えるのが下手なので、私が整えてやる。

「長いねー」

「うぜーから、切りたいんだけど、なんかキムラスカ王族の義務らしーぜ。マジでうぜー」

うぜーうぜーと連呼するルーク。

確かに私も長いが、ルークほどではない。

「編もつか？」

「編むのも駄目らしいんだ」

「……王族も大変だね」

なんでも、たなびく赤髪が王の証らしい。

私も赤髪だぞ、オイ…。

「フレイは結ぶのか？」

「うん、鬱陶しいしね」

そう言っつて、いつものように三つ編みにしてまう。

暑い場合は、三つ編みをアップにすることもあるが、基本的にこの髪型だ。

髪を整え終わると、昨日頼んでいた旅装束が仕上がったらしく、運ばれてきた。

着替え終わっていた私が受け取り、ルークに手渡す。

「フレイ、これどうやって付けるんだー？」

「多分、ここに固定する金具が…お、あつたあつた」

初めての服なので、私がフォローをしながらルークに着付けてやる。いやあ、基本的にアトリエと大して衣装が変わらなくて良かったよ。これが着物とかの民族衣装風だったら、アウトだった。ホドって、どうも日本風と言っつか和風みたいなんだよね。

「お、ルーク。似合う似合う」

ルークの服は、白を基調として薄い緑を所々配色したような服だった。

最初に着ていた服のように腹だしはないし、変な模様も入ってない。本当に普通の服だ。

「そうか？」

ルークは、少しだけ自分が着ていた服に未練があるみたいだ。

「あの服はちゃんと持って帰ろうね」

私は袋を出してやると、それを入れてルークに手渡した。

「おう！」

あの服は、俺が考えたんだ！ かつくえーだろ？」

「……そだね」

私の趣味ではないけど。

衣服を整え終わると、私たちは食事へと向かった。

食堂では、グレン中将だけでなくマグガヴァン元帥にまでマルクト軍にスカウトされました。

ルークが食事中に、私の服をぎゅっと掴むのを眺めながら、丁重にお断りしておきました。

それでも、言い募ってこようとするので、さっさと食事を終えて町への外出許可をもぎ取り、町へと繰り出した。

当然、ルークも一緒です。

せっかく綺麗に梳かした髪だけど、目立たないように布で隠し、護衛の兵士A他数人と一緒にセント・ビナーの町へと繰り出したのだった。

45

町へと繰り出した私とルークは、さんざん町を楽しんだ。

私は、アビスの世界の薬草を何個か入手した。

多分、使えると思うんだけど……。実際調べてみないとなんともいえないからなあ……。

ルークには、まだアトリエの事を話していないから、ルークの前でアトリエに入る訳にはいかないし。

調合って始めたらあつと言つ間に時間が経つから、今の状況下では試せないんだよなあ。

「フレイ、次はこつちだ」

私はルークに手を引つ張られながら、この町のシンボルともいえる大樹　ソイルの木と言つらしい　へと引つ張られ連れて行かれる。

「こつちから登れるつてさ」

「ふおー、高いなー…」

「このセントビナーで様々な薬草が取れるのは、この木のおかげだと言われています」

妖精の森の妖精の木や、世界樹と同じような木かな？

アトリエの世界で、妖精の木を見る機会があつて見たことがあるけれど、似たような雰囲気を持っているし。

妖精の木より、大分魔力的と言つが、そーいのが薄いような気がするけれど…。

妖精の木より、力は弱いのかな？

頂上に登ると絶景が広がつていた。

「すげー…！」

「これは、また絶景ねえ…」

私とルークの目の前には、広がる町の風景と街の外の緑が広がる風景が広がつていた。

ルークが、俺の町と全然ちげーとボヤいていた。

私の言葉にAは嬉しそうだ。

自分の国が誉められるのはやはり嬉しいのだろう。

太陽を見ると、そろそろ中天にかかろうとしていた。

そろそろ戻るか。おなかも減ってきたし。

今日の昼食はなにかなあ…。

それだけを考えながら私とルークは下に降りてきた。

ソイルの木はこの町一番の観光名所で、この木を一度は見ようとする観光客が訪れる。

そんな観光客が多いソイルの木の下、人ごみの中から一人の金髪の男が飛び出してきた。

「ルーク！ 探したんだぞ！！」

ルークと私に駆け寄ってきたのは、ゲームで何度か見たことのある金髪の青年、ガイだった。

フレイと奈落の物語16

46

ルークが嬉しそうにガイに駆け寄る。

けれど、その勢い良く駆け寄る途中で段々とスピードが落ちてくる。そして、ルークの視線がガイの背後へと注がれる。

「ルーク様、どうかなさいました……ああ」

私は、ガイの後ろから怒りの形相でやってくるティア・グランツを発見した。

ルークは、ガイの前に駆け寄ることなく、

「なあ、後ろの女……」

「ああ、ティアだろ？ 困っていたから、助けたんだ。聞いたぞ、ルーク。駄目じゃないか。困っている人を見捨てちゃ」

「ガイ、そいつ、俺の家……」

すると、ガイはしたり顔で頷きながらルークに笑いかける。

後ろからは、ルークの顔は分からないが、先程の嬉しそうな笑顔ではないだろう。

「それも聞いた。余程の事情だったんだろう？」

「……もう、いい。行こう、フレイ！」

そう言うと、ルークは私の腕を引っ張って、マルクト駐屯地へと走っていく。

私は、ガイと後ろのティアを一瞥だけすると、ルークと一緒に走っ

ていった。

それを後から、兵士達が追いかける。

ティアが何か言っていたけど、私の耳はそれを拒否した。

どうせ、「どうしてタルタロス内で私達を見捨てたんだ！」なんて文句しかないだろう。

しばらく走って、ガイ達の姿が見えない所でルークは止まった。

良かった。これ以上ルークの走るスピードで走られてたら、吐くところだった。

今ですらもういっぱいいっぱいです。

ルークは、私の方を見ていないから気付かないが、後ろでは私の顔色の青さに兵士Aが右往左往している。

それを手で制しながら、私はルークの言葉を待つ。

「ガイは、俺のたった一人の友達だったんだ」

「はい」

「俺が、アイツに浚われて、なんで仕方なかったって笑ってるんだ？」

「……………」

「俺が浚われたのに、アイツは、ガイは浚った相手をなんとも思わないんだ？」

「ルーク……」

私の言葉が少ないのは、迫り来る吐き気と戦っている為。

私は、ルークの肩に両手を置いて、ただ一言こつ言った。

「非常識な人間を、常識の尺度で測ると馬鹿を見ますよ？」

むしろ、疲れます。なので、あーいう輩は、あーいう奴なんだと思っておきましょう。そうしないと、精神的に辛いですよ?」

後ろで、兵士Aがこけた。

誰だ、せつかくのいいシーンなのにとか言う奴は。

私は、何度か非常識なあいつらと付き合って、開眼したよ。

常識の無いやつと付き合っていたら、自分の常識が危うくなるって。

「だから、ルーク。気にしちゃ駄目です。正直、ガイの思考回路がどうなっているかは分かりません。あいつらになんて説明されたのかも分かりませんし。一度、あの女+ がいない所で話し合ってみては?」

正直、ガイがティア・グランツたちからどーいった話を聞いたかは分からない。

けど、ガイのさっきの発言だけでガイの全てを否定するわけにはいかないだろう。

「ちゃんと、話し合いましょう。ルークの友達なのでしょう?」

「おう。………なあ、フレイ」

「なんででしょう?」

「話し合いの時、付いていてくれるか?」

「ルークが、そう望むのならば」

下を向いていたルークが、顔を上げにっこりと笑いかけてくれた。

うん、大丈夫。いい笑顔だ。

ルークと手を？いでマルクト軍基地に戻ると、

「おや、これはこれは。こんな所で会うとは正直思ってもいけませんでしたよ」

非常識大佐が居ました。

私とルークの姿を確認して、いちいち嫌味を言ってくるジェイド・カーティス大佐35歳。当然独身。私はサラリと見なかったことにして、

「ルーク様、疲れたでしょう？」

「あちらでお茶にしましょう」

と言い、ルークを引っ張って移動した。手を？いでいるから、丁度良かったんだよね。

途中で、グレン中將からしばらくしたら応接室に来てくれ、とあったのでルークと2人じっくりとお菓子を堪能することにした。

ちなみに、町の見学の途中に購入したもので、新鮮なフルーツたっぷりのケーキだ。

しかもきっかり四人分だ。

内訳は、私・ルーク・中將・元元帥だ。

兵士Aにも、と思うのだが一応仕事だから遠慮させて貰った。

伝言を伝えにきた兵士に、中將と元元帥の分ケーキを手渡し、お茶の時間に出してもらおうようにお願いする。

毒が心配なら、きちんと毒見するでしょ。

「なあ、フレイ。今日の菓子はなんだ？」

「今日はですねー、苺たっぷりケーキです。いやあ、さすがエンゲーブが近いだけあって、フルーツが豊富ですね〜」

ケーキは、あまり錬金術では作られない。

いや、私はケーキじゃなくてタルト系が好きだから、タルト系ばかりのレシピを増やしたせいもあるのだけど。

チーズケーキは、エリーが居たから特に研究しなかったしなあ…。

エリーってば、チーズの種類を替えて、分量も変えて、とか色々研究していたもんなあ。

チーズケーキ一つにかけるあの情熱は素晴らしいの一言だ。

ルークの部屋で、苺たっぷりケーキに舌鼓を打ち、ガイのせいで急降下していたルークの機嫌も大分回復した。

面倒だけど、応接室に向かいますかね。

「お呼びだと聞きましたが、なにか？」

応接室に入ると、グレン中將が一枚の書状を前に、しかめっ面をしていた。

書状はとても上質そうな紙を使っており、マルクト帝国の紋章がすかしで入っていた。

なぜ、マルクト帝国の紋章かと分かったかと言うと、旗に描かれているし。

マルクト帝国の紋章がすかしとして入った書類を使っているのは、

基本的に公的書類だろうと思われる。

私がそう尋ねると、グレン中将は重々しく頷いた。

「グラン・コクマより、ジェイド・カーティスへの処遇が決まった」

そう言つて、差し出される勅書。

いや、私が見てもいいのかな？

視線でそう尋ねると、コクリと頷くグレン中将。

私はおそろそろソレを開き、ルークが横から覗き込む。

「ルーク、なんて書いてあるの？」

「ジェイド・カーティスの和平の使者としての任は続行つて、書いてる」

「マジですか!？」

自分の師団一つを全滅させておきながら、任務続行をさせるとは…。

「真に遺憾ながら、そういう事だ。どうも、預言が絡んでいるらしくてな」

「それはそれは。ご愁傷様？」

「そして、ジェイド・カーティスはついでだから、ルーク様を連れてキムラスカへ行くと言つた」

「ついで…」

「彼は、一応皇帝代理だから、否は言えん」

「でしょうねー…」

現在、私とルークはマルクト軍の善意で保護されている状態だ。

「カーティス大佐は、自分の残っている師団の増援は頼んだのです

か？」

「私は、聞いていない。おそらくは、それはないだろう」

確か半個師団で任務に当たっていた筈だから、もう半分は残っている筈なのにね。

「では、ルーク様に自分で身を守りながら、キムラスカまで行けと？」

ゲーム内では、ルークとガイに前線立たせて、後ろでのんびり譜術の詠唱をしていた輩ですよ？

「……だから、こちらから護衛を付ける事にした。あと、馬車も手配する。ルーク様と導師に徒歩で移動させる訳にはいくまい」

「ですよなー」

グレン中将の配慮が嬉しかった。

「導師が疲労しておられる為に、出発は明日となる。ルーク様、本来ならば引き受けた私達の手でお国へ戻してあげたかったのですが、申し訳ございません」

グレン中将が深々と頭を下げた。

いや、彼も苦勞しているんだなー…。

応接室を出たところで、私はカーティス一行を発見した。
あー、ガイも一応いるね。

「君は…」

ガイが私を確認した瞬間、腰が引けた。
そう言えば、女嫌いだった？

「ルーク様がお呼びです」

「あー、明日は7時にはセント・ビナーを出ますのでそのつもりで
いてください」

カーティス大佐の言葉に頷くと、私はガイを連れてルークの部屋へ
とやってきた。

「どうして、ルークは宿に部屋を取らないんだ？」

「現在、ルーク様の身柄はマルクト軍に保護されているからです」

「君が、そうしたのかい？」

「君は、マルクトの人？」

「違いますよ。あ、キムラスカでもないです。ちなみに、ダアトで
もありません」

ある一定の距離を取って、ガイに言う。

一応、私の出身となっているのはケセドニア。

あそこはなんて言うか、中立地帯だ。

「そうか、ケセドニアか」

「まあ、一応」

「じゃあ、どうしてルークと一緒にいるんだい？」

探るような目つき。

そう言えば、ガイってマルクトの元伯爵子息で、ルークのパパに滅ぼされたんだっけ。

それで、復讐のためにルークの家にいる、と。

それにしても、雇用するときには家とか詳しく調べないのだろうか？腐っても公爵家。使用人の身元確認ぐらいするだろうに。

それとも、此处で働くのが預言なんですか？で押し切ったか？

「なりゆき、ですかね。困っていたルーク様を放っておくなんて出来なくて、おせっかいしています」

そう。私がやっている事はただのおせっかいと自己満足なのだ。いや、どこぞの音素集合体に頼まれたのもあるけど。

「じゃあ、ここでお別れかな？」

キラキラと爽やかな笑顔で言ってきます。

「え、ちゃんとキムラスカの公爵家まできちんと送りますよ」

幸い、マルクトからキムラスカに渡る旅券は、私の分は用意してくれるらしい。

グレン中将が、きちんと手配してくれた。

ただ、時間が無いのでカイツールで受け取る事になるらしい。

私の返事に、ガイの顔がほんの少し歪む。

なんなんだ、こいつは。

私は少し疑問に思いつつも、ノックをしてルークの返事を待って、部屋に入る。

「ルーク！」

「ガイ！」

少し複雑そうな顔をして入るが、やはり顔見知りの登場は嬉しいのか、ルークがうれしそうにガイに駆け寄る。

「なあ、ガイ。俺がちょーしんどーで消えた後、家はどうなったんだ？」

ルークに椅子を勧め、私はお茶を入れる。いやあ、お茶もいいけどそろそろコーヒーも恋しくなってきた。

「それはもう大騒ぎさ。急ぎ王城から帰還した公爵が、なんとか騒ぎを鎮めたって所か」

「そうか…。母上は、母上は無事なのか？」

やはり、心配となっていたのは母親の事か。

確か、彼女はルークにとって優しい母親の筈だ。

「ああ、シュザン又様は体が弱いせいで床につかれたぐらいだ」

他には、数人のけが人が人ぐらいだぜと笑いながらガイが言う。

いや、怪我人出ているなら実は結構大事になってないか？

「さすがにゴタゴタしているから、俺とヴァン揺将ぐらいしか動けなかったんだ」

それもよくよく考えたらおかしいんだよね？

「あの、噂に名高いファブレの白騎士団は動かれなかったのですか？」

「俺が出発している時点で動いてはいなかった筈だが…」

私が恐る恐る会話に割って入った。

その言葉にガイは何気ないように頷いた。

どうなっているんだ？

第三位王位継承者が消えたのに、国が動かないなんて。

「ルーク、ヴァン揺将もカイツール経由でマルクトに来ている筈だ。俺はケセドニア経由だったが」

「ヴァン師匠来てるのか!？」

ルークの顔が嬉しそうに輝く。

「ああ。それにしても、ルーク駄目だぞ。女の子には親切にしないと」

彼女もわざと超振動を起こしたんじゃないのだから、と続けるガイ。その言葉に、喜びに輝いていたルークの顔が曇る。

「なあ、ガイ。なんであの女を庇うんだ？」

「彼女も悪気があった訳じゃないだろう？」

ルークの顔がどんどん暗くなる。

んー、ちよつと説明してみるか。

「ねえ、ガイさん。どうして、ティア・グランツにそこまで好意的になれるんです？」

「どうして、って。そちらこそ、どうしてそこまで悪意を持つんだい？」

本当にガイは分からないと言った風だった。

「……あのですね、ティア・グランツは公爵家に譜歌を使って襲撃したって分かってますよね？」

「襲撃なんて大げさだなあ」

あはははと笑うガイ・セシル。

駄目だ、コイツも駄目だ。

私が、ガイ・セシルに見切りをつけた瞬間だった。

この世界、本当にマトモな奴が少ないな！
特にメインキャラ！！

フレイと奈落の物語17

49

害もといガイのあまりの言葉に、私の意識は一瞬飛んだ。

慌ててルークの表情を伺うと、傷つくのを通り越して無表情になっていた。

「ねえ、ガイ・セシルさん。一ついいですか？」

「なんだい？」

「セシルさんの家に、武器を持って押しかけた人間を許せますか？」

「……許せるわけが無いだろう」

ガイ・セシルがどこか遠い所を見ていた。

「ですよね？」

本人は謝罪もなしにのうのうとしていたら、どう思いますか？」

気分は小さな子に自分のした悪い事をきちんと言い含めるように論ずる感じだ。

「ふざけるな、って言うな」

「ですよね？」

どうして、それがティア・グランツに適用されないんですか？」

「え？」

「ティア・グランツは兄であるヴァン・グランツを狙って、公爵邸に襲撃をかけた。そのせいで、多くの人が巻き込まれ、ルーク様に至ってはマルクトまで飛ばされてしまった。彼女から、その事に関する謝罪は一切ない。ねえ、どうしてですか？」

「か、彼女には悪気は……」

「悪気が無かったら何をしてもいいんですか？」

それに、悪気が無い人は無関係な家を襲撃しません。無関係な人を巻き込んで、悪気がないは通用しませよ」

それでも、なお彼女には悪気はないんだ、と繰り返すガイ。

ここまで言ったら、コイツ洗脳されているんじゃないか？と思うぐらいだ。

もしたかしたら、ユリアの血筋には洗脳の効果でもあるんじゃないのか？

ほら、数千年かけて預言を使ってユリアの遺伝子に対する絶対服従とか。

おー、それだったらユリア悪女説が出来るなあ。

「同じ事をルークがしたら、あなたはきっとルークを責めるんでしようねえ……。まあ、いいでしょう。これ以上あなたの顔を見ていても不愉快になるだけです。出て行っていただきましょう」

私はそう言つと、秘密バッグからホウキを取り出し手を離れた。

「生きてるホウキ、ガイ（ゴミ）をハワキ出しておいて」

「え、ちよっ」

生きてるホウキは、私の意思通りゴミ（ガイ）をハワキ出してくれた。

「ルーク、ごめんね。良かれと思ってガイと話し合いの機会を設けたんだけど……」

「いや、いい。分かってたんだ、ホントは……。ガイってさ、時々冷たい目で俺を見てたことがあったんだ。気のせいだ、って何度も思

「ただけど…」

ルークが俯く。

「ルーク…」

「それでも、たった一人の友達だったんだ……」

何も言わず、私はルークの頭を撫で続けたのだった。

50

ルークはそのの疲れて寝てしまい、ルークから離れようとした私は、ルークに服の裾を握られてそのままの状態で一晩過ごしてしまった。途中で、ドーピングして力をあげて、なんとかルークをベッドに移動させて、寝かせた。

その時、流石に疲れ果てて私もルークの横で撃沈。

何も知らない人が見たら、誤解される図になってしまった。

そして、朝。

「フ、フレイごめん！」

顔を、自分の髪以上に真っ赤にしたルークが、慌ててベッドから起きて離れていく。

図式的には、私が先に起きて顔を真っ赤にするのがヒロインポジシ

ヨンではないのか？

このままだと、ルークがヒロインに!？

まあ、いいか。ルークがヒロインで。

ルーク一人で身支度を整えていたが、私が多少手直しをして玄関へと出てきた。

そこには、導師一行の他にグレン中将や、マクガヴァン元元帥などが出てきていた。

「馬車はこちらです」

そう言つて案内された場所には、4人乗りぐらいの馬車が御者と護衛つきで存在していた。

護衛のうち一人は兵士Aだ。

どうやら、彼は最後まで付き合ってくれる模様。

そういえば、所属は第三師団になっていたが、どうなったんだろうか？

いまだに第三師団のままなのか？

あとで、聞いてみよう。

ちなみに、護衛は大体10人ぐらいだ。

「さあ、ルーク様。導師。どうぞ」

御者が扉を開け、恭しくルークを迎える。

「フレイは？」

「私は護衛も兼ねて外です。あと、中に入れるのは、せいぜいカー

ティス大佐ぐらいですかね。和平の死者ですし」

身分的にも、その辺りが妥当だろう。

「そうですね。年ですから、乗らせていただきましょうかね。失礼しますよ」

そう言うと、ルークより先に乗ってしまう。

この軍人は…。

「さあ、導師も」

「はい。わざわざ、馬車をありがとうございます」

「いいえ。本来ならば、和平の総責任者であるカーティス大佐が手配するのが普通なのですが、幸いにもグレン中將が手配してくださいました」

そうなんだよね。ルークの為に手配された馬車だから、導師と眼鏡はついでなんだ。

本来ならば、和平に関する一切の手配は眼鏡の仕事なんだよね…。

「さあ、ルーク様も。ああ、口寂しいでしょうから、これさしあげときますね」

そう言って、手渡したのはお菓子の詰め合わせ。

朝、バタバタ準備したのだ。

「子供扱いすんじゃない」

プイツと横を向いたルークが、馬車へと入った。

ちゃんと、お菓子はもっていく辺りまだまだ子供よのお。

「導師もよければおつまみくださいね？」

錬金術のお菓子だから、体力回復などの副次的な効果もある。体の弱い導師にはうってつけのおやつだろう。

「フレイ殿も、どうぞ御者の横にお乗り下さい」

私が歩く気満々でいると、グレン中將が促してくれた。

「よろしいんですか？」

「フレイ殿は恩人ですから。なにより、女性の身で馬車に着いて行くのは辛いでしょう？」

「ありがとうございます」

深々と頭を下げ、謝辞を申し出ておいた。

「……フレイ殿は、ホドに知り合いがいるのですか？」

「なぜ、そう思われるのです？」

「いえ、そのようにお礼をいう時に頭を下げるのはホドの風習なので」

「ああ。私の場合、育ての親がそうなのかもしれませんが。多くは語らない人ではありませんが」

そう言っつて、寂しそうに笑っておく。

こゝすれば、突っ込んだ質問はしてくる人は少ない。

ホドと言っつ言葉が出たので、周りを見る振りをしてガイの方に視線を向ける。

私の方をただひたすらガン見していた。

ちなみに、少し離れた場所にはティアがいて、私の方を険しい目つきで見ている。

どうせ、どうしても私ばかり特別扱いされるんだとも思っているのだろう。

全員が乗り込んだところで出発だ。

私は、グレン中将に再度礼を言ってから出発した。

51

馬車の姿が見えなくなると、グレンは急ぎ兵を終結させた。

「父上、セントビナーの防衛はお任せします」

「おお。我らマルクトの陸艦をいつまでも、ダアトの好きにさせるわけにはいくまいて」

フオフオフオと笑う、いかにも好好爺然としたマクガヴァン元元帥。

「ええ。いつまでも、我らマルクトの財産を好き放題されてはかたいませんからね。捕虜の事はくれぐれもお願ひします。おそらく、取り返しに来るでしょう」

「わかつておるわ。おそらく、六神将の一人が取り返しにくるだろうて。タダでは返さぬよ」

にやりと笑いあう親子。

「では、行って参ります」

「朗報を待っておりますぞ」

目指すは、この付近に潜伏中のタルタロス。
軍は、発見した後にきちんと追跡までやっていたのだ。

兵を率いて去っていく自分の息子の姿を見ながら、

「陛下もジェイド坊への甘やかしっぷりも困ったものじゃ……」

握られた手紙には、和平に関しては一切ジェイドに任せるようにと
勅命。

自分も、軍人として、譜術師としてはジェイド・カーティスに才能
があるのは分かっていた。

けれど、彼は政治的才能は皆無だ。

むしろ、マイナスだ。

「あれほど聡い方でも、親友に関しては目が曇られるのか……」

溜息一つついて、元元帥は自室へと戻っていった。

52

旅は平穩無事とは、言いがたかった。

この世界も、モンスターと言う存在があるからだ。

それでも、グレン中將がつけてくれた護衛のおかげで、私は戦闘に
参加することなくのんびりとルークの世話をしていた。

そろそろ喉が渴いたと思う時間帯に、持っていた水筒からお茶を差

し出し、食事を作る。

私は、それだけをしていた。

いやあ、軍人の方々って強いですね。

私が出るまでも無く終わるんですから。

「いい加減貴方もルークも戦ったらどうなの!？」

ズタボロになったタイヤがそう喚いた。

「戦う？」

私はともかく、ルーク様が戦う？

なんで？」

私は別段戦ってもいいけどさー。

「何を言っているのです、貴方は。軍人が一般人に戦うように強制するなんて、軍人の自覚はあるのですか？」

御者台にいる私と、地面に立っているティアの間に先程まで戦っていた兵士Aが立ちはだかった。

顔は嫌悪感を隠してもいない。

そしてそれは、先程まで共に戦っていた護衛の人たちも一緒だった。

「武器を持っているものは戦うべきです!」

「いや、ルーク様が持っているのは木剣だから。武器と言うには御粗末過ぎるし、兵士Aの言ったとおり、ルーク様は前線に立たれる身分ではありません」

兵士Aってまだ言いますか…とぼやく兵士Aを無視する私。

いい加減馴れて欲しいものだ。

どうも、横文字の名前って覚えづらいんだよね、最近。

「貴族だから、甘やかすのはどうかと思うけど！」

「軍人は戦うのが御仕事です。文句があるのならば、その軍服を脱いでからどーぞ？」

おほほほと笑い、御者に馬車を出発させるようにお願いする。

あと、もう少ししたら昼食の時間にちょうど良いだろう。

さて、今日は何を作るか。

昼食の時間帯になった。

私は、昨日の昼食のメニューを思い出す。

昨日は確か、サンドイッチを作った。ルークはチキンサンド、導師はタマゴサンドだった。

セント・ビナーで材料を買っているので、かなりの融通が利くんだよね。

野菜を洗う水も、きちんと馬車に積まれてあり余裕がある。

なかったら、私が井戸水を出しても良かったんだけど…。

「サラダに、親子丼あたりかな…」

それにしても、びっくりしたわ。この馬車、ちゃんと冷蔵庫がついてたんだ。

おかげで、食品保存が無茶苦茶楽になった。

野菜はいいけど、肉の常温保存はまずいしね。

「フレイ、今日の昼はなんなんだ？」

「親子丼にしようかと思っっています。あ、導師様の分もちゃんと用意するので安心してくださいね。あと、夜に食べたいものがあつたら、リクエスト承りますよ？」

「カレー」

ルークがボソリと言った。

「カレー、食べたい。カレーだったら、いっぱい作れるから護衛の人も食えるだろう？」

確かに、護衛の人たちは私が作ったのとは別の料理を食べていた。私が作っていたのは、ルークと導師と自分の分のみ。

ティアとガイと大佐？

なんで、私が作る必要があるんだ？

大佐が馬車を用意していなかったの、馬車への便乗は許したが私たちはあくまで和平の一行とは別口だ。

導師の食事の準備をしているのは、大佐が導師の世話をしないからだ。

本来ならば、導師守護役が導師の身の回りの世話をするのだが、タルタロスの際に逸れたらしい。

なので、導師の世話は私が善意でしている事だ。

その善意を大佐一行にまで広げる必要は無いだろう。

ティアが、おにぎりを作りながらスゴイ目つきでこちらを睨んでいたが。

いい年をした女性なのだから、自分の食事ぐらい自分で作れと言いたい。
どうやら、ライスぐらいしか材料を購入していなかったらしく、おにぎりしか作れないみたいだが。

「おいしそうですねえ……」

大佐が後ろから覗き込んでくる。

「そうですか？

大佐もそろそろ料理をしないと、出発の時刻までに食べ終わりませんよ？」

私の言葉に嫌そうに顔をゆがめる大佐。

大佐もどうですか、と言われると思っていたのか？

ちやっちやっとな食事を作り、器に盛ってルークとイオンに持っていく。

イオンは、おいしそうですねと喜び、ルークも好物のチキンが入っているので嬉しそうだった。

さて、私も食べるかね。

フレイと奈落の物語 18

53

色々あるけど、旅は続く。

夕飯時には、ルークの希望通りカレーにした。

ルークは辛いのが苦手（だってお子様舌）だと思うので、途中で取り分けて辛さ控えめにしたチキンカレーを食べさせた。

導師も、どうやら辛いのはあまり得意ではないので、甘口のカレーだ。

ルークは子ども扱いするなど言っただけで、無理すんなよと思いつつ、一口だけ普通のカレーを食べさせた。

目を白黒させていた。

「それで、こっちは分は護衛の方々の分ですけど…：ガイさん、なに
か？」

「いや、その、ね…」

後ろからはギロリとこちらを凝視しているティアと大佐。

どうやら、このカレーを狙っている模様。

「そもそも、和平の死者（笑）と、ルーク様は別の一行ですからね
え。目的地が同じなだけで」

「けど、目的地が一緒ならば、ある程度は協力すべきだと思うんだ」

「まあ、普通だったならそれも出来たでしょうけど、無理ですね。彼
女が野放しにされて、ジェイド・カーティス大佐がルーク様に謝罪
されるまでは」

「謝罪？」

どうやら、私達が牢に入れられていたのを聞いてなかったようだ。

「……だから、私達としては不敬をかました大佐と、あの女を野放しにしている時点で、アウトなんですよ。そもそも、和平をしようって言うならば、王族が住んでいる屋敷に強襲をかけた相手を野放しなんてありえませんよ。下手したら、ダートがマルクトと組んで、誘拐騒ぎを起こしたものと思われます」

もしかしたら、油断させて国境あたりで身柄確保して引渡し、なんて事もあるかなーとは思っているのだが、さすがにそこまで外交センスがあるのならば、ルークの対応に不備はなかっただろうし。

「それは、彼女には彼女の理由が」

「どんな理由があろうとも、彼女の犯した罪は消えませんが」

過去に戻ってやり直さない限り、それはない。

「まあ、ガイさんねルーク様の護衛剣士ならば、ティア・グランツと共に戦わずに、こちらの護衛団と行動を共にされたらいかかですか？」

むしろ、ルークの護衛と言う身分ならば、そうするのが普通だと思う。

和平の使者一行を守ってやる義理なんて、彼には無い筈だ。

むしろ、給料分の仕事をしろと言いたい。

「それをしたら、彼女一人で戦う羽目になるだろう？」

「彼女曰くも武器を持って戦う力があるのならば、自分で戦うのが普通なのでは？」

「ルークや君は戦っていないの？」

「前提条件が違つんですよ。ルーク様の他に誰もいなかったら、私が戦つてますよ。むしろ、護衛がつくまでは私が戦っていましたし」「君が？」

「ええ、まあ。けど、きちんとした護衛がついたら、私のような素人の出番なんて無いんですよ」

むしろ、私がアイテムを使って敵を倒すよりかは余程簡単に敵を倒している。

その事からも、マルクト軍の錬度の高さが伺える。

「そもそも、軍人が後衛で一般人が前衛なのがおかしいです。彼女も大佐も軍人としての訓練をきちんと受けたのならば、前衛もこなせるでしょう」

「……そうなのか？」

「え、だって、士官学校つて入学した当初は、全般的にやりませんか？」

カレーを今か今かと待つ、護衛団の一人に聞くと、頷いてくれた。どうやら、私の考えは正しかったようだ。

「それに、常時前衛がいるか分からない場面もあるだろうから、後衛でもある程度白兵戦はこなせるでしょうし……」

そろそろ煮えた頃なので、カレーの鍋を護衛に渡してやる。

護衛の一人が受け取り、他の人が自分達で炊いたエンゲープライスをよそいかけていく。

「それに、ルーク様を戦わせるのがそもそもおかしいです。ルーク様は王族。しかも、実質的に時期王ですよ？」

「そんな方に戦えなんて、よく言えますよねえ……」

しかも、平民を守って戦えって、どんだけくっつけて感じた。

「ガイさんも、そんな寝言言われたら、きちんと注意してくださいよ。あ、カレーが欲しいならば、早目に言わないと、残りませんよ」

一応、多めに作っておいたので、ガイの分ぐらいはあるだろう。

さっ、私もカレーを食べてしまおう。

甘口だけど。

54

色んなトラブルを抱えつつも、旅は続く。

途中アリエツタがライガを連れて襲ってきたが、どうやら私とルークは無関係だと聞いていたらしく、ティアと出てきた大佐、おまけにガイを一方的にボコりました。

私たちがそれを呆れ顔で見学していたら、地中から瘴気が湧き出たので結界石を起動。

おかげで、馬車の周囲だけ瘴気を見事遮断。

ティア・グランツも慌てて譜歌を歌い、無効化してました。

なんでも、音素振動がなんちゃらくだそうです。

ユリアの譜歌ですね、と導師が言つと、私はユリアの子孫だと声高々に主張します。

「ユリアの子孫がコレか…」
「どーいう意味よ!？」

言葉通りの意味ですが。

まともに瘴気を食らったアリエツタを、大佐がトドメをさそうとしたので、導師が止めます。

ルークも、殺すまでは無いだろうと言います。

「甘いよね」

「甘いというより、優しいんですよ。そもそも、元の原因は貴方達
がライガクイーンとの交渉を駄目にしたせいですし」

あのまま交渉が成立していたら、誰も傷つくことなく問題が解決した筈なのだ。

「さて、余計な時間を取りましたね」

このバカ大佐。元々は誰のせいかと小一時間説教をかましたい。

「ええ、貴方達のせいですが。さ、導師様。一時押し留めていると
しても、次に瘴気が発生しないとも限りません。急いで離れましょ
う」

「そうですね…。ライガ、アリエツタの事をよろしく頼みます」

イオン導師が言うと、ライガは軽く鳴いて返事をする。

「ルーク様も参りましょう」

「あ、ああ」

「それと、導師様。顔色が悪いです。お茶を入れますので、一息入

れてください」

「私の分もお願いします」

「自分でお願いします」

全く。ずーずーしいっただらありゃしない。

「あの、フレイ。ティアが、譜術の使いすぎで疲れているんだ。少しだけでも馬車に乗せて貰えないか？」

「は？ 罪人と導師を一緒の馬車って、正気？」

むしろ、狂気。

「だったら、フレイが馬車の中に入ればいいじゃねーか。どうせ、俺とイオンの世話もあるんだしよ」

「いや、でも、それは…」

「お、俺がいーって言うてんだから、いいだろう！」

なに、その坊ちゃんのような台詞は。

って、坊ちゃんだったっけ、ルークは。

止めてください導師様、とイオンを盗み見れば「僕は構いませんよ」とにこやかな導師の言葉。

大佐は相変わらず我関せず。

兵士Aに視線を向けると、笑顔で頷いてくれる。

いや、待って、止めて。あんぎゃー、ルーク、引っ張って馬車に連れ込まないでーっ。

さて、馬車の中の雰囲気最低だった。

まず、座席の配置だがルークの前にはイオン。そして、横には私。当然私の前には眼鏡大佐だ。

眼鏡大佐は、なんでもない風に私を観察している。

なんか、観察されていると分かると、無茶苦茶不愉快になるよなあ……。

この男、一部の人間以外は価値を認めてない男だから。

まさか、今までの馬車もこんな雰囲気だったのか？

だったら、ごめんよ。ちよっと配慮が足りなかったよ。

うん、簞巻きにでもして転がすべきだったかもなー。

誰も喋ることなく、1時間が過ぎた。

いい加減喉が渴いてきたので、私はバッグの中から水筒を取り出す。

設えは金属だ。それを布で巻いて衝撃に耐えるようにしている。

これもまた錬金術で作り出した水筒だ。

正確には、錬金術で作った金属を使って作り出した、だ。

そう、分かりやすく言えば現代の魔法瓶を再現してみた。いやあ、あったかいお茶がいつでも飲めるっていいよね。

でも、知らない人が見たらまさに魔法の瓶だよねえ……。

一応ルークとイオンが飲むお茶は、自分の事も考えてくパラスト>と言っこれまた錬金術で作ったティーセットを使って毎回淹れている。

ちなみに、2人分オンリー。

あ、そこら辺も空気が悪かった原因かも。

コップにお茶を注ぎ、一口飲む。

ああ、トーン茶の渋味うまい。

大佐が、私のコップを凝視している。

「ルーク様も導師様もお飲みになられますか？」

「あ、ああ」

ルークの言葉に私は頷くと、ティーパックを取り出した急須に入れて、お湯を注ぐ。

ちなみに、このお湯はもう一本の中に入れていたものだ。

一応常時複数は持ち歩いているんだよね。だって、トーン茶の苦味って慣れない人には厳しいものがあるからね。

子供舌のルークには絶対無理だ。

「馬車の中ですので、正式なお茶ではございませんが」

本来ならば馬車を止めてお茶を入れるべきなのだろうが、出来るだけ進みたい。

今日は、川越があるらしいから。

蒸らしてカップに注いでいく。

ミステイカ茶独特の、スツとする匂いが馬車に立ち込める。

「失礼。その水筒は譜業ですか？」

「この程度では譜業とも言えませんが。ただ、保温性を追及しただけのものですし」

私の言葉に、眼鏡大佐が黙りこくった。

私はその間にも、お茶菓子を導師とルークに行き渡らせる。

「フレイさんの作られたお菓子は美味しいですね。しかも、疲れが取れます」

導師が嬉しそうにお菓子を摘み、お茶を飲む。

「適度に甘いものは疲れを取りますから。導師様は、お体が弱いよ
うなので定期的に摂取する事をお勧めいたしますわ」

そうなんだよね。

オリジナルイオンのレプリカである導師イオンは、体が弱い。
だから、それを少しでも楽にしようと、疲労回復のアイテムである
〈お菓子〉系のアイテムを食べさせたのだ。

いやさ、このバカ大佐。導師に地べたに寝転がらせていたらしくて、
私がかちんとテントを使ってさらには毛布で床が痛くないようにし
て、寝るように進めたらびっくりしていたし。

一体、あんたは導師をなんだと思っているんだ？と首根っこ揺さぶ
ってやりたかったよ。

やっても無駄だからやらないけど。

どうせ、緊急事態でそんな余裕もなかったと言って終わりだろう。

その場合でも、もう少しどうにかなっただんじやないのかなー、とは
思うけどね。

例えば移動にしても、大佐が背負うとか。

あ、30代を盾にやるわけないか。この無能大佐が。

つーか、帝国はマジで何を考えてこんな無能を使用者に抜擢したんだか。

そう、何度目かになる事を思わずにはいらなかった。

55・5

ジェイドは思案していた。

自分の目の前に座る少女は、いつものバッグから何気なしに金属製の筒を取り出すと、中からお茶らしきものをコップに注ぎ、飲んでへにやりと笑っている。

その表情は年頃の少女に相応しいものであった。

ただ、その手に持っているアイテムは違う。

湯気が立っていることから、それが淹れたお茶をそのままの温かさで保存しておけるアイテムだと知る事ができた。

そのようなアイテムは、帝国にも一応ある。

ただ、そのようにコンパクトには出来てはいない。

技術的に出来なかったのだ。

技術的に出来なかった理由の一つに、譜術に秀でているマルクトでは随一と言われた譜業博士サフィール・ワイヨン・ネイスが出奔したせいもある。

彼がいれば、もしかすれば出来たかもしれない技術。

それが今、ジェイドの前にあった。

それは、彼女がかの洩垂れに勝るとも劣らない才能を持っている証だ。

彼にとっては、所詮は洩垂れなのだが。

フレイにしてみれば、彼の譜業がなければ完成しなかったレプリカ技術なのに、何馬鹿なこと言ってるの？と鼻で笑われる事だろう。この男は、自分以外の天才を決して認めようとしなかった。

それ所か、馬鹿にしていた風でさえあった。

この世の天才は自分ひとりでも思っていたのだろうか？
なので、ジェイドが最大限に譲歩して発した言葉は、

「失礼。その水筒は譜業ですか？」

だったのだ。

フレイはそれにそれにそっけなく返事をして、会話をする相手をルークと導師に切り替える。

ジェイドは彼女の反応に思わず苦虫を潰したような顔をした。

それでも、即座にいつものポーカーフェイスに戻り、指で眼鏡を押し上げる。

導師にお菓子を勧め、ルークと導師にお茶が行き渡らせる。

当然、世話をする必要がないジェイドの分は無い。

おそらく、そのまま無視されるだろうと思い、ジェイドは彼女への現段階への接触を諦めた。

時間はまだある。

なので、後からでも良かろうと判断したのだ。

すると、ふとフレイがジェイドに尋ねた。

「ああ、大佐。そう言えば、封印術されたみたいですねえ……」

ギクリと自分の体が強張った。

彼は、自分が弱体化している事を、当時いたティアとイオンにしか教えていなかった。

グレン中將にも報告していない。

もし、彼が封印術をかけられた事をきちんと報告していたら、きっと和平の使者を下ろされていただろう。

そもそも、彼が使者に選ばれた理由は預言と、その譜術師としての卓越した才能があつたゆえだ。

それを失ってしまったと知られば、さすがに帝国もかれをそのまま使者を続けさせなかつただろうから。

「先程、大きな譜術を使われなかつたのもしや、と思ったのですが……。図星ですか」

フレイがクスリと嗤った。

「まあ、私からわざわざマルクト軍に報告する義理はないからいいんですけどね」

とぼやくようにフレイが呟き、突然話題を変えた。

「そう言えば、大佐の瞳は音素をより多く吸収できるように改造したと聞いてますが、真ですか？」

「ええ」

それはジェイドにしか扱えない技術。

それだけの音素を操れるのは自分だけ、と言う自負でもある。

「その眼鏡は瞳に音素が吸収されるのを防ぐ譜業、ですか？」

「ええ」

するとフレイは突然笑い出した。

訝しげに眉を潜めジェイドが、

「なぜ笑うのです、突然？」

「いえ、ケセドニアの天才だと言われるジェイド・カーティスが、まさかこんな簡単な事が分からないなんて、と思ひまして」

「どういう意味だ、フレイ？」

今まで沈黙を保っていたルークが口を開いた。

「だって、現在音素が乱されている状態で、それを解除しているんですよ？」

「だから」

「なぜ、眼鏡を外して音素の制限を外さないんです？」

「こんな簡単な事なのに、とフレイは嗤った。

そして、フレイの言葉にジェイドは愕然とした。

確かにその通りなのだ。

現在使える譜術が制限されているジェイドにとっては、その制限が緩む事を意味している。

それを今まで思い出しもしなかった。

ジエイドの頬にサッと赤味が走ったのを、フレイは見逃さなかった。

「ねえ、天才さま。どうして、今まで外さなかったんです？」

私にも教えてくださいますか、とフレイが嗤いながら尋ねた。

フレイと奈落の物語 19

56

ようやく、カイツールに到着した。

カイツールは、二カ国間の国境に位置する町で、町の半分のところ
で関所を設けて両国に別れている。

ちなみに、普通の町なら日中は門が開けられ、旅人の出入りは自由
な場合が多い。

王都や帝都でも、余程怪しければ兵から止められるぐらいだ。

ただ、カイツールのような国境の町は違う。

きちんと旅券がないと入れてすらもらえないのだ。

身分証のない人間はすべて追い返される。違うのは、キムラスカで
ルークのように王家の証を持っていたりする場合ぐらいだ。

ルークの場合、キムラスカではその髪と瞳が何よりの身分証となる。
これだけ見事に赤い髪と碧の瞳を持つのは、王家ぐらいだからだ。

そして、ルークの事はキムラスカ全てが知っていておかしくない。
実質時期王だからだ。

王女ナタリアは形だけ王位継承権を与えられてはいるが、貴色をそ
の身に持たない事から王位には着けない。
だから、ルークが婚約者なのだ。

現王の妹を母とし、公爵を父とするキムラスカの時期王。
それがルークだ。

話はずれたが、身分証がない人間は例え中立国のダアトの人間でも

入れない。

だから、現在門の前で一悶着を起こしているのだ。

「だからあ、身分証落としちゃったんですう。ねえ、ちょっとだけでいいですよ」

両手を前にあわせ、くねくねと身を捻る導師守護役。

なんで、こんなのが導師と言う教団トップの護衛をしなければならないんだ？

待ち合わせをしたと言っても、わざわざ町の中に入る必要は無いだろう。

門の所で待つていればいいんだ。

何か言われたら、連れが身分証を持っているとか言いようがあるだろう。

なのに、あのをいたらく。

「導師イオン。失礼ですが、彼女は一度きちんと導師守護役がなるとるかを教えたほうがよろしいかと。今のままでは、導師の守護役として品位に欠け、教団の権威を落としかねません」

私の言葉に、イオンは顔を赤くする。

旅の間、何度か導師イオンと話をしたのだが、この子頭は悪くないんだ。

ただ優しすぎるのと、教えられてない常識が多すぎるんだ。

全く、初期教育の手を抜くなと言いたいわ。どいつもこいつも。

ようやく諦めたのか、門から離れ

「月夜ばかりと思うなよ」

と、それはもう性格の悪い表情で言ってくれました。後ろで見えていたルークにも、それは見えてたらしく顔を青くしている。

「女つてコエー……」

ルーク、その意見は実は正しいよ。

女なんて猫を必ず一匹は飼っている生き物なのだから。

だから、君も注意なさい。貴族の子女なんてそれはもう特大の猫を飼っているんだから。

「あー、ようやく着いたんですね。大佐、遅いですう。ああ！ルーク様ああん、一緒だったんですねええ」

「うおっ、来るな！」

ルークが嫌がったので、すぐさま護衛が2人の間に入りアニスをルークに接触させない。

おお、いい仕事するじゃないか。

こら、そこの役立たずの護衛剣士。少しは見習え。

57

私とルークと護衛隊は、グレン中將が手配してくれていたらしくすんなりと通してくれた。

ただ、大佐一行はちよつと揉めたみたいだ。

結局は、大佐が自分の地位と皇帝からの勅命、そして導師の威光を

使って強行突破した。

国境越えに導師の威光を使うなど言いたい。

そう言えば、この町入った瞬間イベントがあつたよな？

私はうつすらと覚えていたゲームの流れを思い出し、猫を呼んだ。

そして、護衛隊がルークと私に旅券を手渡してくれた。

「マグガヴァン中将が、手配してありました旅券です。私達はカイツールでルーク様をキムラスカへと渡られたのを確認して、セント・ビナーに戻るように言われております」

「そうか、ここでお別れなのか」

ルークは護衛隊に大分慣れていたので、少し寂しそうだ。

つて事は兵士Aともここでお別れなのか。

私が兵士Aを見ると、ニコリと笑ってくれた。

「ここで死ぬやつにそんなものいらねーよ！」

ザッと上空に影がさした。

「にゃん太、くそっ」

指示が間に合わない！

一発は耐えられるようにガラスの護符を渡しているけど……、最悪私が間に入って時間を稼いで……って。

「エ、エイベル？」

誰よりも先にエイベルが、ルークを突き飛ばし2人の間に入り上か

ら切りかかってきたアツシユに切られた。
そこからはスローモーションのように感じられた。

赤い血が一部ルークの頬を染め、満足そうに笑ってすらいるエイベルが地に倒れる。

「にゃんたあああああ！！！」

私が絶対の攻撃の意思を込めて、にゃん太に命じた。
それと同時にメガクラフトを投げる。

クラフトより爆発範囲の大きいメガクラフトを目隠しに、にゃん太が接近横殴りに吹き飛ばす。

「もう一撃！」

私がレヘルンを使い、アツシユの下半身を束縛する。
そしてにゃん太が間髪いれ殴る殴る。

「ミンチにしてやりなさい！」

私は確かな殺人の意思を持ってにゃん太に命じる。
アツシユは流石のラツシユに最早ぐったりとしている。

ガキン

誰かがアツシユへの攻撃を剣で受け止めた。

「し、師匠？」

「どういうことだ。私はこんな事を命じてないぞ！」

その女性も、これ以上アツシユへの攻撃はやめなさい。すでに

攻撃する意思はない」

ぐったりとしたアツシユを背に、ヴァン・グランツが吼えた。

「攻撃する意思が無い？」

確かな攻撃の意思を持ち、ルークに攻撃を仕掛け、庇ったエイベルを戦闘不能にしたのにな？

エイベル！」

私は慌ててエイベルの近くに駆け寄った。

側では護衛隊の一人で第七音素譜術師の人が、止血の為に術を施しているが悔しそうに顔を歪め、

「傷が深すぎて、私の術程度じゃ血が止まりません！」

譜術師が悲鳴をあげた。

「フ、フレイ！　なんとかできねーのか！？」

「どいて！」

私は譜術師を突き飛ばすようにどかすと、震える手で<エリキシル剤>を取り出し傷口垂らした。

傷は瞬く間に閉じる。

残った薬を口の中にいれ、嚥下させる。

真っ白だった頬に赤味が差し、エイベルがうつすらと目を開けた。

エイベルが一番最初に発した言葉は、

「ああ、生き残ったんですね私…。ルーク様、ご無事ですか？」

「ああ、ああ。転んで、服が汚れた…程度…。なんで、俺なんか庇ったんだよ！？」

お前、死んじゃう所だったんだぞ！」

半泣きのルーク。

目に涙を溜めて、兵士Aに向かって詰る様に叫ぶ。

「私は、軍からの命令で貴方とフレイさんの護衛を命じられました。護衛ならば当たり前のことです。そうでなくても、お2人は私の恩人で、民間人です。守るのは当然の事ですよ」

「当然って…」

「ルーク、文句を言わずに誉めてやりなさいよ。彼は、ルークの為に命を賭けたんだから」

ルークに、彼の行動は護衛として至極当然で、それを全うしたのだから上に立つ人間として誉めてやれ、と教えた。

「あ、ありがとう。お前のおかげで、怪我せずに済んだよ…」

「はい……」

「あ、傷は治したけど、血までは流石に戻らないから今日は大人しく寝て血になるようなものを食べなさいよ」

「あ、はい」

私は、護衛団に頼んで彼を宿屋に運んで貰う。

さて、と。

ヴァンとアツシユをどうするかね…って、ミユウ!?

「死ねですの!」

ぶおおおおおとミユウの口から炎が出て、瞬く間にアツシユを包み…そして…。

「ぶぶお」

「つつ…」

思わず嘔き出した。

「ア、アフロ…ぶひゃひゃひゃひゃ!」

確認したらたまらず指差して、笑い出す私。
ルークも肩をフルフルと震わせている。
ヤバイ、これヤバイ!

「くっ…お、覚えてる!」

ヴァンに治癒術をかけられたのか、アツシユが捨て台詞を吐いて逃走した。

その後を慌ててマルクト兵が追っていく。

さて、当のヴァンはと申しますと、妹となんか言い合っていました。

「誤解だ」とか「裏切り者」とかの単語が聞こえます。

はたから見たら、痴話喧嘩だねありゃあ…。

「ルーク様あん、大丈夫ですかあ?あ、頬に血がついてますう。拭ってあげますね?」

ようやくアニスが動き出し、ルークの頬に触るうとした。

パシン

ルークがその手を払いのける。

「勝手に触んな」

ゴシゴシと手のひらで血を拭おうとするルーク。

「駄目です、ルーク様。血が広がってしまっただけです。これをお使い下さい」

そう言って持っていたハンカチで、ルークの頬に飛んだ血を拭う。

「サンキュー、フレイ」

「どづいたしまして。それにしても、ヴァン揺将の痴話喧嘩、いつ終わるんでしょうかねえ……」

いや、もう旅券もあるから放っておいてキムラスカ側に行ってもいいですか？

フレイと奈落の物語20

59

護衛団の人が近くの宿に兵士Aを運んだと報告が来た頃、ようやく兄弟喧嘩は終わった。

どうも、ティアのほうは納得していないみたいだが。

「ルーク、先程の対応は無様だったな」

カチン

なんだ、このオヤジ。

イケメンオヤジと思っただけど、一気に株が落ちた。

元々底辺に近かったのに、底辺通り過ぎた。

ルークは、ヴァンの言葉に唇を噛んで俯く。

思わず何か言い返してやろうと思っただら、ルークが私の袖を引っ張って止める。

「ああ、公爵から旅券を預かってきた。コレを使って、キムラスカ側に入りなさい」

「私達の分ももらえますかね？」

大佐が、いきなり口を開いて交渉します。

「カーティス大佐、使者としてキムラスカに行くのに旅券の一つも用意していないのですか？」

「……最初はケセドニアに行く予定でしたから」

「セント・ビナーでも手配は出来ましたよね？」

何してんだ、あんだ」

私はこれみよがしに、旅券をヒラヒラと振って眼鏡に見せ付ける。実際、旅券が欲しいのならば、グレン中将にでも交渉して発行手続きをしてもらえばよかったのだ。

それを怠ったお前が悪い。

そして、他人の旅券を使おうとするなんて、なんて行き当たりばったりなんだ。

計画性皆無な和平の使者。それって、和平が達成できるのか？

「それに、失礼ですがグランツ揺将。公爵からルーク様搜索のためにと預かった旅券を、他国の軍人に渡しても良いのですか？」

「……………責任は私が取るう」

「そうですね。ならば、何も言いません。それと、ルーク様に先程切りかかった赤い髪の男は、鮮血のアッシュで間違いないですか？」

「なぜ、そのような事を聞く」

「カイツールにおいて、キムラスカ王族であるルーク様に切りかかる凶行を起こした男ですよ？」

導師様、それはダアトの総意なのですか？」

いきなり話を導師に振ると、導師はすごい勢いで首を振る。

「ダアトは無関係です。あれは、アッシュ単独の行いです」

「そうですね。ダアトは無関係です。もー、何言ってるんですか。六神将は大詠師派なんですよ？」

そう答えるしかないだろうね。

けど、導師。それだけじゃあ、駄目なんだよ。

起こってしまった事には責任を取らないといけないのよ。

「派閥問題は、こちらには関係ないことだと思えます。どちらにする責任問題にはなるでしょうね。一步間違えばルーク様が死ぬ所でしたから」

「なあ、フレイ。ルークも怪我をしなかったんだから、そんなに言わなくても……」

ガイが、私と少し距離を取りながらそうとりなす。

それに、ヴァンとガイとティアにアニスが頷く。大佐は沈黙を保ったままだ。

「怪我しなかったらなんですって!？」

「あんたいい加減にしなさいよ!？」

「ロクに護衛の仕事をしない所か、犯人まで庇うなんて何やってんのよ!！」

「ひっ!」

あまりにも腹が立ったので、胸倉掴んでやった。

蒼白になり、ジタバタともがくガイ。

あまりに情けない姿に、私はガイを投げ捨てた。

「アツシュを捕獲後、査問会議を開きましょう」

ヴァンが出した答えに一応の満足を得て、頷く私。

あのさ、勢いでやっちゃったけど、私が詰問する権利って実はないんだよね。

気付いてないから言わないけど。

「ルーク様、一度宿でお休みになられますか？」

「顔色が悪いです」

「あ、ああ。師匠、また後で」
「ああ、ルーク。キムラス力側で待っている」

私とルークは、馬鹿一行とカイツールの町の中で別れる事に成功した。

60

ズンズンと歩く私と手を？いだ状態で小走りで付いて来るルーク。

「フレイ、なあフレイ」

「なに、ルーク」

「なに怒ってんだ？」

思わず足を止める。

あー、ルークにも分かるぐらいあらかさまだったかあ…。
ちよつと落ち込んだ。

握っていた手を離してもポリポリと頬をかく。

「ヴァンの対応、動かないカーティスと護衛のガイ。自分を悪いとも思っていないティア。ことの大きさを理解していない導師に、導師守護役。なにより、エイブルの行動を読めなかった自分に憤っているわ」

本当に、普通の軍人であるエイブルがどう動くかなんて、簡単に想像がつくのにな。

なんで、あの時はそこまで考えなかったのだろうか。

おかげで、また死に掛けたし。

彼はカイツールが終わったら、私たちと離れて比較的 안전한軍に戻ることが出来るのに。

それなのに、別れ際に傷つけてしまった。無傷で返すつもりだったのになあ…。

あー、眉間にも皺がよってるよ…。

「なあ、フレイ。王族って、そんなに偉いのか？
命を賭けて守られるほど、偉いのか？」

まともに王族として教育を受けていないルークだから出た言葉。

肯定するのは簡単だ。
けど、それだけじゃ駄目だ。

ルークが真剣な目で私を見る。

「偉いよ。王族と言うのは守られて当たり前なんだ。その代わり、
国に何かあれば責任を取らされる立場にあるんだよ」

「そっか。だから、フレイもエイベルも俺を守るんだな」
「ルーク、それは違う」

私はルークの言葉に訂正の言葉を入れる。

「私がルークを守るのは、ルークがルーク・フォン・ファブレじゃなくて、ルークだからだよ。不器用で意地っ張りで、けど優しいルークだから守ろうと思ったよ？」

ルークの目を見て、優しく諭してやる。
そうなんだよ。例えローレライの依頼だろうが、気に食わなかったら私は無視する。

最初なんてカイツールまで送ってそれで終わるつもりだったんだ。

けど、結局ルークに情が移ってしまった。

「だから、ルーク信じなくてもいいから覚えていて。どんな時でも、私はルークの味方だよ？」

「なんだよ……それ」

「今は分からなくていいよ。けど、覚えておいて」

そう、結局私はルークが大事なんだ。

大事なルークが貶められているのが腹が立つんだ。
だから、さつきもそれで腹が立つたんだ。

そう納得できると、心が軽くなった。

60・5

私はふと疑問に思った事を口にした。

「そう言えば、ミュウってまだ成体じゃないのに、どーして火が吹けたの？」

そうなんだよね。成体じゃないから思うように火は吹けない筈なのだ。

ゲームでは、腰にソーサリーリングと言うアイテムがあったから吹かけていた様だし。

「フレイさんの料理を食べていたら、力が沸いてきて出来ると思っただですの！」

「試したら出来たので、ほっとしたですの」

「そ、そう……」

どうやら、錬金術を使った料理はチーグルにはことのほかよく効いた模様。

もしかして、チーグルって錬金術のアイテムがよく効く種族なのかもしれない。

うーん……、あまり無節操にミュウに色々与えられないなあ……。

そのうち、羽とか生えて空も飛べるようになったりして。

……まさかね。

61

私達は、マルクト側の宿屋へとやってきた。

キムラスカとマルクトに別れているこの町は、当然の事ながら宿屋も双方にある。

受付でエイブルの部屋を聞いて訪れると、エイブルはベッドに横になってはいるものの起きて護衛団の人と何か話していた。

「あ、フレイさん、ルーク様。わざわざありがとうございます」

「私達、そろそろキムラスカ側に行くから、別れの挨拶をしにきたんだけど……」

「別れの、挨拶ですか？」

エイブルが不思議そうな顔をする。

「なに、その顔？」

「いえ、実はグレン中将から新たな任務を受けたのです。今、受け取ったんですけどね」

「新しい任務？」

なんか嫌な予感がするんだけど…。

「新しい任務は、フレイ・ローゼン嬢の護衛とマルクト軍へのスカウトです。ようするに、一緒にいてスカウトしてこいって事ですね」

グレン中将、やってくれました。

どうやら、一度断った事で諦めてくれたと思っていたのだが、実は諦めていなかった模様。

「フレイさん宛にお手紙がありますが、フレイさん字が読めませんでしたよね？」

「うん。全然読めない」

「だったら、読みますね」

『フレイ・ローゼン嬢。エイブルから聞いたと思うのだが、君のその才能をそのまま放っておくりは惜しいと思う。』

返事はいつでもいいので、もう一度考えてもらえないだろうか？
それまで、エイブルを君の護衛としてつけるので、好きに使ってくれ。

『色よい返事を期待する』

なんか、それってエイブルを私の護衛に付けるための方便って気がするんだけど。

「あんたはそれでいい訳？ 正直、私はこれっぽっちもマルクト軍に入るつもりがないから、いつまでも帰れないわよ？」

「あのですね、俺第三師団なんですよ。それで、基本的にはあの眼鏡の部下なんです。今は緊急時だからグレン中将が一時的に面倒見ている訳ですが」

そういえば、所属はそうだったわね。

「任務があればその間は、グレン中将の指示で動けるんです。なので……」

「そーいう事か。もう、カーティス大佐の配下にはなりたくないんだ」

「確かに、カーティス大佐は鬼畜だの非道だの色々と言われてきていましたが、実力だけではありませんので尊敬していた部分もあったんですよ。でも、今回ルーク様やフレイへの態度を見ていたら、どうも彼の配下でいるのがイヤになりました。セント・ビナーでグレン中将に相談したら、色々と手配してくれたんですよ。」

カーティス大佐はあんな性格ですから、一度配置されると死ぬまで第三師団なんですよねえ……」

うわっ、それキツッ。

よーするに、部下になりたがる人間がいないから、移動がないって事か。

鬼や、マルクト軍鬼や。

「ホント、兵士達の間では第三師団は墓場って言われているんですよ……。死霊使いだし」

「あー…」

「退職と言う手段もあるのですが、なんかあの人のせいで退職って言うのも業腹なんですよ」

「その気持ちは分かる」

「ホント、あの人の部下になってから口くさな事ないですよ…」

溢れ出る愚痴は今までの苦勞の証か。

「なので、フレイさんの護衛とスカウト依頼は、渡りに船なんですよ。給料もきちんと出てるし、気にしないで下さい」

「あんたがいいんだったら、いいけど…」

「全然オツケーです。ルーク様、これからもよろしくお願いしますね」

「あ、ああ…」

かくして、エイブルの同行が決まった。

グレン中將は、きちんとエイブルの旅券と身分証を手配してくれていたもので、国境越えにはなんら問題はないらしい。
いい仕事してるよね。

フレイと奈落の物語 2 1

62

多少顔色が悪いが動けないこともないと言つが、念の為に<アルテナの祝福>を使いHPの継続回復を図る事にした。

「これ、飲んでね。ちょっと不味いけど、体を中から少しずつ治していくから」

「フレイさんって本当に色々な薬を持ってますね。軍に入らなくても、セント・ビナーで薬屋を開けたらどうですか？

俺、買いに行きますよ？」

確かに長期間この世界に留まるのならば、アトリエを開くのも手かなあ…。

「み、店ならキムラスカに開けばいいだろ！」

ルークが私の腕を取ってそう主張する。

「けど、ルーク様。セント・ビナーは薬草が豊富ですし」

「あ、私の薬はセント・ビナーで取れる薬草は関係ないわよ？」

「ほら！ な、フレイ。店開くならバチカルにしろよ！

そうしたら、俺帰ってからもフレイ呼べるし！」

いや、一応軟禁されているんだよね？

そーいう場合って人は呼べるのか？

「母上に頼んでみる。な、な」

「そうだねー。考えておくね」

「おう！」

いやん、ルークが可愛い。

これはあれだ。お母さんが他の人に取られると思った子供の反応だ。

「さて、そろそろ関所ですけど…って何か騒ぎになっていきますね
「え？」

確かに国境前は騒ぎになっている。

何かトラブルでもあったのかな…って、（一応）和平の使者一行様
じゃないですか。

2人ばかり部外者がいますが。

その使者一行を、マルクトの軍服を着ている兵士達が囲んでいる。

「あれ、俺らの護衛団の奴じゃねー？」

「ですよー！」

きちんと人の顔を覚える子のルークが言った。

「あ、ホントです。ルーク様、目がいいですね」

本当に何があっただんだ？

私達は嫌だけど近づいてみる事にした。

すぐに護衛団の一人が気がつき、私達の方へと走ってきた。

「なにがあっただんですか？

何か不備でも」

「いえ、私達も新しい任務を受けまして…」

「任務？」

「ええ。ティア・グランツを捕縛して、キムラスカ側に引き渡すと
言う任務です。ルーク様の姿を彼らが見ましたら、面倒なことにな
るので子の場で待機をお願いします」

驚きのあまり、目が飛び出るかと思った。

いや、てっきり和平の使者の一人して、ジェイドが全ての責任を取
ると思っていたのだ。

「なぜ、ティアを捕縛するのです？」

「そうですー。導師様の言う事が聞けないの!？」

導師が懸命にティアを庇い、アニスはそれを援護する。

ジェイドは、

「私達は急いでいるのです。さっさと道を開けなさい」

と偉そうだった。

ガイも、剣に手をかけておりまさに一触即発。

「どうして、私が捕縛なんてされないといけないのよ!？」

「不法入国が罪だと言うなら、ルークも捕まえなさいよ!！」

「バカか、お前は」

堪えきれずに、困んでいた護衛団の一人が言った。

「お前の罪は明白なんだよ。キムラスカ側にもきちんと確認を取っ
た。ティア・グランツがファブレ公爵邸を強襲し、ルーク様を誘拐
したと。だから、マクガヴァン中將は俺達にお前の捕縛を命じたん
だよ。キムラスカからも、ティア・グランツの身柄を確保した後、

引渡しを頼まれた」

「そんなんっ！ 私は兄を…」

「譜歌を使い強襲した事に変わりはない。今まで捕縛しなかったのは、カーティス大佐が捕縛するだろうと思っていたのだが、しないようなのでな。まったく、何を考えて罪人を野放しにしているのか本当、君達の行動には苛々させられたよ」

「彼女は和平に必要なので、捕縛していなかったのですがね。私は和平の使者として、全権を与えられています。私達を解放して、先に進ませなさい」

ジェイドの言葉に、鼻で笑う。

「大佐が全権を与えられているのは、和平に関してのみですよ。ティア・グランツの身柄が和平に係るものは、彼女を捕縛してキムラスカに引き渡したら心証が良くなるぐらいでしょう」

それ以外に使い道はあるのですか？と逆に尋ねる。

大佐はうつむき、下がってもいない眼鏡をしきりにあげる。

「どうやら、理解していただけたようで。導師様も、ご安心下さい。真実、彼女が無罪ならば身柄はすぐに解放されます」

無実だったらね。

「つか、ものつすぐく有罪だから。」

王族の住む屋敷を襲撃して、更に誘拐。それからも、不敬罪ブチかましているからね。

護衛団の言葉に、イオンは納得した。

ティアに罪がないならば、大丈夫だと思ったのだろう。

「ティアは女性です。あまり、酷い扱いはしないで下さい」
「音律士なので譜歌は歌えないようにしますが、それ以外は手の拘束位です。ご安心下さい」

それ、マルクトではってつかないか？

導師が納得したのならば、とティアは大人しく捕縛された。
譜歌が歌えないように、首には何か付けられている。

「あれは、譜歌を歌おうとしたら喉に刺激を与えて一時的に声を出なくさせる譜業です」

「はー、あんなんあるんですね」

「ええ」

私達の近くにいた人が、きちんと説明してくれた。

「それじゃあ、行きましようか。国境までお送りします。大佐達が絡んでくるかもしれませんから」

「あれ、先に行かせてもいいのよ？」

「なぜ、アレらをルーク様より優先させなければならぬんですか？」

いや、そーだけどさ。

「ルーク様の耳に犯罪者の戯言を入れるのも憚られますので」
「ご安心を。その場合は、きちんと黙らせますので」

そう言つて、隣の人は杖を構えた。

ああ、この人エイブルの傷を治そうとしてくれた人だ。

そうですか、杖で撲殺ですか。こわっ、エリー思い出した。

「あー、ルーク様あん」

アニスの言葉にようやく私達の存在を確認した一行は、次から次に色々言ってくる。

やれ、ティアの開放をキムラスカに言ってくれたの、あなたが遅いせいでこんな事になったんですよ、だの。

うん、いい加減本気で黙れ。

思わずメガフラムで吹き飛ばそうと思った瞬間、ぶおんとでっかいハルバートが一行のすぐ近くを飛んでいった。

ガツンと大きな音がしてハルバートかせ跳ねた。思わず和平一行の言葉が止まる。

「すみません、手が滑りました」

全然悪びれる感じもしないで、護衛団の一人が言った。

「さ、ルーク様。連絡はしていますので向こうからも迎えがきております」

促され、関所の先に視線を向けると、そこには恭しく跪く立派な服を着た男性とキムラスカ兵士の姿。

あ、女の人もいるよ。

「じゃあ、行きましようか。ルーク様、エイブル」

「おう」

「はい」

私とエイブルは旅券と身分証を手渡し、ルークもそれに習おうとしたら

「ルーク様の身分照会は必要ありません。あなたのその姿こそがキムラスカ王族の証」

そう恭しく言われたのだ。

かくして、私達はマルクトからキムラスカへと無事入国を果たしたのだった。

62・5

グレンは、報告書をまくり満足そうに笑った。

「グレン、報告書があがったぞい」

そう言っつて、父であるマクガヴァン元元帥がグレンに報告書を手渡す。

「父上、ノックぐらいして下さい」

「ふん。忘れただけじゃ。それで、報告書は満足のいくものだったか？」

「ええ。父上の報告書はシンクの脱走の件ですか」

「ほっほっほっ。まあ、一時の間はまともに動けんだろつて。現役を退いたとは言え、まだまだ若い者に遅れは取らんよ」

シンクは予想通り、グレンがタルタロス奪回時に神託の盾騎士団が

奪回に来た。

セント・ビナーの駐留軍は、街の外での防衛線で術の応酬をし、その間にシンクは別の六神将の手を借りて脱走。その追撃に、今は現役を退いた元元帥と一部兵士が対応。

取り逃がすも、決して軽くはない怪我を負わせることに成功。

現役を退いたとは言え、マルクトーの譜術師と呼ばれた男。

今でも並みの譜術師では比喩にならない実力者だ。

その好好爺ぶりからは想像もつかないが。

「どうせ、教団が預言を盾にしてきたら渡さんといかんだ。ああ、町の修繕費は教団に回しておけ。今回ばかりは目撃者が多くて、知らぬ振りも出来ぬだろう。タルタロスと言う証拠もあるし」

「ええ、当然ですね。ティア・グランツは予定通り捕縛してキムラスカに引き渡しました。カーティスが捕縛すると少しばかり期待していましたが…、無駄でしたね」

「ジエイド坊も錆び付いたのう。いや、昔からそうだったのかもしれんわ。あの、譜術の才能に目を曇らせてしもった」

「父上…」

元元帥が術の手ほどきを、何度かしたことがあるのは知っていた。

自分とは違い譜術の才能に溢れ、父の教えを見る見る間に吸収していく姿に嫉妬すら覚えた。

「まあ、過去のことは良い。とりあえず、面倒ごととは一つ片付いたの」

「ええ。後は、彼女ですね」

ケセドニアの領事館に、フレイ・ローゼンを詳しく調べるように命じ情報を集めた。

その情報量の少なさに、グレンと唾然とした。
ケセドニアに戸籍があるとはいえ、フレイ・ローゼンは砂漠の民出身だったのだ。

ザオ砂漠と共に生きる少数民族。それが、彼女の正体だった。

「19年前に養女として引き取られたとしか分かっていません。余程外部との接触がなかったのでしょうか。まるで、何かを恐れるかのように」

「訳ありかのう。じゃが、あの才能は貴重じゃ。ウンディーネを召還できたと言う事は、ローレイの召還も可能かもしれない可能性がある」

「ユリアの再来、ですか」

「ほっほっほっ。そんな事はないと思うのじゃが、あのアイテムも珍しい。ああも、イラプションレベルの爆発を起こすアイテムを連続で使える、と言うのは大きい」

「空を飛ぶ譜業も持っているそうです」

その言葉に元元帥は深い溜息をついた。

「本当に、どうしてこれ程の人物が今まで無名でおれたのじゃ。不思議でならん」

「あと、カイツールで死に掛けのエイブル二等兵をほんの一瞬で回復させたそうです。使った薬品はたった一本です」

「死にかけ？ どの程度じゃ」

「中位の第七音素の譜術で無理だと言っていましたから」

「死ぬ一歩手前じゃな。それを一瞬か……。ただの、薬で」

「ええ」

「キムラスカに渡すわけにはいかんな」

「そうです。けど、前途は多難ですよ」

彼女が始めて出会った軍人が、カーティスでそのカーティスは彼女とその連れであるルーク・フォン・ファブレに無礼な対応をし尽くしてくれた。

それゆえ、彼女は軍へのスカウトを拒否した。

「一応、彼女たちと長くいるエイブルに彼女のスカウトとキムラスカとの必要以上の接触はさせるなどは命じましたが、彼女の側には『彼』がいますから」

「ファブレ子息か」

フレイは、彼にはかなり入れ込んでいた。

甲斐甲斐しく世話をする姿は、まるで母か姉のようだった。

「彼はバチカルで別れますから、それから期待ですね」

「そんな事をせんでもいい方法があるんだかのう」

元元帥がニヤリと笑う。

思わず背中に悪寒が走るグレン。

「グレン、フレイ嬢を嫁に貰え。そうすれば、彼女はマルクトに所属するぞい」

げほごほがふ

思わず咽るグレン。

「父上！」

「なに、いい案じゃ。ワシもそろそろ孫が見たい。嫁を貰え、グレン。ついでじゃから、フレイ嬢を娶ってしまえ。料理も上手、心遣いの細やかさ。今時の若いもんにはなかなかおらんぞ。あれだけの

器量よしは。まあ、顔は普通じやがの」

「冗談はそこまでにして下さい。仕事に差しさわりがあるので出て行ってください」

「冷たいのう」

渋々元元帥は重い腰を上げた。

部屋から出るときに、

「次にフレイ嬢が来るまでよく考えておくんじゃぞ。むしろ、さっさと押し倒してしまえ。あーいうタイプは押しに弱いぞ」

「ちちうえー！ーっ！」

「ほっほっほっ」

思わず書類を投げつけるグレン。

けど、父はグレンよりはるかに上手だった。

書類が当たる前に扉を閉じてしまったのだ。扉に当たり散らばる書類。

「まったく…」

自分が投げた書類を拾いながら、ふとグレンは想像してみる。

フレイがエプロンをして自分を出迎える姿を。

思わず口元が綻んだ。

そんな自分に気付き、慌てて首を振る。

「違う、違うぞ！私はっっ」

誰に弁明しているつもりなのか、誰もいないのに一人で延々と部屋で言い訳をするグレン・マクガヴァンだった。

恭しく跪いた男と兵士はピクリとも動かなかった。

ルークに耳打ちして、顔をあげるように言いなさいと教えてあげる。

「か、顔をあげる」

人に命令する事になれていないルークは多少どもったが、まあ初めてだし落第点かな？

顔をあげる事を許された男が、口を開く。

「お初におめもしります、ルーク様。私はこの町の責任者をしております、アルマダインと申します。此度の不幸、心より同情申し上げます」

「あ、ああ」

「つきましては、ルーク様の身分からしてみたら不満ではあると思いましたが、宿を用意いたしました。今晚はゆるりと休まれ、明日カイツール港へのご案内し、船にお乗り下さい。船は明日までに用意しておきます」

「そっか。明日船だな。うん、さっそく案内してくれ」

「はい。セシル少将。ルーク様のご案内を。くれぐれも失礼のないように」

「はっ。案内をさせてもらいますジヨゼット・セシルと申します。失礼ですが、後ろのお二方はどなた様でございましょう？」

セシル少将が、鋭い目つきで私達を見る。

いやあ、エイブルが宿屋でマルクトの軍服から普通の服に着替えていて良かったよ。

「フレイは、俺が飛ばされた場所で俺を保護してくれて今まで世話してくれたんだ。キムラスカに来たら別れるつもりだったみたいだけど、俺がバチカルまで誘ったんだ。後ろのエイゼルはフレイの護衛かな」

「ルーク様の恩人でございましたか。失礼いたしました」

セシル少将が私に頭を下げるので、慌てて両手を振る。

「い、いえ。はたから見たら私みたいな一般人がルーク様と一緒にいたら変なので仕方ないです」

そうなんだよねえ。

今の髪を隠した状態では、私は碧の目を持つタダの小娘だからなあ。

「歩きながらお話ししましょうか。ルーク様、フレイ嬢とエイベル殿はルーク様の部屋の近くでかまいませんね？」

「え、フレイは一緒に部屋でもいいぞ？」

ぎゃーーっ！

ルークの問題発言に、セシル少将の目が細くなりなぜか殺気すら感じられた。

私は無実だと必死に首をぶんぶん振る。

「だって、旅の間は一緒に部屋だったぞ」

「それは、ルーク様の世話と部屋の関係ですっ」

「そー言えば、セント・ビナーでは別室だったな」

ルークが思い出すように言う。

「です。同室はエンゲープだけです！」

「そうですか。では、部屋は別でいいですね？」

納得してくれたセシル少将にホッとする私。

「別でお願いします」

満面の笑顔で頷く。

「護衛ならばエイブル殿と一緒によろしいですか？」

「勘弁してください」

思わず土下座したくなりました。

ルークぐらいならともかく、エイブルぐらいの年齢の男の人と2人部屋は無理です。

イヴァンやアスランの場合は、血が繋がらないけど兄弟だったから一緒に部屋に寝ていたけどさ。

「冗談です」

どこまでが冗談ですか!?

なんてある意味微笑ましい会話をしていたら、

「ルーク、待ってくれよ！」

と、ようやく入国審査を終えたガイが走ってきた。

ルークの前に立ち剣に手をかけながら、セシル少将が

「誰だ、貴様」

威圧感バリバリでガイをルークの近くにこれないように押し留める。

「だ、誰って。ルーク、説明してくれよ！」

どのみち相手が女性なので、一定の範囲以内には近寄って来れないガイ。

「ガイ・セシル。俺の、一応護衛剣士になる、筈」

「護衛なんて全然せずに、逆にルークに戦わせようとした無能な護衛です。ルーク様の世話を全くやろうとしないので、私が代わりにしていました」

言葉少なげにガイの素性を説明するルーク。

なので、私が補足しておきました。

「バカか、貴様。そもそも、使用人がなにをルーク様を呼び捨てにしているんだ？

身の程を知れ！」

忌々しげに吐き捨てるセシル少将の言葉にガイは慌てて、

「ルーク、俺達親友だろ！」

セシル將軍を止めてくれよ」

「ガイさん、駄目ですよ。ルーク様ですってば。物覚えが悪いですわね。例え自称親友であっても、ちゃんとは外では様付けしませんでしたよーねー？」

常識ですよー。守らなかつたら普通にずんばらりんです」

まだ、ルークを呼び捨てにするガイ。

あ、そろそろセシル少将がキレそうだなあ。

「ルーク様、本当にこんな男がファブレ家の召使いなのですか？」

疑い深いセシル少将に、ルークは頷く。

「……僭越だとは思いますが、公爵家の品位に関わりますのでクビにした方がよろしいのでは？」

「そうか」

確かにそうだよな。召使いのレベルで、その家がレベルが計られるって事もある訳だし。

低レベルの使用人しか雇えない家は、そういうレベルだと見なされてしまう。

ルークが考え込むような顔をする。

ふむ、助け舟を出すか。

「ルーク様。一度公爵夫人に手紙を出してみては？」

家の中を預かるのはその家の女主人の仕事です。ならば、使用人も公爵夫人の役目になると思います」

「けど、母上はお体が弱いんだ……」

「きつと、実際に動くのはさらに下の執事とかになるのではないかと思いますけど？」

公爵夫人は、たかだか一人の使用人のために動く事はないだろう。

けど、耳に入れたら下の人間に命令ぐらいはする。

「それに、きつと公爵夫人は心配なさっていると思います。いきなり、屋敷から連れ出されたのですから」

「そっか。うん、俺母上に手紙を書く」

「それは大層よろしいことですね。それでは、便箋と封筒を用意い

たしましよう」

セシル將軍がそう言ってくれたので、どうやら手紙は書けそうだな。なかつたら私が提供していた所だ。

「ルーク様、ついでだから旅であったことも逐一書いて差し上げてください？」

公爵夫人はそう簡単にマルクトに行けませんから、喜ばれると思いますよ」

「喜んでくれるかな？」

「ええ、きつと」

私の言葉に、ガイは顔を青くする。

どうやら、自分の態度が不味いと言つのに気付いたようだ。

けど、もう遅いよ。上司に叱責されればいい、この無能護衛。

フレイと奈落の物語22

64

ガイはどこまでもKYだった。

「相手にしなかったから、拗ねてるんだなルーク」

どこまでも明後日な思考をしてた。

私とセシル將軍は、引きつった顔でそれを見る。

「フレイ殿、この男は……」

「いつでもこうです。仕事しないので、私が代わりにルーク様の世話をさせていただいております」

「……フレイ殿がいてくれてよかった」

しみじみとそう言われたよ。

ガイは無視する方向に決め、私たちはセシル將軍の案内でカイツールのキムラス力側にある宿屋へとやってきた。

ルークの部屋は当然ながら、一番良い部屋だ。

貴族が訪れる事もある場所らしく、私からしてみたら宿にしてみたら十分豪華だと思ったのだが、

まず部屋が広い。ベッドもバカみたいに大きいし、カーテンに至っては普通宿屋にこんなカーテンつけないだろうというぐらい重厚なカーテンだ。

お、ベッドシートは多分シルクだな。

床は高そうな絨毯が敷かれ、綺麗な透かし彫りで飾られた椅子とテーブルがある。

当然浴室は備え付けだ。猫足の浴槽とシャワー、薰り高い石鹸とシ

ヤンブーが置かれている。

「ルーク様が泊まるには格が落ちますが、この町で一番良い部屋です。専用のメイドもついております。フレイ様とエイブル様の部屋はこの部屋の両隣となります」

見てみると、ベッドと小さなテーブルがあるだけの部屋。お、ちゃんと備え付けのクローゼットがある。

部屋もきちんと掃除しているし、なにより綿らしき肌触りのシーツはちゃんと洗濯済みだ。

風呂は共同がなければ、最悪ルークの部屋のヤツを借りよう。

一応、私の部屋もエイブルの部屋もベッドが二つあるので、おそらくルークの部屋の従者の為の部屋なんだろうなあ。

ガイの部屋はと思い聞いてみたら、下を指差した。

「一般の宿の方に部屋を取りました。この階は貴族のお方が泊まる部屋ですから、彼には宿泊資格はありません。フレイ殿とエイブル殿は、ルーク様の従者としてこの階に滞在できます」

まあ、従者と言われても似たような事してるからしょうがないか。ルークがちよっと面白くなさそうだけだ。

「ルーク様、メイドがお茶を入れるので少しお休み下さい。夕飯はアルマダイン伯爵が是非とも一緒に食べたいと申し出ております」

「……分かった」

ルーク、今すっげー嫌そうな顔した。

まあ、分からないでもないけど。

そっか。ルークはお偉いさんと食事かあ。
セシル將軍は、その場の護衛に出るだろうし…。
私とエイブルはどうするかなあ…。

下の食堂で適当に食べるか。

65

ルークの身支度を整え、ルークを送り出した。

本人は最後まで嫌がっていたけど、これも王族としての務めの一つだ。頑張ってもらおう。

私も旅の汚れを共同浴場でザツと洗い流し、新しい錬金服を着る。

今まで着ていた錬金服は、メイドさんが洗濯してくれると言つので、チップと共に頼んでおいた。

エイブルも着替えをきちんと所持していたのか、ちゃんと真新しい服に着替えている。

さっぱりとした格好で食堂に来ると、さすがに軍事施設でもあるカイトールを訪れる人が少ないのか、ガラガラだった。

私はメニューが読めないなので、エイブルに読んで貰い何を食べるか決めた。

エイブルはカレーを、私はAセットを頼んだ。どうやら、今日のAセットは魚のから揚げらしい。

ライスとパンが選べるので、ライスを頼む。ご飯が普通にある世界って助かるわあ。

今までの慰労を兼ねて、グラスを頼みワインを取り出す。

酔う訳にはいかないの、アルコールの低い<祝福のワイン>だ。それでも、弱い人は酔うんだけどね。けど、ザールブルグでは学生でも平気に飲んでいたワインだ。アルコールはかなり低いんだけどね。

「美味しいですね。どこのワインですか？」

エイブルに勧めたら、最初は勤務中だからと断られたが、私といる限り勤務中だからその間ずっと飲まないつもり？と聞いたら折れた。一人で飲んでも美味しくないって、私の駄々ごねも効いたかもしれないが。

「私の手作り。葡萄からわざわざ作ったの」

「器用ですよねえ……」

感心したようにワインに舌鼓をうちつつ、カレーを食べる。

ワインにカレーってあうのか？

けど、本人は負いしそくに食べているしなー。

「ねえ、カレー好きなの？」

「ええ。一番の好物です。三食カレーでもいいぐらいですよ」

イエローがいる、と思わず私が思ったのも無理はなかるう。

そんな風に食事を続けていると、自称和平の使者さまご一行がやってきた。

ガヤガヤと喋りながらやってくるので、煩い事この上ない。

この宿に自分達しかいないとも思っているのか？

相手側も私たちが食事を取っているのに気付いたのか、こちらの確

認だけすると少し離れた場所に座る。
そして、めいめい好きなものを頼んでいる。

さすがにティアは部屋に軟禁されているらしく、アニスが後で食べ物持って行ってあげないとね、と言う。

「あれ、導師がいない…」

見慣れた緑色が無い。

もしかして、体調でも崩したのかな？

馬車で私が多少挺入れしていたとしても、ティアの一件で精神的負担が大きかっただろうし。

イオンって無駄に繊細なところがあるからなあ…。

会話を盗み聞いていると、どうもイオンは食欲がないので食事はいらないと言っていて、部屋で大人しくしているらしい。

って、アニス。あんた導師ほったらかしで食事しに来てるのか。

導師守護役が導師の側を軽々しく離れるなーっ！

なんとなく分かってはいたけれど、本当に軍人失格者しかいないな。私は溜息一つつくと、少し残っている食事に後ろ髪を引かれながら席を立つ。

「行くのですか？」

フレイさんの仕事じゃないと思いますけど？」

「こればかりは性格だから、諦めています。また貧乏籤引いてきますよ」

受付にイオンの部屋の場所を聞いて、行ってみよう。

本当に体調が悪いならば、医者を呼んだほうが良いし。

エイブルは食事を続けて、と言ったのだが、どうやら付いてきてくれるらしい。

「私は護衛も兼ねていますから」

そうでしたね。

うん、これが正しい護衛の姿だよねえ…。

何であいつらは揃いも揃って、護衛対象の側に居ないんだ？

対象の近くに居ないとロクに護衛が出来ないじゃないか。バカじゃないのか？

66

私が受付に教えてもらって来た部屋は、この宿で一番安い部屋でした。

アニス、部屋代ケチツたな。

導師を最低価格の部屋に宿泊させるなんて何を考えていやがる。

簡素と言う聞こえのいい言葉で言えばともかくも、実質タダ安っぽいドアをノックする。

「……………」

しばらくして、中から導師イオンの許可が下りたので、私達は部屋に入る。

部屋もこれまた安っぽい部屋でした。必要最低限の設備に、薄い布団。

本気で何を考えているんだ、導師守護役。

あと、明らかにイオンはきつそうだった。

「導師さま、イオン様、大丈夫ですか？」

「ええ。さすがに長旅で疲れました。どうかしましたか、フレイさん？」

「イオン様。導師が御一人でいてはなりませんよ。常に導師守護役を身の回りに待機させてください」

私の言葉に導師イオンは、唇を噛んで俯く。

「けれど、アニスもおなかが減っているでしょうし」

「導師。食事ならばルームサービスを取ればいいのです。そもそも、食事如きの為に自らの仕事をないがしろにするとは言語道断。導師守護役の数足りないのならば、ダートから呼び寄せたらどうでしょうか？」

実際、それが妥当な線なのだと思う。

導師守護約が一人しかないから、アニスにも負担がかかるし、好き勝手させてしまっている。

「それは……、駄目です。導師守護役はモースの息がかかっている人間ばかりです」

その中での一番のモースの狗が、アニスなんですけどね。

「困りましたね。ならば、最低限この部屋の状況をどうにかしましょう。エイブルさん、受付に行って部屋を変えてくれるように言ってください。料金はこれだけあれば大丈夫でしょう」

私は、エイブルに1万ばかり金を渡す。

「多すぎますよ」

苦笑いされたので、少々減らす。

「くれぐれも受付の人にこちらの都合だと言う事を、アニスに伝えてくれるように言って置いてください。特に『タダ』と言うのを強調してくれと頼んでおいて」

「分かりました。部屋は私達と同じ階にしますか？」

けど、それやったらアニスがルークに纏わりつきそうなんだよね。そーしたら、今度はルークのストレスになる。

「ジェイドが確か2階に部屋を取っていた筈です。そこへお願いします」

イオンの言葉に私は呆れてしまった。

あいつ、ちゃっかり2階に部屋を取っていたのか。

多分、ジェイドはケチじゃないから、お金はきちんと出したんだと思うのよ。

ただ、アニスに頼んだせいで自分で使う分は一番安い部屋を取って、その差額を自分の懐に入れたのだろう。

それって、横領って言うんだけど、気付いてるのかなアニス…。

帰ってきたエイブルの手には、真新しい部屋の鍵が握られてあった。エイブルに導師イオンを抱きかかえてもらい、新しい部屋へと移動する。

新しい部屋のベッドは、適度なスプリングが利いたベッドで上にかける布団も厚くて温かいものだった。

「お腹は減っていますか？」

減ってなくても、最低限口に入れさせるがな。

多分、疲労が溜まって疲れたから体調が悪いんだ。おでこを触らせてもらったけど、微熱も出ている模様。

つて事は、疲労が取れるような料理がいいね。

私は頭の中のレシピに検索をかけた。
疲労回復してからHPの回復か。

食欲がない状態だから、流し込むようなものが良いわね。

つて事は、＜情熱のコンソメ＞をチョイス。明日の朝、＜妖精がゆ＞でHPを回復させる、つて感じで持つていくか。

私は、エイブルに後を頼むと食堂に交渉をして台所を借りた。

実際、そんなに難しい調合じゃないので、この場でやってしまう。

調味料は塩をチョイス。お、海が近いこともあって塩もいい塩じゃないか。

食材野菜は国境沿いなこともあって、普通レベルのものを入手。なんでも、キムラスカは食べ物の鮮度がヤバイらしいので、ここで最後の補給をしておこう。

確かにマルクトの町と比べて、食料品の値段が高い。

うつつ、生命線を握られている国つていやーね。頑張つて農業を振興させて欲しいものである。

野菜はニンジンと玉ねぎをメインに、色々入れてみた。水は普通の

井戸水だ。

野菜を入れて煮込み、最後に調味料で味付けをするのだが、普通ならば数時間以上コツコツと煮込まないといけないのだが、魔力を使つてそのあたりはショートカット。

錬金術で作つたら、なぜか残っている筈の具が全て溶け込むんだよなあ…。濾す手間が省けてすっげー楽なんだよね。

鼻歌交じりに作り終わると、コックが興味深そうにこちらを見ていたので味見をして貰った。

なんかすごい感動していたので、材料と作り方を教えておいた。ただし、錬金術を使わずに作れるコンソメですが。さすがに、錬金術は教えられないしねー。

出来上がったコンソメを小鍋に移して台所から撤退。

ついでに皿とスプーンも借りていく。

残ったスープは飲んで下さいと、コックに渡す。嬉しそうなコックに和んだ私だった。

フレイと奈落の物語23

67

私がスープ片手に導師の部屋に戻ってみると、アニスはまだ帰っていないかった。

どこで油を売っているのやら…。

もしかして、スパイ活動の報告かしらん。

「お待たせしました、導師様。食欲がないとは思いますが、軽く胃に入れてくださいね」

「ありがとうございます」

イオンはスープを受け取ると、スプーンを使って一口一口ゆっくりと食べた。

スピードは遅いかもしれないけど、確実に量は減っていく。

全て食べ終えたとき、イオンはスプーンを置いた。

「ごちそうさまでした。とても、美味しかったです」

「お口にあったようで何よりです。そろそろ、導師守護役の方も戻るとは思いますが…」

「イオン様、ただいま」。部屋が変わっているので、アニスちゃんビックリしちゃいました」

緊張感の欠片もなしに部屋に入ってくるアニス。

そして、私とエイベルの姿を確認すると眉を潜める。

「なんで、ここにいるの？」

「私にしてみたら、あなたが導師のお側に居ない方が不思議なので

すが？

ねえ、導師守護役様」

彼女の手には、サンドイッチらしきものが握られている。多分、導師イオンの為に持ってきたのだろう。

気遣いが出る辺り、どこかの女よりはるかにマシだ。

「なんで、あなたにそんなこと言われないといけないの！？」

アニスの言葉に私は深い溜息をついた。

「あのさ、自分の職務を考えたら、どうすればいいかは分かっているんでしょ？」

「それは…」

どうやら、導師の側を離れたのはいけない事だと自覚はしているようだった。

よーするに、自分の非を突きつけられて逆ギレしていたのだ。

「食欲がないようでしたので、軽くスープを飲んでいただきました。おそらく、もうしばらくしたら食欲が出てくると思うので、食事をさせてあげて下さい」

アニスがコクンと頷く。

「それと、基本的に導師守護役は導師の側にいるのが仕事だから、食事などはルームサービスにしてみたらどうでしょう？」

「お金、かかるもん」

まあ、アニスにしてみたら余計なお金は出来るだけ使いたくないの
だろう。

導師に関する費用は余計な金じゃないんだけどね！。

けど、今回の場合はいい解決方法がある。

「何言ってるんですか。今回の仲介はマルクトの依頼ですよ。費用
の一切合財はマルクト持ちの筈です。遠慮なく大佐のツケにしてお
あげなさい」

「あ」

アニスは、私の言葉に目をキュピーンと光らせた。

ふふふ、大佐。ご愁傷様。

きつとアニスは導師の為、自分の為、と頑張つて居心地の良い生活
をしようとしてくれるだろう。

当然それにはそれなりの代価が伴う事になるだろうけど。

そして、それは一時的に立替をしている眼鏡大佐の懐を直撃するだ
ろう。

ふふふ、ざまー。

「くれぐれも、導師に不自由させないでくださいね？」

「勿論！」

グツとお互いに親指を立てて、私達はそれはもう清々しく別れたの
だった。

私の後ろではエイベルが、アニスの後ろではイオンが苦笑いをして
いたけれど。

導師の世話が終わり、帰って来てしばらくするとセシル將軍と一緒にルークが帰ってきた。
なんか、ルーク妙にげっそりしているんだけど…。

「ルーク様、どうかなさったんですか？」

「……………察してください」

行く前はこれでもかって言うぐらいセットしていった髪が少し乱れていた。

セシル將軍が帰った後、お茶を入れてもらいルークに

「なにかあったの？」

と聞くと、ルークはビクンと体を震わせて、

「キムラスカ貴族マジこええ…」

一言そう言った。

一体、食事会でなにがあったんだ？

67・5

セシル將軍は、ルークを送ると軍の本部に戻ってきた。

ルークと食事をしたアルマダイン伯爵は、すでに部屋へと戻っていた。

セシル將軍は、報告だけ早めに済ませようと伯爵の部屋を訪れ、

「ルーク様を宿にお送りしました」
「ご苦労」

それだけ報告すると、部屋を出ようとした。

アルマダイン伯爵は、レストランで上機嫌で少なくない量の酒を飲んでいたが、自室でもワイングラスに赤ワインを入れてクルクルと中の液体を回している。

「セシル少将、ルーク様の赤毛は素晴らしいな」

アルマダイン伯爵の言葉に、セシル將軍は足を止めた。

「最近、血が薄れたのか王家の血を引くものでも極一部の人間しか、あの血の如き赤色と、豊穣を約束した緑は出なかった」

「ルーク様の母上は王妹、父上は王家との血の繋がりが深い公爵家ですから」

「ああ、素晴らしいなあ。あの髪、あの瞳。懇願して髪に触れさせてもらったが、手触りも良い。まさに至福」

むしろ彼の髪を敷き詰めた床の上を転げまわりたいだの、踏まれて罵って欲しいだのブツブツ念仏のように呟いていた。
目がイツちゃってる。

セシル少将は、深い、深いため息をついた。

実は、このアルマダイン伯爵の変態っぷりは、何も珍しい事ではない。

貴族のほとんどが似たような、赤毛・緑目フェチだからだ。

極稀に平民でも先祖に落とし胤がいたせい、赤毛に近い色を持つ

者や、薄い緑の目を持つものが出てくる。

それを知ると、貴族達は先を急いでその者を養女にし、自らの血族に嫁がせるのだ。

そして、産まれた子供が運良く貴色を持っていたならば、自分達より上の貴族に嫁がせる。

そうやって、キムラスカの貴色は保たれてきたのだ。

それほどに、キムラスカ貴族の貴色に対する思い入れは深い。

「勿体無い事よ。あれほどの貴色を持つルーク様の婚約者が、赤毛を持たない王女とは」

「他の者に聞かれたら、不敬罪を問われますよ」

「ふん」

赤ワインを一息に飲むと、グラスをテーブルに置く。

「セシル少将」

「なんでしょっ」

「ワシも赤毛の嫁さん欲しい」

思わずアルマダイン伯爵を殴りたくなったセシル將軍であった。

68

寝る前になんとかルークに手紙を書かせた。

途中でアルマダイン怖いと書こうとしたので、慌てて止めたよ。
一体何を書こうとするかな、この子は。

内容は母親の体の心配、和平の使者と導師イオンのこと。セント・

ビナーのマルクト軍に親切にされた事などにして貰った。

「フレイの事も書いていい？」

と聞かれたので、変な風に書かないでね、とだけお願いした。どうせ、字が読めないのだから見ても分からないし。

完成した手紙に封をして、明日セルシル將軍に渡して鳥等を使ってバチカルに送ってもらうことになる。

私が一度でもシュザン又夫人と出会っていたら、私の道具で飛ばせるんだけど、さすがに会った事も無い人の所に手紙を運ぶのは無理だわ。

夜はエイベルと交代で警備をしようかと思っただけど、キムラスカ兵士が私たちが護衛しますので大丈夫です、と言われたので任せる事にした。

ルークにおやすみの挨拶を交わし、自分の部屋に入りアトリエを起動してもぐりこむ。

「おかえりなさいにゃー」

調合を任せていた猫人形が、私にお茶を手渡してくれる。

トーン茶を飲んで、ようやく一息ついた。

さすがに皆のいる前にアトリエを起動させる訳にはいかないからねー。

「おつかれさまですにゃー。新しい調合したもののリストですにゃ。確認した下さいにゃ」

「りょーかい。足りないものを優先的に調合してちょうだいね……って、フラムとクラフトの量が半分減ってるわね。あと、エリキシル

剤も1個使ったから調べておいて」

「了解ですにゃ」

やっと掛け値なしの安全地帯にいることを自覚したら、睡魔が襲ってくる。

あー、向こうの部屋で寝ようと思ったけど、もういいやアトリエで寝よう。

私は思い体を引き摺り起こし、ベッドの置いてある部屋へと向かう。着替える間もなくベッドに倒れこむと、念の為にアトリエの入り口を宿の部屋のベッドの下へと移動する。

さすがに、居ないからと言ってここまで調べる奴は早々いないだろう。

それだけを済ませると、私は目を閉じ意識を飛ばした。

目を覚まし、時計で時間を確認した。

「あー、5時半か。大体11時前に寝たから…7時間は寝れたね」

一度だけ背伸びをして、アトリエ内で作り置いていたパンを袋に詰める。

パンもあるし、ライスもあるのだが、いかんせんバリエーションが少ないのよねえ…。

ジャムと蜂蜜も入れ、さらには導師イオン用の〈妖精かゆ〉を用意する。

「いってらっしゃいませにゃ」

「はい、いつてきます」

アイテムを服の色々な場所に詰め、さあ出発だ。

アトリエのドアを部屋の壁に移動させ、アトリエから出る。
よしよし、誰もいない。

私は、アトリエのドアを消してしまう。

さて、ルークは起きてるかしら？

69

ルークは案の定眠っていた。

メイドからその事を聞いた私は、散歩をしようと思い宿を出た。

近くを散策しつつ、やはり国境の町であるからか兵士の姿が多いのが目に付く。

どうやら、兵士の数の多さが幸いしてか犯罪率も低いみたいだ。

時間的な感覚からして30分ぐらい歩いて、戻ろうとしたらふと見慣れた髪の色を発見した。

「なにしているんですか、イオン様」

導師イオンだった。

どうやら、また抜け出したようだ。

「あ、フレイさん。昨日はどうもありがとうございました」

「いえいえ。守護役はどうしたんですか？

姿が見えないようだけど…」

「寝ているので、起こさなかったのです」

私は頭を抱えなくなった。

寝ずの番をしないアニスにも問題はあるけど、導師イオンにも問題はある。

そもそも、護衛が必要な身分である事を理解している筈なのに、護衛を連れずに歩くその思考が理解できない。

イオンが気を利かせたのかもしれないが、そもそも護衛される側に気を使わせる護衛も護衛だし、気を使う導師もアウトだろ。

「導師イオン。失礼ですが、護衛は常に連れ歩いてください」

「けど、アニスは寝ていましたし……」

「護衛を連れて歩かないなら、外出は控えるべきだと。この状態でイオン様に何かあった場合、責任を問われるのは導師守護役であるアニスになります」

「えっ……」

「護衛とはそーいうものです。以後、それを心に止めておいてあげ下さい。あなたが良かれと思ってやったことでも、下手したら他の人が罪に問われる可能性があるのです」

きちんと注意を促せば、イオンは分かってくれと信じている。

私の言葉にイオンの表情が沈んだ。

多分、そこまで考えていなかったのだろう。

アニスを置いてきたのだって、アニスを起こすのが可哀想だと思った導師イオンの気遣いだったのだろうか。

「わかりました。ありがとう、フレイさん。わざわざ注意してくれて」

「いいえ。宿までお送りします。少し早いですが、朝食はいかがで

す？」

「あまり、食欲が…」

そう言つて、胃の辺りを押さえる導師イオン。

そー言えば、アニスがサンドイッチをお持ち帰りしていたのだが、具はなんだつたんだろう？

もしかして、ヘビーに肉とかだったのかな？

「軽く粥はいかがですか？」

「粥、ですか」

「はい。少量ですが三食はきちんと食べたほうがいいですよ。良ければ、ご用意いたしますが？」

「……お願いします」

「はい、承りました」

私は導師イオンと共に宿に帰り、〈妖精かゆ〉を少量出した。

粥と言つても米粥ではなく、麦を使つたいわゆる麦粥だ。

導師イオンはそれを一口一口、口に入れていく。

「美味しいです」

「お口にあつたようで良かった。これ、良かったら乗せてみてください
さい」

そう言つてトッピングに色々を用意しておいたものを出す。

私も朝食はあっさりした粥にすると決め、導師イオンの前に座り一緒に食べ始める。

「フレイさんの料理は本当に美味しくて、私は好きですよ」

「ありがとうございます。何の変哲も無い家庭料理ですが、喜んで

もらえて嬉しいです。これを食べたなら、アニスが起きる前に部屋に戻りましょうね？」

「はい」

イオンが夢げに微笑む。

だが、それってある意味完全に見ただけだよなあ…。

導師本人は護衛ふりきって外出する、ある意味困ったちゃんだし。

「見つけたですよー！」

チヨコチヨコとミュウが上から降りてきた。

「ふれ、ミュウ？」

「はいですよ。フレイさん、ご主人様が探してますの！」

あー、ルーク起きたんだ。

私はミュウを抱き上げると、

「申し訳ございません、イオン様。ルーク様が呼んでいるので、私はこの辺で失礼します」

近くに居たキムラスカ兵に導師イオンを部屋まで送る事を頼む私。引き受けて貰ってホツとしつつ、導師に別れの言葉を告げてミュウと共にルークの部屋へと戻る。

部屋に戻ると、

「起こしてくれば良かったのに」

とブーたれるルークの姿が。

カメラが欲しいなあ、と思うぐらい可愛らしかったです。
本人に言ったならば、きつと怒るのだろっけど。

フレイと奈落の物語24

70

少し拗ねた感じのルークにきゅんきゅんしながら、ルークの朝食の用意をして身支度を整え、私たちは宿を後にした。

宿の入り口には、セシル將軍とアルマダイン伯爵が馬車と共に待っていた。

「お待ちしておりました、ルーク様。さあ、軍港までお連れします。どうぞ、お乗り下さい」

恭しく傳かれるルークの姿は、まさに王子って感じでした。

いや、実質王族だから王子であってるんだよねー。

私とエイベルは当然徒歩だ。

馬車にはルークの他にアルマダイン伯爵が同乗する。

それを知った瞬間、セシル將軍の気の毒そうな顔とルークの絶望に染まった顔が印象的だった。

こうして、世の中の不条理を知って、子供は大人になるんだなーと思わず達観してしまった。

「まあ、ルーク様が嫌がることは基本的にされない方ですので…」

私はこの時、初めてセシル將軍からキムラスカの貴色狂いを聞いた。ヤバイ、この国私にとって超ヤバイ。

ルークを送り届けたら、さっさと出国した方がいい。

下手したら貴族に目をつけられて、あれよあれよと言う間にお嫁さんにされる可能性が出てきた。

「もう十分嫌がってますけど…」

「昨日、触らせて貰ったそうなので、肉体的には大丈夫です。ただ、跪いて踏まれたいなどと言っていましたから、それだけが心配です」

それが、キムラスカの貴色に対するスタンダードだと言っただから驚いた。

「フレイさんも気をつけてくださいね。目だけでも貴色持ちですから、いきなり浚われたりする事がありますから」

なんでも、娼館でも貴色に近い色持ちは人気者なのだそうだ。

この、赤髪緑目フェチ国家めーっ。

ナタリアがルークとの約束に固執したのって、こーいう裏背景があったのかもしれないね。

どう考えても、ナタリアが貴族からの支持は低そうだし。

多分、影でずーっとコソコソ言われ続けたんだろうなあ…。

ルークの受難はさて置いて、私たちに便乗するように出発した導師一行はと言うと、当然眼鏡が馬車なんか用意する訳も無く、仕方なしにアルマダイン伯爵は導師のみ馬車への同乗を許しました。

導師のみと言うのは、導師に対する敬意の表れでしょう。

同じく和平の使者である眼鏡は、少し不満そうではありましたが。

馬車を用意しないなんて気が利かない、ぐらい思っただけですね。

つーか、馬車が欲しいなら、前日でもいいからキムラスカ側に打診して手配して貰えよ、って思っただけね。

まあ、私は徒歩でも問題ないし。

どうせ、数時間ぐらいの旅路だし。

朝出れば、昼前までには軍港に着く計算だ。それから、前日から用意されていた船に乗って、バチカルに行くらしい。

旅の半分も終わってたって感じた。

馬車にはキムラスカ兵によって厳重な警備がなされ、導師守護役もその中に混じっている。

最初は導師の護衛のためと称して、馬車の中に入ろうとしていたのだが、無礼者と言われて外に叩き出されました。

導師が乱暴をしないで下さいと止めなければ、そのままボコボコにされていた可能性もあったんじゃないのかなあ……。

それを見て外野が煩かったので、エイベルと2人冷たい目を向けておく。

特にエイベルは、同じマルクト人として肩身が狭そうだった。

「そろそろ、カイツール軍港に到着しますよ……、全軍止まれ！」

セシル將軍か、馬車を止めさせた。

「煙が出ています。どうやら、何かあったようです。偵察を飛ばしますので、安全の為にしばらくお待ちいただけますか？」

セシル將軍の言葉にアルマダイン伯爵が頷き、ルークに奏上する。ルークもまた頷き、セシル將軍が一礼してキムラスカ兵士に指示を出し軍港へと向かわせる。

その間も、キムラスカ兵士に馬車を囲ませて円陣を組み、緊急時に

即座に対応できるようにする。

剣はいつでも使えるように抜き放ち、馬車の近くに立つ。

私たちも馬車に近い場所に、寄せられる。

しばらくして、偵察に出たキムラスカ兵士が戻ってきた。

「妖獣のアリエッタが、軍港を襲撃」

と言う、ニュースを持って。

どうやら、簡単には大陸から出してもらえないようだ。

71

軍港は非酷い有様だった。

建物や船は壊れ、それどころかどこからか出火したのか燃えた後すらあった。

「アリエッタは整備士を浚うと、『整備士の命が惜しければ、導師様とルーク様にコーラル城に來い』と言いました」

「馬鹿な事を」

その報告を受け取ったアルマダイン伯爵は、偵察兵の言葉に鼻で笑った。

「ルーク様、しばしお側を離れます。セシル將軍、ルーク様をお守

りせよ」

「はっ」

アルマダイン伯爵は、兵士に指示を出しながら去っていった。

「ルーク様、船が駄目になりましたので一度カイツールへ戻りましょう。導師様たちはどうなさいますか？」

セシル將軍の言葉に、導師イオンは考え込む。

「此処にいても仕方ないので、戻ろうかと思えます。ジエイドもそれでいいですね？」

「ええ。此処にいても仕方ないですからね」

「お待ち下さい！」

建物の影から、ツナギ風の服を着たいかにも技術者ですよと言っていたたちの男が2人走ってきて、イオンに縋りつこうとするのを、アニスがすんでの所で止めた。

それでも、2人組は声を張り上げ、

「お願いです、導師様。整備長をお救い下さい！」

「隊長は預言を忠実に守っている、敬虔なローレイ教の信者です。今年の生誕預言でも、大厄は取り除かれると詠まれたそうので安心しておられました」

すがりつく整備兵にイオンは頷く。

「分かりました」

「よろしいのですか？」

「預言に読まれているならば、導師として守らなければなりません。アリエツタは私に来るように言っているのです」

「導師様！」

キラキラと希望に満ちた目で導師とその一行を見つめる整備兵。非常に感動的な場面なのだが、私とセシル將軍の目は冷めていた。

「私も導師イオン様の意見に賛同いたします。預言を守るのはローレイ教団として正しい事だと思います」

連れ歩かれている犯罪者ティア・グランツも、導師の意見に賛同のようだ。

そもそも、ティア・グランツの意見なんて誰も求めていないと思うのだが。

「まあ、預言を守られるべきものですからね」

「コーラル城に行くなら、俺も調べたいことがあるから行くわ」

どうやら、導師一行はコーラル城に行くようだ。

軍港の出口へと向かって歩き出す。

「ルーク、何をしているの？」

「は？」

ティア・グランツが、ルークに向けて声をかける。

「早く来なさい。アリエッタはイオン様の他にあなたも呼んでいるのよ」

「お願いします！　どうか、隊長を……」

私とセシル將軍は怒りを通り越して呆れてしまった。

それは、整備兵にも言えることだ。

正直、和平の使者一行なんてどーとでもなれって感じなのだが、導師がいるのだから一応止めなければなるまい。そもそも、導師が向かうのがキムラスカ兵の懇願によるものと言うのがいけない。下手に導師が怪我しようものならば、頼んだキムラスカのせいになっってしまうだろう。

「その整備兵2人。お前たちは自分が何を言っているのか分かってるのか？」

「え？」

「ルーク様のこの貴色を見て、お前たちは彼が誰だか判らないか？」

整備兵はルークを見つめ、そしてようやくルークの身分に思い当たったのか、

「ひっ」

と悲鳴をあげ、そのまま青い顔をしてプルプルしている。どうやら、自分たちがルークに何を言ったか考えて恐怖しているようだった。

「なにをごちゃごちゃ言ってるの!？」

「貴様こそ何を言っているんだ。王族であるルーク様が、どうして平民を助けに行かなければならない。それも、わざわざ敵が待ち構えて危険があると判明しているのに」

「だって、それは預言が!」

まさしく一触即発。

「預言ねー。だったら、まずは譜石の提出してから、申請してみた

らー？

そもそも、預言にルーク様とイオン様がコーラル城に行くなんて詠まれてた訳？」

「ユリアの預言以外は読み解くのは難しいですから、はっきりとは書かれていないと思います」

「ならば、イオン様とルーク様が行かなくてもいいと思いますよ。イオン様とルーク様の命令で兵士を派遣して、それで助かったって言う預言かもしれませんし」

私の言葉にセシル將軍が頷く。

そうなんだよね。ゲームを見ているときから不思議に思っていたのだが、なんで敵が待ち構えている場所にわざわざ行く必要があるんだ？

大人しく兵士に救出に行かせればいいのに。

何を言ってるの！？と喚くティア・グランツと悲しげにこちらを見ている導師イオン。

ガイは何をグダグダ言ってるんだ？って感じだし、アニスも早くしててくださいと言わんばかりの態度。

ついでに、この馬鹿どもを止める最年長者眼鏡。和平の使者が和平以外の事をするんじゃないよ。

まさしく、ルークを囲むキムラスカ兵と和平の使者一行が一触即発。

それを破ったのは、グランツ揺将だった。

「導師、コーラル城行きはおやめ下さい。アリエツタは私が捕らえ、整備隊長は私が救出しましょう」

「ですが、ヴァン！」

「導師は世界で唯一人のお方。危険な場所だと分かっているのに、

わざわざ向かう必要もございません。どうぞ、カイツールで朗報が届くのをお待ち下さい」

「師匠が行ってくれるなら、何も問題はねーな。師匠は強いから、アリエツタぐらい簡単に倒せるだろう？」

ルークの言葉に、ヴァンは頷く。

「ならば、私たちはカイツールに戻るとしよう。どうせ、船と港が直るまで待たなければならぬからな。整備兵2人は、追って処罰を申し渡す」

セシル將軍の言葉に俯く2人。

導師イオンが「どうして!？」なんて言っているが、私としてはセシル將軍の判断は当然の事だろう。

彼らは、ただ一人の兵士の為に王族であるルークと、導師であるイオンを危険な場所に行かせようとしたのだから。

兵士一人の為に王族と教団最高位の人間に命を賭けるって、そりやないでしょうよ。

「それが規律と言うものです。行きましょう、ルーク様」

セシル將軍に促されて、ルークは馬車に乗り込む。

イオンはなおもぐずぐず言っていたが、これ以上は知らない。

だって、私たちは和平の使者一行とは別の一行ですから。

わざわざ同じ行動を取る必要はないのだ。

導師の軽拳に注意を促し、一応止めた。

それでも、無理を押し向かうのは導師の都合と言うやつだ。

そこまでキムラスカは責任を取れない。多分、セシル將軍の行動は

こんな所なんだろうなあ。

私にしてみれば、グランツ揺将と言う信託の盾騎士団高位の人間が動くのだから、それで十分だと思っただけどねえ…。

72

導師一行はグランツ揺将が出発した後、コーラル城へと向けて出発した。

どうせ、眼鏡の事だからグランツ揺将をおとりにと考えているのだろう。

一緒に行けばいいのにね。

そして、なぜか現在捕縛中のティア・グランツも行く気満々だったが、キムラスカ兵士が鼻で笑い牢屋に叩き込んだ。

一応導師のなるべく穏便にとの要望で、譜歌と両手を封じたぐらいで行動は自由にさせていた。

けれど、導師がいなくなったのでその厚遇も元の犯罪者としての対応に変えられた。

一応女性なので、牢は男性とは別々だが。

なんでも、先程まで煩く喚いたいたらしいが、さすがに水もなく延々と喚き続ける事に疲れたのか、今は静かなものらしい。

ガイ・セシルは最早何も言うまい。

当然の顔をして、導師一行に着いていった。

お前の役目はなんだと言いたいが、ルークにベタベタ纏わりつかれても鬱陶しいだけなので、良かったのかもしれない。

私はセシル將軍からルークへと報告を聞きながら、ルークの要望で

一緒にお茶をしていた。

ちなみに、今日ルークが飲んでるのは<シヨコラ・オ・レ>で、私とエイベルは<ビッターゲイト>だ。

ルークはどうも苦味をまだ美味しいと感じられないらしく、甘いシヨコラがお気に入りになったようだ。

慣れたらこれも美味しいんだけどねえ…。

ルークを恐怖のどん底に陥れたアルマダイン伯爵は、ルーク様の為にと寝食を惜しんでカイツール軍港を復興中です。

セシル將軍曰く、

「カイツール軍港を復興させたら、ルーク様にご褒美に踏んでもらうんだ」

なんて、フラグを立てつつ頑張っているらしい。

それを聞いて、すぐ複雑かつ嫌そうな表情なルーク。

それに同情を寄せるエイベル。

罵って踏むだけで頑張ってくれるんだから、思う存分踏んでやれば？なんて思うのは他人事だからか。

セシル將軍にこっそりと言うと、笑われてしまった。

さて、私たちは比較的のんびりとカイツール軍港の復帰を待ちつつ、のんびりと過ごしていた。

あまりにする事がなかったので、アトリエから道具を引っ張り出して傷薬の調合をしたり、色々と作ってしまったよ。

横でルークが興味深そうに見ていたので、一緒に中和剤を作ったりしてみました。

自分の手で中和剤（青）を作って凄く興奮していた。

お返しと言う訳ではないが、ルークが私に簡単にこちらの文字を教えてください。

さすがに数日で覚えると言うのは無理なので、アルファベット対応表を作らせて貰った。

これで、一応読むだけは出来るようになる。

そして、3日後。

妙にボロボロになり疲れ果てた導師一行と、アリエッタを捕縛したグランツ揺将がカイツールに帰還した。

ご苦労様でした。

フレイと奈落の物語 25

73

港は一応使えるように修復はしたけれど、船の修復は簡単にはいかないみたいで、結局ケセドニアから船員の訓練の為の船、訓練船に乗ることになった。

時間があればルーク様に相応しい船を仕立てるのですが、とアルマ
ダイン伯爵が切々と語ってくれました。

ルークも慣れたもので、聞き流すという技能を取得した模様。

真面目に聞きながらもちゃんと大半は聞き流して、重要な部分のみきちんと聞き取っていました。

ただでさえ、カイツールの襲撃などで予定より遅れているので、船
が来次第出発となった。

私は、ここが最後とばかりに食材を多目に買いこんでおきます。

なんでも、これより以降質の良い食材は手に入らないとの事。

手に入っても、エンゲープ周辺の町のように安値では手に入らない
らしい。

「キムラスカは、食料生産には向いてないからなー」

それって向いてないって言うより、最初から諦めているんじゃない
のかなー。

貧しい土地は貧しい土地なりに、向いている野菜とかあるんだけど
なー。

サツマイモなんかは比較的痩せた土地に向いているし、海岸部の

塩害がキツイ土地も向いてる野菜はあると思う。
トマトなんて確かそうだった筈…。

まあ、キムラスカに根を下ろすわけでもない旅行者の私にしてみれば、関係ないことなのだ。

とにかく、食料は何かあってもいいように多目に買い込んでおいた。

「沢山買ったんだな」

用もないのになぜかわざわざ付いて来て、荷物持ちを買って出たガイ・セシル。

「何があるか分かりませんからね。多目に買っておくに越したことはないです。それにしても、よくまあ職務をアレだけ蔑ろに出来ますね」

「え？」

「ルーク様の護衛ほったらかして、コーラル城に行ったりするなんて、本当に護衛ですか？」

「だって、ルークはセシル將軍の護衛があつたけど、イオンにはなかったし…」

「一度、護衛と言う言葉を辞書で引く事を勧めますよ。あ、ついでにあなたの行動は全部公爵家へ報告済みですよ」

「はっ!？」

バタバタバタとガイが手に持っていた荷物を落とす。

「それって、どういう」

「どうって、言葉通りの意味ですが。ルーク様が公爵夫人へのお手紙の中で、書いてもらったんですよ」

「どうして!？」

「報告された困る事があつたんですか？」

うふふふと笑つてやる。

ガイが落とした荷物を拾い、ルークとの約束の場所へ急ぐ私。

間に合わなかったら置いていきますよ。

むしろ、置いていくぐらいの勢いで!

74

訓練船に乗り込む時、アルマダイン伯爵はルークの手を跪き恭しく大事そうに手に取り、頬ずりせんばかりの勢いで別れの挨拶を告げた。

相反するルークの表情と裏腹だったのが、記憶に残った一幕だった。私としては置いていく気満々だったが、ジェイドが和平の使者としてバチカルまでの足を頼んだので、しょうがなしに同乗を認める形となった。

乗る間に、アルマダイン伯爵が、

「和平の使者とは聞いていましたが、いつ追加の人員が来られるのかと思つていたのですがね。総員数人の和平の使者なんてなんの冗談かと思ひましたよ。しかも、導師様がおられるのに随分と貧相な一行ですね」

と、ジェイドに向かって嫌味を言つていた。

「妨害がありました、このようになってしまったのですよ。本来な

らば100人近い人員がいたのですがね」

「それはそれは。預言にないことだから仕方ありませんね」

なんてお互いに何の花もない（本人同士花があるとは言い難い中年親父ども）2人だったので、ルークも私も聞き流しておいた。

ルークがイオンの顔色が悪いのをしきりに気にしていた。

「なあ、フレイ。イオンの顔色が変わんだが」

「体弱いのに軍人と同じスピードで歩いたせいでしょうねえ……。歩くスピード調整とかしてあげれば良かったんですけどねえ……。まあ、本人が自己責任の末での行動ですからねー。船旅でゆっくりすれば、ある程度回復すると思いますよ？」

きちんと導師守護役と言う護衛兼世話役がいるのだから必要以上に係わり合いになるつもりはない。

一応、少しばかりの忠告はしたがイオンは聞くつもりはないみたいだし。

「……………フレイが嫌がるのは分かるけど、少しだけ気にかけてくれねーか？」

俺も、気にかけるようにするから」

「どうして、そこまで導師イオンに優しくするのですか？」

正直、そこまですて貰えるだけの事されましたっけ？」

私の言葉にルークはぶっきらぼうに、

「フレイが言ったんだろ。困った人は助けるのが当たり前だって」

と返された。

あー、確かに言ったわー。

「けど、ルーク。限度と言うものがありますからね？」

人間、全てを救おうなんて思い上がりっちゃ駄目ですよ。ルークの掌には、その分だけのモノしか乗せられませんからね？」

「けど、俺だけだと無理でも、俺とフレイならなんとかなんじやねーの？」

うわーい、ルーク頭いいって言うか、吸収力が半端ないね。

これは、私の負けかなー。うん、負けでいいや。子供の純真さに負けた。

「分かりました。なるべく、気にかけるようにはしますよ。けど、ルークの次です。私は、ルークを優先しますよ？」

「別に少しぐらいイオン優先しても」

「イオン様には、一応導師守護役がいますから。ルークには、ほら誰も居ないし」

「いや、ガイは？」

「あれを世話役と認めるのを拒否します。ええ、拒否しますとも！」

なんて話しているうちに、船は出港した。

念の為にルークに酔い止めの薬を渡しておこうと思い、バッグを探っていたらミュウがルークの肩でふらふらしていた。

「気持ち悪いですのー」

「ちょ、まだ出航して30分経ってないよ!？」

そんなに揺れてないのに、元々青いミュウの顔色はさらに真っ青。口元を押さえ、うぶっなんて言っている。

「ルーク、嘔吐物被りたくないなら降ろせ」
「おうっ！」

慌てて掴んで床に落とすルーク。
もうちよつと丁寧に降ろしてやれよ。
案の定ティアが文句言ってきたけど、

「煩いですよ、犯罪者」

とだけ言い、ミュウに酔い止めの薬を飲ませる。

一応人用に作ったけど、果たしてチーグルでも大丈夫だったのだろうか？

まあ、ちょうどいい人体実験になったか。

74・5

私は酔っ払ったミュウを見下ろして、頭を抱えていた。

今回私がミュウに与えたのは、<酔い止めの薬>。

最初はホッフエン水を探していたのだが、それより前にそれが出てきたので効果は同じだと思いついて与えてみたのだが…。

「死霊使いがなんぼのもんですのー！ ご主人様たちはミュウが守るのですー！！」

紙に描かれた眼鏡&ティア・ガイの絵を、クッションに括りつけて体当たりしていた。

「フレイ…」

「うん、酒乱だわ」

チーグル族に＜酔い止めの薬＞を投与すると、そのアルコール成分の為酒に酔った時と同じ状態を起こすらしい。30分後、ミュウアタック（仮）を続けた結果、クッションは見るも無残な形になってご臨終となった。

これって、弁償私がするのかな？

「あ、こら火を吹くのはやめろって!」

ルークがミュウを抑えにいったのを見て、私は秘密バッグをかき回して＜ホッフエン水＞を探すのだった。

75

船旅はまったくもって快適なものになる予定でした。

纏わりつく髭もとい髭揺将がいなければ。

「ルーク、どれだけ腕が上がったか見てやろう」

私の横で研磨剤を作っていたルークに、木剣を手に迫ってくる髭。

「師匠、今フレイと調合してるんだからまた今度にしてくれ。フレイ、こんなもんか？」

「とてもお上手ですよ、ルーク様」

「勉強中だからルークでいいって言ってるだろ」

ルークが不満そうにほつぺたを膨らます。
やば、つつきたい。

「はいはい。ごめんね、ルーク」

ルークから受け取った研磨剤の確認をしながら、私は次に何を教えようか考える。

ルークが私の側から離れようとしないので、揺将は

「それならば、また後で来ましょう。ルーク、たまには体を動かさないとせつかく今まで教えたのが無駄になるぞ？」

「わーったよ。一段落したら、甲板に行くよ。それでいいだろ、師匠？」

途中で面倒になったルークの返事に満足そうに頷く髭。
ルークが行くんなら、後でついていくかあ。

「んー、ルークが行くなら私も見学しに行こうかなあ…。ルークの剣を振るう姿って興味あるし」

「おうっ。頑張るからな！」

ブンブンと手を回すルーク。

ルーク、どうでもいいけどせつかく調査した研磨剤が散ってる散ってる。

時間はまだあるようなので、ルークに新しい調査を教えてやろうと思っただ。

今のところ教えたのは研磨剤と中和剤三種類のみだ。

「第五音素を多く含んだ石があれば、火薬が作れるんだけど…さす

がに逃げ場のないところで初めての人間に調合させるわけにはいかないしなー……」

「フレイ殿、ルーク殿に職人のような真似は……」

側で見ていたセシル將軍が、おそろおそろ口を挟む。

「別にいいだろー。結構面白いぜ」

「そうですねー。あ、フレイさん。中和剤（緑）できましたよ」
「導師様まで……」

ガクリとセシル將軍が膝をつく。

現在、私に割り当てられた部屋で楽しい調合教室の真っ最中。

ちなみに、参加者はルークとイオン。

最初はアニス護衛として部屋にいたのだが、邪魔なので部屋の外に放り出した。

しばらくの間口汚く罵っていたけど、さすがに調合をせずにルークに纏わりついていたので調合の邪魔になったのだ。

眼鏡大佐も新しい技術ってことで、見る気満々だったけどシャットアウトして貰いました。

「軍事利用されたら嫌なので、軍人の方はご遠慮願います」

最後はエイベルに引き摺って退室させました。

ティアは得体のしれない技術と言って近寄りもしないし、ガイも

「まるで御伽噺の魔女だなー。ルークも物好きだなー」

と笑っていただけなので放置。

魔女になるなよと余計な一言を言って去っていった。

それって、私が魔女だって事か？

いや、確かにやっていることは魔女っぽいなあ…。

「次、何にしようか？ 護衛の為にクラフトでもいっとく？」

クラフトぐらいだとそんなに火力もないから、牽制にしかならないけど役には立つだろ。

「あの、よろしかったら私の体調を回復することが出来る薬を教えてくださいなのですが…」

イオンが恐る恐る言ってきた。

ちなみに、この調合の時間だけは私は先生役なので敬語で話さないのを許可を貰った。

「イオンの体調悪化って、大きな術を使って疲れたりしたりした時になるのよね？」

「そうです」

「んー…、譜力不足はミスティカ茶で補うとして…、疲労回復にいい調合教えようか？」

私はにんまりと笑って、蜂の巣を取り出した。

さーて、フレイ特製蜂蜜の作り方を伝授しましょうかね。

フレイと奈落の物語26

76

さて、どうして私がイオンにまで錬金術を教える羽目になったかと言つと、その放置されてるイオンを発見したからなんだ。

最初はさ、コーラル城の事で説教をするつもりだけのつもりだったんだ。

イオンが良かれと判断して行つた事でも、罰せられる人がいるんだつて教えておこうと思つて。

事実、整備兵2人と整備隊長は罰せられた。

整備兵二人はルークと導師に馬鹿な頼み事をした事で、整備隊長はその馬鹿な2人組みが起こした事件の原因として。

正直整備隊長はとんだとばかりだと思つよ。帰ったら罰せられるんだから。

アニスもガイも、イオンが怪我がなかったから罰せられなかったが、これで怪我一つしていようものなら文字通り首が飛んだんじゃないのかな？

私としては和平の仲介を頼まれたなら、それ以外はしちや駄目だと思つよ。

二兎追うものは一兎も得ずと言つじゃないか。それをイオンに言いルークの側を離れたんだ。

すると、イオンが一人で甲板に佇んでいるのを発見した。

周囲には誰もいない。

どこ行つた導師守護役。

それからイオンを保護して、言ったんだよ。上記の事を懇々と諭した。

話が進むに連れてイオンは深く落ち込んでいった。

「僕は、ダアトのトップとして預言を守らないといけないんです。

預言と言われたら、僕は動かざるを得ないんです。フレイさんの言う事も理解できるのですが…」

「いや、導師って教団のトップでしょ？」

ふんぞり返って髭以下の部下に命令すればいいんじゃないんですか？」

「お飾りの、導師ですから」

私はその言葉に深い溜息をついた。

イオンに足りないものは『自覚』と『自信』だね。

「…イオン様。例え実質がどうであれ、教団のトップは貴方なので。髭や樽がどんなに威張っていようと、貴方の下なのです。そして、一般人からしてみたら、ダアトのトップはやはり貴方なんですよ」

「ですが…」

「それに、いつまでもその状況に甘んじているのですか？」

現在の状況に不満があるなら、それに抗らえればいいじゃないですか。力がないと嘆くのなら、私が力を貸しましょう」

現在、ルークに簡単とは言え錬金術を教えている。

イオンもダアト式譜術が連発できるのなら、十分髭や樽に対抗できるだろう。

力が自信に繋がるのならばなおのこと、イオンは力を持つべきだ。

そうして、教団を、下を押さえてもらいたいものだ。

現在、教団員が色々暗躍しているのは、イオンの力が及んでいないことが原因なんだから。

私の言葉にイオンは頷いた。

「僕に、力を貸していただけますか？」

「はい。ようこそ、錬金術の世界に」

ガシリとお互いに手を握り合った。

77

なんて事があり、イオンに錬金術を教える事になった。

「そろそろいいと思いますか、ルーク」

「んー、もうちょっとじゃねーか？」

2人が錬金している姿って和むわあ…。

のほほんとしつつ2人の調合風景を眺める私。

「フレイー、出来たぞ！」

「出来ました」

2人がほっぺたに蜂蜜をつけながら、容器に入れた蜂蜜を持ってきた。

指ですくい一舐め。

「次はもう少し長めに回してみなさい。あと、譜力がちよつと多いかなあ……。これ、譜力はあまり要らないからね。ほんのちよつぴりでいいのよ?」

「わかつた、次からそーするな。でも、フレイ。今回はフレイが持っていたけど、蜂の巣つてどこで手に入るんだ?」

「蜂がいる森とかに行けば手に入るけど……。ルークやイオンの場合は外に出る訳にはいかないから、業者に頼んで入荷してもらおうことになると思う」

身分的に簡単に外出できないからね、2人とも。

「錬金術もいいけど、二人とも自分の責務はちゃんと果たすのよ? 錬金術は趣味でやりなさい。ルークは王族としての、イオンは導師としての責務を」

「わかつてるつて」

「分かりました」

「よろしい。さて、後片付けをしてヴァン謡将の元に向かいしまよつか。大分待たせていますし」

2時間は確実に経過した。

「あと、その蜂蜜はイオン様。貴方に」

「え?」

「顔色が悪いです。調合の後は蜂蜜でも舐めながらゆっくりと休憩して下さい。倒れたら次の調合が出来ませんよ?」

敬称付きに戻ったのは、調合が終了したからだ。調合中は師弟だが、それ以外は身分に準ずる。

私はそう2人と約束させている。

イオンに蜂蜜を差し出す。

イオンの体の弱さは、錬金術士としてもネックになるだろうなあ。錬金術士つてある意味体力勝負だから。

高レベルになると徹夜で調合とかザラになってくるし。

「はい」

「次はミステイカ茶を教えましょうね」

「あれ、すーっとして美味いんだよな」

「……譜力回復しますよね、あれ」

「さすが導師様。よく気付かれました。あれは譜力が回復します。

ミステイカ茶に蜂蜜を入れて飲んだら疲労も回復できるので、イオン様向きですよ?」

「……ありがとうございます」

二人の手は止まることなく動き、使った器材を洗浄していく。

かなり初期の段階で、2人には器材や使った道具の洗浄を叩き込んだ。

「なー、フレイ。この器材はバチカルでも手に入るのか?」

「欲しいですか、ルーク様?」

「欲しい! そうしたら、家でも調合出来んだよな?」

「出来ますね。必要なら、プレゼント……それとも、作ってみますか?」

今使っている遠心分離器は私の手作りですよ」

私の言葉に驚くルークとイオン。

「こーいうのも作れるんですよ。後はこのガラス器具も私が作りま

した」

「錬金術つてすげーなあ……」

「器材もそうですけど、僕はあのフレイさんの猫の人形が気になります」

「あー、あれかあ……。まだ2人には無理かなあ……。あれ、結構難しいレベルの調合なのよ」

「そうですか……」

イオンがしょんぼりとするけど、こればかりはねえ……。そうこうしている内に洗浄は終わり、片付けも済んだ。

「それでは、行きましょうか。ルーク様」

部屋を出ると、兵士から呼び止められたので、セシル將軍にルークを頼み先に行つて貰う事にした。

さすがに2時間以上待ちぼうけは哀れすぎる……。

扉の外にアニスやガイはいなかったので、エイベルに導師を託し、私は兵士と一緒に厨房へと向かった。

エイベルは、

「私は貴方の護衛なんですけどね」

とボヤかれたけど、導師を一人にする訳にはいかない。

イオンに相談したら、寄港するケセドニアでダアトに連絡を取るとの事。

おそらく、別の導師守護役が派遣されると思うけれどねー。

通常導師の外出時は、10人以上の導師守護役がいるのが普通らしいし。

あと、なんで私が厨房に呼ばれたかと言うと、なんでも、食の細かい

イオンのために知恵を借りたらしい。

私、料理人じゃないんだけど…。

78

厨房でイオンに対するメニューについて料理人と協議した。

魚などはカイツールで仕入れた奴を使っているのか、なかなか新鮮なものが用意されていたのでそれを生かしてのメニューになった。けれど、さすがに生はキツイので火を通したものになるけど。

この世界は譜業で冷蔵庫があるので、かなり助かるなあ。

ついでだったので、私の所持しているシャリオミルクをイオン用に提供した。

新鮮なミルクにびっくりさせてしまい、誤魔化すのに苦労したわ。

一応毒見をして貰い、導師に出すかどうかは料理長に判断してもらった事になった。

一応滋養強壮にいいらしいですけど、とは言っておく。

イオンの好む食事ってさ、野菜ばかりなんだよね。しかも、食べる量が少ない。

体を動かさないせいとか、それとも元々なのか、イオンの食事は少ない。

おそらく同年代の半分以下しか食べていない。

そんなんじゃ、体力もつかないよなあ…。

「とりあえずはこんなところで。それでは、ルーク様が待っています」

すから、行かせていただきますね」

「はい。わざわざご足労戴きありがとうございます。また、なにか意見を聞きたい場合はお願いしますね」

快く請合い、私は厨房を後にした。

途中で、眼鏡と遭遇。横にはアニスがいました。

ルークが落とせないから、大佐に鞍替えしたのか、この娘。

「あれ、珍しいですねー。ルーク様の横にいないなんて」

「そうですね。なにかありましたか？」

「別に何の用事も無いですよ。ただ、料理長に食事についての助言を求められたんですよ。イオン様の食が細いのを心配なさっているようです」

「そうですねですよー。イオン様、食が細いんですよー」

細いんですよー、って、心配は一応しているのか？

「体が弱い方ですからね。フレイさんは、食が普通の女性の倍近く食べるのですから、分けて差し上げては？」

確かに私は通常の女性の倍近く食べるけどさー。

「そうですね。分けて差し上げたいですよ。あ、大佐はそろそろ食事量を減らさないと、腹の周りが…ねえ？」

クスリと笑ってやる。

レベルが下がって以降、後衛に下がるor戦わないカーティス大佐の摂取カロリーは、通常の男性より高いだろう。

中々の健啖家なのだ、この男は。

ただし、好みが煩い事この上ないけど。人の料理にケチつけるなら、自分で作れと言いたい。

料理自体は下手ではないんだよなあ…、この男。

つか、何事も器用にこなすのだ。器用でないのは、人間関係だけだ。

セシル將軍にも船上で、

「そう言えば、ケセドニア北部では随分と貴方に痛い思いをさせられました」

「ご冗談を。私の軍はほぼ全滅でしたよ」

なーんて、自分との過去の戦い（しかもセシル將軍敗北）の件を出して、ブリザードを吹かしてくれましたよ。

ルークと2人、吹雪くブリザードに思わず震え上がったのは記憶に新しい。

会話のTPOを一度学んで来いと言いたい。むしろ、士官学校のプログラムに入れてくれ。

「ルーク様がお待ちですので、失礼しますね。導師守護役アニスさん、イオン様は自室に戻っていますよ」

「あ、はい」

アニスが組んでいた大佐の腕を離し、パタパタと駆けて行く。どうやら、自分の責務をこなしてくれるようだ。

「では」

軽く会釈し、歩いて行こうとするとカーティス大佐は、

「フレイ・ローゼン。貴方は何者です？

何の目的があつて、今まで見た事も無い得体のしれない道具を使い、ルークと導師に取り入るのです？」

何者ねえ…。

「私はただの錬金術士ですよ。マルクト軍大佐殿」

唇だけあげて嗤い、その場を立ち去る。

うーん、まるで悪役だな。いや、いいんだけどさ。

フレイと奈落の物語27

79

途中でセシル將軍と合流した。

なんでも、ルークや導師の護衛に不都合が出たらしい。

その不都合って言うのが、アニスとガイだったのだから笑えない。

ガイがルークの護衛は自分がいるから、必要ないって言い出したのだ。

どうやら、手紙を出された事で危機感を覚えたらしい。

その割には、護衛してないけどさー。

って事は、現在ルークと髭が2人つきりで訓練中ってこと？

私は早足から一気に走り出した。

セシル將軍がいるから安全かと思っていたのだが、それだと勝手が違う。

船の甲板で、苦悶の表情で蹲るルークとそれに覆いかぶさるようなヴァンの姿が見えたのはその時だった。

「いやー！ーっ!!」

更に加速して、両手を突き出しヴァンに突貫する私。

「え?」

さすがに突撃されるとは思わなかったヴァンが、私全力の体当たりを食らいバランスを崩し、その場に尻餅をついた。

私はヴァンを一瞥もすることなく、顔色が真っ青なルークを抱きし

める。

「大丈夫、ルーク!？」

未遂、未遂だよね!？」

「未遂…?」

「良かった、未遂ね」

服の乱れがあまり無い事にホッとし、私はキッとヴァンを見る。

「この変態シヨタロリ野郎」

ペツと唾を吐く仕草をする。

「突然なにを…」

私の表情はヴァンを蔑みきっていたのは言うまでも無い。

「ルークを手籠めにしようとするなんて…。しかも、野外」

「ちよつ、待て! 何か変な勘違いを!？」

さすがのヴァンも私が何かとんでもない勘違いをしていると思いがたり、慌てだす。

「ヴァン謡将、まさか貴方…」

セシル將軍もあの光景を見て、顔を真っ青にしている。

「セシル將軍!？」

ヴァンは可哀想なぐらい狼狽しきっていた。

今まで散々陰口を叩かれてきたことはあった。けれど、それは全て自分の実力で黙らせてきた男だ。

その男が面白いぐらいに狼狽しているのだ。

「アツシユなんて人物を突如特務の頭に据えたのって、もしかや…」

アツシユは、確かヴァンがずっと自分の手元で飼い慣らした人材の筈だ。

10歳の頃から、ずっとヴァンと一緒になのだよ。うふふふ、利用させて貰うわ。

これ以上、ルークに近づいて欲しくないし。

私はそれを言うだけで良かった。

後は聞いた人の想像力で補完してくれる筈だ。

「鮮血のアツシユは、確か見事な赤髪を持ち主。よもや、貴様も赤髪フェチか!？」

汚らしいものを見るような目で、ヴァンを見るセシル少将。

「だから、ダアトの重職つく貴方がファブレ公爵邸に足しげく通ったのだな」

もう、セシル少将の目は汚物を見るような目だった。

「しかも、鮮血のアツシユは小さな時から手元に置いて、さらに六神将にしているし…。もしかして、自分の稚児を六神将に？ シンクも確か若かつたし」

「待ってくれ!」

「ルーク様に近づくな、この変態がつ！ ルーク様参りましょう。同じ空気をこれ以上吸ったら、穢れます。フレイ殿、早くルーク様を部屋へ」

「うん。行こう、ルーク」

「はあ！？」

セシル少将の妄想を膨らませるのを助長しながら、私はルークをしつかりと抱きしめて甲板から去っていく。止めたいヴァンは、セシル少将がしつかりと抑えてくれた。

ルークは話の転がり方に呆然としていた。

この日から、ヴァン・グランツがホモでシヨタ野郎と言う噂が広がり始める事となる。
ざまあ。

80

ルークを部屋に連れ帰ると、急いでベッドに寝かす。

「セシル少将はお医者さんを呼んで下さい」
「分かった」

辛そうなルークを見てるだけの自分が齒痒い。

鎮痛作用のある薬かあ…強い睡眠薬を麻酔として使うとかぐらいしか思いつかないなあ。

どうしても辛かったら、＜安眠香＞などで強制的に寝かしつけるといふ手段もあるけど…。

「頭いてえし、変な声聞こえるし…ったく、なんなんだよ…」

「お医者さん呼んだから、きちんと見てもらおうね？」
「だいいい」

よしよしと頭を撫でてやると、心なしか楽そうなルーク。

「フレイに触つてると、痛みが大分いい。さつき抱きしめられる前まですごく痛かったのにな」

「そっか」

確かこの頃あたりのルークの頭痛は、ローレイが原因だった筈。下手にコンタクト取るうとするな、バカローレイ。ルークが苦しむでしょう！

地底の底にいるローレイに、恨み辛みの籠もった電波を飛ばしておく。

まあ、無理だけどさ。

「フレイ殿、連れてきたぞ」

「ルーク様、大人しく診察受けて下さいね」

私は医者に後をお願いすると、部屋を出た。

部屋の外では、セシル少将と2人診察が終わるのを待つことになった。

「それにしても、ヴァン謡将までかのような性癖を持つとは。世も末だな」

「まあ、性癖ばかりはねえ……」

「あれ、2人ともどうしたんですか？」

アニスが、飲み終わったららしいカップをのせたお盆片手にやってき

た。

「いや、ルーク様の体調が悪くてね」

「えー、アニスの王子様が体調不良!？」

誰の王子様だ、誰の。

「ヴァン謡将がどうか言ってたけど、怪我ですか？」

「違う違う。えーと、ヴァン謡将の性癖がちよっと…」

「は？」

アニスに事細かに甲板で見た事を説明した。

「うわっ、なにそれ。サイテー」

「でしょ。しかも、ほら六神将って年端もいかなか少年が2人も入ってるでしょ？」

しかも、鮮血はヴァンの秘蔵っ子とまで言われていたみたいだし…」

「あー、確かに。そう言えば、シンクもヴァン謡将自ら連れてきたってー。あ、そー言えばリグレットってヴァンの愛人って噂あるんだけど」

「あー……、ほらホモを隠すための隠れ蓑とか？」

「可哀想だね、リグレット」

「気の毒すぎる。所詮女は利用されるだけなのか」

セシル少将の言葉に、場が重くなった。

「でも、それじゃあアリエッタは」

「実はロリ属性…あ、分かった。アリエッタの髪の毛ってさ桃色でしょ。赤に近くない？」

しかも、ほらアリエツタはお世辞にもスタイルが…ねえ？」

分かるでしょ、とアニスに向かって無言で問いかける。

アニスは納得したように頷くと、

「ロリも併発してるのかよ。ますます最低…って、事はイオン様ももしかしたら!？」

「ばつちり範囲内かもよ？」

「ぎゃー…!?!」

アニスの顔が真っ青になる。

あ、サブイボも立ってる。

「アニス、あんまりイオン様を謡將に近づけないようにしないと。

下手したらパクリといかれるわよ」

「うわーん、仕事が増えた!。にしても、勿体無いなあ。ヴァン謡將、地位もあるし実力もあるのに」

「キムラスカも似たようなものだ。そろいもそろって貴色馬鹿ばかりだ」

溜息をつくセシル少将は色っぽかったです。

「マルクトは普通だよな? ほら、大佐はノーマルっぽいし」

「Sっ気が強そうだけどね!。あー、でも」

「でも?」

「いやさ、これもまた噂なんだけど、カーティス大佐が若いのにあそこまで出世したのって、皇帝のお気に入って事もあるんだってさ。幼馴染なんだって」

「え」

途端にアニスが嫌そうな顔をする。

「た、確かに大佐は若いのに大佐だけど…懐刀って言われてるけど…、まさか、まさか」

「さーねー…。ただ、マルクト皇帝って35歳ぐらいなのに独身なんだってさ」

「決定的じゃない！

がー、どこもかしこもホモばっか！」

アニスが頭をかきむしる。

いやあ、会話の途中で兵士が何人が通っていったけど、明日以降怖いなあ。

噂に変な尾ひれがついたりして。

81

アニスとセシル將軍とガールズトークに勤しんでいたら、ドアが開き医者が出てきた。

「どうでしたか？」

「おそらくは、疲れが出たのでしょう。突然マルクトに飛ばされ、色々あったようですから。なるべく、ゆっくりさせて下さい」

どうやら、過労からによる頭痛だと診断されたようだ。

ローレライが接触しようとして頭痛が起こっているなんて普通の医者には分からないしねー。

医者が頭を下げ、去っていく。

「あ、私も急いで戻らないと。話し込んでしまった」

「呼び止めてごめんね、アニス」

「ううん。こっちも楽しかったし。それにしても、どこか金持ちで金払いのいいイイトコないかしら？」

「やっぱり、初志貫徹でルークに……」

「ルーク様には婚約者がいますよ。確か王女様でしたっけ」

「売約済みかよ」

ケツとやさぐれるアニスに、公爵子息ともあるう高位な貴族に婚約者がいるのは当たり前でしょ、と返した。

「やっぱり、正妻ではなく愛人狙いか……。それとも、ポツクリいきそうな金持ちのジーさんでも……」

「アニス、老婆心ながら金持ちのジーさんはやめた方がいいと思う。どうせ、親類を名乗る奴らがやってきて揉めるのは目に見えているんだから」

と言うと、ガツクリと肩を落とした。
いや、でも10歳で愛人狙いって……。

「んじゃ、やっぱり愛人か……」

ブツブツ言いながら去っていった。

アニスの現在の状況を考えたら金に汚いのは無理ないのかもしれない。
い。

「やっぱり、アニスは両親から離れた方が絶対いいと思うんだけどなあ。
家族愛ばかりはどうしようもないし。」

ヴァンは最近妙にキムラスカ兵士から生温かい目で見られている事に気付いた。

そして、自分のいないところで交わされるヒソヒソ話。

自分が近づいた瞬間止まるのだから、それはきつと自分の事であるうと言つのは容易に想像がついた。

「ヴァン、ちょっといいか？」

折りしも、ガイがヴァンに話しかけてきた。

ガイがファブレ公爵家に潜伏していると知った時、ヴァンは驚いた。それから、主筋のよしみでお互いに協力をしてきた。

ガイからは主にファブレ家の情報が渡り、ヴァンは色々と便宜を図ってきた。

それは、自分が滅ぼしてしまったホドの領主筋に対する贖罪も兼ねていたのかもしれない。

「なんでしよう？」

目立たないように廊下の端で、コソコソと話す2人。

その2人を遠巻きに見るキムラスカ兵士は、やはりとしたり顔で頷く。

そして、ケセドニア到着の日。

ヴァンは他ならぬ妹の口から、自分がなんと言われていたかを知るのだ。

「兄さん、ロリでホモでシヨタの最低ペド野郎ってどーいうこと!？」

私、恥ずかしい!！」

港で大声で妹から叫ばれたそのあまりの言葉に、ヴァンは放心した。

81・5・2

ティアは、船内の一室に閉じ込められていた。

罪状はフアブレ邸襲撃、公爵子息誘拐、不敬罪であった。

逮捕は不当だと声高々に異議を唱えたが、聞き入れてもらえなかった。

むしろ、導師の温情に感謝しろとまで言われた。

本来ならば貴様みたいな犯罪者は、船内の牢で十分なんだとまで言われた。

たかだか一兵士からである。

あまりに酷い態度に、ティアは憤り何度も文句を言った。

曰く、「私が狙ったのはヴァンだから、公爵家への襲撃はしていない」「あれはたまたまルークと私の音素が共鳴して疑似超振動が起きただけよ」「私はルークに教えてあげただけ。戦う力がある者が戦うのは当然でしょう」等々。

最初は一々反論していた兵士も、最後らへんは口をへの字に曲げて何も言わなくなった。

ただ、視線だけが冷たかった。

そんな彼女の世話をキムラスカ兵はするのを嫌がり、結局仲間であると言つ事を言われアニスとガイに回ってきた。

アニスやガイはティアを慰めたりしてくれたので、ティアはようやく

く人並みの感性の持ち主が来たとホツとしたのだった。

2人の親愛の情が籠もった視線は、ティアのささくれ立った気持ち
を癒してくれた。

けれど、いつからかアニスの視線に憐憫の情が混ざっているのにテ
ィアは気付いた。

「なにかあったの？」

と、ティアがアニスに聞いても、口を閉ざし首を振るだけ。

ガイは全く同じ態度だったので、ガイに聞いても分からなかった。

しばらくしてから、一日に一度は訪れるキムラスカ兵の態度が少し
柔らかくなった。

やっと、自分の無実が証明されたかと思っただらどうやら違うらしい。

アニスと全くの同じ態度。

さすがにキムラスカ兵にしつこく聞いて、ティアは自分がどういう
状況に置かれているかを知ったのだ。

「まさか、兄さんがホモでシヨタでペドでロリだったなんて……」

兵士はすごく気の毒そうにティアに説明してくれた。

自慢の兄が、ルークを船内でルークを手籠めにしようとしていたと。

初めて聞いたとき、ティアは名誉毀損よ！と怒ったが、食事を届け
に来てくれたアニスがさらに詳しい事を説明してくれた。

六神将すらも兄の毒牙にかかっていたのだ。

た、確かに六神将の鮮血のアッシュは兄の秘蔵っ子として有名だった。
幼い時分から兄が引き取り、教育して六神将にしたと。
シンクも兄自ら連れてきた、と。

まさか、まさか。

ティアの頭が兄の醜聞で埋まる。

自慢の兄だったのだ。

若くして謠将にまで登り詰めた自慢の兄。

その兄が、こんな歪んだ性癖を持っていたなんて！
少しだけキュンとくるものがあつたが、それを胸のうちにしまいこむ。

329

確かめなくては！

ティアは、そう決意した。

そして、そのチャンスはケセドニア港で訪れたのだ。

「兄さん、ロリでホモでシヨタの最低ペド野郎ってどーいうこと!？」

私、恥ずかしい!！」

ティアの言葉に、ヴァンの口から何かが出ていった。

その時、ガイは最近生温かい目で見られていた事の真実を知った。

「まさか、ヴァンが…」

愕然と呟くガイに光る兵士の目。

たかだか公爵家の護衛剣士が、ダアトの謠将を呼び捨てにする。

それは、持たれていた疑惑に更なる火を点けた。

すなわち、やはりガイ・セシルはヴァン・グランツの恋人の一人である、と。

ガイが女性を避けるのも、噂を助長した。

キムラスカ兵士は顔を見合って頷いた。

噂は真実であったと。

護衛の任務にあるガイ・セシルが船内でほとんどルーク様の側に居なかつたのは、恋人の側に居たいが為だったと。

誤解のスパイラルは深く、深く。

そして、現在地ケセドニアは交易都市。

噂が広まるのは雷の速さの如く。

ガイは気付かない。

ヴァンの噂に自分も絡んでいるなんて。

噂は広まるよどこまでも。

フレイと奈落の物語 28

82

ケセドニアは交易都市と呼ばれ、本来ならば敵対関係にあるキムラスカとマルクトの間に入り、三角交易をしている都市だ。

おかげで、マルクト産の食べ物やキムラスカに入ると関税などで随分と高くなるらしい。

キムラスカからは、譜業の輸出が行われているらしい。

かのタルタロスにも、キムラスカの技術が使われているらしい。

ガイが食堂で、タルタロスもいいがキムラスカの戦艦もスゴイと言っていた。

逆にマルクトは優秀な譜術師が多いらしいのだが。

とにかく、ケセドニアは商人の町だ。

そのこの港で、ティアの大暴露からヴァンとの修羅場に発展したのを、私とルーク、イオンは眺めていた。

「なあ、フレイ……。ホモでシヨタでつてなんだ？」

「……別に知らなくても問題ないことよ。それより、痴話喧嘩を見るのもなんだから、さっさとキムラスカ側の領事館に行きましようか。あ、カーティス大佐はマルクト側の領事館に顔を出さなくて良いんですか？」

私の言葉に、ジェイドは眼鏡を押し上げつつ、

「報告するような事でもありましたか？」

いや、あるだろ。

「それでは、アリエッタは私がダアトの監査官に引き渡ししましょう。本来ならば、ヴァンがすることですが…」

そこには、ティアに襟首を掴まれてブンブンと揺らされているヴァンの姿。

うわ、口からエクトプラズムが出ているや。

「ガイはガイでなんか落ち込んでいるけど」

「なんかシヨック受けているようですから、そっとしておこうか、ルーク」

「別にいてもいなくても一緒だから、いつか。なあ、フレイ。この町ってどんななんだ？」

「そうですね。随分とにぎやかな町ですよ。ここは、交易都市ですから、色々と珍しいものを置いています。領事館に行った後、見学しに行きましょうか？」

「セシル將軍の許可が出たらですけど」

現在セシル將軍は、自分がいない間の指示を兵士たちに行っている。

「あの、フレイさん。領事館に着いた後でいいのですが、お側を離れてもいいですか？」

「現在任務中なので、報告書を出しておきたいのですよ」

「あ、うん。そうだったね」

「一応、任務の途中だったんだよね。」

「ヴァン師匠、俺先に行くから！。イオン、途中まで一緒に行こう」

「はい、ルーク」

アリエツタは、セシル將軍が付けてくれたキムラスカ兵士が運んでくれている。

イオンの後をアニスが追いかけていく。

さあ、私も行きますか。

チラリと修羅場を盗み見て、私はケセドニアへと足を踏み出したのだった。

83

ケセドニアは砂漠の入り口にある町だ。

当然日差しは強く、空気も乾燥している。

「ルーク、これを」

私はルークがエンゲープで髪を隠していたくフォルメル敷布を頭から被らせた。

「フレイ？」

「日差しが強いから」

にっこりと笑って、はぐれないようにルークの手をしっかりと握ってケセドニアの町を歩く。

この町はのんきな田舎村のエンゲープや、マルクト軍が駐留していたセント・ビナーとは違い治安が少々悪い。

ルークのような身なりの少年が、裏路地でも歩こうものならあつと

言う間に身包みをはがされてしまう。
まあ、クラフトやフラムを持たせているので、しっかりと反撃する
だろうが。

「領事館つてどっちだ？」

「えーと、キムラスカの領事館は南地区にあるので、ここからさほ
ど離れていないですよ」

この町の地形を軽くルークに説明する。

キムラスカが町の南側を支配し、マルクト側が町の北を支配する。

「それじゃあ、この町はどこの国のものなんだ？」

「ダアトかな。ダアトが二カ国間の間に入ってこの町を作ったんだ」

ダアトは中立だという事を手にとって、二カ国間の間を上手く泳ぎ
金を稼いでいるのだ。

キムラスカやマルクトからの献金、預言を詠んで貰った事に対する
寄付なんかでかなり稼いでいるのにもかかわらずにだ。

教団は中々の商売上手なのだ。

「ふーん…」

「さあ、ルーク行こう。今は昼だからかなり日差しがきついでしょ
う？」

大体こー言う時間は屋内に入って大人しくしてた方がいい」

「そーなのか？」

「砂漠を歩く場合は、昼間は寝て夜に歩くななんて事もザラだからね

」

「砂漠かあ…」

ルークが城壁の方をジッと見つめる。

「機会があれば行けますよ。案外、そう遠くないかも」

クスリと先を知っている私は笑った。

「ルーク、領事館では冷たいものが用意されていると思いますよ」

「マジか!？」

「ええ。おそらく、アルマダイン伯爵は領事館にルークが来る事を知らせていると思いますから」

領事館に勤めている人間は、ほとんど貴族かそれに準ずる階級だろう。

ならば、アルマダイン伯爵のように貴色馬鹿がいてもおかしくはない。

セシル少将曰く、「アレはキムラスカ貴族のスタンダードだからなんだとの事。」

終わったな、キムラスカ。

そして、私の予想通り、いやそれ以上の歓迎っぷりを領事館はしてくれた。

入り口から緋色の絨毯を敷き、両脇にはケセドニア中から集めたのであるう花々を煌びやかに飾っている。

外でコレなのだから、中はさぞかしすごかろう。

さらには、領事館の人間が一張羅らしき服を着て今か今かとスタンバイしている。

その光景に道行く人々も、何事かと遠巻きに見ている。

「なあ、フレイ……」

深く布を被っているので表情はあまり分からないが、口が引きつっているのは容易に分かった。

「ルーク、残念ながらこれがキムラスカの常識です。貴色を持つものとして頑張って慣れてください」

「……ワカッタ」

がつくりと肩を落としたルークだが、それでもゆっくりとだが領事館へと歩いていく。

そして、ハラリと被っていた布を落とす。

後はもう上や下やの大歓迎っぷりでした。

「ルーク様でございますか？」

ルークが頷くと、恭しく跪き、

「アルマダイン伯爵から連絡を貰い、お待ち申し上げておりました。我らキムラスカ領事館。総出をあげて歓迎申し上げます。さっ、この時間帯は暑いですから中へどうぞ」

「フレイ、行こう」

ルークが私に向かって手を差し伸べる。

「こちらの方は？」

訝しげな領事館員に、ルークは眉を潜める。

「俺、いや、私の恩人だ」

ルークには船内で身分のあるものの立ち振る舞いと言つのをキツリと教えておいた。

公の場での一人称を俺から私に変えるのは、その第一歩だ。

その言葉に、領事館員は頷き、

「作用でございましたか」

「後で導師が来るかもしれない。その時は、通してくれ」

「かしこまりました」

ケセドニアの町ではルークの手を私が引つ張ったが、今度は私の手をルークが引つ張ってくれた。

ううん、なんかこの成長っぷりがお母さん（嘘）は嬉しいよ。

84

領事館に入るとすぐさま応接室へと案内され、ふわふわの長椅子を勧められる。

ルークが当然の如く座り、私はその横に立とうとすると、

「ルーク様の恩人ですから、よろしければこちらにどうぞ」

とこれまたふんわりとした座り心地の良さそうな椅子が持つてこられた。

ルークを見ると、座れば？って顔をしていたのでおそるおそる座ってみた。

うおう、なんて座り心地の良い椅子なんだ。

「船の件ですが、荷物を積み直し明日には出発出来ます。それまで、どうかゆっくりしていつてください」

領事館の恐らくトップであろう人の説明が始まるとすぐに、冷たい飲み物が持つてこられる。

なんでもこの世界は、譜業のおかげで冷たい飲み物は手に入りやすいらしい。

「後で町を見て見たいのだが？」

「治安が悪いのであまり勧められませんが、護衛をお側から離さないと言うのが条件になりますか」

「構わない」

「わかりました。急いで手配します」

サクサクとルークのケセドニア見学まで整えてくれた。

なに、ゲームと違って凄く優秀じゃないか、キムラスカ？

次々に運ばれてる新鮮なフルーツや、美味しそうなお菓子。

ルークはさすがに甘すぎるものは苦手らしく、フルーツをちまちまと食べている。

「夕飯はルーク様がお好きな海老を用意いたしました。シェフが腕を振るいますので、存分にご堪能下さい」

「海老か。やった！」

子供のように喜ぶルークの姿に、大使の頬が緩む。

ああ、これも貴色馬鹿か。いや、分かってはいたけれど。

そんなこんなで、和やかなひと時を過ごしていると何やら廊下がざわざわと騒がしい。

そして、いきなりドアが開かれた。

「酷いじゃないか、ルーク。置いていくなんて」

「ガイ……」

腰に男の領事館職員をぶら下げて、ガイ様颯爽とご登場。

つて、何やつとるんだーっ!??

私はガタリと椅子から立ち上がり、

「ガイ・セシルさん。これは、一体何事ですか？」

「何事つて、ルークが置いていくからさ、慌てて追いかけて領事館に来たけど、ルークは大使と歓談中だって言われたんだよ。けど、

俺はルークの護衛剣士だろう？」

「護衛なんかしてたっけ、あんた」

ルークの側に居るのがさも当然と言うようなガイに、私は鼻で笑ってやった。

「ルーク様の、お連れ様ですか？」

「あー、一応公爵家の使用人だ」

一応とついているあたり、ルークもバチカルに戻ったら解雇する気満々なのかもしれない。

もしくは、コレを使用人と思われたくないとか。

「一応つて、酷いなルーク」

ハハハと白い歯を見せて爽やかそうに笑うガイだが、拳が強く握り

締められているのを私は見た。

ああ、使用人扱いにムカついたのか？

「使用人、ですか」

大使が少し考え込む。

私もどうしたものかと、少々悩む。

個人的には叩き出してスッキリさせたいのだが、現在ガイは公爵家の使用人。

野放しにして何か粗相でも起こしたら、それは公爵家の恥となる。

いや、存在自体が恥さらしっぽい気もするけどね。

このなんちゃって護衛剣士がっ。

「それにしても、フレイはどうして部屋の中なのに頭を覆っているんだ？

いい加減、脱いでしまえよ」

ガイがすうと動き、考え事をしていた私の頭の布を取る。

あまりに自然な動きだったので、私の反応が一瞬遅れた。

サラリと肩に落ちる紅の髪。

目を見開く領事館職員。

してやっつたりのガイの顔。

こいつ、確信犯かっ！

「結婚を前提にお付き合い下さい」

始まりは大使だった。

ガシリと私の両手を掴み、今にも口付けせんばかりににじり寄ってくる。

そして、他の職員も、

「生まれる前から愛してました！」

「年齢27歳、独身です。一生大事にします！！」

と、口々に私に愛の告白をしてくる。

さらに、ルークの為に用意したのであろう花瓶の花を筆って、私に捧げようとする人など、まさしくカオス。

何人かは私に告白しようとした瞬間、女の職員に撃沈させられ引き摺られていったみたいですが。

もしかして、カップルだったんでしょうか？

キムラスカの貴色萌えって、もしかして国民病か…？

大使に両手を取られ、キスマでされながらさすがに鬱陶しいと思い一発眠らせるかと思い、ポーチに何を入れていたかなーと思い出していたら、

ガチャン！

とルークが、カップを叩き割った。

「ルーク、様？」

「姉上から離れる。即、離れる！ 危ないから！！」

ルーク待て、それどっちが危ないんだ？

こっ、求愛されまくっている私か？

それとも、求愛している領事館の人間か？

ルークの言葉に頬を引きつらせている私と、動きが止まる領事館職員。

「失礼いたしました、ルーク様。フレイ様」

私の手を名残惜しそうに離し、少し距離を取る大使。

「あの、いいですか？」

イオンが乱入したのはまさにその時だった。

フレイと奈落の物語29

86

イオンが乱入したおかげで、ルークが私を姉と呼んだ件は有耶無耶となった。

ちなみに、ガイは貴色馬鹿に押されて踏まれてHP激減中で、さらにそこに私の踏みコンボを叩き込みました。

「ぎゃーーーーー!」

女嫌いなせいか、悲痛な悲鳴をあげていましたが、私の気のせいでしよう。

「これ、外に投げ出しておいて。あ、生ゴミの日が確かかな?」

「いや、まだウチの使用人だし」

「ちっ」

しょうがないので、これ以上下手なことが出来ないように簞巻きにして横に女性の領事館職員で困ませてもらいました。ふふふ、こうしたら手も足も出まい。

「それにしても、とんだことになりましたね」

どうやら無事に教団にアリエッタは預けられたようです。

きちんとアッシュが軍港を襲った件も、タルタロスを襲撃した件も、教団の詠師へと報告したそうです。

すぐさまダアトでは会議が開かれるとのこと。

「帰還を要請されましたが、和平交渉を成功した後という事にして

貰いました。一度引き受けたのですから、和平がなるなら置いといて、僕が仲介しなくてはいけませんから」

グツと拳を握るイオンの姿は逞しい。

最近は少々譜術を使っても発作が起きなくなりつつあるらしい。

「コレのおかげですね」

取り出したのは、<神丹>。効果はHPアップ。

病弱ならば、体力の底上げをしてあげればいいのですよ。

他にもHPアップやMPアップに効果のある品物を、船の間中食べさせた。

「うげ、これ俺らが作るとヤバイんだよな」

「ええ。これだけは自分で作りたくありません」

いや、作らないと上手にならないんだけど…。

けれど、真剣な顔のルークやイオンを見ていると、確かにコレはヤバイよなあと思う。

「気に入らない奴が居たら食べさせるといいよ」

特に髭や樽辺りはお勧めと言うと、イオンが乾いた笑いをしてるのが印象的でした。

いや、樽や髭で分かるって言う事は、イオンもそう思っているって事だよな？

「今日はどこに宿泊するの？」

「一応ジェイドが町に宿を取りました」

「もー、最悪なんですよー。六神将の目を逸らす為とか言って、ふ

「フーの宿なんですよ。もう、イオン様がいらっしやるのに!!」
「エンゲーブや、セント・ビナーみたいに高級宿がない町じゃないもんねー…」

「いっそのこと、領事館に宿泊した方が良かったんじゃないのか？」

「それに、いまさらじゃねーの？」

「俺がいたら目立つし」

確かに、貴色持ちのルークは目立つ。特にキムラスカサイドでは常時注目の的だ。

「ああ、私も髪の毛隠さないと…」

「それにしても、何でルーク私を姉呼ばわりしたかなあ。絶対、変な噂になってるよ」

「変な、噂？」

「あ、聞きましたよー。フレイさんってファブレ公爵の隠し子ってホントーですか？」

「うわーい、一気に隠し子疑惑にいったー」

「まあ、貴色持ちでルークに姉上と呼ばれたらそりゃーそう思うよなあ…」

「ルークの家に変な波風立ててないといいけど…」

「わりい。だって、フレイ俺に色々教えてくれて、姉上みたいだっと思って、つい…」

「悲しげに俯くルークに母性本能が刺激されまくった。」

「だがな、ルーク。君の目が少々泳いでいるのは気のせいかな？」

「まあ、少し面倒な事になったけど、髪の毛隠さなくて良くなったし怒ってないよ、ルーク」

なでなでと頭を撫でてやると、ホツとしたような顔になるルーク。

「アニス、ついでに私は孤児だから、親の顔なんて知らないわよ」

「あ、そーなんですか？」

「赤ん坊の時に捨てられていたらしくてね」

珍しくないけど私が肩を竦めると、アニスも納得したように頷く。

イオンは痛ましげな顔を私に向けてきたが、気にしないで笑顔で言うておく。

「でも、確かにフレイさんはお姉さんって感じですね。色々と言ってくれたり、手助けしてくれましすし」

「うん、そーかも。アニスちゃんも色々教えてもらったし。特に料理は参考になるわ!」

目指せ玉の輿、目指せお嫁さんと叫ぶアニスを生温かい目で見る私。まだ、玉の輿諦めていなかったんかい。

87

服装よし、お財布よし、髪の毛も女性の領事館職員さんに手伝ってもらって布の中に入れた。

「フレイ、これでいいんだろ？」

目立たないように簡素な地元の人間の服装（それでも、見る人が見

れば生地の良さ等で貴族階級だと分かる)をしたルークが、クルリと鏡の前で一周回った。

「ああ、ルーク様かわいい…」

なんて頬を染める女性職員に、

「キムラスカあああ」

なんてちよつとした絶望を覚えた私だった。

ちなみに、私もイオンもアニスも、似たような服装なだけどね。

「あ、ルークもイオンもお小遣いあげるからね」

そう言つて、2人のお財布に10000ガルドばかり入れてあげる。お金はあらかじめ領事館職員に、生地や宝石と引き換えにしたものだ。

マルクトでも珍しいものだとか太鼓判を押された生地は、やはりキムラスカでも珍しかったようです。

「けど、いいのかフレイ？」

フレイが作ったアイテムなんだろう？」

「そうです。僕たちがお小遣いを貰つては…」

「いいのいいの。はい、アニスのも。これで何か買いなさい」

私もアニスにお小遣いを渡してやる。

「うわ、いいの？」

「うん。ケセドニアなんてそうそう来る事もないでしょ？」

珍しい生地とか、食べ物とか色々あるから十分堪能していくとい
いよ」

「ありがと、フレイさん」

お小遣いを貰って喜ぶ姿は年相応だった。

多分、お小遣いなんて親から貰った事無いんだろっなあ…。

「でもさ、フレイ。なんで財布に紐がついてるんだ？」

「ですな」

「これは、服の此処につけておくのよ」

私は紐を服の一部分に結びつけた。

ちなみにイオンも私のしている事を見て真似ている。

「色々と物騒だからね、この町は」

「ああ」

アニスが思い出したように頷いた。

どうやらアニスは思い当たるフシがあるようだ。

まあ、アニスは一般市民だったからね。

「確かに。イオン様とかいい鴨になりますう」

「でしょ？」

「鴨？」

分かっていないルークとイオンに、私とアニスはクスクスと笑いあ
う。

「それにしても、服装変えただけで全然イオン様が導師って分から
なくなくなりますね」

「そもそも、タルタロス襲撃後に目立たなく行動したいのならば、まず服装を導師や軍服のものから一般市民のものに変えるって常套手段だと思うんだけどね。特に導師の服は目立つし」

それに、イオンが所持している音叉の杖は導師の証らしい。それも、今回は領事館に置いていく予定だ。

念の為にルークの腰には、剣を帯びさせてはいるが使うことなどほぼないだろう。

「これで旅をするのも面白いかもしれませんね」

「その時はご一緒させて下さいね、イオン様！」

「ええ、アニス。その時はまた、一緒に行きましょうね？」

「はい！」

なんて会話をしつつ、ケセドニアの町に出発です。

88

夕暮れ間近のケセドニアはそれはもう沢山の人で賑わっていた。私のいたザールブルグでも夕暮れ間近の町は妙に慌しかったが、それとは間逆の慌しさだ。

ザールブルグでは閉店前の、けれどケセドニアでは今からが本番なのだ。

「フレイ、すげー、すげーよ！」

ルークが初めて見る人ごみに興奮したように騒ぐ。

イオンも物珍しそうに、露天を見ている。

アニスも興味があるのか、チラチラと露天を盗み見していた。

「ルーク、セシルさんからあまり離れないようにね。アニスも露天が楽しみなのは分かるけど、きちんとイオンを見てないと駄目よ」

私の言葉に、アニスは慌てて露天から目を反らし周囲を警戒する。

「それじゃあ、ルークとイオン。ちゃんとセシルさんとアニスを連れているならバザール内は好きなように行動していいわよ。お小遣い、あげたでしょ？」

「おう」

「は、はい」

私の言葉に、2人は元気良く頷いた。

「さ、色々見ておいで。もしかしたら、調合に使えるものが混じっているかもしれないから」

私の言葉に、2人はやるぞーと気合を入れて露天を冷やかしに走った。

その後ろを慌ててついていく護衛の2人。

「さて、Aさん」

「また、Aですか」

「いやー、エイベルかエイブルか、ごちゃごちゃになってね。もう、

Aでいいじゃないと自己完結しました」

「覚える気ないんですか」

呆れ顔のAにやはははと笑いで返す。

それにしても、本当に人が多い。

「フレイさんも、この町はあまり治安が良くないから気をつけてくださいね。まあ、地元みたいだから言う必要はないでしょうが」
「地元って言うか、最寄の町がこの町だっただけなんだけどねー。私たちは砂漠に住んでいたから」

「オアシスですか？」

「違う違う。オアシスほど出なくても、水がある場所はあるのよ。ただ、砂漠なんていう劣悪な環境に住む人間が少ないだけで」

ローレライが用意してくれた私の戸籍はケセドニアにある。

ただし、私は砂漠の民という事になっているので、便宜上ケセドニアになっているだけだ。

正直、トリップしてきた私は初めてケセドニアにやってきたのだから。

「どちらにしろ、気をつけてください。若い女性をかどわかすなんて事も良くあるそうですから。特にフレイさんは、高く売れる条件が揃っているし」

キムラスカに売るには最高の高値の条件を満たしているからね。

「うん。まあ、もしなにかされたら全力で反撃するから大丈夫」

「町を壊す気ですか、貴方は」

「私と私の大事な人の安全の為だったら、町の一つや二つ壊すよ？」

にやりと笑う私に、ブルリと震え上がるA。

事実、ルークの為にアクゼリユスを落とさないといけないのならば、迷うことなく私は落とすだろう。

知らない1万人より、知り合いの一人を優先させた結果だ。

「あ、話は全然違うけど、マルクトにはきちんと報告したの？」

カーティス大佐はその辺り全然気にしてないようだから」

「ええ。私の方からマクガヴァン中将経由で王宮には報告されていると思います。それと、あの噂の元、フレイさんでしょ？」

「あー、ヴァンの噂？」

あら、無関係そうなAの耳にまで入っていたんだ。思っただより耳ざといなあ。

露天を適当に冷やかしながら、私たちは歩く。

人ごみの中、誰も私たちの会話を気にしてはいない。皆、買い物に夢中だ。

「陛下の、噂もです」

ジト目。

それはもう見事なジト目。

マルクト兵士として、敬愛する陛下の悪い噂は聞くに堪えないものだったのだろう。

キムラスカの船の中かつ、キムラスカ兵士の噂だから遠慮なんて全く無かっただろうし。

「私はただ、怪しいなと言っただけですよ？」

ニツコリと笑ってやる。

「いや、確かに怪しいかもしれませんが」

「結婚したらぶっ飛ぶ程度の噂ですよ。結婚すれば、ね」

その為には、初恋の痛手から回復しないといけない。
って言うかさ、何年失恋を引き摺ってるんだ？

それに、こんな噂が広まったらますます縁遠くなりそうだ。
いや、政略結婚だから大丈夫か。

「それに、ペットに男の名前つけているんですよ？」

「どこでそういう噂話を仕入れてくるんですか……」

「秘密v」

そもそもの発端は眼鏡を野放しにしていた皇帝のせいなので、その
辺りはきつちりと責任とって貰います。
手始めはこの噂だけだ。

「さーで、私も買い物しましよーかねー……って、揉めてる？」

人ごみの中、ぽっかりと空いた空間を野次馬の間から覗いて見ると、
そこには、

「ルーク！？」

ルークたち一行が居た。

フレイと奈落の物語30

89

野次馬の中に居たのはルークたちと、

「デリストお？」

六神将のデリストだった。

しかも、なぜか地面でピクピクしている。

「あ、フレイ。面白いのがいた！」

ルークや、面白いの扱いですか。

しかも、指差して言ってる辺り扱いは人間と言うより珍獣。

確かに服装からしてみてもエリマキトカゲみたいな奴ではあるけれど。

「なんでピクピク痙攣してるの？」

私の疑問に答えてくれたのは、なんとイオンだった。

「いや、逃げ出そうとしたのでくしびれ薬をちよっと…」

無茶苦茶イイ笑顔の導師様。何かをやり遂げたような顔だ。

そりゃあ、戦闘用のアイテムなんて船上で使う機会はなかったですけど…。

よくよく見て見ると、デリスト以外にも野次馬がピクピクしている。

ああ、そりゃ周囲の人間が遠巻きになるわけだ。

「な、なんですか、この粉は」

「あー…、特製のしびれ薬。それにしても、どうすんのよ。こんな捕まえて。飼い主に戻してきなさい」

ちなみに、私特製のしびれ薬は体の自由は奪うが口は動くようになっている。

ほら、負け犬の遠吠えって聞いてたら楽しいから。

「この場合の飼い主は僕になるんですかねー？」

イオンが自分を指差した。

確かに教団のトップはイオンだ。ならば、飼い主はイオンでもおかしくはない。

「誰がペットですか！

ピオニーじゃあるまいし！！」

「んー、出身はマルクトだから、マルクトに…」

「要りませんよ、こんな『変なの』」

キツイな、兵士A。

世界が誇る譜業博士ほ『変なの』扱い。

いや、一応世界でもトップレベルの人間なんだけどなあ…。

眼鏡にも冷遇されてたし、すごく不憫だわあ。

「くう、ジェイドのみならずこんな一般人にまで。きいいいいい」

「うわ、フレイ。噛み付くのか!？」

「いや、ルーク。これ普通の人間だから。格好がちよっと変なだけで。イオンも街中でしびれ薬撒かないの。危害を加えられた訳じゃ

ないでしょ？」

「けど、六神将ですよ？ 和平反対派の」

アニスが口を挟んできた。

「街中でやるんじゃないの、って言ってるのよ。やるなら町の外でやりなさい。まったく」

子供はこれだから怖いわ。

私は万能薬を飲ませ、麻痺を解除した。

「失礼しました。私の生徒が」

「全く。とんでもない目にあいました。ジェイドに会いに来たというのに」

「ジェイド・カーティスなら宿屋にいる筈ですよ。ねえ、イオン？」

「ええ」

「イ、イオン様教えていいんですか!？」

「かまいませんよ。どうせ調べたらすぐに分かる事ですから」

ジェイドみたいにマルクトの軍服をこれ見よがしに着ていたらとても目立つからね。

探すのも楽だろう。

「はーっはっはっはっ。待ってなさい、ジェイド！」

あなたの最大のライバルが、今行ってあげますからねー!!」

ふよふよとこの場に浮かんでいた椅子に乗り、宿屋へと向かうディスト。

「うーん、三角関係？」

嬉々としてジェイドの元に向かうディストを見て、思わず言ってしまった。

ブホツとアニスとAが吹き出す。2人とも噂を知っているから、ダメージがでかかったのだろう。

特にアニスは私と詳しい事話してたからなあ。

Aは、ほら国民だし。なまじ顔もよく知っているからなあ…。

もしかして、マルクトの噂話に新たなページを加えたかもしれない。

そんな話。

90

<マヒロン>で、麻痺を解除しひたすら謝り倒しました。気分はもうお母さんです。

セシル將軍の威圧もあって、なんとか無事に済んでほっと一息ついたよ。

「イオン、こーいう場合は単独のアイテム…出来れば、<ズフタフ槍の水>を使った後に、助ける振りして捕縛がセオリーよ」

「どこの誘拐犯ですか、貴方は」

Aの突っ込み。

いや、だって六神将は敵だと分かっているのならば、早々と捕縛するのは間違いじゃないんだもん。

「アイテムの選択がダメだったんですね。次はちゃんとやります」

「うん、期待してる」

「な、なんかイオン様が黒くなってる？」

アニスの乾いた笑いと、

「ルーク様もこうなるのだろうか…。やはり、一緒に旅をするのは問題が…」

これまた頭を抱えるセル将軍が印象的でした。

だって、私的には敵対した人間には一切の情け容赦無用。殺る時は徹底的に、がモットーだからなあ…。基本的には私って弱いから、イニシアチブを渡したらあつと言つ間に終わるし。

「フレイイ、これ実験に使えねーか？」

ブンブンと赤い石を片手にルークが叫ぶ。

なんとなく分かつてはいたけれど、ルークってスゴイマイペースだ。スルー能力が高くなつたせいかな？

どれどれと私がイオン達から離れ、ルークの手の中にある石を覗いてみた。

その店は露天の中でもガラクタを扱っている店だった。

店主は子供。

おそらく、孤児が拾ったもので商売をしているのだろう。

一件、石とか何に使うのか分からないものが特徴的な店だった。

「これ、なに？」

「…わかんない。ただ、第五音素感じるから…」

ボソボソと喋る子供店主。

「なあ、フレイ」

「ルーク、私に聞かなくても自分でコレが欲しいと思ったら買っていいのよ？」

「う、うん。あのさ、これいくらだ？」

「300ガルド」

正直高いのか安いのかは良く分からない。

「それじゃあ、これ」

ルークが財布からお金を取り出し、渡す。

相手はちよつとだけびつくりした顔をして、慌ててお釣りを渡した。小銭が妙に多いお釣りだった。

おそらく、値切らないで買われたのは初めてなのだろう。

私は何も言わなかった。多分相場からしてみたら高いのだろう。

ルークがもう少し大人になった時にあれってぼったくられたんだ、って笑って話せたらいいだろう。

何事も勉強だ。

そう、例えば…。

「あらん、お金持ちなのねん、坊や」

露出度の高い綺麗な女性がルークにしなだれかかり、その手がルークが財布を入れた場所に突っ込まれているのも。

ルークは、初めて女性にそんな風に接触されてわたわたしていた。

さて、助けますか。

アイコンタクトでセシル少将と頷き合うと、私が女性の腕を捻り上げ、セシル少将が抜剣し首へとその刃を当てる。

「はいはい、その悪いおててをのけてくださいね」

「全く。やはり、ケセドニアは治安が悪い」

「ちっ、イケると思ったんだがね。ただの小娘じゃなかったのかい」

女は舌打ちをして、ルークの胸から手を離す。

ぶらりと財布がぶら下がる。

「え、あれ？」

「ルーク、財布をきちんと戻してね。ちなみに、こーいう事をする女性もいるから、安易に体を触らせるのは危険よ？」

「あ、ああ」

コクコクと頷くルーク。

おそらく、ルークがこれまで接した事のある女性は母親と、婚約者、それとメイドぐらいだったのだろう。

それを考えたら、こーいう態度を取られたから戸惑ってしまったのだろう。

私は戸惑いがちのルークに笑いかけると、運良く露天近くに居た警備兵にその女を手渡した。

多分、これ漆黒のなんたらって言う義賊集団だから、おそらく逃げられるだろうけどそこまで関与しない。

っーか、メンドイ。

ルークの財布も守れたし、後は知らん。

「さて、ルーク。気を取り直して色々を見て回るうか？」

「うん……」

「気にしないほうがいい。言いたくないけど、あー言う事は良くある事だから」

「……キムラスカでもか？」

真剣な眼差しのルーク。

私はセシル少将を見ると、一回だけ頷いた。

「そうです。むしろ、バチカルのほうが多いかもしれません」

「そっか。ありがとう。行こう、フレイ」

ルークが手を差し伸べてきたので、私はそつとルークの掌に自分の手を重ねた。

結局ルークたちは、錬金術の材料になりそうなもの以外、ほとんど自家用の物を購入しなかった。

「これは母上だろ、これはラムダス、これはポール」

色々な物を買ったのに、自家用のものは何一つ買っていない。

メイド一人一人にまでちよつとしたお土産を買う始末。

悲しいほどに、ルークも、イオンも優しかった。

イオンは渡したお金で買ったのは、アニスへの物ばかり。
渡されたアニスのほうが戸惑っていた。

あまりの事に、Aが、

「自分用の物ね何か記念に買われては？」

と聞いたのだが、首を振り、

「僕には、必要ないですら」

とだけ答えた。

その言葉に、付いてきた私たちは押し黙ってしまったのだった。

少し話が暗くなったけど、無事夕食も終わり次の日となった。
朝から太陽が痛いくらいに眩しいのは、砂漠が近い証だろう。

あー、そう言えば砂漠には砂漠の薔薇とかあったのだろうか？

「フレイ、コレやっぱり母上にぴったりだよな？」

ルークが心配そうに買ったペンダントを見せながら、言ってきた。
いやあ、よもやここでティアのペンダントを見るとは思わなかったよ。

露天で色々と見て回っていたときに、馬車の御者らしき男が手に持っていたのをルークが気付いて8000で買い取ったのだ。
ちよっと高くかないか、と思ったがゲームではそれ以上の値段がし

たので安く買えた方なのだろう。
おかげで、公爵への土産がシヨボくなつたのは秘密だ。

「ええ。パツと見て簡素な感じがしますが、細工も細かいし石も大きいです。ルーク様は買い物上手ですね」

見送りに着いて来てくれた領事館の人の言葉に、ルークは嬉しそうに笑った。

「さて、荷物も積んだしそろそろ出発…って、まだ来てないんですか。マルクトの使者様は」

遅刻とはとてもいい根性である。
置いて行ってやろうか。

ちなみに、ガイは私からのおしおきが堪えたのか、廃人同様に船に担ぎこまれました。
いやあ、

「女の人怖い」

ってブツブツ呟いているガイを見て、果たして領事館職員が何をしたのかすごく気になりましたよ。

見張らせといた女性が、無茶苦茶艶々していたのが印象的でした。

「すみません、少し遅れました」

どっぴりと疲れた感じがするヴァンが、船に合流した。
なんか一気に10歳ぐらい年を取ったような感じだ。

そして、最後に登場したのがマルクトの領事館員と眼鏡大佐。どうやら、Aの報告で領事館自体が動いて、ジェイドを捕獲したようだ。

さすがに領事館を訪れず、報告書もなしという事に納得できなかった模様。

「すみません、遅れました」

後ろでひたすらぺこぺこしている領事館員が、哀れで私たちは視線をそらしました。

恨むならこんな使者を選んだ皇帝を恨んでくれい。

とにかく、人員が揃ったので連絡船、キムラスカ王都バチカルに向けて出発です。

91・5

グレンは、提出された二枚の書類を手に頭を抱えていた。

「どうしたのだ、グレン？」

横ではあまりの多忙っぷりに自分の補佐をしてくれる父が、突っ伏した息子を見て言った。

ああ、お茶がすっかり冷めたと思い侍従に命令して淹れ直させる。

「カーティスからの報告書です」

ペラリとした薄いというには、色んな意味で薄い報告書を覗く。

どんなに言葉を重ねても内容はたった一言で表すことが出来た。すなわち、「順調です」と言う事だけだ。

その報告書には、ティア・グランツの捕縛の事も書かれていなかった。

和平の使者として連れていた人員にも飽き足らず。

「……………ジエイド坊には期待するなという事だな」

「ええ。報告すらまともに来ないとは思いませんでした。こちらが、フレイ嬢の護衛として同伴させたエイベルの報告書です」

渡された報告書は、ティア・グランツの捕縛の事から、船内で起きた事やジエイド・カーティスの態度など事細かに書かれてあった。

「ルーク殿と、イオン様が、フレイ嬢の道具作りを学ばれている、か」

「ええ。どうやら、フレイ嬢にしか作れないとだけと違っていましたが、違うようですね」

それが分かっていたら、こちらもそれ相応の手段を取ったのにと悔しそうなグレン。

フレイの不可思議極まりない道具は、譜業にも負けず劣らずの効果齎す。

もしかしたら、キムラスカとマルクトの間の力関係が変わるかも知れない一品かもしれないのだ。

「こちらからも、学べる人員を差し出したほうがいいかもしれないな」

「エイベルに命じておきましょう。それと、もう一つ。困った噂がございます」

二枚目の報告書を見て、元元帥は固まった。

「いや、確かに……だが、それはネフリー殿……」

「陛下の心が誰にあるかは、父上には分かっているでしょう。けれど、それが表沙汰になっていない以上、この噂は厄介すぎます」

「……………陛下のご結婚がこれでまた遠のくな」

皇帝本人はこの噂を知らなければ大喜びだろう。

未だに失恋の痛手が回復しきっていない皇帝は、結婚自体を避けて避けて避けまくっていたのだから。

「ええ。マルクトが世継ぎの皇太子を抱けるのはいつになるのでしょうかね」

世継ぎが決定していない状態で、現皇帝が死去したら国が荒れる。

先の皇帝死去時にも国が荒れた。あの時と同じことが再び起きる可能性がある。

現在、マルクトには直系の王族は現皇帝のピオニーただ一人。

後は、血の薄いものばかり。

とても、玉座に付けられるような血も、才覚もない。

一番良いのはピオニーが結婚をして子供を儲ける事なのだが、今の現状ではそれもままならない。

事実、正式な結婚でなくても愛妾をとの声もあがっているが、ピオニーが全て拒絶している。

そして、今回の噂。

ホモの噂がある男性に好き好んで嫁ごうとする女性は居ないだろう。よしんば側室として後宮に入っても、下手したら相手にされない可能性のほうが高いのだ。

「頭が痛いもんだいばかりじゃな。それはそうと、アクゼリユスへの救助隊の再編成は完了したぞい」

「ああ、ご苦労さまです。父上。物資などもかなり横流しされていたみたいですね」

タルタロスは即座に奪回できたので、おそらく物資はそのままだったのだろう。

それでも、2割近いアクゼリユスへの救援物資が消えていた。

「まったく、なにをしていたのだから。あの男は。自分の師団すらもともに統率できないのか」

「指揮官は、王都からリングス少将を寄越してくれるらしい」

「それは随分とまともな人材ですね。陛下の守りは大丈夫なのか？」

「陛下が大人しくしてくださるなら大丈夫じゃろ」

侍従が持ってきたお茶に口をつける2人。

どうじに、クッキーも持ってこられたので短い休憩となった。

本格的に休憩を取るには、仕事が多すぎる。

「問題は、カーティスがきちんと自分の職務を理解して動いてくれるかだが…」

「エイベルに期待するのでしょうかのう」

2人はジェイド・カーティスに期待する事をやめていた。

フレイと奈落の物語 3 1

92

やってきました。光の王都バチカル。

バチカルは音機関と精緻な細工飾りによって形作られた都市で、下層には工業地帯や貧民層の住む地域、最上層部は王城を中心とする高級住宅地だ。

当然の事ながら、ルークの住んでいたファブレ公爵邸は最上層だ。

「えーと、確か移動には天空客車を使うんだっけか？」

「昇降機でも行けますよ」

うんうんと唸りながら、ゲーム内の知識を捻り出す。

そんな私に助け舟を出してくれたセシル將軍。

徐々に港に入っていく様を、甲板でルークと共に見学する。

せわしなくキムラスカ兵士が入稿の準備をしている。

さらに、遠目からでも分かるのだが、港には仰々しい人々の群れ。

あー、多分ルークの迎えに来たんだろうなあ…。

「フレイ、これで旅も終わりだな」

「うん。ちゃんとルーク様をファブレ公爵邸まで送って、それを確認したらですけど」

「なんか、今思えば短かったな、って思う。なあ、フレイ。もし、もしフレイがよければ、俺の家に来ないか？」

「んー…」

「ほら、錬金術もまだまだ知りたいし…」

一生懸命、私と一緒にいたいと頑張って主張してくれろ。

「特にケセドニアに急いで帰らないといけないって、訳でもなないですけど」

「マジか!？」

「だったら、いいだろう? な、な、な」

手をブンブンと振り回しているルークを温かい目で見守る私とセシル將軍。

そして横から、

「ルークばかりズルイですよ。僕だってフレイにはまだまだ色々教えて貰いたいですよ?」

イオンが乱入した。

頬をぷくりと膨らまし、ちょっと機嫌が悪いのか眉間に皺がよっている。

「だったら、イオンも俺の家に泊まればいいじゃねーか。一週間ぐらい泊まってさ、一緒に錬金術やるーぜ」

「……………そうですね。和平が成ったら、僕の役目も終わりですし少しゆっくり出来たら、そうしたいです」

「だったら決まり! 俺、父上に頼んでみる!」

うふふ、あはは、とすごく和やかな雰囲気の中、連絡船キャツベルトはバチカル港に入港した。

煌びやかな騎士団が、最敬礼でルークが降りてくるのを待つ。

「お初にお目にかかります。キムラスカ・ランバルディア王国軍第

一師団師団長のゴールドバーグです。この度は無事のご帰国おめでとうございます」

恭しく跪き、ルークに敬意を表すゴールドバーグ将軍。

「じくろつ」

それに鷹揚に頷き返すルーク。

最初はかなりおどおどしていたのだが、大分様になってきている。何度も実践したおかげだね。

「ルーク様、アルマダインからマルクトよりの使者が同じ船で来ていると聞いたのですが」

「ああ。導師イオンと和平の使者で皇帝名代であるジェイド・カーティス大佐が同伴している」

「ローレライ教団導師イオンです。マルクト帝国皇帝ピオニー九世陛下に請われ、親書をお持ちしました。国王インゴベルト六世陛下にお取り次ぎ願えますか？」

その言葉にゴールドバーグは大いに頷き、イオンに導師としての敬意を払いつつ、

「無論です。皆様のことはセシル将軍が責任を持って城にお連れします。セシル将軍、ルーク様のお迎えご苦労であった」

「はっ」

ピシリとまるで教科書に載るような敬礼をするセシル少将。

「これより、少将の任務は私が引き継ぐ。少将はイオン様とカーティス大佐を王城へとお連れして差し上げろ」

「了承しました」

「復唱はいい。すぐさま任務に移れ」

「はっ！」

ううん、思ってたよりキムラスカ兵錬度が高いな。

「それでは、ルーク様。公爵邸へとお送りいたします」

「ああ、分かった。フレイ、行こう。イオン、また後でな？
絶対連絡くれよ」

「はい、ルークもフレイさんも今までありがとうございました。ア
ニス、行きますよ」

「はい！」

イオンのすぐ後はアニスは歩いていく。

さらにその後ろがジェイド・カーティスがついていく。

「師匠も、ありがとうございました。また、公爵邸に来てくれる日
を楽しみにしています」

「ああ。近いうちに再び剣の稽古に訪れよう。それまで、きちんと
練習するんだぞ」

「はい」

ヴァンと握手をして、別れるルーク。

「なあ、ルーク。いいのか、イオンたちが心配じゃないのか？」

「心配だけど、俺は何も出来ないよ。それにガイ。家では呼び捨て
を許可していたかもしれないが、外でまで呼び捨てをするなって俺、
この間言っただよな？」

「は、何言ってるんだ？ 俺達、友達だろ？」

「友達でも、公私の区別はつけると言いたいんだ。まあ、いい」

そうだよ、ルーク。どうせ、あと少しの使用人生命なんだ。
今のガイは最後の輝きなんだよ。

それに、どうしてガイは気付かないのか。
キムラスカ兵士の突き刺さる視線を。

鈍いのか、それとも余程の大物なのか？
絶対前者だな。

ちなみに、ティアはきちんと兵士が王城へと連行していきました。
どうせ、ほぼ無罪放免って感じで解放されるんだけどさ。

93

公爵邸までは馬車と天空客車で移動するとの事だった。

ルークは始めて見るバチカルの町並みに興味満々と言った感じだ。

「なあ、あれはなんだ？」

「闘技場でございます、ルーク様。腕自慢たちが腕を競う場所です」

「……………へえ」

港から乗った馬車の中には、ルークとゴールドバーグ將軍、そして
私が居た。

私は外で歩いて行く気だったんだけど、ルークが頑として譲らな
かったのだ。

一応私の髪の毛は布で隠してはいるが、おそらくケセドニアからの
報告があったのだろ。

ゴールドバーグ將軍は何も言わなかった。

「いつか、出てみてーな」

「軟禁がとられましたら、機会はあると思いますよ。さっ、そろそろ天空客車です」

うん、まんまロープウェイでした。

どうやら、警備の為に一般の客を乗せないで私たちだけが乗客のようだ。

本来乗るはずだった客たちが、何事かと見ていたがルークが出た事で納得したような顔をした。

そして、ルークを真剣にひたすら見る人々。

キムラスカの貴色轟頂って本当に国民病だな、おい。

中にはルークの姿を見て、拝みだしたし。生き神かなんかか？

キムラスカの貴色持ちの扱って…。

天空客車では、ルークも私も田舎物丸出しで風景を楽しんだ。

ルークなど、天空客車がすれ違うたびに喜んだ。

しかも、上へ登っているせいか風景が絶景なんだ。

そんな楽しい時間が過ぎ、再び馬車に揺られて公爵邸へと帰り着いたルーク。

「ここまでの案内を感謝する、ゴールドバーグ將軍」

「いえ、国王陛下よりルーク様を無事家まで送り届けるのが私の任務ですから。それでは、御前失礼します」

恭しく挨拶をすると、ゴールドバーグ將軍と馬車は去って行った。

「ようやく帰り着いたな、ルーク」

「ルーク様！」

門番がすぐさまルークに気付いて、門を開ける。白光騎士団の詰め所らしき場所から、騎士達が一斉に出てきて敬礼をする。

扉にはいかにも執事ですよ、と言う人が待ち構え、その横にはメイド達が恭しく頭を下げている。

「ご無事のお帰り、お待ち申し上げておりました」

「今、帰った。母上の具合はどうだ？」

「ルーク様からのお手紙が届いてからは、気分がよろしいようで本日も部屋でごゆっくりなさっております」

ルークの対応に少し驚いたような顔をした執事だが、そこは熟練の技なのかすぐに普通の顔に戻る。

ルークは腰の剣とマントをラムダスに預けると、

「すぐに母上に会えるか？」

「はい。少しお待ち下さい」

執事の視線を受けて、メイドの一人がルークの前から立ち去る。

おそらくは、公爵夫人の都合を聞きに行ったのだろう。

「ルーク様、ガイは分かりますが、そちらの女性は？」

「手紙にも書いたと思うが、フレイ・ローゼンと言って俺の恩人だ。初めてキムラスカに来たと言うので、お礼がてら我が家に滞在を勧めた。父上はご在宅か？俺から父上にお問い合わせする」

「そうでしたか。ファブレ公爵様は、現在登城の準備をなさっております」

「母上より先に会って、お願いしたい。出来るか？」
「かしこまりました。フレイ様はこちらでお待ちを」

メイドの一人がどうやら案内してくれるらしく、進み出た。
ルークに向かって私は一度だけ頷くと、ルークもまた頷きラムダスの後を付いていく。

私はおそらく別室で待たされるのだろう。

ガイが当たり前の顔をして、ルークの後を付いて行こうとした時、後ろからガイの襟首を引っ張る男がいた。

「だ、団長？」

「ガイ、ルーク様の手紙を見て、俺は心底恥ずかしくなった。お前の腕を信用して、グランツ謡将と一緒に出したのに、ルーク様の護衛をしなかっただど!？」

「え、いや、それは」

「問答無用！ お前の進退はファブレ公爵様が決めるが、その腐った性根を叩きなおしてくれるわ！」

「え、な、まって……」

ズリズリと白光騎士団総出とも言える人員で、運び出していかれるガイ。

グッバイ、ガイラルディア。

私はハンカチを振りながら、ガイに別れを告げたのだった。
ものすごくイイ笑顔をしていたのが、自分でも分かった。

15分後、ルークは執事を伴って帰ってきた。

「フレイ、待たせてゴメンな」

「いいですよ。お茶まで戴いてゆっくりとしていましたから」

私の言葉にルークはホツとしたように笑った。

私もルークに合わせて笑顔を返した。

私を通された部屋は、客の待機用の部屋なのか椅子が数客置いてあった。

ルークが適当に椅子に座ると、すぐさまメイドがお茶を淹れてルークに渡した。

私も飲んでいるけど、香りが豊かでおそらくキムラスカではかなり高いだろうと簡単に推察できた。

さすが、ファブレ公爵家。客用の紅茶もそれなりの物を使っている。少し欲しいなあ、と思ったのは秘密だ。

紅茶ばかりは自分で作れないからな！

だって、自分で作らなくてもこの世界でも質は置いといて流通しているからさ。

特に自分が作る必要性が薄かったのだ。

「ルーク様、奥方様がお会いになりたいと……」

ルークとお茶を飲んでいたら、使いに出ていたメイドがルークにそう伝えるにきた。

「ラムダス、フレイを先に部屋へ……」

「奥方様は、フレイ様も一緒に、と……。ルーク様の恩人にお礼を

言いたいと仰せです」

私とルークは思わずお互いを見た。

「……公爵夫人に会うのに、この格好で問題はありませんか？

正直、貴人に面会できるような服ではないのですが……」

シュザン又公爵夫人は現在、キムラスカで二番目に身分のある女性だ。

それを言うなら、ルークは時期王なんだけどさー。

けれど、ルークの場合はさて置いて、こんな薄汚れた旅装で会っていいものか悩む所だ。

「問題ないと仰せです」

「分かりました。お伺いさせていただきます」

うーむ…、シュザン又夫人に会うのが最初から分かっていたのならば、手土産の一つでも用意したのだけどなあ…。公爵夫人に生半可な物は送れないし…。

メイドとラムダスに先導されて、私とルークはファブレ公爵邸の中でも奥まった場所にあるシュザン又夫人の部屋へと案内された。

ファブレ公爵邸は、公爵家に相応しく多くの使用人を抱え、それなりに賑やかだ。

けれど、シュザン又夫人の部屋は静寂に満ちている。

私が不思議そうな顔をしていると、執事のラムダスが、

「奥様は体がお弱いですから、なるべく静かな場所での静養をと考えられて最も奥まった場所に部屋があるのです」

「なるほど。どうりで、静かだと思いました」

「俺の部屋はもう少し表にあるけどな」

ルークの部屋もシュザン又夫人の部屋から大して離れていないらしい。

「まあ、俺の部屋は外部からの侵入が出来ないようになっているけどな」

ガイはしょっちゅう窓から入ってきたけど、とはルークの弁だ。

ガイの素行を思い出したのか、ラムダスの眉間に皺が寄った。

「どうやら、執事としてはガイの行動を苦々しく思っていたようだ。」

確かに一使用人として、ガイの態度は相応しくないからな！。

おそらく、ルークが懐いていたのである程度は大目に見ていたのだろう。

ルークは基本的に屋敷に軟禁状態だったから、公爵邸以外の人間の目に触れなかったしね。

おかげでガイが勘違いして、外でも同じ態度だった訳だが。

そんな事を話していたら、一番奥まった部屋に到着した。

大きな扉をラムダスがノックし、対応に出たメイドにルークと私が来た事を告げた。

すると、ドアが開けられきっちりとして年配の女性メイドがルークと私に頭を下げた。

「シュザン又様付きの筆頭メイドのマリアン又と申します。奥方様がお待ちです。どうぞ、こちらへ…」

そう言つて案内されたのは、白いテーブルクロスをかけたテーブルだった。

ゆったりとした椅子に、品の良い赤い髪、緑の目、少し華奢な感じがする女性が座っていた。

おそらく、シュザン又夫人だろうと言う事が簡単に分かった。

彼女の後ろには数人のメイドが控えている。

「母上、ただいま帰りました」

「おかえりなさい、ルーク。無事に帰還できて本当に良かった…」

少し顔色が悪く白い肌の女性が嬉しそうに笑う。

「ルークも、フレイさんもどうぞお座りになつて？」

おっとりとした口調は、育ちのよさを感じられた。

ナタリアが生まれても、キムラスカで最も高貴な女性と言われるだけの事はある。

本来、最も高貴な女性はインゴベルト6世の息女たるナタリア王女だが、貴色を持っていない故に高貴さと言う点では一歩劣る。

その証拠に、シュザン又夫人は第一位の王位継承権を所持している。

第二位は、ルークの父親であるファブレ公爵だ。

本来ならばインゴベルト6世が退位の後は、シュザン又夫人が後を

継ぐのが正しいのだが、その体の弱さとルークが王女の婚約者である事から時期王と見なされているのだ。

インゴベルト6世も、自分の愛娘の為にそれを望んでいるらしいし。けど、預言大好きインゴベルト6世は忘れてないのだろうか？
ユリアの預言で、ルークがアクセリユスで死亡すると言う事を。

確か、知っていた筈だよねえ…。

それとも、ルークが死亡したら王位継承者4位辺りと結婚して、王妃にするのかな？

ルークは何気なしに、私は少し躊躇いながらも勧められた椅子に座った。

すぐさま、筆頭メイドのマリアンヌが茶を注いでくれた。

香りからして控え室で貰ったお茶よ、高い物であると言う事は簡単に分かった。

「お菓子はいかがかしら？」

「フレイ、母上の所の菓子はフレイの作った菓子と負けず劣らずウメーんだぜ」

ルークが、皿に置かれたケーキを口に入れる。

少し甘かったのか、眉間に僅かながらに皺が寄ったのを私は見逃さなかった。

けど、ルークや。さすがにプロが作った菓子と素人の私が作った菓子を比べるのはどうと思うぞ？

絶対、プロが作ったほうが美味しいって。

「ルークには少し甘かったかしら？」

「ええ、少し甘かったです」

ムムムと唸るルークを微笑ましいものと感じているのか、シュザン又夫人がルークを見る目には確かな愛情があるように見えた。

周囲のメイドも目が優しく、ルークを見つめていた。

「超振動を起こして、マルクトに飛ばされて随分と心配しました。フレイさんにルークを保護してもらえなかったらどうなったか、考えるだけで恐ろしかったですわ」

誘拐犯にこき使われ、死霊眼鏡から馬鹿にされ、玉の輿を夢見た導師守護役から変なモーシオンをかけられて散々な目にあっていました、なんて言えない。

「そんな…。私はただ溪谷でルーク様を見つけ、ここまで一緒にただけですわ」

「いいえ。ルークの手紙を読んでも、今のルークを見てみると、フレイ様が本当にしっかりとルークに向き合って対応してくれたのが分かります。マルクトに行くまで、ルークは年の割には幼かったように思えます。それが、今では大分しっかりして…」

「母上…」

シュザン又夫人が遠くを見る。

「今回の事は、ルークにとってたいそう意味のある旅となったようです。フレイさん、本当にありがとう」

そう言つて、シュザン又夫人は身分も何もない私に頭を下げた。
その時、ああこの人は本当に王族なんだなと理解した。

例え、降嫁していてもその態度や考え方は王族として得難いもの
だろう。

ゲーム内ではただ、ルークの不幸を嘆くだけの女性だと思つていた
のだが、随分と違う物である。

フレイと奈落の物語32

95

ルークと私が旅の間の話をシュザン又夫人に聞かせていたら、ルークがようやく土産を買っていた事を思い出し、ポケットからペンダントを取り出した。

「母上、これお土産」

ルークはポケットの中から丁寧にハンカチで包まれたペンダントをシュザン又夫人に手渡した。

シュザン又夫人はペンダントを受け取ると、嬉しそうに笑った。

「ありがとう、ルーク。付けて貰えるかしら？」

「はい、母上」

ルークがペンダントを四苦八苦しながら、シュザン又夫人の首にかけてやる。

ルークからのプレゼントが嬉しかったのか、満面の笑みだ。

「花以外の、ルークからの初めての贈り物ね。嬉しいわ、ルーク」

シュザン又夫人に、そのペンダントはとても似合っていた。

「珍しい色合いの石ね。どこの石かしらね？」

「んー、フレイ分かるか？」

「さすがに、それはちよつと…」

一瞬、ホドかなーとも思っただけど黙っておく。

正確なことは分からないしね。

「ねえ、フレイさん。その髪の毛を取ってもらえないかしら？」

そろそろ話題が尽きる頃、シュザン又夫人がそう言ってきた。

「一応ケセドニアでバレたとは言え、再び船に乗ったときに髪は布で覆ってしまった。」

ケセドニアでも大騒ぎだったのだ。貴族の多いバチカルだともっと厄介な事になる可能性が大きい。

「いや、それは……」

「あなたの事情はケセドニの領事館からの報告で知っていますわ。けど、それならば私が役に立てると思うのです。身分と言う後ろ盾のない貴色持ちは、その、あまり良い事にはなりませんし」

気の毒そうに言うシュザン又夫人。

シュザン又夫人も貴色持ちとして、今まで色々あったのだろう。

彼女の場合は、王族と言う身分があったから少しはマシだったと思うけど。

「貴方はルークの恩人ですわ。ですから、私が貴方の後見人となつて、身分の保証をとようと思っております。私がバックに居たら、貴族の方々も貴方に無体な真似はし辛いと思いますわ」

「ですが、ご迷惑では？」

シュザン又夫人が緩やかに首を横に振った。

「いいえ。私にはこれぐらいしか出来ませんから。どうか、ルークとはいつまでも良い関係でいてやってくださいね？」

「はい。シュザン又公爵夫人。ご好意をありがとうございます」

ぺこりと頭を下げ、感謝の意を述べる。
とりあえず、これで一応の身の安全は保障された訳だ。

シュザン又夫人の顔色が少し悪くなったので、そろそろお暇しようとした時、嵐はやってきた。

96

バタバタと忙しない足音と、それを押し留めようとするラムダスの言葉。

それに最初に気づいたのは、マリアン又さんだった。

「少し、騒がしいですね。シュザン様、様子を見に行ってもよろしいですか？」

シュザン又夫人は鷹揚に頷き、マリアン又さんが様子を見に行こうとした瞬間、扉が勢い良く開かれた。

「ルーク、ようやく帰られましたのね！」

金色の髪の毛のドレスを着た女性が、足音も高々と部屋へと入ってくる。彼女の後ろには、彼女を押し留めようとしたのか息を切らしたメイドがいた。

「ナタリア？」

「無事、お帰りになったので安心しましたわ！」

嬉しそうにルークの側まで行き、メイドが用意した椅子に腰を下ろ

す。

ちなみに、私は恐ろしくてあまり見たくないのだが、シュザン又夫人を盗み見た。

ひっ、眉間に皺がよっています。

先程まで白かった肌が、感情の高まりの為か少し赤くなっている。

けど、笑顔です。笑顔なんです。

「おばさまも、大分回復されたので安心いたしましたわ。ルーク、おばさまはルークが消えた後倒れられ、私が毎日見舞いに参ってましたのよ」

「そっか。ナタリア、サンキューな」

「当然ですわ。私はルークの婚約者ですもの」

うふふと笑い、私をチラリと見た。

え、もしかしてライバル認定でもされたのか？

「ナタリア。あなたと言う子は…」

片手で顔を覆うシュザン又夫人。

どうしてそういう行動を取るか分からないナタリア。

「おばさま？」

「どうして、家人が止めるのも聞かず私の部屋までやって来る事なんて無作法な真似が出来るのですか？

それが、キムラスカの貴婦人の頂点に立つ王女の態度なのですか？」

言葉は丁寧でゆっくりでいかにも貴婦人然とした口調だったが、言

葉に宿る力は強かった。

そのようなシュザン又夫人は初めてだったのだろう。途端に戸惑うナタリア。

今までの猪っぷりはどこに行ったのだろうか？と言った風情である。

「おばさま……」

「どうやら、一度お兄様にナタリアの教育に関して一言言わなければなりませんね。どうも、お兄様はナタリアの貴婦人としての教育を疎かにしているようですわ。まったくも甘いのと教育は別々にして下さいとあれ程申し上げましたのに」

「……………」

ナタリアの顔は蒼白になってしまった。

よもや、自分の行動が咎められるとは思わなかったのだ。

意気揚々とこの部屋に来た筈なのに、見る見る間にしょんぼりとしたものになっていく。

「フレイさん。みつともない所を見せてしまつて申し訳ないですわ。どうぞ、忘れてくださいね？」

わたしはコクコクと壊れた人形のように頷いた。

正直、それ以外に選択肢はなかった。

だって、シュザン又夫人、無茶苦茶迫力あつたんだよ。

さすが、元王女と言つた所か。

それにしても、王女乱入のせいでお茶会の散会のタイミングを逃してしまった。

私は徐々に顔色が悪くなつていくシュザン又夫人を見て、後ろにいるマリアン又さんの顔を伺つた。

一見ポーカーフェイスだが、少し焦っているようにも見受けられる。

「ルーク様、回復されたばかりのシュザン又様の体の負担になりますので、そろそろお暇させていただきたいのですが」

「そうですね。マリアンヌ、彼女を送ってちょうだい」

ナタリアが立ち上がり、ルークを連れてシュザン又夫人の部屋から出て行くとする。

「はあ？」

「フレイは今日此処に泊まるんだぜ？」

「……ルーク、もしかして浮気ですか？」

ナタリアの目が猜疑心で一杯になったのが見て取れた。
浮気ねえ……。

「ばっ、そんなことある訳ねーだろ!？」

顔を真っ赤にして両手を振って否定するルーク。
いや、待てルーク。それは逆効果だ。下手したら凶星を指されて狼狽しているようにしか見えない。

「あら、あらあら」

シュザン又夫人、なに嬉しそうに笑っているんですか。
は？ ルークも恋をする年頃になったのね、ですか？
勘弁してくださいよ……。

結局、ナタリアはルークの態度に機嫌を損ね足音も高々に去っていきこうとしたので、

「ルーク様、追いかけて誤解をお解きしてあげて下さい」

「メンドーだな」

「ルーク様。ナタリア様は、恐らくルーク様を心配されて来られたのです。彼女も貴方が拉致されてから気を揉まれた方の一人ですよ？」

「わーったよ。行つて来る。マリアンヌでも誰でもいいから、フレイを俺の部屋に案内しておいて」

「かしこまりました」

とりあえず、ルークにナタリアの後を追いかけさせました。

私はシュザンヌ夫人と向き合い、頭を下げる。

正直儀礼とか良く分からないから、ザールブルグ式の王宮の儀礼でやってみた。

た、多分大丈夫だと思う。

「シュザンヌ様との会話が楽しくてついつい長居をしてしまいました」

「私もとても楽しませて貰いました」

シュザンヌ夫人が鷹揚に頷く。

「疲れた体には甘い物が良いと聞きます。私が作った拙い物ではございますが、よろしければお食べ下さい」

そう言って取り出したのは、〈宝石キャンディー〉。

しかも、ただの宝石キャンディーではない。改良してLP回復ができるようにしたんだ。本当に僅かだけど。

甘くて姿も美しいお菓子は、シュザンヌ夫人のような高貴な女性には相応しいだろう。

「まあ、綺麗ね。ルークがフレイさんの料理を美味しいって喜んだのが良く分かるような気がしますわ」

「いえ、野営でしたので大した物は作れませんでした」

「いいえ。本当に宝石みたい。大事に食べさせて貰いますね」

そう言つて、横のマリアン又さんに手渡す。

おそらく、毒見をしてから食べることが出来るのだろう。
王族としてはごくごく当たり前だよな。

「それでは、御前失礼させていただきます」

「ええ。またお話ししましょう。旅の間のルークの事を色々聞きたいですから」

いや、一応数日間の滞在予定なんですけどね。

マリアン又さんはすぐさまシュザン又夫人をベッドへと横にならせると、てきぱきとメイドたちに指示していく。

私は、年若いメイドに連れられてシュザン又夫人の部屋を後にしたのだった。

ルーク、無事に誤解といてればいいけど…。

96・5 - 1

「待てよ、ナタリア。待ってっば！」

ようやくナタリアに追いついたルークは、ナタリアの腕を掴んだ。

「ルーク…」

ナタリアの歩みが止まり、ゆっくりとルークのほうに振り向いた。

「私を、追いかけてくれましたのね」

「ああ」

先程まで怒りと焦燥に彩られていたナタリアの表情が、一瞬だけ花が咲いたかのような笑みが浮かんだ。

そう、一瞬だけ。

ルークは、それに気付かなかった。

「せっかく母上のお見舞いに来たのに、何怒っていたんだ？」

「いいえ、もういいのです」

ルークに寄り添い、笑うナタリア。

ルークは、良く分からないがナタリアが機嫌が良くなったのにホツとした。

「そう言えば、ルーク。ガイはどうしましたの？」

確かルークと一緒に帰ってきたと聞きましたけど。姿が見えないようですね？」

「あ…、白光騎士団長に連れて行かれた」

「まあ…」

ファブレ公爵邸はキムラスカ城の斜め前に立っており、徒歩での移動が可能なくらい近い。

本来ならばその身分上、ナタリアは馬車での移動が最良なのだが、ナタリアは気軽に徒歩で遊びに来る。

本人曰く、

「ルークとすぐに会いたいですし、この距離ならば馬車を用意するまでも無いですわ」

との事らしい。

さすがに護衛なしで移動と言っわけにはいかない事は分かってるのか、仰々しい護衛を引き連れてはいるが。

「帰るならウチの馬車に送らせる」

「歩きでかまいませんのに」

ナタリアの返事に、ルークは曖昧に笑った。

フレイに教わり、物事を考えるようになってから困ったときは笑うようになったなあ、とルークは思った。

本人は気付いていないが、それはフレイの癖だ。

フレイあたり気付いたら苦笑する事間違いなしな癖だ。

玄関までナタリアを送っていきこうと、二人が歩き始めると少し離れた場所でラムダスに食ってかかるガイの姿が見えた。

「あら、ガイ」

ナタリアがガイに気付き、ルークの手を引っ張ってそちらへ向かう。ルークは正直気が乗らなかった。

ガイがラムダスに食ってかかっているのは、おそらくあの事をラムダスから言われたのだろう。

ガイもルークとナタリアの姿に気付いたのか、パツとこちらを見た。何か期待しているような瞳だな、とルークは思った。

「ルーク、ナタリア様!？」

ちょうど良かった、ルーク。ラムダスさんに言ってくれよ。ラムダスさんが、俺とペールをクビにするって言うんだ!」

『ああ、今言ったのか』とルークが目でラムダスに問いかれると、ラムダスは頷いた。

「ラムダスに言っても無駄だろう、ガイ。お前の解雇は、父上が決めたことだ」

「な、ならお前から公爵様にとりなしを…」

ガイの言葉に、ルークは首を横に振った。

ガイの手が、握られた紙と共にフルフルと震えた。

「まあ、ルーク。ガイは私とルークの幼馴染だと言っても良い関係の筈よ。どうして、とりなしてさしあげませんか?」

「ナタリア様…」

ガイはナタリアをジツと見つめている。

最早この場では頼れる者はナタリアしか居ないと気付いたのだろう。

「さすがに、護衛剣士としてあそこまで失態を重ねたら、このまま雇っている訳にはいかないだろう。さすがに、マルクトからの使者と導師を前にして、タメ口で俺に話しかけたら俺は庇えねーよ」

「俺はお前の友達…」

「友達だから、タメ口はやめろって言ったよな、俺?」

「……………」
「ガイ・セシル。公爵様は何も無一文でお前を放り出す訳ではない。今までの働きに相応しい退職金と、新しい職場へ出す紹介状も書いて下された。正直、お前のような不忠者には過ぎたる対応だと私は思うのだがな」

本来ならば、退職金など払われず、身一つで公爵邸から叩き出される予定だったが、ルークがそれではペールが気の毒だと、公爵にせめて通常の解雇にしてくれと頼んだのだ。

ペールの腕ならば、紹介状もあることから公爵家とまでいかなくても良い仕事にありつけるだろう。

そう思つて、ルークはあまり話したことの無い父親に頭を下げた頼んだのだつた。

公爵は少し驚いたような顔をしていたのが、ルークの記憶に残つた。

「おじ様の判断では、私でもどうしようもないですね。けれど、ルーク。いい考えがありますの」

ナタリアがガイとルークをじつと見ながら、口を開いた。

「ナタリア？」

「私がガイとペールを雇いますわ」

「ナタリア（様）！？」

二人が非難をの色を混ぜた声をあげた。

「お考え直しをナタリア様！」

ペールはともかくガイは王族に仕えるには未熟すぎます。確かに、剣の腕は確かですが、貴人に対する態度は首を傾げざるを得ません」

「ならば、護衛として側に起きますわ。それに、ルークと私が結婚するとき一緒に連れてくるので、また元通りになりますし。本当、我ながらいいアイデアですわ！」

「ガイもそれでいいですわよね？」

ガイは少し悩んだ後、頷いた。

「ナタリア、正気か？」

「ええ。大丈夫ですわ、ルーク。ガイは私に対しては、きちんとしているじゃないですか。それに、ガイは私達の幼馴染、このまま離れてしまうのは、悲しいですわ」

ルークが眉を潜め、ナタリアに思い止まるように言うが、ナタリアの決意は翻らなかった。

「ルーク、少し離れるけどナタリア様と一緒にたまに顔を出すからな…ってナタリア様、あまり近寄らないで下さい！」

今までルークに引付いたいたナタリアが、ガイに近づいた瞬間ガイが大げさに飛び退った。

「私の使用人になったのだから、いい加減慣れてくださいませ！」

「むむむむ、無理です。すいません！」

「ガイ！」

なんてはたから見たら掛け合い漫才のような事をしながら、二人は去っていった。

去っていく二人の後ろ姿を眺め、ルークは不安で一杯だった。

「ラムダス。ガイに王族の使用人が勤まると思うか？」

「公爵家の使用人ですら満足に勤め切れなかった男ですよ。考える間もなく無理かと」

「だよなあ…。ナタリアの評判大丈夫か？」

ルークは自分の婚約者の評判が気になった。

旅の最中、平民達の会話を聞いていたらナタリアの評判はさほど悪くなかった。

福祉に熱心な慈愛溢れるお姫さまだと言われていた。

けれど、初めて貴族と接した時、貴族ではナタリアの評価があまり高くないと知った。

まあ、アルマダイン、ケセドニアの領事館の職員と、一部の貴族のだったが。

まず、貴色を持たないのが評価の低さの一つに挙げられた。

けれど、こればかりはナタリアは仕方ないだろうとルークは思った。

次に挙げられたのが、ナタリアの態度だ。下々の者に気安く話しかけ、徒歩で出かけ、王族としての態度に相応しくない応対をする。こればかりは、ルークは反論できなかった。

平民から見ても偉ぶらない姫と言うナタリアの美德は、貴族からしたら悪徳になってしまうのだ。

代わりに貴族達は、ルークを褒め称えた。
ルークの鷹揚な態度は、貴族の頂点の公爵家の一員として相応しい物だと口々に誉めるのだ

その時、ルークは今までの自分を恥じた。

このような態度を取り出したのは、フレイがそういう風にした方がいいとアドバイスを受け入れて実践したからだ。

王族として、貴族として相応しい態度。そんなのは一度も考えた事がなかった。

ルークは数ある家庭教師の先生でも知識の先生が嫌いだった。

あの先生は、全てを忘れたルークに忘れる前の勉学を教え込もうとし、

「記憶を失う前のルーク様は、このような事は簡単に出来ましたよ」と言うのだ。

それには耐えかねて、ルークは徹底的にボイコットした。

その時、ついでとばかりに他の授業もボイコットした。

いつからだっただろう。家庭教師が訪れなくなったのは。

そして、家庭教師が訪れなくなった頃から、ナタリアが本を持参して、ルークに勉強を迫るようになった。

一応、シュザンヌが最低限の知識は必要と、ルークに文字と貴族としてはやや不足ではあるが、良家の子息としての立ち振る舞いの先生を雇った。

それは最初の先生とは違ったように思えた。

だから、ルークは文字と立ち振る舞いを取得できた。

それにフレイがさらに付け足してくれた。
だから、恥をかかずに済んだ。

「なあ、ラムダス。家庭教師の先生、手配してくれねーか？」
「ルーク様？」

「俺、旅に出るまで知識や立ち振る舞いなんて最低限でいいと思っ
てた。けど、違っただよな。俺は、公爵家の跡継ぎで、王女の婚約
者なんだよな？」

「だったら、今のままじゃ駄目だ」

「ルーク様……。分かりました。公爵様とシュザンヌ様と相談して、
今のルーク様に相応しい相応しい家庭教師を雇うようにいたします
よう」

「ありがとう。頼む」

ルークはそう言うと、踵を返して自室へと歩いていった。

その後姿を見ながら、ラムダスは喜びに包まれた。

二度目の誘拐をされる前のルークは、我侷な貴族の子供だった。そ
れが、旅と言う普段ではありえない経験をして、見事成長され戻っ
てきたのだ。

「誘拐犯には感謝すらしたくなりますね……」

さあ、今から忙しくなるとラムダスは思った。

ルークに相応しい家庭教師を探さないといけない。

「まずは、シュザンヌ様にご相談ですな」

公爵はなぜかルークを放任していた。

まるで、興味など欠片もないように。

逆にシュザンヌの方がルークには気をかけていた。
体が弱く寝込むことの多いシュザンヌでは思ったようにルークに手をかけられなかった。

けれど、ルークに気をかけていたのは彼女だ。

ならば、ルークの今回の頼みを伝えるのは最も相応しい。

ラムダスか、お体は大丈夫だろうかと心配しながらも、シュザンヌの部屋へと向かった。

ルークの望みを叶える為に。

フレイと奈落の物語33

97

こんにちは、フレイ・ローゼンです。

現在なぜかキムラスカルはファブレ公爵邸に滞在し、行儀作法の勉強をしています。

あ、あれー？

事の発端は、ルークに新しい家庭教師がついた事だった。

ルークが帰宅して次の日にはやってきたので、おそらく帰宅したその日に頼んだのでしょう。

「フレイ、俺頑張る！」

なにをどう頑張るのか分からなかったけれど、笑顔で頑張ってたね、と伝えておいた。

けれど、ルークが居なくてすっかり手持ち無沙汰になってしまった。

イオンと再会を約束したので、それまではファブレ公爵邸に居ないとマズイよなあ、と思いつつイオンの訪れが妙に遅いことが気にかかった。

わきもきしながら、調べたら久し振りに失敗してしまっし、本当にいい事がなかった。

その日の午後、体調を持ち直したシュザン又夫人とお茶をしていたら、正式に礼儀作法を学んでみないか？と聞かれたのだ。

問いかけの形式だったけど、あれは半ば強制でしたよ。

なんでも、シュザン又夫人が私の後見をすると正式に決定したらし

い。

キムラスカ出身の預言士が、預言を確認してオツケーが出たらしい。ちよつと待て、それ実は詠んでないだろう？

私に預言は無い筈だから、一体いくら袖の下を掴ませたのか気にかかります。

それともあれか？

キムラスカの貴色愛は預言すらも超越するという事か？
貴色愛、半端ねー。

と、こーいう事で久し振りに勉学と相成りました。

慣れない筋肉使ったせいで、体が痛いです…。トホホ。

他にも開いた時間に、シュザン又夫人のお医者さんと話し合ったりしてましたよ。

なんでも、私があげたく宝石キャンディ>を食べると体調が良くなつたらしい。

慌てて医師は私に接触してきたんだ。

とりあえず、私独自の技術である事を説明して、シュザン又夫人の容態を見ながら薬を調合していく事と相成りました。

いやさ、実はザールブルグでもあった生薬系と<薬のもと>を組み合わせた、効果が劇的にアップするんですよー。

ちなみに、この研究は私とノルデイスの共同研究だったりする。いやあ、懐かしいわー。ザールブルグでも有用だった技術がここでも役に立つなんてさ。

と、ある意味とても忙しいファブレ公爵邸の日々でした。

決して大人しくただ飯食いをしていた訳ではない。

ある意味とっても平穏な日々が終わりを告げたのは、ようやくイオンが我が家に訪れたせいだったりする。

98

イオンがファブレ公爵邸を訪れたとき、私はシュザン又夫人と定例のお茶の最中だった。

大体この時間帯に、ルークのこれからの教育方針やシュザン又夫人の病状を聞いている。

「は、導師とマルクトの使者、ですか？」

「はい。ルーク様は現在勉強中なのですが、いかがいたしましたでしょうか？」

公式では導師の身分は国王とほぼ同列。

ならば、次期国王と言われても未だ公爵子息であるルークは、直ちに勉強を取りやめて応対に出るのがスジだと言うもの。

「マルクトの使者、ですか…」

シュザン又夫人に、私が応対に出ましようか？と尋ねる。

共に旅をしていた私ならば、そうそう失礼だとは思われまい。一応私の生徒と言うか、弟子みたいなものだし。

「そうですわね。お願いできますか？」

私は笑顔で快諾すると、お茶会から退席する旨を謝罪する。

さてさて、別れてから五日間か。今まで何をしていたんだろうね！。

公爵邸の応接室に、イオンとアニス、それにジェイドは通されお茶を出されていた。

アニスは初めて訪れた公爵家の煌びやかさっぷりに目を輝かせていた。

あれは金目の物を探している目だなあ。後で一言言っておこう。導師守護役が品が無いと思われるって。

私があると、すぐさま人払いをする。

ラムダスは心得たものばかりに、メイドたちを下げ自分も退室してくれた。

「お久しぶりです、イオン」

一週間ぶりを見るイオンは少しやつれていた。城で一体何があったんだ？

ジェイドもまた苛々が隠せないでいるようだった。

「お約束していたのに遅れてしまい、申し訳ないです」

「いえ、和平の仲介がイオン様の任務でしたから、それはいいんですよ」

「大変でしたよ。ようやく、昨日親書が渡せたんですから」

「は？」

アニスが説明してくれたが、城では先に大詠師が訪れており、そのせいで謁見の手筈が中々整わなかったそうだ。

地味に嫌がらせをしてきたか、樽豚。

「色々と難癖を付けられたんですよ。まったく」

なんでも、使者の人数が少ない事や責任者が軍人の、しかも大佐だと言っ点も問題視されたらしい。
預言ですから、で押し通したらしいが。

「あと、大きかったのはジエイドの態度だったのもかもしれません」
「あー、下手に偉そうな態度だったんですよ」

こそそとアニスとイオンが耳打ちしてくれた。
あー、納得。

「あ、ルークは今家庭教師が来ていて手が離せないんだよね。あと、20分ぐらいで終わるからゆっくりしていて」

「いいご身分ですよね。導師が来ているというのに」
「すみません、前もって使者を出していれば良かったですね」

嫌味を言うジエイドを冷たい目で睨みつけ、申し訳なさそうにするイオンを慰める。

けど、この眼鏡。何しに来たんだ？

「いえ、導師の来訪はあらかじめ告げられていましたので問題は無いんですが…」

チラリと眼鏡を見てやった。
本気で何しに来たんだ？

「する事がなかったんですよ」

ぶっきらぼうに言う私にアニスが補足説明をしてくれた。
なんでも、使者として最低限の礼儀は払われているがそれ以外は無

いものとして扱われているらしい。

「これが隣国からの使者に対する扱いなんですかねえ……」

どうして、この男が話すと嫌味臭いんだろーねー。

「そりゃ、大佐が使者に相応しからずって判断されたんじゃないんですか？

そもそも、軍人が『和平』の使者を努める辺りで疑問視されそうなものじゃないですか。あと、大佐の階級不足。佐官程度が和平交渉に来たって事で、キムラスカが馬鹿にされたと怒っているのでは？」

「私は皇帝陛下の懐刀と思っていたのですがねえ」

あー、ねっちりねっちり。

こいつ、絶対結婚できないね。断言出来るわ。

「え、それって公式評価なの？」

私が言っているのはそーいう評価じゃなくて、公式のものだよ。ほら、王妃と側室は一緒かな？

違うでしょ。つまり、公式での地位だよ。大佐の場合は、軍人だから大佐なんだけどさ、せめて將軍位でも持つてこないと、相手は馬鹿にされたと思うよ？

しかも、キムラスカって歴史がマルクトより長いからとてもプライド高いのよ？

もしかして、自分が和平交渉に赴く国のことロクに調べていませんでした、なんて馬鹿なこと言わないわよね？」

アッサリバツサリ一気に喋ってやった。

あー、お茶お茶。喉か乾いたわ。

「よーするに、あなたのマルクト国内でどーいう風に扱われているかはどーでもいいってことよ。まっ、とにかく親書を出して返事を貰ったらさっさと帰ればいいんじゃない？」

「アクゼリユスの救出はどうするつもりですか？」

「キムラスカが救助隊出してくればいいねー。だって、あなたが率いてた師団ほぼ全滅でしょ？」

「国にきちんと報告書をあげておいたら、何らかの対応が取れているだろうけど、あげてる？」

「あげてるわよねー、と言うと眼鏡はしきりに眼鏡を触る。」

「マクガヴァン中將が報告した筈です」

「責任者のあんたが報告しなさいよ」

「仕事しろって事ですね。」

「さて、イオンにはルークとの時間までの間、簡単な講義をしてあげようかしらね。大佐はどうぞ、お帰りになつてくださいな？」

「導師イオン様の護衛、ご苦労様でした」

これ以上は話すことなんてないし、ルークを下に見ようとするこいつにルークを会わせるつもりもない。

「……………失礼しますよ」

「ええ。使者のお仕事、頑張ってくださいね？」

上品に小首をかしげ淑女然とした態度で、メイドに大佐を玄関先まで送る事を頼む。

「すみません、フレイ。断りきれなくて」
「今度から、ズフタフ槍の水でも盛ってやんなさい。まったく、ガイといい眼鏡といい…」

どうやら、随分長い間眼鏡と話したようだ。

ルークが走ってきたのか息を切らして、部屋へとやってきた。

99

相当急いでいたのか、ルークは肩で息をしていた。

「イオン、遅れてごめん」

「いいえ。僕こそ大遅刻ですから」

ルークにお茶を淹れて差し出すと、ルークが不思議そうな顔をする。

「あれ、カーティス大佐は？」

「来てる、って聞いてたけど」

「用事が終わったので帰ったの。ルークは、用事があった？」

ルークが首を振る。

アニスのカップも空になっていたので、ついでに淹れてやる。

アニスはお礼を言いながらカップを受け取ると、私に聞いてきた。

「それにしてもー、フレイさんが敬語を使わずに大佐と話すなんて珍しいですね」

「あー、あれね。あれ、ワザとなのよ」

「ワザと、ですかあ？」

「あれって、ジェイドの真似をしたつもりなのよ。自分より身分の高い人間にタメ口で、かつ慇懃無礼」

「ふんふん。なるほど、ってフレイさん。そー言う目で大佐を見ていたの？」

「うん。あ、秘密よ、アニス？」

「今度お菓子あげるから」

きゅぴーんとアニスの目が光った。

うん、アニスも女の子なだけあって甘いもの好きだもんねー。

しかも、タダ。

「自分が同じ態度取られて、少しはわが身を省みるかと思ったけど無駄だったようね」

「けど、随分と危ない橋を渡りましたね」

ルークと話していたイオンが私達の方にやってきた。

いつの間にか、男と女で別れて話をしていたのだったんだね。

「ああ。だから、人払いしたんだよ。本人が無礼な態度を取られたって主張しても、その場にいた人間が否定すれば、証拠なんて無いからね」

それに、私は貴色持ち。

マルクトならともかく、キムラスカでは下手したら平民出身の佐官クラスより身分が高くなってしまいうらしい。

眼鏡はマルクトでは名家かもしれないが、所詮は軍人家系の養子にすぎないのだ。

こーいった場合、キムラスカでは私のほうが身分が高くなるそうだ。

これ、実は初日にラムダスさんに言われたんだよね。

メイドにいちいちありがとつと言っていたら、

「あなたのほうが身分が上になりますから、いちいち頭を下げなくても結構ですよ」

と。むしろ、私も呼び捨てでいいですつて言われてしまった。

さすがにラムダスさん呼び捨てにするのは無理なので、敬称をつけさせてもらっているけど。

「うわ、フレイってば悪どい」

「ほほほほ。大人ってこんなものよ」

子供達は、私のダークな部分に若干腰が引けている。

「特にルークとイオンがこれから飛び込む世界は、こんな大人ばかりよ。一歩先、二歩先を常に考えて行動しなさい」

「「はい」」

「でもお、それって私とイオン様が口を噤まないと出来ない事ですよね?」

あ、やっぱりアニスが先に気付いた。

「んー、アップルパイワンホール。あと、アニスの好きなハニータルト」

これでだめだったら、宝石かなあ。

「はうつ。噤みます噤みます」

「フレイ、僕には何をくれるんですか?」

くすくす笑ってイオンが言った。

「導師様への口止め料かー。生半可なもの渡せないなー」

「冗談ですよ。何も貰わなくても何も言いませんよ。ジェイドのおかげで、城ではしなくてもいい苦労しましたから。正直、少しいい気味だとすら思っていますよ」

なんか、やさぐれている導師様。

「そうですねー。誰でも彼でも無意識に喧嘩売ってますから、あの人の」

「ほんっとーに、和平の使者なの、あれ？」

本気で、マルクトの威信を欠けたブラックジョーク説を信じそうなんだけど、私。

「まあ、賄賂と言うのは冗談だけど、ルークとイオンにはプレゼントがあるわよ？」

「え？」

「そろそろ、私がいなくても調合しても大丈夫だと思ってきたし。はい、まずはこれ」

そう言っつて2人に手渡したのは、小さな木の箱に入った基本調合セット。

「これって…」

「もしかして」

「そう、ルークとイオン専用。一人1セット用意しているからね。

二つ目は、今はルークしか無理なんだよね」

「どうして、ルークだけなのですか？」

ルークだけ二つ貰えてズルイと、頬をプックリ膨らませるイオン。

「部屋に設置しないとイケないのよ。ルークの部屋はファブレ邸にあるからいいけど、イオンの自室はダアトでしょ？」

「確かに。それでは無理ですね」

しよぼんと落ち込むイオンにルークが慌てだす。

「ど、どーなかな出来ないのかよフレイ？」

「んー…、イオンのを設置するまでの間、イオンの奴をルークのほうに繋げるかあ…」

「…？」

「ま、とにかく見せてあげるわ。ルークの部屋に行くわよ」

私達はルークの部屋へと向かった。

ルークの部屋は最初の頃と比べ、随分と本が増えていた。ルークが知識を貪欲に吸収している証拠だろう。

「えっと、ルークここに箱置いていいかな？」

「あ、うん。かまわねーぜ」

私は壁際の空いている場所に、白い箱を置いた。

「なんだ、フレイ。これ」

「これはねー、フレイ特製の収納箱。空間を弄ってあるから、沢山収納できるの。ただ、一種類99個までだけ。それと、劣化しな

いように設計されているから、腐りそんな物はこの中突っ込んでなさい」

そう。アールランドで出てきた収納ボックスを再現したのだ。実は、アトリエが作れるなら私でも作れるんじゃないかね？と思って作ってみたら、存外簡単に作れた。

これが、ザールブルグ時代に作れていたら、収納に頭を抱える事も無かったんだけどなあ……。

世の中ってそう上手くことが運ぶ物ではないって事ね。

私は最後に二つの腰用のポーチを取り出す。

ルーク用は白に赤字のラインどり、イオンはラインの部分が緑色だ。

「はい、最後。このポーチをあげるわ。このポーチは、このボックスに繋がっているの。ボックスからアイテムを自由に引き出したり、自分が持っているアイテムをボックスに入れる事が出来るの」

「すげー、それってフレイが持っているそのバッグと一緒に事だよな！？」

「うん、そう。錬金術だったら持っていたほうが便利だからね。二人が見習い錬金術士になったお祝い」

感覚だが、ルークの錬金レベルは12。イオンは8ぐらいだ。

このレベルだと一人前の錬金術士になったとは言いつらい。

「ありがとう、フレイ」

「だから、僕のが設置できないんですね」

「とりあえず、使えないのは不便だから、ひとまずはルークのボックスに繋げる様にしたから。イオンのを設置するまで、共用ボックスにして2人で管理してね」

「はい」

「はい、おしまい。さ、イオン、ルーク。今日は新しい調査に入るわよ」

私はルークとイオンと三人で、新しい調査に取り掛かったのだった。

フレイと奈落の物語34

100

数日、返事が出るまでイオンはファブレ公爵邸に滞在した。

その間にじっくりと収納ボックスの使い方を叩き込んだり、ファブレ公爵邸の庭に生えていた安らぎのハーブなどを採取したりした。

さすがに外にまで採取に行くわけにはいかないのです、ラムダスさんに頼んだりもしたし。

つい、『うに』と言って海産物の『うに』を用意されて目を丸くしたのはいい思い出だ。

そうだよ。ザールブルグ以外では栗だよ。

ううう、これで私も心身ともにザールブルグっ子。

さて、事が動いたのは3日目の夜の食事時。

ルークがファブレ公爵から、明日城に参内せよと言われたのだ。

どうやら、和平に関しての返事をするらしい。

どうして、俺が関係するのかな？ってルークが首を傾げていたので、曖昧に笑っておいた。

ああ、魂に叩き込まれたジャパニーズスマイル万歳。

その晩、私はシュザン又夫人に呼び出された。

「ルークに一人だと色々不安ですから、ルークと共に城に行ってください。ああ、大丈夫ですよ。私の名代として城に上がってもらいますから」

なんか、いつの間にか私もさぞ当然のような感じでルークに付いて行く事が決定しました。

いや、どっちみち城まで付いて行く気だったからいいんですけど。中に入れなくても、外で待ってればいいんですから。

そうと決まればさっそく準備です。

ルークに、しいてはファブレ公爵家に恥をかかさなただけの服を用意しなくては。

ううう、確かザールブルグで何度か着た礼服、虫食いしてないよね。

「あ、服はこちらで用意しますからね」

「……お願いします」

素直に頭を下げておきました。

そして、現在。

私は城の中にいます。

101

私はルークと共に登ると、ルーク用にと用意された控え室に通された。

服装はシュザンヌ夫人の前にルーク用にと手渡した国宝布で作られた服を着せられた。

私が派手系の服装が苦手だと理解してくれているのか、シンプルで地味な装いだ。

けれど、私の目と髪の色の色で色々注目されてしまったよ。

もう、注目度が半端じゃないし、ルークの衣服を控え室で整えて国王との謁見の為に謁見の間へと送り出した後は、何人も何人も貴族の方々がルークへのご機嫌伺いと言う名目でやってくるのだ。

国王との謁見で居ないのが分かっているのに、来るのだから夕チが悪い。

拳句の果てに婚約者の有無を聞かれたり、ルークとの関係を聞かれたり、最悪な事にその場で求婚すらもされたよ。

求婚に関しては、その場で丁重にお断りしていた。

ちなみに、私の隣に居るアニスもその状況に引きつりながら呆然としていた。

「私もフレイさんのように責め持ってたなら良かったのに……」

なんて言ってくる始末。

なので、少し訂正しておいた。

「あのさ、私は運が良くルークと知り合えて、シュザン又公爵夫人の後見があるから人権を尊重してもらえるけど、平民のままここに来たら浚われてそのまま愛人ルートよ。キムラスカ以外でも下手に人の少ない通りを歩いたら、そのまま人攫いに浚われて娼館に高級娼婦として売られてたわね」

「……けど、私にしたら羨ましいわ」

「あのさ、なんでお金が必要かは分からないけど、夕チの悪い人にタカられているのなら縁切り推奨しておくわ」

それが出来たらどんなにいいか、とだけアニスは言い黙ってしまった。

あ、ちなみアニスが謁見の間にイオンと共に出向いていないのは、私が止めたからだ。

今からイオンが向かうのはキムラスカ最高の警備がされている場所で、護衛なんか必要ないのだ。
それをアニスとイオンに言い含めて、私と共に控え室で待機してもらった。

そして、どれぐらい時間が経っただろう。

ルークとイオンが余計なおまけと共に帰ってきた。

私は慌てず騒がずに、

「元あつた場所に捨ててきてください」

「失礼ね！」

ブンスカと怒るティア・グランツ。

あなたつて本当に傲慢だわ！なんて言っている。

「フレイさん。詳しい事は今から説明しますから、どうか落ち着いて聞いてくださいね。あと、入り口で押し問答されたら入れません」

「失礼しました、イオン様」

私は慌ててイオンとルークとおまけの二匹（ティア+眼鏡）を控え室へと通した。

アニスがお茶の準備を手早くして、四人にお茶を回していく。

私とアニスの分はない。

「マルクトとの和平は結ばれる事が決定したんだ。その為の親善大使として、俺、いや私が救助隊を率いてアクゼリユスに向かう事になった」

やはり、ゲームの筋道は変わらないようだ。

ルークは、預言に詠まれていた通りにアクゼリユスに向かうのだらう。

「預言、ですか？」

「はい。ユリアの預言です」

イオンがそう言ったきりで黙り込んだ。

どうやら、預言に気になる点があったのかもしれない。

「分かりました。シユザン又様に連絡して、すぐさま準備を整えてもらいしまよう。それで、そのカーティス大佐とティア・グランツ響長はそれと関係するのですか？」

「私は和平の使者ですよ。和平がきちんと締結されるまで見守るのは当然でしょう。ルークが親善大使としてアクゼリユスに訪れないと和平が締結されないのならば、アクゼリユスまで当然着いていきますよ」

私とルーク、イオンの会話に口を挟んでくる大佐。

「なるほど。マルクト側の目付け役ですね？」

「一応、和平の使者としての任は果たされたのですから」「そう思ってくれて結構ですよ」

私は、とりあえず納得したフリをして、ティア・グランツに視線を向けた。

ティア・グランツは、私の視線を受けて少したじろいだがすぐに持ち直した。

「で、その犯罪者はどうして親善大使なんて歴史的にも光栄のある任に着かれる事になったのですか？」

「……ユリアの末裔を処刑する訳にはいかないのです、助命と減刑の為に親善大使の護衛を言い渡されたのです」

イオンの言葉に、ユリアの末裔と言われて自分が認められたと判断したティアが満足そうに頷いた。

「ようするに、血筋による助命の為ですね。導師イオン様にお聞きいたします。グランツ響長は一介の護衛で、ルーク様に対しての肉の盾として扱ってよろしいのですね？」

「ちよつと、肉の盾ってどういうつもり!？」

「かまいません。あくまで、減刑の為の護衛です。ルークを守る為に存分に使ってください」

「え、イオン様!？」

「フレイつてばぶつちやけ過ぎでしょ……」

アニスが私の発言に乾いた笑いを浮かべ、眼鏡大佐もなにやら不穏な空気を感じ取ったのかしきりに眼鏡を触っている。

けれど、教団の最高責任者からの言質は取った。

これでティア・グランツはルークの肉の盾だ。

私は後衛よなんて言って後ろに下がるものなら、さらに後ろから蹴りだしてやろう。

102

色々と準備や用意があるので、出発を2日ごと定め私たちは王城で別れた。

「今晚からは、教会に泊まりますね。準備の邪魔になるでしょうか」

ら。ああ。ティアも当然同じ場所で宿泊させますよ。減刑中の身ですから、教団としても管理していいと次に何か起こされたら困りますからね。大詠師がキムラスカに嘆願までして戴いた減刑ですから」

サラリと毒吐いてくれるイオンに頼もしさを覚えた私だった。

後ろで吼えているティアを笑顔で牽制するのも堂に入っていた。

「一応、身の安全の為に枕元にクラフトとしばれ薬ぐらい置いてくださいね？」

「大丈夫ですよ。アニスもいますから。きちんと守ってくださいね、アニス」

「はい、イオン様！」

私としては誘拐フラグを完全に潰す為にも、ファブレ邸への宿泊を勧めるんだけどね。

「それでは、明後日の朝に王城前に集合ですね」

「ええ。それまでに出来る事は全て済ませてくださいね」

一応カーティス大佐に言っておく。

まあ、どうせ何もしないけど、後で何も言われなかったなんて言われたらウザイだけだし。

決めるべき事を決めると、もう用はないとばかりにティアと眼鏡が退室する。

どーでもいいけど、ティアはあまり城の中をうろつろしない方がいいと思うけどね。

変なところに入り込んだら、斬られても文句は言えないし。

「僕はダアトからアニス以外の導師守護役を派遣して貰い、それが着き次第ダアトへと戻る事になるでしょう」

「じゃあ、これで当分会えなくなるんだな。手紙、書くからな！」

「手紙書いたなら、ポーチの中に入れておけば、リアルタイムでルークに届きますよ」

「本気で便利だな、このポーチ」

ルークが腰につけたポーチを撫でながら、感心したように言った。

「ルーク様もイオン様も、今まで教えた調査を何度もして下さいね。一応今の段階では、まだまだ見習いレベルですから。目を閉じても調査できるようになるのが目標ですよ」

「できねーって」

「私は出来ますよ？」

ちなみに、アイゼルもエリーも出来る。

なんて言うか、感覚的に調査できるようになるんだよね。

そう、水を飲むかのように調査するんだ。誰でも出来て当たり前のが感覚だ。

ルークもイオンもあんぐりと口を開いたままだ。

あまり、開けっ放しだと虫が入るけどいいのかしら？

「あと、ルーク様。城にいる間に文官にでも言っつて、マルクト軍のキムラスカ領の通行許可証を取ってください」

「それ、無理だろ？」

最近頑張つて勉強しているルークが、自国の中に他国の軍を入れる事が、国防にとってどれだけ危険性が高いことか習ったようだった。

「地域と進路を限定すればなんとかいけると思いますが。そうしないと、キムラスカとダアトにだけに救助をさせる事になります」
「それはいけませんね。親善後の和平条件を平等にする為にもマルクトから軍を派遣して貰わなくては」

イオンの言葉に私は頷いた。

「その為の許可証です。本来ならば、大佐が率いてきた人員がそのままアクゼリユス救助に回される予定だったんですけどね」

「そうでしたね……」

アクゼリユスの事を思い出したのか、イオンの顔が暗く沈んだ。

「けど、今からで間に合うんですかあ？」

「大丈夫。Aがきちんと連絡取っているし」

ファブレ公爵邸に滞在中に、何度かAは外出していた。あれって多分、マルクト側のスパイと連絡を取って、和平交渉の状況などを伝えていたのだろう。

まあ、外部からの情報なのでどれだけ役に立つかは分からないが。

けれど、私の言葉にルークもイオンも、そしてアニスすら納得したように頷いた。

ちなみに、Aは今頃ファブレ邸でわきもきしているだろう。

Aの身分では、キムラスカの王城に入るのは無理なのだ。だから、お留守番。

「おそらくグレン中将が、なんらかの手筈を整えている筈よ。タル

タロスが奪われて救助隊が全滅したのは伝えただから」

余程の無能でなければ動くだろう。

それを考えたら、今彼らに必要なのが何であるか想像は簡単だ。

「それに、今から私たちが救助物資を用意していたら、時間かかるしね。それに、アクゼリユスの救助を要請したマルクトが物資を出すのは至極当然でしょう。物資もタダじゃないんだし。ただでさえ、キムラスカは食糧難だしね」

ルークも、救援物資に関してはどうするか頭を悩ませていたらしく、安心したかのように息を吐いた。

「でもお、それってマルクト側がキムラスカ側に申請しないといかないんじゃないんですかあ？」

「アニス、正解！」

本来はあの眼鏡大佐が、ルークに申請して許可証を出して貰わないといけないのよ」

どちらにしる、マルクトはこれでキムラスカに頭が上がりなくなるのは決定だ。

こればかりはイオンも乾いた笑いを浮かべるしかない。

イオンとしては平等な条約を結ぶ事を望むのであるが、現在キムラスカの公爵夫人の後見を受けている身としては、キムラスカに多少の肩入れをしてしまうのはしょうがないだろう。

多分、こんな事を私にさせたくて、ルークに自分の名代として付けたんだから。

「許可証と、派遣する人員に付いては父上にお問い合わせ。許可証もなるべく早く到着するようにする。カイツール経由が早いよな？」

「はい、おそろく」

「念の為に予備として一部余計に貰い、Aに渡そう。そうすれば、妨害が入ったとしても届くだろ」

「はい、ルーク様。貰いましたら、すぐさまAに出させますね」

細々とした事例を、ルークとそして呼び出した文官と煮詰め、私たちは控え室を出た。

うつん、思ったより控え室に長居をしてしまったなあ…。

コスメミック・イラ と私（前書き）

アンチ成分多大にあります。
カガリファン注意。

コズミック・イラ と私

「あんの馬鹿姫ーーーーっ!!」

私は、その知らせを受け取ると、思わず大声で叫ばずにはいられなかった。

そんな私を見て、苦笑する黒髪ロングヘアーの女性。

「あまり、怒るなフレイ。怒るほうが馬鹿らしい」

「いや、そうだけどさー。けど、なによこれ。『カガリ・ユラ・アスハは、独自の交渉経路を使い、オーブ出身のコーディネーターの軍事施設への雇用に対して、プラントに異議を申し立てに行く』って！

なに、内政干渉!?

それが一国の元首が取るべき行動なの？

セイランはなにやってたあああああ!!」

興奮しすぎて、肩で息をする私。

「フレイ姉、はいお茶」

そう言って渡されたのは、この世界の技術で密封販売される事が可能になった、ミステイカティだ。

うん、神経を落ち着かせよう。

「セイランも頭を抱えていた。確かに、連合から件の苦情は来ているが、やんわりと対応するつもりだったみたいだから」

「だよな？」

実際、敗戦からオーブがココまで立ち直ったのは、セイラン家の手腕による所が大きい。

連合と独特のパイプを、前回の大战から作っておいたセイランは、連合からの賠償を巧みに引き出し、オーブの復興へと使っていた。その手腕は、ミナとギナも認めている。

敗戦に際して、国を脱出したアスハは宇宙で理念の為の戦争をしている間、焼け野原になったオーブの地で、国民を養ったって事は凄いことだと思う。

なのに、地上オーブではアスハの人气が高いんだよね。宇宙では逆なんだけど。

そう、宇宙。

私は、今元の現代日本を通り越して、コズミック・イラにやってまいました。

いや、その前になぜか地底世界ラ・ギアスに召還されちゃったりもしたけど、それは別の話です。

なんとか、ラ・ギアスで破壊神ぶっ倒して世界を救う手伝いをして、やれ帰還出来ると思っていたら、ここに飛ばされました。

激しく、返還場所を間違えてると言いたい。

返還するとき、セリアが「あ」って言ったんだよね。多分、失敗しやがった。

まあ、一応平和なオーブだったので、難民として申告し、戸籍を取

得。
それから色々あって会社を立ち上げ、ミナとギナと知り合い、大戦を泳ぎきり、現在に至ります。

いやあ、この世界ほど私が無能になるのもないと思う。

MSなんて、適正さらさらないよ。アスランはかるうじて、イヴァンはコーディネーター以上に適正があつたみたいなんだけどね。

おかげで、最近はアトリエに籠りきって新薬の製作に勤しんでいる毎日。

大戦の結果を知っていた私は、友人2人の為にアメノミハシラを含む宇宙オーブを、地上オーブから半独立のような形にする事に成功させたので、地上とはある程度の付き合い以外はする気が無い。

けど、一応建前上の元首は、『カガリ・ユラ・アスハ』。
現在内政干渉真つ最中なお姫様だ。

「一応平和になったとは言え、火種は燻っている状態で、なんで喧嘩売りに行くかなあ……」

「その件だが、セイランより要請があった」

嫌な予感がした。

「なに？」

「馬鹿姫を連れ戻してくれ、と」

「やっぱりいいいいいいいい！！」

「私が動けばいいのだが、情勢が不安な今私やギナが動くとは戦力的に無理だ」

「でしようね」

実は、私は過去にカガリにちょっとおしおきをした事があるのだ。その結果、カガリは私に苦手意識を持ち、言う事を聞いてくれる可能性が高い。

そう、踏んだのだろう。我らがセイラン宰相様は。

「これがプラント評議会議長に対する詫び状だ。そして、元オーブの民を頼むとの手紙でもある」

「了解」

「すまないな。民間人にこのような事を頼んで。護衛として、アスランとイヴァンを付けるので、のんびりとは出来ないが、楽しんできてくれ」

「うん。久し振りに家族との対話を楽しむよ……」

私はトボトボと部屋を出た。

目指すは宇宙港。そこに、高速船が用意されているらしい。

ああ、あの馬鹿姫め……！！

コズミック・イラ と私2

カガリは、コロニーの宇宙港から地上部分に降りるエレベーターに乗っていた。

ラクス・クラインの力を借りて、評議会議長と非公式ながら会談を持つ事が出来た。

これに成功すれば、自分の婚約者の父であり宰相のウナト・エマ・セイランに対して、有利になれる。そう思ったからこそその会談だった。

このエレベーターを降りて、向かった先の部屋にデュランダル評議会議長がいる。

背後に控えるアスラン　今は、アレックス・ディノと名乗っている　に視線を向ける。

アスランは力強く頷いてくれる。

さあ、勝負だと思い扉を開けると、そこには魔神がいた。

ボタン

思わず扉を閉めてしまった。

「カガリ？」

「帰ろう、アレックス」

「おい、どーいう」

「魔神がいる」

「は？」

「駄目なんだ、あの人だけは」

ガクブルと、戦争の最中でも震えたことの無かったカガリが震えだした。

さて、こちらは閉じられた扉の内部。

そこには、応接用の椅子に座ったデュランダル議長とフレイ、その背後にSPよろしく控えているイヴァンの姿があった。アスランは、非常時に備えて船で待機している。

「おかしいですね、何があったのでしょうか？」

「さあ？」

おほほと笑いながら、コーヒーを飲む。

やはり、プラントの嗜好品は質が悪いな。

私がつったくビッターゲイトを飲ませてあげたいわ。

それに比べると、これはタダの泥水ね。

それにしても、諦めが悪い。

さっさと入ってくればいいのものを。

「カガリ様、いい加減入ってきたらどうです？」

私が言うと、観念したのか扉が開き、カガリが入ってきた。顔色はすこぶる悪い。

「フ、フレイ。なぜここに…」

「セイラン宰相から、泣きつかれたんですよ。だから、私が来たのです」

「私は、世界の平和とオーブの為に！」

「申し訳ございませんが、議長。カガリ様と少し話をしたいのですが？」

「ああ、それでは私は少し場を離れましょう」

「申し訳ございません、議長」

議長に向かって深々と頭を下げる。

優しい顔をした議長は笑いながら、部屋を出てくれる。

「待ってくれ、議長！」

「カガリ様。あなたの相手はこの私です」

カガリを押し留める。

さあ、OHANASHIの始まりだ。

カガリは、椅子の隅に座る。

「ねえ、カガリ。あんた、さっきオーブの為にって言ったわよね？」

「あ、ああ」

「違うでしょ？」

自分の為にでしょ？」

でないと、この時期にプラントに対して内政干渉なんてしないわよ」

「な、内政干渉!？」

「そうでしょうが。あんた、自分の言っている意味が判る？」

オーブからプラントに移住した人が、自分の持っている技術を使って何が悪いのよ？」

「それが、軍事関連だと言うのが問題なんだ！」

その言葉に鼻で笑って答える私。

アスラン・ズラモといザラの肩が少しはねる。

けど、怖くなんか無い。私の後ろには最高の護衛がいるのだから。

「そのの何が悪い」

「フレイ、オーブの理念は！」

「理念でメシが食えるか！」

私は、あんた達が国を焼いたときも言ったわよね！？

理念も結構。けど、理念に拘りすぎて国を滅ぼすなんてあつてはならないって！」

「だが！」

「理念を語るのはいいけれど、現実を見なさい！」

今回のことは、下手をしたらプラントとオーブ間の関係を悪化させる事もあつたのよ！？」

実際、移住した人をどう使うかはその国の自由なのだ。

「けど、彼らはオーブの……」

「元オーブよ。確かにオーブの国民だったけど、あんた達が国を焼いたから国を捨てたの」

それでも、地上オーブから宇宙オーブが半独立を果たしたと聞いて、プラントからアミノミハシラに来たコーディネーターもいた。

つまりは、彼らは地上オーブを見限ったのだ。

「……………」

「私達残った者が出来るのは、いつか彼らが再び訪れてくれた時に、移住したけどこの国は素晴らしい国だったんだと思ってくれるような国にしなければならぬの」

その為にセイランもミナもギナも頑張っているんだ。

「その筆頭になるべき元首がぶち壊してどーする!？」

ガン!とテーブルを力任せに叩く。

「今回の会談は、移住した元国民の様子を元首として知りたいので、極秘に訪れると言う事にプラントとの間ではなってるから」

「……会談は」

「中止よ。まあ、議長自身が彼らが働いている所に案内してくれるらしいわ。それを見てさっさと帰って、仕事しなさいな。私だって暇じゃないのよ」

会社自体は部下に任せても大丈夫だけど、色々と調合が入っているんだ。

本当はアトリエを起動して直に来たかったけど、他国相手にそれやったら不法入国だし。

「……分かった」

不承不承と言った感じだか、カガリが頷いたのを見てホッとした。後はカガリが見学したのを見届けて帰るのみ。

あー、やれやれ。

コズミック・イラ と私3

カガリが、デュランダル議長と連れ立って、施設の見学に行ったのを確認して、私はアスランの待っている艦へと戻った。

「どうだった？」

艦長席に座っているアスラン。

「なんとかなつたと思うよ。さて、さっさと帰ろう。ナチュラルにプラントは居心地が悪い」

そうなんだよね。

プラントは基本的にコーディネーターで構成された国だから、どうしてもナチュラルの私には居心地が悪いんだよね。別に差別されるって訳ではないんだけどさ。

「了解」

ゴゴゴゴゴ

そう言つて、艦を発進させようとした瞬間、艦が大きく揺れた。

「うおわ！」

「フレイ姉！」

転びかけた私を、イヴァンが慌てて支えてくれた。

「な、何事!？」

いつせいに鳴り響くアラート。

『第一級戦闘配備！』

総員予定された配置につけ』

コンピューターの無機質な声が、艦橋に響いた。

「え、戦闘？」

「状況を確認して報告せよ」

アスランの指示に、艦橋の人員が慌しく動く。

「どうやら、不明艦に港が攻撃されている模様。ザフトの被害甚大です！」

「すぐさま、港より離脱せよ。巻き込まれるな！」

この時期にザフトを攻撃なんて、まるでヘリオポリスをザフトが襲撃した時みたいだな。

「攻撃した艦の姿は見えるか？」

「いいえ、見えません」

「……………余程遠距離にいるか…まさか、ミラーージュコロイド？」

「え、あれってユニウス条約で製造が禁止されなかった？」

確か、戦後に結ばれたユニウス条約で、核動力と一緒に禁止にされた筈だ。

つてことは、今回の襲撃は…。

「恐らく、連合だな。オーブや他の国には、プラントに手を出す理

由は無い」

「うわーい、また戦争？」

どうせ、戦争を裏で糸を引いているのは、地球に拠点を構える企業達だろう。

戦争と言つのは、中々旨みが多いのだ。

いやさ、ウチは基本的に化粧品で稼がせて貰っているけれど、少量だが薬も販売している。

MSは、私の顔見知りの人の分しか作っていないんだけどね。

ちよつと技術的に、色々と問題が…。

ラ・ギアスのフルカネルリ式永久機関なんて、外部に洩れたら大変だし。

これ、人の精神力で動くようになっていいるから、下手したら核動力と同じように使えるし。

まあ、一般人には動かせないけどね。

私を作った3機のMSの動力源となっているが、それぞれ操縦者は、ミナ、ギナ、イヴァンだ。

「すぐさま現在の状況を、アマノミハシラに報告！」

「はっ！」

これまたラ・ギアス特製のエーテル通信機なので、ニュートロンジヤマーの影響は受けないで、遠距離通信が出来る。

これも隠匿モノの技術だ。

「イヴァン、出撃準備しておけ。恐らくMSなりMAなりいる筈だ」

「了解。フレイ姉、いつてくる」

「いつてらー」

手をひらひらと振って、イヴァンを送り出す。

「フレイは、俺の横にでも座っておいて」

そう言っつて、折りたたんでいた席を出してくれる。

「少し揺れるけど、大丈夫だから」

「うん、信頼してる」

実は宇宙での戦闘行動っつてこれが初めてなんだよね。

アスランもイヴァンも心配性で、私をアメノミハシラから外に出さないんだもの。

「港から、出ます！」

「砲撃ロック解除！」

ザフトに我が艦が出る事を通達！」

「はい！」

さあ、いよいよ戦闘開始だ。

コズミック・イラ と私4

戦闘はあれからそんなに時間がかからずに終わった。

私達はコロニーから離脱して、即座に攻撃圏外と思われる場所まで離脱。

いや、一瞬代表どうしようかと思ったけど、私達宇宙オーブって半ば独立しているような位置にあるからなあ。

もし死んでいた場合は、運が悪かったと思って諦めて貰おう。って言うか、オーブの未来のためには死んで欲しいなあ。

なんかもう、セイラン宰相なんてカガリが問題行動を起こすたびに胃の辺りを押さえて辛そうなんだよね。

一応アルテナの水を処方して、胃潰瘍は防いでいるけど、胃炎は防げない。

キリキリと痛むと、悲しい顔をして栄養剤と一緒にアルテナの水を飲む姿ときたら！

頼むからもう少し真面目に仕事してやれと思う。

そりゃあ、国営企業のモルゲンレーテが大事なのは分かるが、人間はMS食うわけにはいかないんだよ！

食料の問題とか、移民の問題とか細々とした事を全て押し付けているもんなー…。

この間は差し入れた酒を飲んで愚痴ってたしな！。

「ユウナが不憫だ」

って。

ユウナは、カガリ代表の婚約者で、いずれ結婚して共にオーブを治める筈なんだけど、当のカガリがユウナを毛嫌いして、挙句の果てに恋人のアスラン・ザラを堂々と横に連れて歩くんだよ。

そう言えば、アスラン・ザラもその相手も婚約者があるのに、他の相手に現抜かしているしな！。

身分の高い人間って、そーいうところの教育はしてないのかな？
そんな筈はないと思いたいんだけど…。

幸いなのは、ユウナ自身はカガリの事を手のかかる妹ぐらいにしか思っていない事なんだよね。

これで好きだったりしたら、目も当てられない。

「アスラン様。ザフトのミネルヴァ艦より通信が来ています」

「？いでください」

メインスクリーンに、大きく写るザフトの白服を着た女の人の姿。
これが、ザフトの新艦の艦長か。

「こちら、ザフト艦ミネルヴァ。オーブのカガリ代表を保護した事をお知らせに参りました」

「ありがとうございます。現在、コロニーの中では通信が不能で心配しております。代表をシャトルでこちらへ輸送願えますか？」

「待て！」

私は襲撃した奴らをどうにかするまで帰らないぞ！」

艦長同士の会話に割ってはいるカガリ・ユラ・アスハオーブ代表。

ああ、元の字をつけてやりたい！

この、オーブの恥さらしがっ！！

お前は何回家出したら気が済むんだ！？

思わず胃の辺りをさすりながら、私は深い深い溜息をついた。

「私達はこれより襲撃した犯人達を追い、その捕獲もしくは破の任を負っています」

「重々承知ですので、カガリ代表をこちらに…」

「フレイ、一刻を争う事態なんだぞ!？」

何を考えている!？」

ブチ

「お前こそ何を考えているんだ!？」

一国の元首がすべき事は、その艦に搭乗して犯人逮捕を見届けることか!？」

違うだろ!

あなたがすべき事は即刻オーブに帰って、この機会に動き出すであろう連合の動きを鈍らせることではないのか!？」

「フレイ、気持ちは分かるけど落ち着け」

荒々しく肩で息をする私を宥める様に、肩を叩くアスラン。

実際、最近のオーブはセイラン達が上手い具合に、連合に近づいてそこそこの影響力を及ぼせるようになっていて。

対して宇宙オーブは、プラント寄りだ。

ようするに、大国二国の間で忙しく飛び回る蝙蝠のようなどっちつかずの状態なのだ。

実際、そういう国は多いのでまず目立たない。

今のオーブの国力では、目立つ事自体が厳禁なのだ。

下手に目を付けられると、何を要求されるか分かったものじゃない。

それに、元々中立ってそんなものでしょ。

「私は帰らんからな！」

「ちよ、代表!？」

ブチリ

小娘、通信切りやがった。

「上等だ、あの小娘」

「ほどほどにな。けど、代表が生存の現在、放って帰りたいが、そう言う訳にはいかないだろう。ミネルヴァの後を追う。ただし、距離を取り、こちらが攻撃された場合のみ反撃を許可する。他国の奴等つけ込まれる様な失態はするな」

「はっ！」

クルー達が敬礼をして、アスランの指示に従う。

「アスラン、多分もう一戦位ある筈だから、それが終了したらシャトルであっちに行き、カガリ私自ら捕まえてくるわ」

「道具は使っなよ？」

「アスラン・ザラならともかく、肉弾戦の実戦経験が無いお姫様に私が負けるとでも？」

伊達に長生きはしていない。

生粋の軍人には勝てなくても、元ゲリラ相手ならどうとでもなる。それに…。

「バレなきゃいいのよ、バレなきゃ…ククク」

首洗って待ってる、カガリ・ユラ・アスハ！

コズミック・イラ と私5

あれから予想通りアーモリーワンを襲撃した戦艦からの攻撃を受けた、戦艦ミネルヴァ。

私たちはプラントの人間ではないので、手出しは出来ないんだよねー。

ちなみに、今回の襲撃はリアルタイムでアマノミハシラへと伝えられ、そこから地上オーブにも伝えられている。

前回力ガリが戦艦の移動を拒否したのもしつかりと報告済みです。ウナト宰相、頭の血管がブチ切れないといいけど……。

「それにしても、慣れていないのか随分とお粗末な戦闘だったな」

先程の戦闘を録画したファイルを見ながら、アスランが言った。

「まあ、新設された部隊だからしょうがないんじゃないのー。実際、前回の戦争でプラントの受けた人的被害は大きかったでしょう？」

おそらく、今回艦に乗ってる人間は新兵が多いと思うのよね」「どこも一緒か」

ちなみに、オーブ兵のほとんどが連合の侵略によって死亡している。なので、戦闘経験の無い新兵が多いんだよね。

ソレを言うならば連合ぐらいしか、まともに戦争できる国ってないんじゃないのかな。

連合は地球最大の組織だから、人間の数も膨大だしね。

例え能力が高いコーディネーターも50人のナチュラルに同時に襲

われたら負けるしね。

所詮、戦闘は数なのだ。

そのそろえた多数の兵隊を正しく運用できれば、理論上では戦闘には負けないのだ。

世の中ハブニングは多々あるので、絶対とは言えないのがキツイ所だが。

「さてと。そろそろ行きますかね」

「馬鹿姫を迎えに行くのか？」

「うん。さすがに、ユニウスセブンの破砕作業なんて危険な所に連れて行かせるわけには行かないしね」

実際ウナト宰相から、首に縄をつけてでも引きずり戻してこいと命令が来たし。

多少手荒なことをしても、姪の命には代えられないので大目に見るとのお達しだ。

「分かった。小型のポッドを用意するからイヴァンに運転してもらえ」

「イエッサー」

無様な敬礼もどきをしてから、私はイヴァンと合流してミネルヴァへと向かった。

そう言えば、私はオーブ以外の船に乗るのって初めてなんだよね。基本的にオーブで引きこもり生活だからさ。

移動する場合にもミナやギナが一緒の場合が多いので、どうしてもオーブ艦での移動になるしね。

初めて見たプラントの戦艦は、ブリッジがオーブのものと同じで、あとはほぼ全て一緒でした。議長と艦長であるタリアさんに挨拶をして、カガリ姫を連れて帰る旨を伝える。

それと同時に、ウナト宰相からのお礼も伝えておいた。

でもさ、議長とタリア艦長のやり取りと言いか霧困気を見ると、この2人ってデキてないか？

なんか、目と目で通じ合うのを目の前でやられたんですけど……。

確か事前に調べてもらった資料では、タリア艦長って既婚で子持ちだった筈だよな。

不倫か……。いや、もしかしたら旦那さんは戦争で死亡したのかも。だったら、再婚すればいいのにな！。

さて、プラントの風紀の乱れはさて置いて、わがまま姫の迎えに行きますかね。

全く。予定な手間をかけさせないで欲しいわ。

「それがプラント全員の……！」

お、カガリの叫び声。

全く。どこでもトラブルを起こす人だ。

「はいはい。そこまですておいてねー」

パフンと問答無用で、貴婦人のたしなみをカガリの顔に吹きかける。

ちなみに、この薬は効力の調整をして眠り状態に陥るようになって
いるものだ。

カガリは力なくその場に倒れた。

慌ててそれを支えて、私の方に食って掛かるアスラン・ザラ。

ちなみに、暴力行為を起こそうとしたらそのままイヴァンに制圧す
るように頼んでいる。

「えーと、とりあえず（なんちゃって）代表連れて帰ってもいいで
すか？」

「あ、ああ」

カガリに食って掛かろうとしてたのが、相手が突然いなくなっ
てしまふ。まい呆然とした赤目の少年。

「いえいえ。どうも、うちの代表がご迷惑をおかけしたようで申し
訳ございません」

「いえ。こちらこそ、一部の者が心無い事を言いました事をお詫び
します」

金色長髪の少年が頭を下げた。

ソレを見て、後ろにいた整備服を着た子も慌てて頭を下げる。

「ちなみに、どんな事を言われたのですか？」

「……ユニウスセブンが地上に落ちたら厄介ごとが減る、と」

「……なるほど」

それはカガリでなくても過剰反応するだろうな！。

でも、宇宙に本拠地を置くプラントの人間としてはしょうがないの
かもしれない。

だって、彼らは地球に愛着が無いもの。

愛着がある所か、無理難題を押し付けてくる連合が幅を利かせている地球が滅ぶなんて、プラントの住人からしてみたら、こっそりと喜んでこそそれはしょうがないだろう。

たまたま、カガリが聞いていたからこの騒ぎになっただけで。

「プラントの方には地球は諸悪の根源かもしれませんが、地球に家族が居る者もいます。その事だけは気に留めて下さいね」

「……はい。すみませんでした」

整備服の男の子が頭を下げて、この場は無事に収まったのだった。

それにしても、気にかかったのは赤い目の男の子の事だ。

私がオーブからの来訪者だと知った瞬間、彼の瞳に憎しみの炎が宿ったのを私は見逃さなかった。

少し彼について調べてみたほうがいいのかもしれない。

コズミック・イラ と私6

カガリを部屋へと引きずり込んだ私は、睡眠状態のカガリの鼻に<ガツシユの木炭>を突っ込んだ。

「くさっ！ なにするんだ、フレイ！」

「おはよう、カガリ代表。で、何か言い訳はあるかな？」

笑顔で怒り心頭のカガリと対峙する私。

アスラン・ザラは眼中にありませんことよ。

「私の判断のどこが間違っていたんだって言うんだ！？」

「いや、間違いだらけだって。一国の代表がテロリストを追ってどうする」

実際、テロリストを追っているミネルヴァにプラント議長が乗っているとつのもおかしい話なんだけどね。

今の段階でさっさと小型シャトルなどに乗り換えて、プラントに帰りプラント内の舵取りをしなければいけない筈なのに。

まるで、今回のユニウスセブンの異変を予感していたような動きに、私は疑惑を拭いきれない。

そもそも、なんか怪しいのだ、あーいうキャラは。

いかにも、腹に一物持っていそうなキャラなんだよなー。

実はラスボスでしたって言われても驚かないね。

「仕方ないだろう。放っておくわけにはいかないのだから」

「いや、それならオーブ本部と連絡を取って、対策した方がいいと思うけどー。大体プラントに敵対するっておそらく連合の息がかか

っているだろうから、遅かれ早かれいつら地上に降りてくるし」

それを阻止できたら、テロリストの目標阻止にも役に立ちそうだし。

「……………」

「それに、カガリ代表は、もうちょっと代表としての意識を持って行動してください。たかだか整備員の一言に腹を立ててどうするんですか」

ここは、遺憾であると悲しそうな顔をするだけでいいんですよ、と言つとカガリが顔を顰めた。

「そんなシヨミみたいな真似出来るか！」

「政治家なんていかに自分を良く見せるかですよ。デュランダル議長を見なさい。上手でしょう？」

あの腹黒狸は、自分を良く見せるのに長けている。

彼は穏やかな穏健派と自分を評しているが、実は過激派とも繋がりがああるんだよねー。

そんな事全然おくびに出さないけれど。

ちなみに、オーブの政治家はこの辺りが下手だ。

有能なウナト宰相ですら、こちら辺はデュランダル議長に遠く及ばないと思う。

ウナト宰相もちゃんとやれば出来ると思うのだが、今のオーブではそこまで気を回す余裕がないのだ。

ほぼ一人で宰相府を切り盛りしているからな、彼。

今、ウナト宰相が死んだら地上オーブの全てが停止するね。

宇宙オーブは半ば独立しているし、有能な指導者がいるからなんとかなるが。

「……………」
「せっかくデュランダル議長と言う稀代の詐…もとい政治家がいる
のだから、少しは学びなさいな」
「……………ああ」

とてもじゃないが、かの歌姫を真似られたら困るしね。
彼女は政治家としての才能はあると思えないが、扇動者としてはす
こぶる有能なんだよねー。

どうして、コーディネーターはあそこまで彼女に熱狂するのだろうか？
遺伝子にそーいう要素が組み込まれているのか？

「さて。それじゃあ、帰るわよ」

「！？ ユニウスセブンはどうするんだ！！？」

「プラントに任せるわ。メテオブレイカーを準備するみたいだし」

私達の艦にもMSは積んでいるが、コロニーの残骸相手にMS一機
など役に立たないんだよね。

「私達もなにか出来ないのか？」

「何が出来るのよ？」

言ってみなさいよと先を促す。

「破砕作業を手伝うとか」

「どうやって？ メテオブレイカーもないのに？」

「そ、そうだけど…何か出来るはずだ！」

無理です。手段も方法も限定されている今の状況じゃ、一番良いの
は力ガリがさっさと地上に戻って、被害を受けた後の対処をする事

だ。

私の予想だが、ユニウスセブンは完全に砕くことは難しいだろう。何よりあれは大きすぎる。

メテオブレイカーを全て打ち込んだとしても、アレ程の大きさでは全て大気圏内で燃え尽きるのは難しいかもしれない。

「一応、私たちの方から宇宙オーブの司令部に報告しました。先程、アメノミハシラから破砕作業への援軍が派遣される予定との連絡がありました。なので、代表は安心して我が艦に搭乗、アメノミハシラよりエレベーターを使い、地上へ帰還して下さい」

そして、受けるであろう被害に対しての陣頭指揮を執るのだ！
それが多分ベストの筈だ。

「……わかった」

さすがに多少は政治について学んでいたのか、カガリは不承不承だが頷いてくれた。
さて、後は…。

「でさ、カガリ代表。先ほどはよくも通信切ってくれましたよね？」
「え？」

カガリが慌てて逃げようとするので、私は生きている縄を使う。
生きている縄は自動的に相手を捕縛する縄で、至極便利な一品だ。

「な、なんだこれは！？

か、体に絡み付いて……」

「うふふふ。大丈夫ですよ、危害なんて加えませんから」

私は懐からアードラの羽を取り出すと、ニヤリと笑った。

「ま、まさか…」

カガリは私の思惑をどうやら感じ取ったようだ。

「反省しましょうね、カガリ様」

「ひっ！」

私は羽をカガリ様のわき腹へと伸ばしたのだった。

コズミック・イラ と私6（後書き）

簡単アイテム説明

生きてる縄：その名の通り生きている縄。相手を傷つけないように捕縛するのに最適です。けど、本来の使い道は本などを縛ることだったりする。

コズミック・イラ と私7

あの後、アスラン・ザラがユニウスセブンの破砕作業の手伝いをなぜかデュランダル議長に申し出、許可された。

おい、このズラ野郎。あんた、自分がまだプラントの住民だと勘違いしていないか？

現在のあんたはオーブ在住のアレックス・ディノなんだっつーの。全く。議長にズラが破砕作業の手伝いを申し出たと聞いてびっくりしたよ。

ちなみに、カガリもびっくりしていた。

意思疎通の取れていない恋人同士だな、オイ。

「アスランを置いて帰るのか!？」

さて、私とイヴァンは、カガリを連れて宇宙オーブの艦へと場を移していた。

いつまでも、ザフトの艦のご厄介になる訳にはいかない。

「置いて帰るも何も、本来カガリ代表の護衛であるディノが破砕作業に出るのが、おかしいですよ」

アスランの言葉に、私とイヴァンとクルー全員は大きく頷く。

某ゲームでも思っただが、護衛とは護衛以外の仕事はしてはいけないのだ。

なぜならば、護衛とは重要人物を守るという大切な仕事だ。それは、片手間で出来る仕事ではない。

常に周囲に気を配り、護衛対象の動きを予測して動かなければならない。

それなのに、別の事までする余裕なんてないのだ。

「アレックス・ディノはカガリ様の護衛としては、失格と言う事です。後日、その旨をセイラン宰相より伝えられるでしょう」

「フレイ！」

「カガリ様。確かにユニウスセブンの破砕は重要とは言え、あなたの護衛も重要な任務なのです。それを理解していないのであれば、護衛から外されることもやむをえないかと」

むしろ、給料泥棒と声を大にして叫びたいぞ。

最近知ったんだけど、カガリのような要人SPの給料って一般の軍人より高いんだよ。

まあ、カガリは自身が富豪なのであまり意識してないだろうけど。

「それでは、カガリ様。アメノミハシラ経由でオーブ本国にお送りしますね。アスラン、お願いします」

「イワナガ、アメノミハシラに進路を取れ」

「はい！」

クルー達がアスランの指示に従って、忙しく動き出す。
これで、今回の私の任務は終了だ。

ズラ野郎は、頑張って破砕作業に勤しんでくれたまえ。

オーブ帰還時には、あんた護衛の任務から外されてるから。

実はウナト宰相に前々から、ズラをカガリの周囲から外してくれするように頼まれていたんだよな。

だって、歌姫一行ってカガリに対する影響力が強すぎるのよ。

この場合は、カガリが影響を受けすぎなのかもしれないけどさ。

しかも、良い影響ではなく悪い影響ばかりなのだ。

そのうち、ウチの新型MSを奪取して出奔なんてされたら目も当てられない。

早目に対処しておくに限るなって事らしいのだ。

とにかく、さらばだズラ野郎！

私は心の中でハンカチを振りつつ、遠く離れていくミネルヴァを見送ったのだった。

コスミック・イラ と私 8 (前書き)

今回もカガリアンチ風味アリ

コズミック・イラ と私⑧

アメノミハシラに到着した私達は、ユニウスセブンの破砕援護の軍からの報告を見た。

一応、文字だけの報告はアメノミハシラ経由で貰っていたんだけどね。

プラントが指揮したユニウスセブンの破砕は失敗に終わった。

アーモリーワンで略奪されたMSが、作業の邪魔をしたのが原因らしい。

今回の原因はテロリスト達によるテロ行動と判明。

テロリスト自体は撃破できたのだが、地球とプラントの間に大きな火種を残してしまった。

「テロリストがコーディネーターって言うのは考え物よねー」

私はミナの執務室で、執務に追われるミナを横目に<ロイヤルクラウン>を飲む。

ついでと言ってはなんだが、ミナのテーブルにも温めておいたロイヤルクラウンがあるのだけど、口はつけられていない。
勿体無いなあ……。

「そつだな。さて、どうするべきだと思う、フレイ？」

書類から顔を上げて私に問うてくるミナ。

「こーいう政治的な事柄って、私ではなくアスラン向きだと思うのだからねー」。

私は立体TVを通して流れるユニウスセブンの破砕時の映像を見ながら、

「中立国としてはいち早くこの映像を公開。そして、プラントが手を尽くした事を世界に発表しないとイケませんね。中立だからこそ、それが出来ると思いますよ」

連合側や連合の息がかかった所が発表するのは、きっと自国に有利なように編集しているだろうしねー。

こーいうのは早い者勝ちだ。

「手筈はすでに整えている。ユニウスセブンの欠片による電磁障害が収まれば、すぐさま放送できる」

「さすが」

うんうん。これこそ施政者のあるべき姿ってヤツだよな。

カガリもミナを見習ってほしいものである。

「フレイもご苦労様だったな。ユニウスセブン破砕後のミネルヴァの動向はコレだ。アスランに渡しておいてくれ」

「見てもいい？」

「ああ。状況の把握だけはしておいてくれ」

「りょーかい」

私はお茶を飲むようにだけ言うと、ミナの執務室を後にした。さて、自室に戻ってアトリエを起動させて籠りましようかね。そろそろ、新しいコスメ商品出したいからね。

研究にある程度時間を割かないと、どうにもならない。

「相手を軽く魅了する香水なんていいよね」

どんなものを作るか考えながら歩いていると、曲がり角で人にぶつかった。

「うおっ！」

「うわ！」

凄い勢いだっただのか、吹っ飛ぶ私。

無重力の中、私は壁にぶつかる寸前でなんとか手すりに掴まり制動をかけることに成功した。

「いったいなー！」

廊下は走るなって習わなかったの！？

「ちようどいい、フレイ！」

今すぐミナに地上に戻すように言ってくれ！

アスランが地上にいるんだ！」

誰だ、このオーブ首長様（仮）に現在の状況を教えたのは。私は相手を確認せず、その言葉だけで誰か分かりました。

「地上に戻ろうにも軌道エレベーターは使えないわよ」

ユニウスセブン落下の余波で、アメノミハシラの機能は停止している。

再開するにしてもきちんと整備をして安全を確かめなければ、とてもじゃないが使い物にならないだろう。

「なら、艦を貸せ！」

「余分な艦なんてないわよー」

「首長である私がこの緊急時にオーブに居なくてどうするんだ！？」

ズラ云々よりその言葉が先に出たら少しは考えたんだけどね！。

私に詰め寄り今にも首元を掴まんばかりのカガリの醜態。
いやはや、恋愛感情ってホント面倒なものよね。

「で、オーブで何するの？」

「は？」

耳をホジホジしながら、

「だーかーらー、地上で何するのって聞いているの」

「指揮を！」

「どんな？」

「どんなって、臨機応変なんだな！」

「具体的には」

「……………」

一つ一つ問い詰めていくと、カガリは黙った。

「ちなみに、現在のオーブの状況は知ってる？」

「知らない」

「知ろうとしなかったの？」

「オーブの首長様」

「お前達が私に教えないのが悪いんだらう！？」

「いや、カガリの部屋にあるコンピューターから、情報にはアクセスできるわよ。カガリ、首長のパス持っているでしょう？」

「一応宇宙オーブの機密事項にはパスがかかって見る事は出来ないが、カガリのパスだとかなりの情報は見る事が出来る。」

「そうなのか？」

「うん。最初に説明したでしょ？」

記憶を引きずり出すと、うん、してるしてる。

そもそも、報告されないと動かないって無いよ。

カガリは確かにオーブの首長だが、アメノミハシラにおいてはお客様なんだよねー。

だから、どうしても普通に報告はいかないんだよ。

オーブ本国と同じと思ってもらっては困る。

「ちなみに、私が知ってる情報だけどオーブ本国自体にはユニウスセブンの欠片は落下してないわ」

「そ、そうか」

「ただし、海に落下した衝撃による津波の被害はあるみたい」

「……………さすがに被害は全く無いわけではないのだな」

「うん。人的被害はほとんどないわね。ほら、国の再建時に避難経路とか色々見直して都市計画したでしょ？」

アレが効いたらしく、素早く避難できたみたい。軽い怪我人が出たぐらいね」

年寄りが端つて転んで骨折したぐらいか。

ちなみに、今回の避難経路はユウナが担当した所だ。いい仕事してるじゃないか。

「さすがに建物に全く被害がなかった訳ではないけどね。特に沿岸部は結構酷いらしいわ。って、そこまでが私に分かる部分ね。これを踏まえて、戻って何をするの？」

避難民に対する対応はウナト宰相達に任せていれば大丈夫。じゃ

あ、カガリはこの中で戻ってどうするの？」

「それは……」

「それは？」

「………私はアスランが心配なんだ」

ポツリとカガリが漏らした言葉。

これがカガリの本音なのだろう。

本当に恋する乙女なんだなあ。

個人的にはカガリはそんなに嫌いではないので、首長なんて座から降りて大学にでも通うといいのだ。

未熟なのに首長なんかしているから、色々と醜態をさらすんだから。カガリって確かまだ未成年だよな。

本気で、首長制問題ないか？

「どっちにしろ、もう少し気候や海が落ち着かないと艦は出せませんよ。流石に、兵士達に緊急時でもないのにそこまで無理をしろとは言えません」

「そうか。悪かった」

「まあ、もう少ししたら映像付きの通信が地上オーブと通じる筈です。それで、ズラもといアレックス・デイノの安否を確かめればよろしいでしょう。私からミナ様に進言しておきましょう」

「ありがとうございます、フレイ！」

「はい。それでは、失礼しますね」

私は駄々っ子を納得させて、その場を後にした。

コレぐらいで納得してくれるんだから、楽なものだ。

コズミック・イラ と私 8 (後書き)

簡単アイテム説明

ロイヤルクラウン：疲労全回復する脅威のお茶。ロイヤルの名は伊達ではない。

コズミック・イラ と私9

私は、南国特有の強い日差しの中にいた。

地上オーブでズラと連絡が取れたカガリは、少し落ち着くかと思いきや、逆に早く地上にも取る事を望んだ。

こっそりと盗聴していたら、セイラン家の悪口を言いまくること。いや、カガリの居ない状況下で、宰相であるウマトが政治を執るのって利になつていいると思うんだけどさ。

あまりにキャンキャン喚きたてるカガリに、呆れ果てたミナが私に頭を下げて地上までカガリを送って行ってくれと言が、さすがに仕事山のように溜まっていたので無理だと断った。

ミナは、私の背後にあった書類の山を見て納得したように頷いた後、

「悪かった」

と言つて、通信を切った。

やれやれ。仕事の続きをしますかね。

地上がある程度の落ち着きを取り戻した頃を見計らつて、オーブは全世界に向けてユニウスセブン破碎時の映像を流した。

今回の完全破碎がなぜ失敗したか、事細かに特番の中で語ってもらった。

こー言うのは一番最初に放送した物勝ちだ。

どうせ、連合は都合の良いように編集したものしか流さないのだから。

オーブが唐突に流した映像に世界は揺れた。

まず、テロリストがコーディネーターの可能性が高いのが一つ。そして、オーブの破砕援護部隊が偶然に拾ったこの通信。

『パトリック・ザラが取った道こそが、我々にとって唯一正しい道だったのだ!』

『我が娘の墓標、落としてやらねば世界は変わらぬ!』

テロリストはコーディネーターで、ユニウスセブンの犠牲者の家族だった。

ユニウスセブンは、ナチュラルにとっても顔を顰める行為だった。開戦はしていたが、何の前触れも無く核で奇襲攻撃をしたのだから、連合側は一部の兵の暴走だ、なんて言っていたけど誰が信じると言うのか？

どうせ、農業コロニーを作って食料の自給を始めたのが許せなかっただけだろう。

連合にとって、食料でプラントをいのように使っていたので、プラント側が食糧の自給が出来るようになったら、ますます連合に従わなくなる。

そう思ったからの凶行だった。

そして、世界はプラントVS連合と世界を二分しての戦いは激しさを増したのだ。

ただの独立戦争から、種族同士の争いへの変化へと。こうなると、どちらかが滅びるまで戦い続ける可能性が出てくる。

当然、ユニウスセブンの犠牲者家族は被害者だが、だからと言ってテロ行為をして良いわけではない。

テロは所詮テロでしかないのだ。

プラントはこの映像が放送された直後、すぐさま使われていた機体は廃棄処分したものだと言い、プラントの介入を否定した。

それを、連合が否定して今、再び緊張状態に陥ってしまった。

連合からは多少恨まれただろうけど、すぐさま戦争と言う状態は避けられた。

その間に、オーブは国の方針を決めなければいけない。

ミナギナ兄妹（姉弟）と話したが、どうやら地上オーブは連合と同盟を結ぶらしい。

けれど、そこは熟練した政治家であるウナト宰相の手腕。

同盟は結ぶが、未だ完全な復興にはほど遠いとして軍の派遣は同盟の条件には含まないようにするらしい。

要するに物資の運搬などは手伝うが、実際の兵力は出しませんよって事だ。

よく、こんな条件を連合が飲んだよなーと思ったわ。

よっぽど、オーブが敵に回ったら厄介だと思ったんだろうね。

だって、過去に自爆してるからなー。

しかも、当時の連合が欲しかった施設と心中だよ。

その後、大多数の国民は苦勞したんだけどね。

その時の苦勞を良く知っているのがセイランだ。
民に寄り添って、民と共に終戦を迎えたのだから。

宇宙に上がり、理念の為の戦争を続けたアス八では決してない。

まあ、役割分担だと言えばそれまでだけどね。

「さて、世界はどう動くことやら。その前に仕事、全然減らないわあー」

戦争も間近なのに、綺麗になりたいという女性の欲望はとどまる所を知らない。

私の仕事は一向に減らないのだった。

ヤバイ、私もそろそろロイヤルクラウンが欲しいかも……。

コズミック・イラ と私10

結局、プラントと地球連合は開戦になった。

初っ端から、ニュートロンジャーマーキャンセラー（以下NJC）付きの核弾頭をプラントにぶち込むと言う、荒い方法で。

私は、宇宙オーブの偵察ユニットから送られてくる映像を見ながら、溜息をついた。

ミナがお前も見ていたほうが都合が良いと、わざわざ回してくれているのだ。

しかも、リアルタイムです。うれしー（棒読み）。

けれど、核はプラントに到達する前にプラントの新兵器を前に沈んだ。

NJCは先の大戦で、連合に渡っていたからきちんと対抗策を考えていたのだろう。

宇宙オーブも独自の技術開発をしていたので、まあ不思議は無いだろう。

連合も何かしら作っていてもおかしくは無い。

「フレイ、どう思う？」

戦争の映像が小さくなり、代わりにスペースにミナの顔が映る。

「あー、あれだ。報復されるよ、コレ」

自分達の居住空間に核を打ち込まれたのだ。

核に対してアレルギーのあるコーディネーター達はすぐさま報復に移るだろう。

例えば、地球の都市に向けての核攻撃とかさ。

連合も文句は言えまい。

同じ事をされたくなければ、しない方がいいのだ。

「困ったものだな。プラントも、連合も」

「こちらとしては巻き込まれたくないのですけどね」

「こちらとしても一緒だ。再び戦争となったらオーブが巻き込まれる」

ホント、いい加減にしてほしいものだ。

コーディネーターに拒否反応を示すブルーコスモスに。

姿形も思考もほとんど一緒なのだから、受け入れればいいのだ。

どうせ、ナチュラルと混血をしなければ種として存続できないのだから。

今のプラントは混血政策を取っていないのだから、笑いながら見ていたらいいのになー。

「そう言えば、セイラン達は連合との同盟締結をカガリに認めさせたいらしい」

「おー、やったね。地球では、いまだに連合が強いからね。ある程度のパイプは持っているに限る」

オーブはマスドライバーを持っているので、絶対に巻き込まれるのだから。

中立を目指すのならば、目立たないほうがいいのだが、マスドライバーがある限りどうしても目を引くのだから。

ならば、開き直るしかない。

中立を果たしたいのならば、両国に対して平等に輸出をして死の商人化した方が、安全なだけだね。
恨まれるけどさ。

そんな事をミナと話していたら、再度画面が変わりピンクの髪の少女が出てくる。

「ラクス・クラインじゃないよね？ 確か、彼女はオーブのマルキオ導師の元にいるはずだし」

先の大戦の立役者として名高い、プラントの平和の歌姫様は、現在恋人の療養に付き添ってオーブに滞在中だ。
ええ、停戦後に必要な事を全て投げ打ったんですよね、彼女。

そして、カガリの弟やらとのんりすごしている筈だ。

そして、始まるプラントに向けての演説。

うん、けどこれはラクス・クラインの演説ではないな。
評議会が対応を考えているので、信じて待つていてなんて絶対に彼女は言わない。

ラクス・クラインならば、「もう一度、考えましょう。復讐に復讐を求めても新たな戦いの連鎖が生まれるだけです」って言うだろう。

ラクス・クラインは、人を導くことは無い。

彼女は、問題の提起をするだけだ。

私は、問題の提起はしましたよ。後は、自分で考えなさいと任せるのだ。

ある意味とても無責任と言えるかもしれない。

彼女は自分の答えを明かさないのでから。

それで、自分の考えた答え以外を導き出すと、潰しにくるのだ。

先の大戦では、それでパトリック・ザラを潰した。

まあ、世界の終焉を迎えなかっただけ、その時は良かったけどね。

今回も同じようにいくかしら？

それにさ。

「さすがに、偽者だわ、あれ」

「ほう、どこで見破ったの？」

「まず、演説。次にあのカラダ」

上半身しか写っていないが、私達の知っているラクス・クラインならば絶対にありえないもの。

わずか、2年であそこまでメリハリの効いたボディになるものか。特にむねっ！

私が握っていたペンがパキリと音を立てて、二つにへし折れた。いかんいかん。つい、力が入った。

「……なるほど。さすがフレイだな」

「喧嘩売っているなら、高値で買うわよ。具体的には、化粧品と薬の販売ストップ」

「それは勘弁してくれ」

私は切々とプラントの人々に訴える偽ラクスを見ながら、冷たくなつたロイヤルクラウンを飲み干した。

コズミック・イラ と私 11

地上のセイランからアスハと連名で封書が届いた。中を開けて見ると、結婚式の招待状。

私は、地上オーブへと通信を開いた。

通信先は当然、セイラン家だ。

まず執事が出たので、ウナトかユウナへの取次ぎを頼む。しばらくして、画面が切り替わりユウナが現れた。

「結婚おめでとう、ユウナ。と言うべきなのかな？」

「ああ。今日、招待状が届いたんだね。日程的には辛いと思うけど、式に参加してくれたら嬉しいよ。式が終わり次第同盟の締結になるからさ」

それにしても、よくカガリが結婚を承諾したなと思った。恋人がいるので、結婚は嫌がると踏んでいたんだけど。

それを聞いてみると、ユウナから意外な答えが返ってきた。

「アレックス君がいないからね」

「は、ズラいないの？」

「とうとう先が無い関係に絶望して、オーブを出て行ったの？」

だって、このままだとズラは間男一直線だしね。

それは、カガリには耐えられないだろう。

ちよっと思惑回路が爛れていたら、恋と結婚は別物だと考えるんだけどね。

「違うよ。カガリの特使としてプラントに行ったよ」
「プラントに？ 今更？」

戦争が始まっているのに、プラントに戦争の愚かさを訴えに行っただらしい。

「核打ち込まれてなお戦争しなかったら、プラントが舐められるわよ」

「ああ。行った時点では戦争状態では無かったからね。さすがに、戦争状態だったらいかに中立国の特使だとしてもプラントには行けなかったよ」
「なるほど」

それにしても、随分とめでたい考えだなー。

父親が評議会議員で、自分もザフトの赤服だった頃なら多少の影響力もあったかもしれないが、今のズラには影響力はない。

ラクス・クラインのような民衆に訴える活動をしていなかったせいかな、どうしても地味なんだよねー。

「ユウナはズラがいない時を見計らって、弱気になったカガリを丸め込んだって訳か。卑怯ね」

「なんとも言えはいいよ。昔に比べてかなり劣ったとはいえ、アスハの名前が及ぼす影響は大きいからね。大事な同盟の前に、国内の意思を統一すると言う点において、僕とカガリの結婚は最適だからね」

「そこは嘘でも、カガリを愛してるぐらい言いなさいよ。駄目なオトコね」

「他人しか見てない女に何を期待しろと言っただい？」

カガリは、僕を全然見てないよ。それに、アスハ派の言う事を真

に受けて、僕を無能者とすら思っているんじゃない？」

ユウナが無能ねー。

カガリは忘れているかもしれないが、オーブが滅んだ後オーブの民を守ったのはセイランなのだ。

その時は、国の危機と言う事でユウナも表に立つてはいないものの、父親であるウナトを補佐していた。

きちんとウナトを補佐できたユウナが無能な訳はないし、現在も復興の為に手を尽くしている。

少し調べれば、ユウナが無能かどうか分かりそうなものなんだけどもね。

「まあ、結婚してから少しずつ教育していくよ。今のカガリは自分の耳に心地よい言葉しか受け取れないからね。自分の現在の状況を正しく把握させて、為政者として相応しい教育を施すのが僕の役目だと思うよ」

「そこまでしなくても、あんたがアスハに養子に入ってしまったばいいのに。んで、カガリをファーストレディとして教育するほうがきつと楽よ」

ファーストレディも結婚大変だけど、為政者はそれ以上に大変なんだよねー。

「まあ、どうにもならなかったらそれでいくよ。それに、僕はセイランだからね。弟妹がいない状況下で養子には出れないよ。フレイ達が、セイランに養子に来てくれたら別だけど」

「めんどいからパス」

「言うと思ったよ。じゃあ、そろそろ出かけないといけないので、終わらせてもらおうよ。アスラン達にもよろしく言うておいて。同じ招待状を出しておいたからさ」

「りよーかい」

通信が切れて、ユウナの顔が消えた。

さてさて、キリがいいところで仕事を終わらせて結婚式の準備をしましよつかね。

多分同盟国である連合の人も参加するのだろうか、変な格好は出さないし。

ドレス、新しいの作るかなあ……。

染めに出した国宝布あったかなあ……。

コズミック・イラ と私12

時は流れてユウナとカガリの結婚当日。

私とアスラン、イヴァンとミナはオーブへとやってきていた。

情勢が許すのならば、ギナも来たのだろうが、さすがにこの状況下でミナとギナが同時にアメノミハシラを離れるわけにはいかない。なので、双子の間でジャンケンをして、勝ったミナが地上に降りたのだ。

朝、私とミナはお抱えのヘア・コーディネーターに髪の毛と化粧をしてもらい、ドレスに身を包む。

私は<国宝布>を<ロクフォゲル染料>で染めた上品なピンクのドレスを着ている。染めた布を一流のデザイナーに任せたのが良かったのか、今の流行を取り入れたドレスだ。

ミナのドレスも、一流のデザイナーのデザインのドレスだ。

錬金術で作ったアクセサリーを互いにつけ、高いヒールの靴を履いたら、準備の完了だ。

それにしても、いつも思うのだけれど、女性のヒールって歩き辛いと思う。

何か事が起きたときに、絶対身動きが取れないと思うんだよね。かと言って、この格好にヒールを履かないと変だからなあ……。

いつも、ペったんこの靴かローヒールの私にしてみたら、このハイヒールはバランスを取るのが難しい。

思わず、エスコートのイヴァンの腕に縋ってしまう。

「フレイ姉、大丈夫？」

「び、微妙かな。支えよろしく」

ちなみに、アスランはミナをエスコートしている。

さすが騎士という職業についていただけあって、中々堂に入ったエスコートっぷりだ。

ミナもきちんと淑女然としている。

私とイヴァンはそれと比べたら場違いな一般市民だろう。

「さて、そろそろ行かないと間に合わないな」

ミナが細い腕に巻かれた小さな腕時計を見て、時間を確認した。

「結婚式のパレードがあるからね。早く行くに越した事はないよ。途中、道路規制もあるだろうからね」

まあ、道路規制はミナが自分の名前を出せば通してもらえと思うけど。

目立つ事をするのもなんなので、私達は早目にホテルを出ることにした。

ミナの場合、サハクの別邸が地上にきちんとあるのだが、朝に私達と合流するのが面倒だと言って、私達と同じホテルに泊まったのだ。ホテルの支配人は、五大氏族の当主が泊まるとあってガクブルしてたけど。

まあ、一流と言ってもいいホテルだから、何も粗相はなかったし。

それに、ミナは存外身の回りのことには煩くないんだよね。不便がなかったらいいらしい。

反対に煩いのはギナの方だ。すつつつごい神経質なのだ。

正直神経質すぎて、ついていけない。

今回の結婚式に出るのが、ミナで助かったよ、ホント。

私たちは、大きな黒塗りの車（現代で言うロールスロイス）に乗って、式会場へとやってきた。

予想通り道路は、カガリのウェディングドレス姿を一目見ようと、オーブ中から集まった市民でごった返していた。

会場は屋外で、でっかいハウメアの像が立っている。

この像の前で、永遠の愛を誓うのがオーブでの結婚の儀式だ。

ウナト宰相が、招待客に囲まれて色々とお祝いの言葉を貰っていた。オーブの五体氏族もいれば、連合の高官、さらには交流のある中立国の方々など、バラエティに富んでいる。

よくもまあ、あれだけの短い期間でこれだけの招待客を揃えられたものだ。

そして、これだけの人脈を持つウナト宰相に感心した。

私達も祝いの言葉を述べるのがマナーなので、他の人々と一緒にウナトへと接近する。

すると、ウナトはすぐに私達の姿に気付いて、話していた人に詫びを入れつつ、私の方へとやってきた、

「ユウナの結婚、おめでとう。末永く幸せが続くように願っているよ」

ミナがまず祝いの言葉を述べた。

「本日はおめでとございます、ウナト宰相。次はお孫さんですね」「それは、ちょっと気が早いと思うけど……」

アスランがぼそりと呟いた。
いや、政治的にはさっさと子供を作って、セイランとアスハが一つになったとアピールした方がいい。
アスハの支持者って、軍とモルゲンレーテに集中しているから、クーデターを起こす可能性があるのだ。
得に軍関係のセイランの支持率の低さは、目を見張るものがある。
軍関連の予算、削りまくっているからなあ。

現在のオーブでは、過去のウズミ時代のように潤沢な軍事予算は難しい。
税収自体が比喩にならないほど低いのだ。

正直私としては、技術立国としてより観光立国にした方がいいかも、と思わなくもないんだけどね。
下手に技術を持っているから、目をつけられる。
まあ、難しい問題だね。

強ければ恐れられ、弱ければ侮られる。
何事もバランスが大事、と。

さて、どうやら今日の主役が会場に着いたようだ。
さあ、結婚式と言う茶番の始まりだ。

コズミック・イラ と私13 (前書き)

ユウナに微妙に補正が入っております。
ユウナが嫌いな方は要注意。

コズミック・イラ と私13

一番最初に異変に気付いたのは、当たり前のようにイヴァンだった。

「フレイ姉、なんか駆動音がする」

静粛な空気の中執り行われている式の最中に、イヴァンが私に耳打ちをしてきた。

「駆動音？ なんの？」

顔を寄せ合ってこそこそと話す私とイヴァン。

周囲は何コイツ等と言うような目で見てきているが、気にしないようにしておく。

「……………戦艦の音じゃない。MS…しかも、出力が大きいMS。しかも、飛行タイプ」

じつくりと聞いたイヴァンがそう断言した。

「いや、戦艦も微かに聞こえた……………聞いたことがある」

ようやく私の耳にもMS独特の音が聞こえてきた。

「フリーダム！」

イヴァンがようやくMSの音を思い出し、立ち上がって叫ぶのと同じ時にMSが空から降ってきた。

いや、正確には降り立ったのだ。

花婿と花嫁が居る祭壇の前に。

人々が席を立ち上がり、逃げ出す。

ウナト宰相とミナが客人たちを誘導していく。

MSが近くに降り立ったために、背中 of 排気部分から出てくる風で吹き飛ばされそうになる私。
立っているのが辛い風だ。

普段ならばもう少し踏ん張りが利くのだが、慣れないヒールの為によくよるけて倒れそうになるのを、アスランが支えてくれた。

バタバタと長いドレスの裾がたなびく。

「イヴァン、ユウナとカガリの確保！」

「了解！」

イヴァンが私の指示に暴風の中を駆け出した。

私も前に出たいが、とてもではないがこの風の中では無理だ。

私の指示でイヴァンが二人を確保するより早く、フリーダムの腕がカガリを掴み、持ち上げる。

「撃つな、カガリに当たる！」

発砲しようとした警備員をユウナとウナトが制する。

彼らの持っている武器では、MSの…しかも、ガンダムには通用しない。

けど、フリーダムがどうして此処にいるんだ？

フリーダムは先の大戦で大破して廃棄したと、ユニウス条約を締結

したおりに聞いた。

ちょうどユニウス条約で核動力のMSの製造・運用が禁止されたので、誰も特に突っ込んで聞くことはなく終わったのだ。

それが、どうして現在、オーブにあるんだ!?

確か、フリーダムのパイロットはカガリの双子の弟だったはずだ。カガリはウズミの養女となって、アスハの籍に入ったのだが、弟はそうではなかった筈だ。

名前は確か……。

「キラ・ヤマト…何を考えてる……」

誰にも聞こえないように、自分の思考を纏める為だけに声に出す。

フリーダムのコックピットが開き、中からノーマルスーツに身を包んだパイロットが出てきてカガリをコックピットに内に引きずり込んだ。

カガリは抵抗らしきものをしている。

どうやら、今回のことはカガリは知らなかったようだ。

「ダメだ、カガリ! 行つてはダメだ!」

ユウナが手を伸ばして、なんとかフリーダムにすがり付こうとする。それをイヴァンが押し留める。

いま、この状況下でユウナが死んだ場合、取り返しのつかないことになる。

声が聞こえないのか、無視することに決めたのか、フリーダムが飛び上がった。

着陸の時とは比べ物にならない風圧に、一番近くに居たユウナとイヴァンが吹き飛ぶ。

かろうじてイヴァンがユウナを庇って、したたかに床に叩きつけられ、床を転がる。

けれど、それを見ていた私もアスランに庇われながら、床を転がった。

「軍に連絡して、フリーダムを逃がすなと伝える！」

ちっ、どうしてこういう時に私達はMSを宇宙に置いて来たんだ！」

ガツンとミナが手近にあった物を殴りつける。

普段なら八つ当たりをしないミナが、八つ当たりをしてしまうほど今の状況は最悪だった。

国家元首の結婚式と言う国の威信をかけたイベントで、主役の片割れが浚われたのだ。

当然、今回は来賓として様々な国の人々が来ていたので、この醜態はすぐに広がるだろう。

呆然として床に座り込むウナト宰相。

その姿は結婚式前よりも老けて見えた。

そして、主役の片割れのユウナはと言うと、床に転がった体勢のままフリーダムが去った方向を睨みつけている。

強く握り締めた手で、床を一発力任せに殴り、次に自分の頬を叩く。そして、呆然としている父ウナトの所まで行くと、

「父さん、呆然としていないですぐに動かないと！」

「ユウナ、国の面目が…オーブが…」

「国のトップが浚われたんだ！」

きつちりと対応しないととんでもない事になる！

幸いミナさんが軍に指示を出してくれた。僕達はマスコミを当たろう。式の後の披露宴にマスコミの取材を許可していたせいで、マスコミが詰め掛けているんだよ。今回の一件は隠せないよ。

だから、カガリが誘拐されたと発表しよう。オーブの面目は潰れるかもしれないが、それしかないよ！」

地球連合との同盟にこの一件がどんな影響を与えるか…。

せっかく、セイランが頑張ってお膳立てをしていた事が、フリーダムのせいで全てパアになった瞬間だった。

「オーブの代表が浚われたので、父さんを臨時の首長にするように会議で決めないと。それと、父さんはカガリ奪回の指揮を取って。

僕は連合との同盟締結の方に専念するから。連合との同盟は、今のオーブを守るためには必要なことなんだから！」

「ユウナ……。そうだな、いつまでも呆然としてはいられんな。フレイ、悪いがアス八邸への報告を頼む。現在を持って、ユウナを一時的にだがカガリの婿としてアス八に移す、と伝えてくれ」

「アス八に移すのですか？」

「ああ。アス八の権力を…正確には金を押さえないと、最悪キラ・ヤマトにアス八の力を使われる恐れがある。世間知らずのカガリを言い包めるぐらい、歌姫にはお手の物だろうからな」

確かに。

今回の一件はおそらく計画的だろう。

「それから、一応プラントに連絡してくれ。フリーダムの事だけをだが」

「プラントにですか？」

「ああ。連合にもだ。必要ないかもしれないが。ユニウス条約違反のMSだ。報告して当然だ。あのMSは危険物だからな」

「了解です」

「それにしても、どこからフリーダムなんて引っ張り出したのだから……」

ブツブツ言いながら、ウナトはユウナと共に会場から出て行った。来賓の方々はすでに避難済みなので、今この場に居るのは私達と後始末の人だけだ。

私はウナトに頼まれた事を果たすために、アス八本邸へと向かった。今回の式の為に、ユウナがカガリの好きな花をふんだんに飾らせていたが、それは無残にもフリーダムによって散らされてしまった。

それを見て、私は眉間に皺を寄せて、アスランとイヴァンを引き連れて、出て行った。

コズミック・イラ と私 14

あれから、私はアス八郎に行き、事の顛末を報告した。
アス八郎にはカガリの乳母の女性と、執事が取り仕切っているらしく、慌てるアス八郎の人々を見事に纏めてあげる。

私は、カガリが居ない間ユウナがアス八郎にて政務を取る旨を伝え、眉を潜める2人。

「まだ、結婚もしていないユウナ様をアス八家の当主として扱えと？」

「そんなことできる訳がないでしょう！」

アス八家の当主はカガリ様ただお一人ですわよ！」

激昂する乳母を、執事が抑える。

「式は途中で中断されましたが、婚姻届はすでに提出しております。だからこそ、カガリ様が誘拐された今、ユウナ様の下でカガリ様奪還の手伝いをして下さいと言っているのです」

「嫌がるカガリ様から無理矢理」

「今回の婚姻は、カガリ様のご了承の筈です。無理矢理結婚をしたと言つのは、アス八に仕える人間としての見識ですか？」

乳母の言葉を被せるように発言する。

例えズラが居ない間の不安定な状態のカガリだったとしても、決断をしたのはカガリなのだ。

なので、無理やり結婚したなんて言つのはありえないのだ。

どうやら、カガリのあのような性格は、この乳母によるものが大きい

いのかもしいない。

まったく。死んだ人間を悪く言うのは嫌だけど、ウズミは何を考え
てカガリに教育を施したんだ？

首長として、もしくは上流階級の人間としての教育はまともに施し
ておらず、ただオーブの理念のみを教えたのか？

それとも、MSの操縦なんて上流階級の子女には必要のない事を重
点的に教えたのか？

もしくは、元々の素質なのかしらねー。

「ユウナ様のアス八家入りは了承いたしました」

「それは良かった。では、ユウナ様が後ほど参られましたら、よろ
しく対応してください」

アス八家当主代理として、ユウナにはカガリとほぼ同じような権限
が与えられるだろう。

それを表立って、抗議することは彼らには出来ない。

なんと言っても、籍はきちんと入っている。

戸籍上では、カガリ・ユラ・アス八はユウナ・ロマ・セイランの妻
なのだから。

さて、今から宰相府に戻って報告をするか。

宇宙に戻るのはいそれからだな。

状況把握の為につけられたアス八家のTVでは、ウナト宰相がカガ
リが式場から誘拐された事を発表していた。

宰相府に戻ると、ミナとウナトが顔を突きつけて話していた。私が入室すると、2人は私の方に視線を向け、頷く。あ、なんか嫌な予感。

「フレイ、悪いが当分は地上に居てくれないか？」
「え？」

どう考えても、地上はこれから色々と忙しくなりそうだが、私としてはさっさと宇宙に戻って、自分の会社に専念したいんだけど…。

「宇宙からも多少は人手を回すが、正直そんなに回せない」
「そりゃ、そーだろーねー」

「ああ。だから、悪いとは思うのだが、少しの間地上でウナトとユウナの補佐に回ってくれないか？」

ミナの言葉に考え込む私。
それに付け加えるかのように、ウナトが口を開いた。

「正直、私一人では今回の一件は対処できないのだよ。連合との同盟、カガリの行方。どれをとっても片手間にと言うわけにはいかな
い」

「ユウナが居るでしょ」
「ユウナでは、経験が不足しておるよ」

確かに、結婚式場では妙にやる気を見せたユウナだが、彼の實力では空回りする部分もあるだろう。
特に、連合の海千山千との交渉は、彼には少々荷が重い。
正直、ユウナにはカガリの搜索の方に回って欲しいものだけど…。

「……………」
「宇宙からはアスランとイヴァンの2人をお前の指揮下に回す。宇宙で出来るのは、それぐらいだ。大きく兵を地上に派遣して、プラントを刺激できない」

確かに宇宙では独自にプラントに繋ぎを取っている。

その状態で、地上に兵力の派遣なんて出来るものではない。

「なので、誰かがユウナのフォローをしないといけない。そうすると、フレイぐらいしか正直思い当たらないんだ。軍部の人間はアス八派の人間ばかりだからな」

「アス八は軍とモルゲンレーテに人気があるからね」

だからこそ、経験不足のカガリが首長なんて地位につけたのだが。

「了解。ちなみに、期限はいつまで？」

私も仕事があるから、いつまでもユウナの手伝いをする訳にはいかないわ」

「今回の件が一段落するまでだ」

「長くかかりそうじゃない、ソレ…」

私は溜息をつきつつも、了承の意を告げた。

「それで、カガリ捜索はどれぐらい進んでいるの？」

「逃げられたよ」

「はあ！？ 軍は何を…って、そういう事か。無能どもめっ」

どうやら、アス八派の軍人がカガリがフリーダムで連れ去られたのを、ただ見送っただけだった。

拳句の果てに、敬礼までしていたという報告すらあつたらしい。

どうやら、カガリがユウナとの意の染まらない結婚をするよりか、逃げ出してくれた方が良かったらしい。

「なにそれなにそれ！」

「軍人どもは文民統制を何だと思っているのよ！」

近代国家では、軍の統治は政府が握っている。

なので、戦争をするかしないかは軍ではなく政府が決めるのだ。

それを無視すると言う事は、軍を政府が把握できていないと言う事。

「ほんつつつとに軍はアス八に対して甘いわね」

「仕方あるまい。先代が軍を甘やかしすぎた。優れた兵器が数多く配備されて当たり前の状況下であって戦前と軍の規模を縮小した現在では、どちらがいいかは分かりきったことだろう」

「軍を強化しようにも、金がないって言うのに。軍人どもは……」

「一度オーブの財布を見せてあげたいものだ。」

「一体どこに戦前と同じような軍隊を養える予算があるというのだ。」

「士気もあるから大々的に処罰するわけにもいかん。さすがに、この状況下でユウナに任せるわけにいかん」

「だね……。了解。けど、報告はこちらにもあげておいてね」

「ああ。それと、これはフレイには知らせていなかったのだが、最近マルキオ導師の住宅が、MSによって襲撃されたようだ」

「は？」

これは、完全に寝耳に水の話だった。

コスミック・イラ と私15

「オーブ軍、直ちに戦闘を停止せよ！軍を退け！」

ダーダネルス海峡に、よーーく聞いた事のある声が響いた。

空中にプカプカ浮いている赤味があったガンダムタイプの機体
ルージュストライク。

それは、オーブでは良く知られているオーブ国首長カガリ・ユラ・
アスハの搭乗する機体。

彼女は、先の大戦でコレに乗って駆け抜け、プラントの歌姫と共に
戦争を終結に導いた。

これが、世間一般の評価だ。

ようするに、あの機体はあのバカガリの機体なのだ。

そして、聞こえた来た声もカガリのもの。

「フ、フレイ……」

ユウナが困惑顔で私を見ていた。

本来ならば総指揮官のユウナは、地上オーブの艦に搭乗しないとい
けないのだが、私を地上オーブの艦に乗せるのを嫌がったアスラン
が、ギナとミナ兄弟にかけあって、ユウナ諸共自分の艦に乗せたの
だ。

「誰が沈みそうな艦に、最愛の妹を乗せますか」

だそうで……。

地球連合への援軍として要請されたのは、結構な大軍だったんだけどその辺りは交渉して今回の戦艦1隻、巡洋艦3隻となりました。連合は空母を希望していたんですけどねー…空母は高いんだよ。

ちなみに、私が乗っているのは巡洋艦クラスです。

正確には巡洋艦じゃないんだけど、サイズ的にはそれが一番ピッタリだからねー。

戦艦にはアスハ派の人間を突っ込んで纏めました。

もしもの時は盾にして使い捨てます。

私は思わずorzの姿勢になってしまったが、その間もカガリからの全周波通信は続く。

緊急通信を使っているのか、顔が見えないのは幸いだった。見えたら、通信開いて罵声を飛ばしている。

「現在、訳あって国もとを離れてはいるが、このウズミ・ナラ・アスハの子、カガリ・ユラ・アスハが、オーブ連合首長国の代表首長であることに変わりない！」

その名において命ずる！オーブ軍はその理念にそぐわぬこの戦闘を直ちに停止し、軍を退け！」

あんのバカ女あああああ。

てめーがとんずらしてから、こっちがどれだけ苦労して地球連合と同盟結んだと思っていやがる！？

連合高官の嫌味や圧力に耐えて、それでもなんとかオーブに有利なように交渉を進めて……さらには派遣する兵の編成で何日徹夜したと思っていやがる！？

私の胃と肌はボロボロよ。

しかも、しかもこんだけ働いておきながら無償ですわよ!？
ミナとギナが、友人が頑張っているのに金寄せせなんて言えなかつた私がいけないんだけど！

あまりにも気の毒に思ったのか、ウナト宰相が少しだがと言って自分のポケットマネーからお小遣いくれたわよ！

しかも、いつの間に持ち出していたんだあの機体！

あの機体はオーブの税金で作っていたんだ。返せ、この税金泥棒！

「フレイ、全部ダダ漏れだよ」

アスランが乾いた口調で言った。

カガリの演説の最中、地球連合からの通信が入った。

カガリは全周波で通信をしているので、彼もまた通信を聞いたのだろつ。

うつつ、胃、胃が……胃薬どこだっけ？

『ユウナ・ロマ・セイラン。これはどういうことですか？』

あれは何ですか？本当に貴国の代表ですか？』

「う……あ……」

始めて見た時は笑いを堪えるのに苦労した、仮面を被った指揮官。なかなか有能らしいが、いまだにミネルヴァが落とせない時点で果たして本当に有能なのだろうかと少々疑問が残る。

そもそも、欠陥の多い強化兵士なんて果たして役に立つのかが大いに疑問だ。

ユウナが助けを求めるかのように私を見る。

確かにこの状況では、ユウナに仕切れと言う方が無理だ。

ユウナは平時では無難にこなせるが、非常時にはあまり有為な人材ではない。

こーいう事態はどちらかと言うバカガリの方が得意なんだ。

そーいう所は、一応買っていたのよね。

「確かに、あのMSといい声といいウチのオーブ代表ですね」

「同盟は破棄、と言うことですか？」

「いいえー。知っての通り、我が代表は結婚式会場から誘拐されて、現在オーブではウナト宰相が臨時元首となつて、オーブを統治しています。おそらく、アレはテロリストに洗脳されたのでしょうか」

「フレイ!？」

下手に隠したらバレた時に困るので、カガリが結婚式の最中に誘拐されたと言うのは公表しました。

ついでに、誘拐したのが核搭載のフリーダムだとも公表済みさ。

核搭載のMSは、ユニウス条約で存在自体が禁止とされた兵器だ。

ユニウス条約違反として、全世界に向けて公表。

『ほう』

「ウチの代表はこちらで抑えます。そのうちにミネルヴァの撃破をして下さい。幸い、AAがミネルヴァの主砲を潰してくれましたからね。今なら大分楽に勝てるでしょう」

『信じていいのかな?』

「同盟は守りますよ。裏切られなければ」

『……いいだろう。あちらの艦とフリーダムは任せたぞ』

「はい」

切れる通信。

「アスラン、全軍に通達。目標をAAとし、ストライクルージュの確保を。イヴァン、ギナ準備は出来ているわね？」

「任せて、フレイ姉！」

「出撃準備は完了している」

「フリーダムを押さえて。多分、2人ぐらいしかマトモに相手が出る人はいないわ」

核が搭載されているMSには、電池切れが無いし、パワーも桁違いだからね。

「核爆発されたら厄介だから、手足を狙ってちょーだい」

「了解！」

「発進シーケンス作動します！」

管制担当の兵士の声が、マイクを通じて響く。

さーて、バカ娘にオシオキと参りましようか！

コズミック・イラ と私16

イヴァンとギナが飛び立ち、それと連動してアスランがAAへと攻撃の指示を出す。

配下の巡洋艦二隻が、主砲や副砲を撃ちながら、AAとの距離を縮めていく。

本来ならば、その先頭に立たなければいけない戦艦の動きは他の二隻と比べると明らかに遅い。

「戦艦イナバに通信を開け。連動して動かないと、巡洋艦二隻への負担が大きい。AAは作ったのは先の大戦末期でも、現在でも通用するポテンシャルを持っているからな」

確かに、大戦末期にオーブで作られたAAは現在でも十分使用可能な武装を兼ね備えている。

切り札として、作ったからなー、アレ。

ほら、ガンダムの木馬と似たような状況下だったし。

「通信、開きます！」

「ユウナ様！なぜ、攻撃なさいますか！

あれにはカガリさまが乗っているのですよ！？」

イナバ艦長の、トダカー佐がアップでそう怒鳴ってくる。

こらこら、腰が引けてるぞユウナ。

「何を馬鹿な事を言ってるんですか、あなた達は。カガリ様が、結婚式会場から誘拐されたのは貴方達もよく知っている筈ですよ。犯

人を追いかけさせたのに、取り逃がしたのは貴方達なんですから。そもそも、たった一隻相手に振り切られたって言うのが、おかしいんですけどね」

「…っ。けど、あのお声、あの機体は確かにカガリ様の…」

「多分、あなたの想像通りストライクルージュにはバ…コホン、カガリ元首が乗っていらっしやるでしょう」

「ならばっ！」

あーあー、本当にアス八派はその場凌ぎの対応しかしないよね。

「連合との同盟を決められたのはカガリ元首です。彼女がよく言われていたオーブの理念を曲げてでも、再び国が焼かれる事があってはならないと、苦渋の決断をなされたのです。それが、今回の出兵の前提となった連合との同盟です」

「……………」

「そもそも、カガリ元首は誘拐されたのです。誘拐時には、犯人によって思考の誘導が行われることは、貴方もご存知でしょう？」

ならば、今のカガリ様の思考が、誘拐犯によって誘導されたものではないとどうして言えますか」

実際、誘拐された時に思考を誘導されて、テロリストの仲間になった被害者と言うのは、珍しい事ではない。

それどころか、極限状態から恋に落ちる人間だっているのだ。

多分、アスラン・ズラモといザラとの恋愛関係も、戦争状態の時から始まったのだから、そーいふ部分は多大に含まれていただろう。いや、本人が納得しているのなら、それならそれでいいんだけどさ。

「基本的にカガリ元首は、できるだけ無傷で捕獲と言う指示を出しています。先の大戦を戦い抜いたパイロットであるカガリ様も、多

数の兵士を上手く捌けるだけの腕はお持ちではないでしょう。けれど、流れ弾が飛んでくるといふ可能性はあります。グダグダ言っていないで、さっさと動きなさいよ。じゃないと、給料泥棒よ、あんた達」

私なんて給料自体貰っていないボランティアだぞ、この野郎！
動かないんだったら、ためーらの給料寄越しやがれ。

「……了解しました」

トダカー佐は苦虫を大量に噛み潰した顔をして、最後に敬礼をして通信を切った。

そして、動き出すイナバ。
搭載のムラクモも次から次に発進させる。

「ご苦労様、フレイ」

アスランが拍手をしてくれた。
いやいや、こーいう屁理屈は私担当だからね。

ユウナは、ポカーンと私を見ている。
ユウナには、私を参考にして口だけはよく回るようになってもらわないといけない。

国家元首は、MS操縦技術や戦闘技術は必要ないのだ。
ただ、その思考と口だけでいいのだ。

カガリや某歌姫のような指導者は稀、って言うか彼女達しかいない。
どうして、両者とも深窓の令嬢と言ってよい程の育ちなのに、こう

も戦闘派なんでしょうね。

一人は頼まれてもいないのにMSに乗って戦闘行為を行うし、もう一人は当時最新鋭の機体と戦艦を奪取して戦闘に参加するし。

行動派ですな、お嬢様方。

どうせ、今回カガリを言い包めたのもラクス・クラインだろう。

キラ・ヤマトはただ戦闘が得意なだけだし。確か最高のコーディネーターだったっけ？

戦闘とプログラミングが得意なだけで、最高なのか。

作った人間はどういう意図を持って最高だと位置づけたのだろうか。コーディネーターだから、運動神経はナチュラルよりいいのは当たり前だが、それでも常識の範囲を超えてないしね。

どうせなら、車一台を楽々と担ぎ上げるようにしたならば、驚嘆に値するんだけどなー。

まあ、これは私の考えだけ。

何を持って最高とするか。

難しい問題だよねー。

コズミック・イラ と私17

私はブリッジから、ビームの飛び交う様を見ながら、状況を把握していった。

オーブ地上軍は現在私の指示通り動き、カガリの確保に向かっている。

危険な戦場にカガリを置いておけないと判断したのだろう。

ミネルバは、ファントムペインが率いる連合軍が順調に追い詰めていつている。

元々戦力差が大きいのだ。

コーディネーターがナチュラルより優秀だとしても、兵器の優劣がなく、人員が倍以上なのでどうにもならないだろう。

しかも、AAによる砲撃で主砲が沈黙してしまっている状態だ。

なんで、この状態で沈没していないか不思議なぐらいだ。

まあ、主砲を撃ってくれたのは正直AAが唯一私達にした善行だが。

そして、視線をストライクルージュを守るように戦うフリーダムへと移す。

カガリはその間も、全周波の通信で停戦を呼びかけている。

この状態で停戦が出来るわけがない。

相手が撃ってきているのに、銃を下ろせとは死ねと言われるのと同じ義語だ。

フリーダムはそんなカガリを確保すべく、手足を狙って無力化攻撃をしかける我が軍のMS相手にこちらも手足を狙って無力化するという攻撃で当たってくる。

そして、そんなフリーダムを狙ってイヴァンとギナが接近する。位置的にはイヴァンが前に出て積極的に攻撃を仕掛け、後ろでギナが援護なんだろうけど…。

「あれ、イヴァンごと狙っているわよねえ…」

「だなあ…」

容赦ないギナの攻撃に、私とアスランは呆れ顔で見ていた。

ギナって戦闘狂の部分があるから、強いイヴァン相手だとよくあーなっていたよねー。

まあ、珍しい風景ではない。

ギナは当てにいつている訳じゃなく、イヴァンなら避けれる事を知っているから。

これも一種の信頼感かもしれない。

「ふははははははは」

この笑い声さえなければねえ…。

「まんま悪役。つーか、ギナの存在自体が悪役染みている」

金も権力もあり、MSの操縦もエースクラス。

うん、見事に敵役の条件を満たしている。

「ははは、キラ・ヤマト。会いたかったぞ、最高の」

ブチリ

私は、手元のスイッチでギナへの通信を切った。

一応ギナとイヴァンの機体は、常時通信を入れられるようにしている。特にギナは指揮官を兼ねることが多いので、通信機能には力を入れて作った。

けど、あいつは一体何を考えているんだ。

戦闘によるハイで、ちよつとネジが飛んだか。

まあ、一度最高のコーディネーターと戦ってみたいようだったからねー。

まあ、後でミナを通して釘を刺しておこう。

一応、彼が最高のコーディネーターと言う事は明かすつもりはない。キラ・ヤマトの存在を知ったバカが、第二のキラ・ヤマトを生み出さないとは限らないからだ。

私は、人間と言う存在に関してはあまり信頼していないからね。

私も、その信頼していない人間の一人なのだが。

ギナは最高に絶好調でギナ様っぷりを振りまきつつ、フリーダムに攻撃を仕掛けている。

しかも、フリーダムのように手足を狙って無力化なんて事ではなく、コックピットを狙って撃墜する気満々の攻撃だ。

いや、洗淨ではギナの行動こそが正しいんだけどね。

敵は殺しておかないと、味方が殺される恐れがある。

なので、敵は殺す。これが、戦場だ。

さすがのフリーダムも、ギナの相手をするのは大変らしく、少しずつストライクルージュから離れていく。

なまじ、ストライクルージュに近かったらカガリを巻き込むかもしれないからだ。

でも、おかげでオーブ軍MSの攻撃がストライクルージュに届くようになった。

カガリも先の大戦を生き抜いたパイロットだが、やはり一年のプランクは大きすぎたようだ。

まあ、元々大した腕ではないのだけど。

所詮はお嬢様のお遊びだ。何度か激戦を勝ち抜いたと言っても、イヴァンやアスランには遠く及ばない。

アスランも一応MSの操縦は出来るんだよね。けど、本人の資質的に指揮の方が向いているから、戦艦の艦長になっているだけで。

MS操縦にこれっつぽつちも適正がなかった私にしては、羨ましい話だけど。

「フレイ姉ー、ギナさんが怖いんだけど……」

「……アスラン、イヴァンをカガリ捕獲に向けても大丈夫かな？」

「大丈夫だろ。ギナだし」

「それじゃあ、カガリをさっさと蹴落として捕獲してー。そろそろ、MSの燃料が切れる頃だから」

MSを飛行できるようにしたら、電池の食いが早いんだよね。

その条件は相手も一緒なので、文句はそうそう言えないが。

一応イヴァンとギナのMSだけは、精霊炉を使っているので問題はないけど。

イヴァンがフリーダムから離脱して、カガリへと向かう。

フリーダムがその動きに気付き、行かせまいとするがギナがそれを阻む。

よし、そのまま押さえてろ、ギナ。

「アスランは、AAをきっちり押さえてね」

「分かってる」

さーて、これでもう邪魔は入らない。
チエツクメイトと参りましょうか。

イヴァン機の剣が、ストライクルージュの四肢を断ち切り、カガリを海面へと蹴り落とした。

「チエツクメイト」

ニヤリと笑って、そう通信を入れてやる。

そう、AA達にだ。

さて、AAご一行はどう動くかな？

コズミック・イラ と私 18

私とユウナ、そしてアスランとトダカー佐は待っていた。さすがにブリッジで、一国の元首の醜態を晒して士気を下げるのもどうかと思うので、ユウナへと与えられた部屋で待っていた。

そこに、イヴァンに引き摺られたカガリが入室してきた。

私は立ち上がり、両手を広げ、

「おかえりなさい、カガリ様」

と、にこやかに笑っていった。

「フレイ…」

アスランとユウナは苦笑い、トダカー佐は心配そうにカガリを見ていた。

「フレイ、なんでアークエンジェルを攻撃した!？」

私たちは、戦争を止めたい…」

「寝言は寝てから言え、このバカガリ。多少バカでも向上心があるもので、少しでも学んでくれれば可愛げがあるものを…」

私は、無知を罪とは思わない。

知ったときに、どう行動するかが問題なんだ。

無知を当たり前と享受する方が問題なんだ。

無知と知り、学ぼうとするのならそれは素晴らしい事だと思う。

「だが、オーブは戦ってはいけないんだ！」

「カガリ、君のせいでオーブは戦争に出る事になったんだよ？
その事は理解してる？」

ユウナが、戸籍上の妻に向けて、懇切丁寧に現在オーブが置かれて
いる状況を説明する。

「オーブは、中立でないといけないんだ！」

「いや、別に中立はどーでもいいのよ。ただ、国民を守れば」

命だけではない。

国民の財産も守らなければならない。

それは、過去の大戦から中立政策だけでは守れないのは分かっていた。
た。

「中立、大いに結構。けどね、その中立の為に果たして国民の命は
どれだけ必要なの？」

確かに、状態が均衡している間は中立政策でもいいと思う。

けど、ひとたび均衡が崩れたら絶対に巻き込まれるんだ。

劣勢側が、無傷のオーブを搾取しようとするのだ。

「つーか、自分がやった事でオーブが今回の戦争に首を突っ込む羽
目になったのを理解しろ、このバカ姫。そもそも、結婚式から逃げ
出す奴がいるか」

「いや、それは私のせいでは」

「確かに。けど、フリーダム所持はどう言い訳するの？」

「あんた、知ってたんでしょ？」

ユウナがアスハの全てを握ったおかげで、アスハ家の金の動きが全て分かった。

その中には、AAとフリーダムの補修に使った金銭も含まれる。AAも色々イヤバイが、何よりもヤバイのがフリーダムだ。

フリーダムは、ユニウス条約で禁止とされた核動力のMSだ。保持しているだけで、条約違反なのだ。

一国の元首が、先の大戦で大破したフリーダムを補修・保持。

「ねえ、条約違反をしているあなたが、中立だなんて笑わせないでくれます?」

「それは…」

「自分は知らなかったとも言つつもり?」
アスハの金を使っている以上、知らなかったで済むつもりはないでしょう?」

これが表沙汰になれば、オーブは条約違反を最初にした国として後ろ指を指される。

「それに、カガリ。あなた、私達に心配かけてゴメンの一言も無いの?」

「え?」

「顔見知りか、結婚式で突然浚われて心配したよ?」

ユウナに至っては、当事者だよ。心配するのは当然じゃないの?」

まあ、フリーダムのパイロットがカガリの弟で、危害を加えられる心配はないって知っていたけれど。

「ねえ、カガリ。オーブの理念云々の他に、他に言葉はなかったの

？」

実際、カガリが誘拐されて方々皆しなくて良い苦勞をした。特に私なんてまったく無関係。

「まずは、ウナトさんやユウナさんに謝りなよ」

実際、ウナトさんの消耗っぷりは凄かった。

結局なんだかんだ言っても、ウナトさんはアス八を見捨てていない。それは、アス八が大事だからだ。

別段、ユウナはカガリと結婚しなくても大した問題ではない。なぜならば、セイランは首長の一人だからだ。

今更、カガリと結婚なんてしなくても、ユウナはセイランの跡取りだ。

それなのに、ひとえにユウナとカガリを婚約させたのはカガリのためだ。

それを、当の本人は分かっていない。

「ねえ、カガリ。いろんな人に心配をかけたんだよ。まずは、皆に心配かけてごめん、から始めようよ」

私の言葉に、カガリは俯き、それでも確かに頷いたのだった。

コズミック・イラ と私19

カガリの頭に上っていた血が、いい具合に冷めたようだ。私の興奮していた頭脳も、大分元に戻った。

「そもそも、なんで中立なのよ？」

「それが、オーブの、父さんの目指した事だからだ！」

とりあえず、通信でオーブ本国にカガリの保護を連絡した。

通信に出たウナトさんはカガリの無事の姿を見て、涙ぐんでいた。

いや、ちつよと見ない間にデコが広くなってた…。

精神的苦痛がやはり激しかったか？

「でもさ、カガリの言葉がないじゃない」

「え？」

「中立にしてどうしたいの？」

「ま、前のオーブみたいに豊かな国に」

「それは難しいんじゃないのかな？」

社会情勢とか変わってるし、モルゲンレーテも完全に再興できたわけでもないし」

まだまだ発展途上なのだ、オーブは。

「一応さ、中立云々を抜かしてどーいう国にしたいか考えてみたら？
再び技術立国するのか、農業は無理だから観光に力入れるって言うのもあるわね。オーブは、海がきれいだし、リゾートも経営できるわよ。技術も、MSとかじゃなくても色々あるだろうし」

メインにモルゲンレーテを据えなくても、色々取れる手段はある。なにより、モルゲンレーテが目立ちすぎると前回の二の舞になる可能性が高い。

「考えた事もなかった。元の、オーブに一日も早く戻さなくてはならないと、ずっと思っていた」

カガリがうめく様に言った。

おい、そこからきちんと教えるよ…。

「カガリはさ、悪いけど一度首長を降りるべきだと思うよ。今のカガリじゃ、お飾りにしかならない。一度きちんと勉強した方がいい」

そもそも、カガリは首長としてロクな教育を受けていない。それは、ユウナがいたからだ。

最初から、ユウナがアスハを継ぐ予定だったのだ。

カガリは、その伴侶でしかなかった。

けれど、前回の戦争でカガリが表に立ってしまった。

ユウナはその時、アマノミハシラに滞在していたのだ。オーブ戦が始まったときには、最早帰国できなかった。

そして、三隻同盟から戦争終結へ、カガリはその中心人物であり続けた。

戦争を終結に功があった。

だから、国民は夢を見てしまったのかもしれない。

オーブを、復興できるのはウズミの娘であるカガリだけだと。

その実体は、こんなお粗末なものだったけれど。

「それに、カガリ。今すぐは無理だけど、離婚したならしてあげるよ」

「え？」

「元々、この結婚はカガリがアス八を名乗る為のものだったんだ。

アス八を名乗らなくてもいいのならば、方法はあるんだよ」

「カガリ、あなたアス八の血を一滴も引いてないでしょ？」

「あ、ああ」

「そんな君をアス八を名乗らせる為の、婚約だったんだよ。ユウナとの婚約は」

君がアス八を名乗らなくてもいいのならば、方法はあるんだよと教えてやる。

死んだ事にすればいいんだよ。カガリ・ユラ・アス八を言う姫君を。

「そうすれば、アスランとも結婚できるんだって」

「でも、それをしたらお父様の子供じなくなってしまう！」

「アス八でいる限り、中立を叫ぶ限り、アスランとはどのみち結婚できないよ。だって、彼はザラだもの」

ザラと言うのは、プラントの名門だった。

アス八と言うオーブの首長の一族が、ザラに嫁ぐというのは中立政策をする上でも不味い手だ。

「そんな……」

「両方を得る事は無理だよ。どちらかは捨てなければならない」

「……………」

ガツクリと肩を落とすカガリ。

それにさー、ユウナとは一人は子供を作らなければならぬが、それ以外でアスラン・ザラと愛人関係にいればいいじゃないと思ってしまつのは、私が薄汚れた大人だからだろうか？
それだったら、恋とアスハを両立できるんだけどね。

カガリが、自分の取った手段がどれだけ悪手であったか理解させて、私たちはカガリを連れてオーブに戻る事になった。

ザフトもさすがに一時撤退したし。

これ以上ここに残る意味も無い。

それに、ザフトとAAを同時に相手にしたくないし。

絶対にAAは私達を追ってくるだろう。

プラントに新たなラクスがいる限り、ラクス・クラインはプラントには帰れない。

ならば、カガリと言うオーブを巻き込み共闘体制を整えるしかない。

おそらく、彼女の大義名分は先の大戦から変わっていないだろう。
コーディネーターとナチュラルが手に手を取って協力してゝって感じだっけ。

その為には、カガリは必要なのだ。オーブの首長であり、ナチュラルのカガリとの共闘体制は。

そもそも、あのピンクの歌姫も平和を謳いながら、やってる事はテロリストだからなあ…。

武器を手に取らないと、主義主張も出来ないよつな国なのか、プラ
ント？

フレイと神々の戯れ

私は最近では、現実ではなく<フレイのアトリエ>に籠もる日が多くなってきた。

知り合いの多くが逝ってしまい、店も滅多に開けなくなった。

アカデミーの臨時講師もほとんどせず、ただアトリエに籠もって研究の日々だった。

ある日、籠もりきりは体に悪いと外出しようとして適当な採取地に？げ、扉を開けるとそこは風呂場で黒髪のマツパの男が高笑いをしていた。

バタン

私は扉を閉めて急遽、アトリエを移動させました。

風呂場でマツパは普通だが、鏡で自分の裸を凝視しながら高笑いをあげる男は異常です。

「やべ、リアル変態きたーっ！」

相手が後ろ向きでよかったと、ひたすら感謝をして私は今回の夕食の話題はコレだと決めた。

どうも、フレイのアトリエの移動が出来ないので、その世界の比較的安全で自分が良く知っている土地……、すなわち日本に私はアトリエのドアを移動させた。

いやあ、現代日本に近い世界でよかったよ。

私は、比較的普通に見える服を着て、町へと繰り出し金策をしました。

ええ、貴金属類の放出です。

かなりいい値段で売れたので、当面の生活費をゲットです。

いや、アトリエ内にいれば多少不自由はあるけど、食べ物には問題ないんですけどね。

米が、日本米が食べたかったです。

あの、もっちりとした食感。うん、保存も考えて50キロばかり買いこんでおきました。

後は懐かしい食べ物の数々を。

はあ、やっぱりきちんと味を考えて飼育された動物は美味しいわー。ザールブルグの飼育はそのレベルまで到達していないかなー。

とりあえず、食べればいいレベルだから。

鯉節も欠かせないよね。あれって、結局私は作る事が出来なかったし。

職人さんたちには感謝感謝。

あと、食べ物関係ないけどタオルも買っただろう。あのパイルってザールブルグの技術では再現できてないし。

書店でも、雑誌を何冊か買い込みました。

後は新聞ですね。ある程度の情報は必要です。

「うわっ、この世界まだ昭和なんだ」

私が現代にいた頃は平成でした。
そして、この世界は昭和が64年で終わらずに続いていました。

パラパラと雑誌を捲っていると、一人の少女が写っているページに目が止まりました。

見出しには、『城戸グループの若き総帥』と書かれてあった。

「城戸グループ、か」

写っている彼女の顔と、後ろにいるガタイのイイにーちゃんの顔を見て、私はこの世界がどんな世界かを知りました。

「星矢か。うん、出来るだけ聖域とは無関係で行こう」

素手で平気でコンクリートを砕き、光速移動なんて人外な真似をする輩とは、好き好んで付き合おうとは思わない。

けど、それじゃあこの間会ったあのマップ男は多分サガなんだろうな！。

髪の色が黒かったから、まだ十二宮突破前？

いや、アテナの後ろに黄金がいることからそれはないよなあ。

もしかして、また黒サガになってるのか？

難儀な男だなあ。多分ストレスが多い生活をしているか、ストレスに弱いんだろうなあ。

聖闘士向いてないんじゃないか？

城戸沙織 現代のアテナに13人の男が跪いていた。

「最近、小さいのですが気にかかる小宇宙が感じられます。放置していても、特に問題とと思うのですが、念の為に調べてください」
「はっ。畏まりました」

13人のうち一人がそう返事をした。
そして、フレイに魔の手（笑）が迫ることになった。

入手したTVを見ながら、居間でゴロゴロしていた。
電源は購入した自家発電機で、電波は案外どうにかなった。
いやあ、現代社会って快適だね。

このまま自堕落な生活を送りそうだよ。
いや、私が自堕落な生活をして誰かが困るって訳ではないのだが。

トントン

その時、アトリエの扉がノックされて、木鶏の道具効果で訪問者の顔が頭に思い浮かんだ。

現在、アトリエのドアは日本の首都の人通りの少ない裏路地に設置した。

ここならば、そうそう客は通らないだろう。
目指せ、都市伝説化ってなものよ。

「ヤ、ヤクザ…いや、この場合はマフィアか…？」

相手が外国人だったので、ヤクザと言うよりマフィアが正解だろう。
私は無言でアトリエのドアを別の場所へと移動させた。

あれ、あのマフィア2人組、どっかで見たような顔だったなあ……。

「だから、問答無用でドアをぶち壊して入れればよかったんだ」

銀色の髪をした男が黒髪の男を小突いていた。
黒髪の男も、所々でやり返してはいたが。

「まさか、ドアが消えるとは……」

「それ以前に何の変哲もない壁に、ドアだけがあるって言うのは十分異常だぞ。物理法則無視しているだろうが」

それ以前に色々常識を無視した存在である聖闘士が言うなど、フレイなら突っ込みを入れただろう。

「まずは、アテナに報告だな」

「またーから探しなおしか。小宇宙が小さくて、一般人の小宇宙と紛れてしまつて、探し出すのが骨なんだがな」

やれやれと言つた風情の2人組が、裏路地から消えた。
後に残るは、一匹の黒猫のみ。

ドアを開けると、そこには変な鎧を着た人間達がいました。

「……………」

「……………失礼しました」

お互い見つめあふこと数秒、私は頭を下げてドアを閉めようとした。

「アイザック、確保しなさい！」

フルートを持った男の激が飛び、私はアトリエから引きずり出される。

「いだだだだだだ」

「海神殿に侵入するとは……。どこの手のものだ？」

アイザックと呼ばれた男が、私を床に押さえつけ腕を捻り上げる。痛いつたらありゃしない。

「私は…偶然…っていったいわー！」

「にゃん太、にゃん吉！」

アトリエのドアは開いたままだったので、私の声を聞いた二匹が飛び出し瞬時に状況を把握、二匹が私を解放しようと腕を捻り上げている男に向かって飛び掛った。

すると、相手も即座に反応して二匹の行方を阻もうとしたので、二匹のうちになん吉はソレを食い止めようとその場に留まる。

「ご主人様を離すにやああああ！」

完全にフリーになったにゃん太が、武器を構えて相手に向かって殴りかかった。

相手がソレをいなそうと私から意識を離した瞬間、私は動いた。服の一部分に仕込んでいたフラムを手に取り、ほんの少ししか動かない指先で上に向かって放り投げる。

ボムン

髪の毛焦げた匂いと、相手が驚いて手を完全に離すのが分かった。あー、畜生髪焦げた。後で絶対切り揃えなくちゃ。

私はその瞬間、転がって相手から距離を取る。

私に手が出されないように、にゃん太が相手に攻撃する。

私はある程度距離を取って立ち上がり、

「にゃん太、にゃん吉！」

と二匹をこちらに呼び寄せるのと同時に、アトリエのドアを消す。

アトリエのドアは一箇所にしか作ることが出来ない。

なので、作ったままだと他の場所に出すことが出来ないのだ。

二匹もそれが分かっているのです、私の元へとなんとかやってくる。

私はソレを確認すると、結界石を作動させる。

それと同時に、

「オーロラボレアリス！」

氷雪が私の視界を埋め尽くした。

寒さは結界石のおかげで、かろうじてこちらまでやってこれないが、それも長くは保たないだろう。

って言うか、なんであんなに動きが早いんだ？

イヴァンのおかげでなんとか対応できているけど、下手したらイヴァンより早いわよ。

眼前に展開される結界石の効果による光の盾を見ながら、私は内心ぼやいた。

フラム程度の攻撃じゃ効きそうにないよなあ…しょうがない。搦め手でいくか。

私はポーチに入っているアイテムのうち、暗黒水を取り出した。それを相手の頭上へと投げた。

それと同時ににゃん太が持っていた杖を、ブーメランのようにして投げ瓶を割る。

「甘い」

相手が暗黒水の直撃を避けようとして、横に移動した。

だが、甘いのはそつちだ。

空気に触れた暗黒水はたちまち揮発する。

私も始めて使ったときはビビッたよ。

いきなり、揮発するんだもん。イヴァンを巻き込んでしまったのは、懐かしい思い出だ。

瞬く間に空気と化した暗黒水は、私達以外の人間に降りかかる。

「むっ…」

三人は私を見てぼーっとし、二人は彫像のように動かなくなり、もう二人はその場に倒れこむ。

おー、さすが暗黒水。効果が高い。

私がアイテムの効果を確認して、ほっと一息をつきドアを出そうとしたその瞬間、

「ほう、なかなか面白い技を持っているな」

最大の存在感を持つモノが、この場に化現した。

私の体が麻痺を食らったように動けなくなる。

麻痺攻撃を食らった訳ではない。

相手の存在感の大きさに、私の体が動くのを拒否したのだ。

「我が神殿に単騎で挑むとはどんな愚か者かと思えば…小娘ではないか」

背中まである長い髪、海色の瞳。

その顔の表情は、慈愛と残酷さを兼ね備えた表情。

生まれ変わる前、博物館で見た仏像の表情に似ていた。

「申し訳ございません、ポセイドン様！」

僅かな間に、私から状態異常を食らった七人は回復してしまっ

ちっ、回復が早いな、オイ。

にゃん太とにゃん吉もガクガクと震えている。

ならば、この状態の打破を二匹に任せる事は出来ない。

自分で動かなければならない。

動け

「なるほど。最近アテナの狗が地上で煩く動いていたのは、お前が原因か？」

「アテナが探してる？ なにそれ？」

「くくく、さあな。あれは、お前を保護したいのだろうよ。なあ、異世界の娘よ」

「!？」

ポセイドンは私が異世界の住人だという事に気付いている？

「面白い。本当に面白い。まさか、アテナの探している人物が、私の元を訪れるとは。そのように身構えなくても良い。今の私は、封じられている状態で、手も足も出ないのだから」

そう言うと、この部屋に居た者達にも、戦闘体勢を解く様に命じるポセイドン。

「久しく見なかった、珍しき客人よ。丁重にもてなすが良い、テテイスよ」

「は…ははっ」

そう言って、女性が私を別室へと誘う。

うん、どうやら戦わなくて済んだみたい。

た、助かったああああ。

さすがの私でも神様相手だと逃げられるかどうか分からなかったよ。

最悪、一か八か時の石版を起動させて相手の動きを止めてアトリエを起動してトンスラぐらいしかなかった。

それにしても、神の存在感って半端ないというか、反則物だな。

封じられていても、神は神という事か？

通された部屋は椅子と丸テーブルが並んでいるだけの部屋だった。
椅子の数は8個。

おそらく中央にある装飾が立派な椅子は、ポセイダンの椅子だろう。
他の椅子も様々な幻獣のモチーフが色んな場所に刻まれているので、
海將軍の椅子だろう。

「シードラゴンの所に座っていて下さい。現在、シードラゴンは空
位ですから、問題ないです。お茶を淹れてきましょう」

そう言つて、ティティスは部屋から出て行った。

私は勧められたので、シードラゴンの椅子に座る。

「座り心地わるっ。クッションが欲しいわ」

石で作られた椅子の座り心地は悪かった。

そこから待つこと、10分。

「お茶を入れるだけにしては遅くないか？」

誰も来ない事が気にかかる。

私は、悪いと思ったが部屋のドアを開いて顔だけを出して、キョロ
キョロと辺りを伺つてみた。

「私の勘では、台所は多分アツチだ」

靴をくネコ足の靴に履き替えて、忍び足で進んでいく。

私は全然意識しなくても、この靴を履いていれば勝手に忍び足をしてくれる。

まあ、気配は消さないといけないけど。

進んで行くと、私の勘通りにある扉の前から声が聞こえる。

「ど、どうしましょう。まさか、茶葉まで無いなんて…。誰が残りの茶葉を飲んだのー!?!」

ティティスの絶叫が、特に聞き耳を立てなくても聞こえた。

「し、仕方ないだろ。ちょ、落ち着け。他の飲み物を…」

「ある訳ないでしょう!?! あああ、どうしましょう。ポセイドン様やお客様に水を出すなんて、そんな不名誉なこと出来る訳ないでしょう! せ、せめてお菓子を…あああ、湿気ってるー!」

ティティスの絶望の悲鳴が聞こえた。

私は思わずorzとなった。

もしかして、海底神殿って物資不足だったりする?

なんか、言葉から考えるともしかして、物資全般が不足していたりする?

なんか微妙に生温かい気持ちになって、思わずorzの状態から涙

を拭った。

ほら、涙は心の汗だし（意味不明）。

扉の向こうでは、テティスさんともう一人が一生懸命お茶の準備をしようと四苦八苦している。

さつさと元の部屋に撤退して素知らぬ振りして彼らが用意した茶を何も言わずに飲み干そう。

それが優しさってものだ。

ガチャリ

「……あ……」

かがんだ状態の私と、半分錯乱しているテティス嬢とえーと、確かバイアンだっけ？

お見合い状態の私達の中で、一番最初に動いたのは意外にもテティス嬢だった。

「ほ、星になれ！」

「待てい！」

お盆で攻撃をしようとしたテティス嬢を、ズビシと裏手で突っ込みを入れて止めてくれたのは、バイアンさんだった。

「か、海底神殿の恥部が！ あああああ」

攻撃を止められて、絶望に打ちひしがれるテティス嬢。

お盆の上には、水があった。

結局別の茶菓子は見つからなかった模様。

「あの、余計なことかもしれませんがお茶とお菓子ありますよ？」
「え？」

「よければ、茶葉はお譲りいたしますし、お茶菓子もさしあげます」

正直、海底神殿と言う場所の威厳を保つ為には役立つだろう。
組織と言うのは、ある程度外側を繕わないといけないものだ。

「い、いいんですか？」

キラキラとテティスが私を見つめている。

「構いませんよ。じゃあ、ちょっと用意するので待つてくださいね」

そう言うと、私は秘密バッグの中から三種類の茶葉を取り出した。
トーン茶は、人にやるものじゃないだろう。

「これは、私のオリジナルの茶葉なんですけど……まあ、飲んでみてください。使わなかったものも差しあげますので、役に立てて下さい」
「い」

「……久し振りに味がある飲み物が飲めるのか」

ボソリと呟いたバイヤンの言葉に、普段の彼らの食生活が心配になった。

ザツと見たところ調味料も少なさそうだしね、この台所。

私はテティスが持ってきていた水を少し飲んでみた。

うん、この水ならばハーベル湖の水の代わりが出来るかもしれないな。

だったら、淹れるのはアザミ茶葉ではなくハーブティーが妥当だろ

う。

テティス嬢の高ぶった精神も少しは落ち着くかもしれないし。むしろ、落ち着いてくれ。

私は、いつものように茶を淹れ2人に渡す。

海王も飲むものならば、まず彼らに毒見を兼ねて味見してもらったのだ。

「美味しいです…」

テティスが驚いたようにハーブティーを見つめていた。

「俺にしてみたら少し味が薄いけどな」

「けど、美味しいですよ。むしろ、上品ですよ」

どうやら、ウケは悪くないようだ。

「ミルクがあつたらもう一つあるんですが…」

私的には、ミスティカティーはあまり好きではない。

美味しいのだが、高級すぎて舌に合わない。

同じ理由で、ロイヤルクラウンも無理だ。

なんて言うか、飲む時に値段を考えてしまうのだ。

コレ一杯銀貨何枚って…。

なので、高級茶は専ら作る専門だった。

いい値段で売れるんだよねー。

茶菓子は、チーズケーキをホールで出しておいた。

秘密バッグからチーズケーキをワンホール出し時、バイアンさんの

顔が引きつっていたのはご愛嬌。

まあ、普通に考えたら物理法則無視してるしねー。

「これで、お茶の準備は大丈夫だと思います」

「あ、ありがとうございます！」

「いえいえ。お役に立てたようで幸いです。では」

私は用意したお茶一式を手渡すと、さつさと元の部屋へと戻った。

それにしても、茶を用意していたときに思ったが、塩以外の調味料がなかったよ…。

マジで、どーいう食生活してるんだ海底神殿？

今、私は戦場にいた。

いや、違う。正確には、私の前にあるテーブルは戦場となっていた、だ。

高速で動かされる（いや、光速だよ。目に見えないし）フォーク達と、響きあう音に私は思わずハーブティーを啜った。

通常ならばヘーベル湖の水で淹れられるハーブティーだが、この海底神殿の水で淹れてもすこぶる美味しかった。

少々風味が違うが、それもまた良い。

今度、ヘーベル湖の水で淹れたもので飲み比べてみてもらった欲しいものだわ。

やはり、海底から直接地下水をくみ上げるといいのかもしれない。余計な物質が混ざりにくくて。

「まかさ、チーズケーキワンホールでこの事態なんて…」

そう。目の前に起こっているフォーク大戦の原因はチーズケーキだった。

海王と共に私が居た部屋に入ってきた海將軍達は、私が用意したチーズケーキに目を見張り、取り分けたチーズケーキを瞬く間に食い尽くすと、残っていたチーズケーキを得ようとして仁義なき戦いに突入した。

思わずまとめ役と思われるセイレーンさんと、テティスに救いを求めるように目を向けたが、一人は海王の世話をいそいそとこなしてこちらに視線も向けやしない。

そして、もう一人は我関さずと言った風にハーブティーを飲んでいく。

ちなみに、数少ない二つ目のチーズケーキをちゃっかりとゲットしていたりする。

止めるものがない絶望のあまり、思わず私は天を仰ぐ。
神頼みがしたくなる時ってこー言う時なのかもしれない。

すると、ふと視線が横に流れた瞬間一人皿を切なくそうに見ている人を発見。

確か、アイザックだったか。

私の記憶にあるのは、確か青銅たちと大して変わらない年齢だった少年の筈。

その年ならば、甘味が欲しいのも無理はない。

私は、ほとんど手をつけていない（あの戦いを見て食べる気が失せた）チーズケーキをアイザック少年の前へと押しやる。

「え？」

「食欲が無いので、どうぞ？」

あんな骨肉の争いを見て、食欲が沸くわけが無い。

それに、私にとってこのチーズケーキはいつでも作れる代物だ。ならば、アイザック少年に進呈してもまったく問題は無い。

「……………ありがとうございます。ありがたくいただきます」

そう言って、アイザック少年はケーキを口を切り分け口に入れた。

チーズケーキの甘さに、ホロリとアイザックの頬が緩んだのを確認して、思わず私の頬も緩んだのだった。

海王がナプキンで口を拭い、それをティイスが受け取ることで食事の時間は終了を告げた。

「ふむ。喉も潤った事だ。本題に入るとするか」

「私としては、聞きたいことはただ一つ。アテナが私を探しているって本当なの？」

私としては、アテナなんて言う物騒な神様とは係わり合いにならない。くない。

いくら、自衛がメインと言っても、アテナが職能は戦い。

作品内では、愛云々言ってたけど、アテナは『戦いの女神』なのだ。しかも、ギリシャ神話では最強の。ちなみに、アテナ以外にもアレスと言う戦いの神がいるけど、彼はアテナと比べると弱いと思われる。

いや、一回も勝てた事ないし…。

アレスの方が本妻ヘラの子供なのにねえ…。
ゼウスの子供で有名所は、全て愛人の子供なのだ。

「ああ。自分の全聖闘士に、お前の保護を命じたのは確かだ」
「そう…。」

私は冷めた茶を飲みながら考える。

私としては、出来るだけ係わり合いになりたくなかったのに、向こうから関わってくるか。

「面倒だなあ…。」

人の来ない僻地に、アトリエを移動してもいいけど、聖闘士にはあまり関係がないのよね。

無駄に身体能力の高い奴らめ。

しかも、小宇宙を探るなんて事が出来るものだから、居場所の探知も出来るし。

「なんで、こつちは係わり合いになりたくないのに、わざわざ関わろうとするかなあ…。」

「ふむ。アテナの庇護を受けると言う選択肢はないか」

「当たり前でしょ。『正義の為だ。協力しろ！』って言われるのが関の山よ。聖闘士は揃いも揃ってアテナ馬鹿だし。私の事情なんて二の次で、アテナを優先するでしょうよ」

いや、この世界の神様の部下って言うのは、それがスタンダードなのかもしれないが。

もし、彼らと関係を築けと言うのなら、それは商売相手以外は無理。

私は、誰かに自分の意思を曲げられるのは、大嫌いなのだ。

「……ならば、私の庇護を受けるか？」
「は？」

思ってもよらなかった提案が、海王からされた。

「この茶も、菓子もたいそう美味であった。幸い場所だけはあるかな。そこで起居すればよい」
「あー、なるほど」

海王は、自分の発想が気に入ったのか、たいそう満足そうだった。なるほど、アテナの庇護ではなく海王の庇護に入るのか。

それは、考えてもなかったなあ…。

「アテナもこの海底まではどうにもならぬからな。シードラゴンの座は空いているのだ。いつそ、シードラゴンになるか？」

我が授ける鱗鎧は、修行をしなくてもある程度の能力は授けてくれるぞ？

クククツと笑う海王の姿は、アテナが出し抜ける事がとても嬉しいようだ。

「私が出る事と言ったら、錬金術ぐらいだけど…」
「食事の準備ぐらいでよい。この海底神殿では、食べ物入手困難なため、そこから考えないといけんかな」
「食事の材料から、調達しろってか」

まあ、それぐらいならどうにかなる。

ミルクは、シャリオミルクが増産できるし、小麦も在庫があるし。

一部の野菜とかもあるけど、家庭菜園とか作って回せばなんとかなるか…。

チラリと海将軍のほうを見ると、期待に満ちた目で私を見ていた。うん、どうやら餌付けしたみたいだなあ…。

「いいでしょう。私、フレイ・ローゼンは、海底神殿でお世話になる事にします」

その言葉と同時に、湧き上がる会議室。

いや、あまりの歓迎っぷりに、思わず腰が引けたよ。

「ふむ。詳しい事は、テティスとセイレーンと相談するがいい。シードラゴン無き今、海底神殿を管理しているのは、この2人だ」

そう言えば、海王ってアテナから再封印されたっけ。

シードラゴンの件は、ちょっと保留しておこう。

わざわざあんな重たい鎧なんて着たくないし。

「分かりました」

「それで、フレイ。小腹が空いた。食事を所望する」

「さつき、ケーキ食べたじゃん…」

私は、がっくりと肩を落としたのだった。

フレイと神々の戯れ2

ああ、そう言えば忘れていた。

私は、自分の部分的に焦げてチリチリとなった髪を触った瞬間に、思い出した。

「あの、すいませんがちょっと髪の毛切ってもらえませんかね？」

景気良く爆発させたから、随分と髪の毛が酷い事になっている。

一回切りそろえてから、育毛剤を使って髪の毛伸ばさないとなあ…。

ちなみに、アトリエである意味曰くつきの育毛剤だが、武器屋のオヤジ以外には普通の育毛剤でした。

あの人の毛根って一体どーいう風になっているんだ？

と、突然変異？

皆が、私の髪の毛に注目する。

特にテイスなんかは、同じ女性だから痛ましげに見られた。

「切りそろえてくれれば、後はどーでもなりますし。良く効く育毛剤もありますし」

と言った瞬間、私ともう一名以外の視線がクリシヤナへと向かった。遅ればせながらも、私の視線もクリシユナへと向かう。

うむ。見事なスキンヘッドだ。

「な、なんだその視線は！？」

私の髪型は、ハゲたのではなくわざと剃っているのだ！」

ポンと横に居たイオが、肩に手を置く。
さらにその反対側のカーサも慰めるように、手を置きグツと親指を立てた。

「ち、違つぞ。ポセイドン様まで！」

お、俺をそんな目で見るなああああああ！！！！」

いたたまれなくなったクリシュナが、立ち上がり走って部屋から出て行く。

「あのさ、私の髪…いや、いいよ。後でにゃん太とにゃん吉にやって貰うわ…」

後でクリシュナにお詫びも兼ねて、育毛剤三種類送ってやるか。使う使わないは相手の自由だし。

私は、今北大西洋の柱の下に来ていた。

案内人は、セイレーンのソレントとクラーケンのアイザック。

ちなみに、場所的にはセイレーンはお隣さんだが、基本的に彼はポセイドンの憑坐であるジュリアン・ソロ付きになっている。

なので、私がある程度は南大西洋の柱も管理をしなければならない。さすがに、初心者にはそれは無理なので、アイザックが手伝ってくれる事になった。

他の人間は、自分の柱だけで精一杯らしい。

「毎日真面目に処理していませんからね」

とは、ソレントの言葉。

なんでも、海と言うのは汚染されやすい。

そりゃあ、人間が生活排水をダダ流しにしているからね。

それを、小宇宙を使って浄化能力を高めているらしい。

それが、冥王との聖戦終了時に、自分の配下の復活を望んだ海王に突きつけられた条件だった。

毎日小宇宙を使って浄化すればいいものを、どうしても後回しにしてしまうものらしい。

私なんて小宇宙使えないけど、どうすればいいのか…。

「小宇宙は誰でも持っています。大丈夫です、俺が教えます」

と、アイザックが言ってくれた。

こーいう場合、アイザックの事を先生っ！と呼ぶべきなのだろうか？

「まずは、鱗鎧の装着だな。こちらが、シードラゴンの鱗鎧だ」

聖闘士が纏う聖衣と一緒に、鱗鎧は装着者が纏っていない状態では置物のような形となる。

シードラゴンの場合は、海竜の形をしている。

それが、北大西洋の柱の前に鎮座していた。

「ポセイドン様から鱗鎧の調整は終了したとの事です。後は、貴方が念じれば体に装着できます」

私は、シードラゴンの鱗鎧に向けて、こっちにおいでと念じる。すると、置物がパーツごとに分解され、私の体へと装着された。

うん、まるで変身ヒーローのような気分だ。

普段の私からは考えられないほどいかつい全身鎧身を包んだ私。重さは、多少はあるが動けないと言っ程ではない。

「重さは大丈夫だとは思いますが…。ポセイドン様の加護で、身体能力も上がりますし。慣れれば、海闘士専用の技が使えるようになりますよ。シードラゴンの場合は、ゴールドントライアングルでしたか」

手をグーパーグーパーと動かし、その場で多少跳ねてみる。

確かに体はいつも以上に軽い。

鱗鎧すげー。このメカニズムを解明して、錬金術に組み込めないかな？

ほら、鱗鎧なんて戦い時にしか使えないから、鎧を着てない状態で戦闘になったら、海闘士って不利なんだよね。

基本的に、自衛しかしないから、本拠地にいる間は常時装備してればいいじゃないと思うだろうが…。

「いや、いいけど、この状態だったらアイテムが使いにくい」

海闘士である前に錬金術士なんだよね、私。

あまりの動き辛さに、ポセイドンに申告したら改造許可が出たので、私はさっそくアトリエに戻った。

ちなみに、入り口は私の守る柱に移動させて貰った。

「聖域からの使者が来たら、どうするつもりですか？」

と、アイザックから聞かれたので、

「あそここの内部に移すよ。確か、空洞でしょ？」

指差したのは、メイン・ブレドウウナ。
この海底神殿を支える一番大きな柱だ。

「よく、あそこが空洞だと知っていましたね」

「おほほほほ。乙女の秘密。それより、これって溶けるかなあ……」

出来れば、一回インゴットに戻した後に布地に加工しなおしたいんだよねー。

やっぱり動きやすいのは、布系装備だし。

「ポセイドン様の加護がありますからね。どうでしょうか？」

「とりあえず、やってみるか」

適当なパーツを取り外し、アタノールの中に突っ込み加熱を始める。魔力を込めて加熱する事10時間。

「うわー、駄目だ。さすがに神の加護は伊達じゃないかあ……」

アタノールを使って高温で溶かそうとするのだが、びくともしない。

そりゃあ、聖闘士たちの戦いつて隕石が飛んできたり普通にするからなあ…。

普通にアタノールを使ったぐらいじゃ溶けないか。

「錬金炭使うか」

普段は普通の炭を使用しているが、とっておきの錬金炭を使用してみる事にした。

錬金炭だと、普通の炭より高温かつ長時間の加熱が出来るのだ。

「錬金炭セッター。レッツゴー」

再びアタノールを始動させる。

私が鱗鎧を加工していると聞いた、ポセイドンが作業中にアトリエにやってきた。

さすがに手が離せないので、アイザックに対応を頼んだ。ちなみに、猫達は別のアイテムを作っていたり、私の補助をして貰っている。

「そう簡単には加工出来まい」

ポセイドンは嬉しそうにドヤ顔だ。

ちよつとだけムカついた。

不可能ならば可能にしたいくなるのが人情と言うもの。

良く考えるんだ、私！

「この世界は小宇宙が基本。では、小宇宙とはなにか？」

もしかしたら、それは魔力や気と非常に似たようなものではないのか？」

自分的理論を展開させる。

どーせ、駄目元だ。

私はアタノールに魔力をこれでもかっ！って言うぐらい注いでやる。伊達に長年錬金術をやってはいない。

戦闘では魔力の扱いは不得手だが、錬金では大の得意だ。

特に細かい魔力の使い方は、同学年のアイゼルやエリーをも勝ると思う。

エリーは、ほらあれは魔力馬鹿だから…。

私が魔力を放出し始めたあたりから、アイザックの顔が引き締まったものになった。
ちなみに、ポセイドンは焦っている。

「燃え上がれ私の魔力！

奇跡を起こせ！！」

今こそ長年の錬金キャリアを見せるとき！

長い時間、琥珀湯などのMP回復アイテムを大量に使い、魔力を間断なく注いでいく。

下手したら、賢者の石より魔力使ってるんじゃないの？と言うぐらい魔力を消費した。

そして、10時間後、おそろおそろアタノールを開くと、見事に溶けた液体が。

ガクリと膝をつくポセイドンを見ながら、私は自分の勝利を自覚した。

あはははは、神に勝った！

「よもや、小宇宙だけでヘパイトスの火を再現するとは……」

「どうやら、小宇宙と魔力は非常に似たようなものだったらしいです。棚ボタラッキー？」

「献血をお願いします」

私は、自作した注射器を片手に、ポセイドンに言った。
ポセイドンは訝しげな顔をしながら、書類の整理をしている。

「献血？」

「です。確か青銅聖衣がアテナの血を受けて神聖衣にパワーアップしたと聞きます。私の鱗鎧改造のついでに、皆の鱗鎧もパワーアップさせようと思います」

これ、企画書ね、と魔法の紙に書いた計画書を手渡す。
それを見た瞬間、嫌そうな顔をするポセイドン。

「個人的には、まず黄金の血でパワーアップかな、と思ったけどはしりました」

いや、便利ですよ。神の血って。

「言うておくが、この体は憑代だから神の血なんてほとんどないぞ」
「あれ、アテナは転生でしたけど、一応人間ですよ？」

「確かに、私の血を僅かながらに引いているから、僅かながらに神

の血は…って、なんだそのドヤ顔は？」

「薄いならば、私が濃くすればいいんですよ」

「けっけっけっ、と笑って一般的な大きさの注射器を引っ込めて、でっかい注射器を取り出す私。

沢山採取して、神の血の部分を取り出せばいい。

「ま、待て。話せば…ぎゃあああああ！..」

「がつつり、全体の血液量の致死量寸前までの血液を採取いたしました。

「テティスが真っ青な顔をしていたので、今晚の夕飯は増血メニューと参りましょうか。」

「レバーとハウレンソウを用意しておきますね〜」

「ポセイドンの血を手に入れた私は、スキップをしながら執務室を後にしたのだった。

「さ、この血の成分を濃くしましょうかね〜。」

「私は、出来上がったシードドラゴンの鱗鎧もとい鱗衣の前に、大変満足していた。」

「軽いし、強い。強度は、従来の鱗鎧の2割り増し。ついでに、皆の鱗鎧の強度も4割り増しだし」

「ポセイドンの血は大変役に立った。」

「濃くしたのを、それぞれ数滴垂らすだけで、聖戦で見えないところ

に傷ついていた駒かな破損は、すべて回復した。

「素晴らしいな」

「ふふふ、でしょでしょ」

約一名（一神？）の犠牲はあったが、それだけの価値はあったと思う。

念の為に、ポセイドンには増血料理以外も回復効果の高い料理を食べさせておいた。

「これから、鱗鎧が壊れたらポセイドン様に血を貰えばいいと思うよ」

「いや、さすがにそれは…」

一番簡単な回復方法なのにね。

さすがに自分達の主を材料に使うのに抵抗があるのか、アイザックの頬が引きつっていた。

「さて、次にするのは…」

「少し、修行しないか？」

「こつして、鱗…鎧も出来た事だから」

「修行ねえ…。確か、固有の技があるんだっけ？」

「ああ。小宇宙を高めるのはできていた。ならば、後はそれを技の形に持っていくだけだ」

ゴールドントライアングルって、確か亜空間とか異空間を作り出して、相手を吸い込むだったっけ？

入り口作って吸い込んで、出口を閉じれば帰ってこれない。

カノンは、兄の技を真似るだけではないとか言っていたけど、技的

にはアナザーディメーションに近いよね。
むしろ、名前が変わったくらいじゃないのか？

私は、さっそく自分のアトリエで小宇宙を高めた。

「そうだ。その小宇宙が最高に高まったときに、技を放つんだ！」

「ゴーるでんとらいあんぐるー」

緊張感が無い声と共に、異空間が僅かながらに現れ…。

「いまだ！」

と、錬金ゴミが沢山入ったゴミを蹴り入れた。

「おいつ!?!」

「うっしやあ！」

作戦成功。いやあ、アカデミーにゴミ処理頼めないから溜まっていたんだよねー。産業廃棄物A」

ゴールドントライアングルの効果を思い出してから、ある意味狙っていたんだ。

これって、ゴミ処理に使えないかって。

いやあ、ピッタリだったね。

「わ、技をゴミ処理に使うなんて…」

がっくりと膝をつくアイザック。

背中がなんかすすけてる。

自分の今までの苦しい聖闘士修行はなんだったんだ、なんて過去を振り返っていたりもする。

あんまり、考えすぎたら禿げるぞー。

そもそも、聖闘士自体が非常識の塊なんだから、これぐらいでグジグジ言うなと言いたいな。

貧血気味のポセイドンは、海底神殿の私室にあるベッドに横になっていた。

彼に付き従っているのは、テティスとソレントの2人のみ。

アイザックは基本的にフレイと共に行動し、他の海將軍は自分の仕事をしている。

「どうして、血を抜く事をお許しになられたのですか!？」

ポセイドンの血を奪っていったフレイに、テティスはおかんむり中だった。

「アレの行動は突拍子も無くて面白い。それに、鱗鎧の強化など、私は思いつきもなかった」

神代に作ったそのまま、鱗鎧は数千年変わらない姿をし続けた。けれど、急速にソレを変えたのは異世界の錬金術士。

「好きにさせよ。あれは、なかなか役に立つ」

「……分かりました」

「それに、アテナへの嫌がらせにも役に立つ。なぜ、アテナがああ

娘を欲したか分かるか？」

「天馬座の聖闘士の怪我ですね？」

天馬座の聖闘士である星矢は、冥王との聖戦で冥王に一撃を与えた代償とでも言うかのように、大怪我を負ってしまった。立つ事もままならない程の大怪我。

「それを癒したいのだろう。お優しい事だ」

アテナは戦いの神。

回復は不得手。ポセイドンもたいして得意ではない。得意なのは、意外な事に長兄たる冥王ハーデス。

けれど、冥王は自らを傷つけた星矢を決して癒す事はないだろう。ならば、おのずと方法は限られる。

「くくく、アテナの悔しがる姿が目には浮かぶ」

アテナが、異世界の人間を探していると知つたのとほぼ同時期に、自分の手元に転がり込んできた錬金術士。

アテナに聖戦で負け、海の浄化と言う仕事を押し付けられた海底神殿にとってアテナに優位に立てる鍵。

それは、聖戦に負けた意趣返し。

「近いうちに、披露をせねばなるまい。なあ、ソレント」
「はっ」

恭しく跪き、自らの主に同意するセイレーン・ソレント。

自分の忠実な配下たちを見ながら、ポセイドンはどういう経緯でフレイの存在を知らせるか思考するのだった。

双児宮は嵐が吹き荒れていた。
嵐の名は、兄弟喧嘩と言う…。

「この愚弟が！」

何度言ったら、着たものを籠に入れるのだ!？」

「今度するって言うてるだろ。すぐに、手が出る癖どーにかしやがれ、この二重人格がつ！」

普通ならば罵りあいでも済む兄弟喧嘩だが、聖闘士…しかも、双方黄金聖闘士にもなると手が混じってくる。
しかも、光速レベルだ。

「いつもの事なんですけどねえ…」

近隣の住民（お隣や通りすがりの人々）は、いつもの兄弟喧嘩を遠巻きに試みている。

正直、手足での殴りあいぐらいならばスキップの一つで済むが、小宇宙を使った技を使われたら被害は双児宮だけで済まなくなる可能性が出てくる。

2人とも聖闘士最高レベルと言われている黄金なのだから仕方ないのかもしれないが。

ちなみに、表向き最強は黄金と言われているが、実際は最低レベルの青銅五人組が最強の聖闘士だったりする。

所詮、青銅だの、黄金だのはある一定の目安なだけだ。小宇宙を燃やし、よりた高みに登った人間が勝利する。

そして、兄弟喧嘩なんて低レベルな争いをしている人間の高みはある意味低かった。

主に精神的な部分で。

「一度、異空間で反省するがいつ！ アナザーデイメーション！
！」

「アニキが反省しやがれっ！ ゴールデントライウおっ！」

弟が技を放とうとした瞬間、兄に向けて飛来するゴミゴミゴミ。

あまりにあまりの攻撃に、避けることすら出来ずにゴミを浴びる兄。膨らんでいた小宇宙が一瞬沈静化し、そして大気が震える。

ちなみに、弟はなぜゴールドエントライアングルで異空間に繋げようとした瞬間、ゴミが飛来してきたか分からなかった。

弟の混乱の間にも、兄の後ろの小宇宙は膨らみ、そして起こる変異。

「また、ですか」

「さて、アテナの盾を持つてくるか」

ビッグバンを起こしながら、髪が黒くなった兄が弟を一方的にしばき倒していた。

一応、鱗鎧の改造（完全に別物）が終わったので、海底神殿の改革に着手しようと思う。

「そう言えば、ここの食料ってどうなってるの？」

ちなみに、トイレはきちんと水洗で、風呂も立派な風呂がありました。

そういえば、古代ギリシャでは風呂は普通に入られていたらしいし。実際、ローマ帝国時代も大衆浴場があったくらいだもんね！。

「魚」

「は？」

「魚だ」

そりゃあ、魚は周囲が海だから大量にいるでしょうよ。

「オンリー？」

「そうだ」

苦々しく頷くアイザック。

いや、魚オンリーってよく体が無事で…。

「戦士は食べ物に苦情は言わない」

「いや、体の基本となるのだから言おうよ」

やはり、地上の支配権がないのがネックか。

「地上への橋頭堡が欲しいわよねえ…」

どちらにしろ、最低限の物資は地上からの輸入に頼らなければいけないだろう。

今は、私のアトリエから食べられるものを持ってきているけど、いつまでもそれをする訳にはいかない。

むしろ、ヒモなどいらぬ。

「ただ、地上の支配権、大地の支配権はアテナのものだ」

それが、先の聖戦が終わった後での三神会議の結果だ。

ポセイドンは海を、ハーデスは冥府を、アテナが大地を。支配権をそれぞれはつきりとさせた。

「大地ねえ…。そう言えば、アイザックはギリシャ神話習ったんだっけ」

「一応。聖闘士の基礎とも言える知識だからな」

「だよな。デロス島は地上になるの？」

私がいち当たったのは、デロス島の神話だ。

かの有名な太陽と月の双子神が生まれた地。そもそも、双子の母は嫉妬した女神ヘラが、地上でのお産を禁じてしまった。

それゆえに、この島にきて産んだのだ。

元々この島は、浮島だったから。

そう、根っこが無いのだ。

「確か、神話ではアポロンとアルテミスが生まれた時点で、確か浮島を…ああ、浮島か」

探せば似たような島はあるかもしれない。
だって、ギリシャには島は沢山ある。
そう、エーゲ海の小島というやつだ。

「浮島を海闘士の地上での本拠地にするのよ。お金は、まああなた達の協力があればなんとかなるわ」

「へ？」

「うん、肉体労働して貰うけど」

まあ、聖闘士とガチでやりあうのだ。

多少の肉体労働ぐらいへでもないだろう。

まあ、会社を興さなければならぬから、ポセイドンの依り代でもあるジュリアン・ソロに協力はして貰うが。

出資金、いくらぐらい必要かなあ…。

アトリエにある貴金属を思い出し、計算する。

「何をするつもりですか？」

「サルベージの会社を興すのよ。ほら、大航海時代でお宝載せて沈んだ船は沢山あるし」

かの有名なタイタニックとかを筆頭に、それこそ山のように沈んである。

いや、初めて海の浄化をした時に、情景が頭の中に浮かぶのだよね。どうも、あの柱は自分の支配する海全体に繋がってるらしい。

小宇宙を注いだときに、なぜだか見えるんですよ。

その時に、沈んでいた船を発見して思い当たったのだ。
金がないのならば、ある所から持ってくれば良い、と。

幸い海は私達の支配下。いかに、アテナといえども何も言えない。

「取って取って取りまくるわよ！」

そこから、ついでに海底資源を発掘して市場に売れば、改革の資金源には十分だ。

「とにかく、自分達で食べる分だけの食料は確保しないと」

石鹸などの生活必需品も必要だ。

アイザックに至っては、替えの下着数枚、なんていうお粗末な衣料事情だ。

彼らが常時鱗鎧なのは、一番鱗鎧がまともな服だからだ。

「それに、魚だと共食いだしねえ……」

「と、共食いだ……」

だって、したっぱの海鬪士は魚などを変化させたものだ。テティスもそうらしいし。

とにかく、一刻も早く改革をしてまともな食料生産体制にしないと……。

私はその日の夕食の一つに、海草サラダを出した。その瞬間、降りる沈黙。

「これ、ただの海草だろ？」

フォークで、海草をすくいやすいやそんな顔をするカーサ。アイザックから魚だけ食べていた、と聞いてはいたが、まさか海草とか一切食べていなかったのか？

よく、死ななかつたな。

案外、海闘士は海のモノを摂取するだけで生きていけるのか？神の加護は、人体に必要な栄養素にすら影響をもたらすのか？

「いや、食べ物だよ。日本じゃ、普通に食べられてる」

ソ連とがフォークで器用に海草をすくい、口の中に入れる。

ああ、ソレントは食べた事があるんだな。

「日本食、食べた事があるの？」

「アテナとの会食でね。アテナは一応日本育ちだから」

そー言えばそうでしたね。

あのボンキュボンな体型は、おそらく洋食のおかげだとは思いますが。

同じ洋食を食べているのに、どうしてこんなに体型に差があるんだか…。

まあ、会食として日本食と言うのは案外ポピュラーなのかもしれない。

日本食って、盛り付けとかがキレイだから。

アイザックがおそろおそろの口に入れる。

「うん、結構食べれるよ。美味しい」

そりゃあ、海底神殿の周りの海は綺麗だし、鮮度も抜群にいいですから。
ドレッシングも、海草サラダ専用にしたものだし、不味いわけが無い。

皆恐る恐る食べて、うんうんと納得している。

「海草、食べてなかったのね」

「ああ。食べれるとは知らなかった」

まあ、海草なんて海に生えた草だもんね。
進んで食べようとする民族は少ないだろう。

とかく、日本人と言う民族は、海にあるものはなんでも食べようとするからな。

特に河豚なんて、猛毒な食べ物を進んで食べるのは日本人ぐらいだろう。

そして、私は肉体はともかく精神は日本人だ。

海のものなんでも食す。例えウミウシであろうとも！

「まあ、タコ食べる民族だしな」

「フレイ、見た目は西洋人なのにな」

うるさいよ、海將軍、S。

とにかく、魚ばかり食べていた反動か肉ばかり食べたがるこいつらに、肉以外のものを食わせないと。

下手したら、野菜も嫌がるんだ。

クリシュナはカレーにしたら食べるけど…。

この、偏食児どもめ！

海將軍達は肉が好きだけど、私は魚のほうが大好きだ。

正直、肉は食傷気味なんだよねえ…。

ザールブルグは地理的な問題があつて、魚より肉って感じのところだし。

私は海魚が好きなので、カスターニエにアトリエを移転させようとしたら、スゴイ勢いで邪魔されたしなあ。

あの時は、陛下や前陛下からもこの地に来てくれと頼まれたし。

なんか、いいように便利屋扱いにされてたからな！。

そー言うのは、宮廷つきの錬金術士にして貰えと言つたが、なんでも汎用性が薄いらしい。

微妙に役に立たないな、とは思うのだが、だつたらお前がなるか？と言われたので丁重にお断りしたのはいい思い出だ。

だつて、宮廷なんてめんどくさくて好きじゃないんだよねえ…。

一応アスランのおかげで、騎士階級にはなれたけどさ、正直ドロドロなんだよ。

仲いい夫婦が御互い愛人を囲つてたなんてザラだし！。

なので、基本的には係わり合いになりたくない。

だから、宮廷つきの錬金術士なんて御免蒙る。

ともかく、今晚のメインは肉ではなく魚にする事にした。
それも、淡泊な白身魚だ。

栄養価的には青魚がいいんだけど、イイ魚が手に入ったんだよね。
ニコニコ顔で魚を捌く。

「今日は何だ？」

バイアンさんが、本を片手に台所を覗いてきた。

「今日ですね、いい魚が入ったので鍋にしようかと思っています」
「鍋か。楽しみにしておく」

小難しい本を片手に、バイアンさんは去っていく。
さっ、欠食童子たちの為に夕飯を急ぎますかね。

コンロを2つ準備して、その上に土鍋を置く。

ちなみに、ある程度は火を通してきたので、少し火を通せば完成だ。

「できたよー」

「お、うまそー」

皆ニコニコ顔で、鍋から具を取っていく。

最初は、箸をなべに突っ込んで食べるのを嫌がったけど、今は慣れたものだ。

元々、ポセイドンの依り代であるジュリアンさんのように、育ちの良い人間はいないからね。

マナーなんて最低限なんだ。

ちなみに、ソレントさんも驚く事なかれ。

元々は一般市民だったらしい。あれだけ、品があるのだから上流階

級かと思いきや、普通の家庭で生まれ育ったそうだ。なんでも、楽器を習うときの付け焼刃的に習った事らしい。いやあ、それでもサマになるのだから美形は得だ。

私も海將軍達に負けないように、鍋の具を食べていく。鍋と言うのはなかなか戦争なのだ。

「最後の魚投入します」
「今回の魚は美味しいな。なんの魚だ？」

イオさんが啞えバシをしていたので、裏拳で教育的指導を施しておく。

「今回は河豚です」
「は？」

「だから、種類のには河豚です」
「日本の方は、確か食べられましたよね？」

アイザックの言葉に、凍っていた時間が動き出した。けれど、再びバイアンの言葉で時間が止まる。

「けど、お前が裁いてなかったか？」
「ええ、まあ」

ぎゃー！と騒ぎ出す、海將軍'S。
あー、もう煩いなあ……。
そもそも、光速拳を繰り出して戦う海鬪士が、毒ぐらいでグダグダ言うなどいいたい。

それ以上に、以前の偏った食生活を省みると、河豚の毒ぐらい可愛

いものではないか？と思わなくもないし。

「毒なんてあるものを誰が食べさせますか。河豚は河豚でも、ハコフグと言う毒の無い河豚ですよ」

そう。ハコフグは、河豚と言っても毒性は弱い。

調理するときに、皮の部分に気をつければどうにかなる。

捌き方は猟師の方にきちんと教わったので、問題は無いのだ。

そもそも、エリーじゃないんだから解毒剤とセットにふぐ料理なんてしないわよ。

まったく、失礼しちゃうわ。

今日、地上から荷物が届いた。

小さな小さな荷物。

「なんだろ、これ？」

紐解いてみると、中には調味料や少量だが小麦粉や日用雑貨品。ただ、圧倒的に量が足りない。

「ああ、定期便か」

「定期便？」

生活雑貨を前にして、首をひねっていた私にイオが言う。

でも、現在海將軍は全員在宅中。

その前に、海將軍はお金を持っていない。基本的に地上にいるソレントもそれは例外ではなかった。

どんだけ、財政的に危機状態なんだ、海底神殿。

私の言葉に、イオが教えてなかったかと呟いた。

「前のシードラゴンだったカノンから、定期的に送って来るんだよ」

「え、そーなの!？」

確かに量は少ないけど、それは人間が生きていくために必要な物資だった。

「ま、双子の兄が家計を握っているらしく、自由に使える金が少なくて量は少ないけどな」

ええ人や（ホロリ）。

「罪滅ぼし、もあるかもな」

クツリと暗い笑いを浮かべるイオ。

ああ、確か自分の野望の為に本来復活する筈のなかったポセイドン
を復活させたんだって。

もし、カノンが復活させなければ、今回の聖戦はなかったわけで…。
聖戦がなければ、海將軍達の人生は別のものになったのかもしれない。

「……物資に罪は無いからな」

「そりゃそーだ」

この物資はありがたく使う事にしよう。

現在、サルベージ計画が持ち上がっている。

これに成功して得た金で地上本部を整えて、さらには物資を海底神殿に届けるパイプラインまできちんと作ってしまわなければ。

「けどさ、この物資ってどうやって来たんだろ？」

その前に、海底神殿からの外に出るのってどうするのよ？」

アトリエを使えばなんとかなるだろうけど…。

普段はどうやって行き来していたんだ？

「基本的に泳ぎだな。小宇宙使って泳いで到達、が基本だ。それに、鱗鎧を着ていたら、自動的に海底神殿まで導いてくれる」

「鱗鎧必須なわけか。でも、こんなに目立つもの着て外に出れるか！って感じだよな？」

これから、海將軍達も外に出る機会が増えるから、その辺りはどうにかしないとなあ…。

ポセイドンに相談して、外で活動用のアクセサリーでも作るか？

素材は、鱗鎧と同質のものでさ。

サルベージ計画は見事成功した。

法律的に、半分は国のものとなるがもう半分は自分達のものとなる。それに、本来ならば機材とかが色々必要になるけど、このあたりは完璧に人力だ。

「えーと、地上拠点はこの島で…」

ソレントとテイイスに頼んで、手配してもらった島に家を建てる。

なぜか、私の感覚からしてみたら豪邸になってしまった…。なんだ？

「あまりにも小さかったら、侮られる。これぐらいは必要だな」
フフンと笑うポセイドン。

「あとは、農家や畜産やってる所と契約して、定期的に食べ物送ってもらって…。ああ、ポセイドン様、こっちの書類の処理をお願いします」

「……海底資源にも手を出すのか？」

「ええ、まあ」

眠らせていても勿体無いだけだし。

まあ、この計画はさすがにALL人力と言う訳にはいかないから、もう少し資金を溜めないといけないが。

「余裕が出来たら、ソロ家の方に回しますよ」

海運王と呼ばれたソロ家ではあるが、昨年から始めたボランティアのおかげで財産は目減りしている。

正直、ソロ家が行っているのは見返りがほとんどないのだ。

いくら、海運王と呼ばれ、膨大な財産があるソロ家ではあるが、何事も限界がある。

「確かに、親類も最近煩いな」

ジュリアン・ソロ以外にも、ソロ家の一族はいる。

ソロ家の親戚にしてみれば、目減りしていくだけの財産を苦々しく思っているのだろう。

「だったら、ボランティアだけでなく商売も少しは身を入れてください」

「この体の持ち主に言え」

なんでもいい所坊ちゃんと言うのは、自分がこうだと思ったなら突っ走る傾向にあるらしい。

「ジュリアンは思い込みが強いからな……」

達観した目で、遠くを見る。

確かにそれぐらいじゃないと、アテナに求婚なんてしようとは思わないだろうよ。

まあ、アテナは美人だし地位も財産もあるし、ソロ家としてはぴったりの相手だったせいもあるが。

「とにかく、ソロ家の血筋から海王の依り代は出るんです。ならば、最低限の財産はないと、極貧生活をさせることになりますよ?」

イヤですよ、世帯染みた神様なんてと言外に匂わす。

私の意図に気付いたのか、海王もまた嫌そうだ。

「……とりあえず、こちらの書類は適切に処理しておく。国との交渉には私が当たろう。ソロ家の名を出すのが早い」

「そうして下さい」

さて、それじゃあそろそろ地上に行って、購入した屋敷でも見に行くか。

とりあえず、地上との連絡用として下っ端とは言え、海鬪士を配置するようになっている。

彼らは連絡要員だ。

「それと、近いうちに定期の三神会議がある。フレイもついて来るように。披露目をしなればなるまい」

「面倒だな、オイ」

けれど、確かに披露目は必要なので承諾しておく。

「その場合は、あの改造鱗鎧ではなくこちらの鱗鎧を着用しろ」

そう言っ出てされたシードドラゴンの鱗鎧。

新しく作ったんかい。

「えー、動きづらーい」

「正直、あの鱗鎧でシードドラゴンと言っても説得力皆無だ。公式の場だけは、これを着用しろ」

そう言って、シードドラゴンの鱗鎧を押し付けてくる。

何のために改造したんだか…。

「ちなみに、魔改造はするなよ？」

「え、駄目ですか？」

「駄目に決まっておるだろう。あれはもう仕方ないので、お前専用にするが良い」

「イエッサー」

防具1個ゲッター。

フレイと神々の戯れ3

その頃聖域では、三神会議に向けて急ピッチに準備が進んでいた。基本的に三神会議はアテナが主催する事になっているので、主催者側はその準備に大忙しだった。

「あら、まあ」

アテナが、出席者の人員名簿を見て驚く。

「どうされました、アテナ」

243年間教皇を務めていたシオンが、今もまだ在位中だ。

本人は、いい加減隠居したいとボヤいているのだが、教皇に最も相応しいサガはストレスに弱く、次に教皇にと思ったアイオロスは実は脳筋だった為、引退も出来ない。

サガがストレスに負けていちいち黒化しなければ、いいのだが…が最近の教皇の悩みどころだ。

「いえ、海王からの出席者に、シードラゴンの名が書かれてあるのです」

「シードラゴン？」

「はて、カノンはこちらの出席者になっておりますが…」

「いえ、間違いではありません」

書状を持ってきた、海王の秘書的存在であるテティスが頭を下げたまま言っ。

「どづいう事だ？」

「海王様は、海將軍の取りまとめ役であるシードラゴン様不在に憂慮なされ、新たにシードラゴンを選出なさいました」

ズガガガーン。

謁見の間に雷が落ちた。

「前のシードラゴンであったカノン様は、最近の言葉で言うならばリストラでございます」

「リ、リストラ……」

シオンの頬が引きつっていた。

双子座であり、シードラゴンでもあるカノンは聖域が海底神殿への手札の一つだった。

ようするに、海將軍の一人はこちらの双子座であるので大人しくしとけ、と言う。

そして、今回海底神殿側はそれをひっくり返しに来た。

「元々、海將軍と聖闘士が兼任と言うのがそもそもおかしいのです。仕える神が違うのです。海王様はそのあたりを憂慮なされました」

「そう。カノンと言う存在が、友好の架け橋になると思っていましたのに、残念です」

「アテナのお心遣い、大変ありがたく思います。けれど、海將軍は激務。カノン様は、自らの柱を訪れる事もままならず、執務は溜まっております」

言外にサボりまくったカノンに文句言えよーと言つてのけるテディス。

「それゆえの、今回のシードドラゴンの選抜でございます。新たにシードドラゴンに就任されましたフレイ様は、たいそう心栄えの優しく家庭的な方で、今までは気付かなかった色々な面も気付いて補佐してくれるので、海王様も満足されております。今回、シードドラゴン様を連れてくるのは、皆様への披露目の為にとの海王様の心遣いでございます」

「……分かりました。新たなシードドラゴンに会うのを楽しみにしています」
「それでは」

テティスがシオンから、会議に必要な書類を貰い退室する。

「どうやら、最近のソロ家の活発な動きは新たなシードドラゴンが原因のようですね」

「そのようです。いかがいたしますか？」
「現在の所、彼らの動きに怪しい所はありません。聖戦終了後の処理は終わり、海底神殿は元の独立性を回復しています。下手に動けば、新たな聖戦を呼ぶでしょう」

そうなれば、傷を癒しつつある冥界も呼応する。
一番なのは、現在のこのバランスを保ち続ける事。

「平和と言つのは難しいわね、シオン」
「左様で」

「ところで、本日の執務担当はどうしたのかしら？
まだ、姿が見えないですけど？」

まるで、今日の天気を探ねるかのようなアテナの口ぶり。
対するシオンの額には、なぜか暑くも無いのに汗が…。

「きよ、今日の担当は蟹座と射手座でございます…」

「蟹は逃げましたのね。そして、アイオロスは多分忘れているのね」
「左様で」

ブウンとアテナがニケを振る。

「今すぐ、連れてきなさい」

「御意」

小宇宙通信を飛ばし、すぐさま蟹と射手座を捕獲するように指令を出す。

アテナはやれやれと、再び椅子に腰を落ろす。

黄金聖闘士を復活させたのはいいけれど、どれもアクが強すぎて使いづらかった。

しかも、日本と言う国で育ったアテナは、日本人の勤勉さが懐かしくなった。

この国にはシエスタがある。

日中の時間は、休憩時間だ。ただし、アテナは日本育ちなのでシエスタの慣習は馴染みが無い。

よって、アテナは昼間動く。

なので、交代でシエスタをしているのだ。

今回はその中でもサボリ気味な蟹座と射手座だったただけだ。

ようは、日常茶飯事な出来事なのだ。

さて、新しく任命されたシードラゴンにどういう対応を取るか、思案のしどころである。

私は、鱗鎧をきっちり着込み、海底神殿の入り口へと来ていた。入り口と言っても、本当に入り口があるわけではない。

出ようと思えばどこからだって出れるのだ。出た瞬間、ポセイドンの庇護が無くなり、水圧で押しつぶされるが。

いや、一回手が間違っただけで出た瞬間、無茶苦茶痛い思いしたよ。慌てて引っ込めて回復させたけど、見るも無残な体になってた。

言ってしまうえば、暫定入り口と言った所だ。

「今回の任務は、私とソレントさんと、テティスさんだけだっただけで聞いてただけだ…。なんで、付いて来るかなあ…。」

深いため息をつくとき、アイザックは困ったように頬をかいた。

「その、フレイさんが心配で…。」

「うん、アイザック君はそーなんだろうね。んで、残りは？」

その他イオとアイザックとソレントさんとテティス以外。

雁首そろえてなにやってるの？

「あー、お前いなかったらメシが」

「てめーら、妻が旅行に出たらメシが作れない50代旦那か」

ガスリとローキックをするけど、多分痛くも痒くもないんだろうなあ。

おそらくは、子猫に引つかかれた以下かもしれない。

「まあ、地上のアテネにでも滞在してれば？」

「タベルナ（食堂）とかあるし」

滞在するには、地上の橋頭堡の家を使えばいい。

一応、全員が来てもいいように全員用の個室とかあるし。家具もテキトーだけどいれておいた。

正直、それぐらいしないと部屋が多くて使いようがないんだわ。

食料も10人分ぐらいしか必要ないから、そんなに大量、って訳でもないし。

ちなみに、庭は家庭菜園として下っ端が面倒を見ております。

作ってるのは野菜とお国柄的にオリーブ。

オリーブの木を見たときに、ポセイドンがものすごく嫌そうな顔をしたんだけどね。

そう言えば、アテネの守護神決めるときにアテナに敗れたんだっけ。その時から仲悪かったんだなあ…。

でも、オイルは取れるし、食べれるし、便利だから育てています。今度実が収穫できたら、ピュアオイル作ってみようっと。

「出来れば、一緒にいいんだが…正直、お前のメシ食ってたら、油っこいんだよ。この国の料理」

「いや、ヨーロッパって言うか地中海近辺の国は、大体そんなもんだと…」

「胃にくんだよ…」

「じゃあ、大人しくカレー食べてなよ。海底神殿に、カレー作り置きしてあげたでしょ」

「イオじゃねーのに毎食カレーなんて食べるか！」

「贅沢言うな、このタコ野郎」

「何度言えば分かる！？ 俺はスキュラだ！！」

はたから見たらタコに見えるんだって…。

「まあ、ポセイドン様に聞いてみてよ…アイザック」

「了解」

アイザックが小宇宙を使って、ポセイドンに思念を送る。

この言い方だと、小宇宙が使えるやつって全員電波だな。

ちなみに、私はそーいう使い方は出来ない。

ホントーに、戦いに向いてないんだそうだ。

ポセイドンも笑っていた。

「史上最も戦いに向かない海闘士。しかも、筆頭のシードラゴン、か」

って。

「アテナに聞いてみるって。おそらく、許可は出ても12宮の入り

口前で待機になると思うってさ」

「近場の村って、ロドリオ村だっけ？

そこでホテル取つときなさいよ。あと、絶対迷惑かけるな」

カードは持っていないので、ホテル代現金払いだろうなあ。

まあ、あんな田舎の村でカードなんて使えないと思うからいいけど。

ああ、今度ポセイドン様に会社用のクレジットカード作って貰わないと。

アメリカとか行く場合、カードがあった方がやっぱり便利なんだよ

ね。

あ、でも肝心のロドリオ村にホテルっつーか、泊まれる所あるかしらっ？

「許可でした」

アイザックの言葉に、私は頷いた。
やれやれ、出発前にひと悶着あったけど、ようやく出発できるよ。

はーるばる来たぜ、聖域へ。
思わずそんなワンフレーズが出てきてしまった。

私たちは本拠地から移動して、聖域最寄りの村であるロドニオ村を通り聖域の12宮の前までやってきた。

ちなみに、ロドリオ村では一応小さいながらも宿泊施設があったので、全員分の部屋を取ってそこで待っていてもらうようにした。ただ、一部屋のみだったので雑魚寝が決定したが。

ちなみに、私は皆みたいにな光速移動なんて技は持っていないので、抱っこで運んでもらいました。

ちなみに、抱っこしたのはアイザックだ。

うん、彼が色んな意味で一番安心。真面目だし。

「海底神殿も凄いけど、ここも大概だよねえ……」

私は聖域を観察する。

先程通るときに見たのだがこの聖域と言う場所、現代にあるのにも関わらず、文明の利器がない。

電気はないからランプだし、ガスレンジが普及しているのに今時竈オンリー。

なんて言うか、神代から全然変わってない印象を受けるのだ。

それは、建物の形式だってそうだ。

先程案内人に説明された聖闘士の宿泊所は、簡素な石造りだ。

「この上にアテナがお待ちになっております」

ここまで私達を案内してくれたのは、銀色の聖衣を身に纏った人物。所謂白銀聖闘士だ。

別名アテ馬。

だって、漫画の扱い見ていると、最下位の青銅にも勝てなかったんだよ。

しかも、ほぼ同等の人数で。

聖闘士は下から、青銅・白銀・黄金と聖衣の強さが増していく。

当然上の聖衣を身に纏うには、下の聖衣を身に纏うよりはるかに高い実力が必要になる。

正直白銀聖闘士の顔なんて全て覚えている訳はない。

黄金と比べて印象が薄すぎるから。

「ありがとうございました」

そして、覚える必要もないだろう。

彼は白銀の聖闘士。それだけでいいのだ。

さて、視線を十二宮に移そう。
麓には漫画にもあった火時計があり、そこから順番に12の宮がある。

「随分と住み辛い所よね。聖闘士になって毎日コレ登れって言われたら、絶対聖闘士やめるわ」

「それ、どーなんですか…」

過去に聖闘士になる為に修行していたアイザックが脱力する。

「あー、ごめん。アイザックのお師匠さんがいる場所だったか」
「……ええ」

十二宮の11番目の宮、宝瓶宮にアイザックの師匠はいる。

「挨拶、した方がいいかな？」

「ちなみに、なんて挨拶するんです？」

「お弟子さんにいつもお世話になっています？」

いや、お世話しています、か？

私の言葉にさらにアイザックが脱力した。

さて、そろそろ十二宮か。

アイザックが私を抱き上げた。

私の速度で行くと日が暮れるので仕方ないのだ。

白羊宮は目の前だ。

結果から言わせて貰おう。

アイザックに抱っこしてもらって正解でした。

本気で洒落にならないよ、この階段。

私に一人で登れとか言ったら、途中でへばっていたわよ。

最近、アトリエに籠もりっぱなしで採取に行かないから、めっきり持久力落ちているんだよね。

うつつ、運動不足だ…。

今回、私は元シードラゴンの鱗衣をフルで装着してきた。

その格好で、アイザックに抱えられているのだ。

宮の守護者たちは、目を丸くして私とアイザックを見比べていた。

ただ、双児宮のカノンだけは、私を睨むように見ていたな。

自分が着ていたものを、私が装着しているのが面白くないみたいだ。

カノンはほら、サガと仲良く聖衣をシェアしていればいいよ。

そして、11番目の宮である宝瓶宮では通り過ぎるだけでなく、アイザックがカミュと何か言葉を交わしていた。

カミュは、私を確認するとペコリと頭を下げたので、私も頭を下げておく。

どうも、会議が終わったら一緒に食事でもしようかと誘われているみたいだ。

私は別に良いと思うけどね。

現在、海底神殿は聖域と敵対している訳ではないのだから。

私が頷くと、アイザックは嬉しそうに笑って喜んで！と言った。

後でお菓子でも持って行かせるか。

薔薇の茂る階段を通り……って、これ魔薔薇じゃ……いや、普通の薔薇に入れ替えたのか？
全然苦しくないし。

そして、辿り着いた最上階教皇宮。
さすがにそこからは案内人がつく。

「シードラゴン様、クラーケン様。海王様とアテナはこちらの間でお待ちです」

そう言つて案内された教皇の間と思しきでっかい扉がある部屋の前。

「あのさー、これ私で開けると思つて？」

「……俺が開けます」

アイザックがドアを両手で押す。

ゴゴゴゴゴ

その音にやっぱり重たかつたんだ、と私は思った。

まあ、聖闘士ならコレ程度楽に開けれるから、問題ないんだろうな。

前方には、アテナと海王とその横に空きの椅子。

アテナの手には黄金の杖が握られ、横には麻呂眉の黒いローブ姿の男が立っている。

ポセイダンの両脇には、テティスとソレントが。

私とアイザックは2人の神の前まで歩き、そして片膝を付いた。
そして、目深に被っていた兜を脱ぐ。

バサリと長い赤い髪が、私の頬を撫でる。

アテナと教皇が僅かに表情を動かした。

口が動いた。

多分、私が女であることへの驚きの言葉だろう。

聖闘士にも女性はいるのだから、そんなに驚く事か？

「ポセイドン様。シードラゴン・フレイ・ローゼン、クラーケン・

アイザック、お呼びにより御前に罷り越しましてございます」

そう言つて、深々と頭を下げた。

アイザックも私の横で頭を下げる。

「よく来たな。こちらがアテナだ」

ポセイドンがアテナを紹介してくれたので、私は頭を下げた状態で、

「お初におめもじつかまつります。ポセイドン様より北大西洋の柱を預らせて貰つております、シードラゴンの鱗衣を賜りましたフレイ・ローゼンと申します」

「ようこそ、聖域へ。疲れてはいると思うが、冥王が到着次第、会議は始まるので、短い時間だがゆっくりと休むがよい」

教皇がアテナの代わりに、そう返事をした。

アテナは、ただ私を凝視している。

「かしこまりました。準備は整っております。ポセイドン様、こちらに資料を用意しております」

「じ苦勞」

海王が偉そうに頷く。

一種のパフォーマンスなのだが、どうしてもこー言う事も必要になる。

恭しくポセイドンに資料を差し出すと、私たちは一旦部屋を後にした。

次に二柱の神に会うのは、会議室でだ。

それから、30分後冥王一行が到着し、三神会議の幕が上がった。

ペラリペラリとページを捲る音が響く。

そして、始まる会議と言う名の茶番。

チラリチラリと私に投げかけられる視線は、少々鬱陶しい。

ポセイドンの両脇には秘書役のテティスとソレントが侍っている。

私はと言うと、後ろでお茶と菓子の準備をしている。

実は、菓子は自腹なんだぜ。

何でそうなったかと言うと、会議が一度冥府の地上の橋頭堡であるハインシュタイン城で開かれたときに、一悶着あったらしい。

なんでも、安全性がどうかで揉めに揉めてそれ以降、会議後の食事以外の軽食は全て持参になったらしい。

聖域サイドや冥府サイドは、なんとコック連れて来たらしいよー。ちなみに、海底神殿側はそれ相応のものを買ってきていたらしい。

ヤバイ、なにそれ哀れすぎる。

「だから、今まで海底神殿が会場になっても必死に断ってたんだよな」

の言葉には、思わず涙が溢れました。
不憫すぎる…。

まあ、そんな事情があるものだから、私は後ろでお茶菓子とお茶の用意に専念していました。

今回のチヨイスは、ミスティカティーのアイスです。
今日は暑いですからね。

お茶菓子はベリータルトを作ってきたので、それをポセイドンに出します。

秘書役の私達の間もあるので、後で仲良くいただきますよ。

「まあ、ポセイドン。おいしそうね」

アテナが高そうな紅茶と、無茶苦茶甘そうな蜂蜜がかかった焼き菓子を食べながら、ポセイドンの菓子を見る。

「珍しいな。お前が、市販品以外を持つてくるとは」

「今まで色々あつて持つて来れなかっただけですよ、兄上」

そう言えば、ポセイドンとハーデスって兄弟だっけ。

さらに言うならば、アテナは姪だ。

親戚同士で殺しあうのはギリシャ神話のセオリーだよ。

「そうか」

「……フレイ、兄上にも」
「かしこまりました」

真新しい皿に入れて、お付きの方に渡す。
かもめ眉毛の人が、本当に申し訳なさそうにでかい体を小さくさせて頭を下げてきた。

いえいえ、困ったときはお互い様ですよ。
ただしアテナは煩そうなのでお断りします。

「ふむ……不味くはない」

「珍しいですね。何を食べても不味いという兄上が」

「昨今の地上の食べ物など、神代と比べて汚染されて旨味にかけるわ」

野菜的には現代野菜のほうが品種改良されて美味しいんだろうなあ…。

「ただ、この菓子は汚染が少ない。どこの食べ物だ？」

「シードラゴン、直答を許すゆえ答えよ」

「海底神殿で試験的に作りました菜園で取れた野菜でございます」
「なるほど。冥府とは違い海底神殿では、植物が育つのだな」

余には無理な事よ、と冥王が自嘲する。

うわっ、一気に場が暗くなった。

「兄上…」

「ふむ。パンドラにも食べさせてやりたくなった。シードラゴンよ、これを一つ所望する」

「かしこまりました。後でお届けいたします」

アイザックに氷を作ってもらって、保冷剤として入れておかなければ。
便利だわあ、氷の技を持つてる人って。

海王陣営と冥王陣営にほんわかした空気が流れる。

実際、この2神の仲は悪くない。そもそも、敵対する要素がないのだ。

冥王との聖戦の時は、聖戦後の事を見越して動いただけで、ほとんどは海王の気まぐれに近い。

別にアテナに協力しようと思って協力したわけではない。

冥王もそれが分かっているから、何も言わなかった。

さて、そのような空気が面白くなかったのはアテナだった。
むうっとしたかと思うと、

「ポセイドン。話は変わりますが、新たに地上に拠点を作った理由聞かせて貰えないかしら？」

微妙な力関係の所に、新たに石を投じた意味を。拠点を作るなど言っている訳ではないわ。一言相談して貰いたかったのよ？」

「……アテナよ。思い違いをしていないか？」

ポセイドンの返しで、ほんわかした空気が一瞬にして真冬になった。
さむっ、寒いよ。

誰だ、小宇宙出している奴。くっ、アイザックのお師匠さんか。

さみーんだよ、出すなよこんちくしょう！

「我も兄上も、聖戦に負けたとはいえ終戦処理は終わっておる。我らを貴様の配下とでも思い違えたか？ 自惚れるな。海底神殿も、冥府も独立した勢力だ」

ポセイドンが威圧をかける為に、小宇宙を僅かだが放出する。それと協調して、冥王の小宇宙も僅かながらに漏れ出している。

「もう一度聖戦を起こすか？」

「そうなれば、余もポセイドンと協調するぞ？」

「配下と見られてはかなわぬ」

「失礼しましたわ。けど、あなたが平地に乱を起こす事をしたのは確かです。その説明を求めますわ」

二神の小宇宙に当てられたかのように、黄金聖闘士が動こうとするのをアテナが制す。

こちらも、ソレントとテイスが戦闘準備に入ろうとする。

冥王側も、連れの冥闘士の雰囲気がからんと変わる。先程までいい人そうだった人の顔つきが変わっている。おおお、ちょっとカッコイイ。かもめ眉毛だけど。

私？ ティーポッド持って呆然としていましたよ。正直、ドンパチが始まったらさっさと撤退します。

戦わないのだった？

うん、無理。むしろ自殺行為。

凡人に聖闘士の真似は無理ですよ。

「ふむ。ならば、説明するが良い。シードラゴンよ」

え、私？

いきなりの指名に思わず動揺するが、すぐにそれを収める。

動揺していたら240年以上生きているジジイに突っ込まれるからだ。

実は私はそれ以上生きていたりするんだけどね！。

「先程も少し話しましたが、海底神殿では常時物資の不足に悩まされております。今回の地上の拠点はそれに対する対抗処置だと思っ
てください」

「物資不足？」

シオンが訝しげに眉を顰める。

「聖域より少ないとはいえ、海底神殿には常時5人以上の海将軍が
詰めております。彼らが生活する為に必要な食料、生活雑貨などが
必要となります」

「それにしても、少々大規模ではないかのう？」

「私たちが地上に出るときの宿泊施設も兼ねております。海王様が
宿泊される場合もあります。むしろ、狭いぐらいです。そもそも、
そちらのアテナ様が別の場所に宿泊するとき、粗末な建物を選びま
すか？」

無理でしょう？ 我らも一緒ですよ。わが君には、不自由なく生
活していただく」

「ふむ。拠点は分かった。だが、食べ物のお。カノンからもある
程度支援しているのは聞き及んでおるが、それでは足りぬか？」

は？

あの量で足りないかですって？

足りるかバカヤロー。うちの子たちは育ち盛りよ！

っ！か、あれっぼっちの食料で養えるか！

いや、それでもカノンさんの善意はありがたかったわよ。無償で、
見返りのない援助なんだから。

つーか、知っててそれを放置して聖域の為に利用していた教皇が腹黒い。

黒いよ、この元干物じじい。

「足りる訳ないでしょう。こちらの資料がカノン様からの一回当たりの援助です」

念の為に用意しておいた一枚の紙を渡す。
それを、シオンは横目で確かめ眉を顰める。

「一人分か？」

「なんでわざわざ一人分にして持ってますか。一回分です。いいですか、これでは海將軍全員生活できません。だから、今回の拠点が必要なんです。人間、食べなかつたら死ぬのです。普通に生活するのに必要な品があるのです。石鹸ないと体も洗えないし、トイレットペーパーのない生活は嫌です！」

私の心の叫びに、黄金聖闘士たちが微妙な顔をする。

ふはははは、驚いたか。こちらら、こんな状況だったんだよ！

実際私が居ないときは、よく生活できたよね。

私に来てから、宝石・貴金属を少しだけ売ってその資金で海底神殿の物資を購入したんだ。

そもそも、金を出さないのだから口も出さなと言いたい。

私に力説と睨みに、シオンはふいつと目をそらした。

ふっ、勝った。いや、ちょっと乙女としてトイレットペーパーの重要性を力説したのは、乙女として必要な『何か』を失ってしまったような気がするけど。

その『何か』の名前は多分恥じらいなのだろうけど。

なんとか纏まろうとした場に、爆弾を投げ込んだのはアテナだった、

「けど、食料の為にこんなに稼ぐ必要があるのかしら？」

バサッと出されたのは、私が音頭を取って行っている事業の数々。

主に日本以外で行っている船のサルベージに、海底資源の採掘予定。

冥王がそれを見て「ほう、手広くやってるな」と感心したように言った。

「食料の為だけなら必要ないですね」

「戦でも起こすつもりか？」

聖闘士の間で再び剣呑な空気が漏れ出してくる。

うとうとう、逃げたいけど…。

チラリと海王を見ると、逃げたら許さんオーラが…。

もう少し頑張ろう。

「違いますよ。先の聖戦時の被害者救済の為に、海王様の依り代であらせられますジュリアン・ソ口様が私財一切投げ打って救済活動をしているのをご存知ですか？」

「ええ」

アテナが鷹揚に頷く。

だったら、話が早い。

「ジュリアン様の親戚の仲には、ジュリアン家の財に頼って生活の糧を得ている親戚の方々がいらっしやいました。その方達が、今回

の私財を投げ打った事で、困窮しています。その救済も兼ねてお
ります」

そう。今まで、ソロ家の血を引いているものはソロ家関連企業で働
く場合が多かったんだ。

けど、ジュリアンはそれを全て手放し被害者の救済に当たっている。
じゃあ、ソロ家の人間はどうなるか？

幹部としての地位を挿げ替えられたり、前より収入が下がったり下
手したら解雇されていたりする。

その人たちを拾い集める意味も今回の事業にある。

「そのままでも問題はないのではなくて？

言つては悪いけど、人界の出来事よ？ 海界がでしゃばるのは問
題じゃないのかしら？」

「普通だったらそうでしょうね」

甘いよ、アテナ。

あんたは聖戦ごとに転生してくるから関係ないと思ってるけど、
ポセイDONは違うんだ。

「ポセイDON様は代々ソロ家の人間に憑依しております。次にポセ
イDON様が憑依する人間が困窮の中におられるのは、よろしくない。
そう判断した故です。富豪、とまではいきませんが裕福程度の生活
をポセイDON様の寄り代には送って貰いたいのですよ。部下として
は」

代々聖域に傳かれて大事に育てられ、今回はサガの乱のせいで聖域
外で育つたとはいえ、引き取られた先は極東でも有数の財閥の主。
食事に不自由したことのない、金に困つた事のない生活を送ってい

るんだ、このお嬢さんは。

そんなお嬢さんに、食べ物が食べれなくておなかと背中がくっつき
そんな飢餓感は分かるまい。

「全ては、ポセイドン様の為に。それが、我ら海將軍が生きる意味
でございます。そちらも、アテナの為ならばなんでもするでしょう？
小さな子供に過酷な修行をさせて死なせたり、それと一緒にでしょ
う？」

すべては、自分の仕える神の為。聖戦をしかけている訳でもない
し、放つて置いてください。

これ以上何か言うのであれば、口を出す前に金を出してください。
以上ですわ」

それはもう満面の笑顔で、淑女の礼を取りポセイドンの後ろに戻る。
ポセイドンはよく言ったとばかりに満足そうに笑っている。

あんまりと言えばあんまりな反論に、聖域側の殺気が膨れ上がろう
とする。

それを制したのは一人の黄金聖闘士の突拍子のない笑い声だった。

「ふはははは。正しい、その嬢ちゃんも正しいぜ、アテナ。間違
った事は何一つ言っただけじゃねーか。食べ物を買うために金が必
要なのは当たり前で、ポセイドンの依り代の血筋のソコ家を守るの
も大事。そして、俺らがアテナの為に小さな子供を犠牲にしてい
るのも真実だ。何を今更怒る必要があるんだ？」

その笑い声の持ち主は、蟹座の聖闘士デスマスクだった。

「デスマスク、アテナの御前だぞ！」

「へいへい。俺は外の警備に回るぜ。まったく、だから嫌だったんだ、こんな茶番は」

デスマスクは出口へ向かいながら、そう言った。

最後の方は出口の近くに居る私以外には聞こえなかっただろう一言。

けど、デスマスクの発言のおかげで殺気が散ったのは真実。むう、もしかして助けられたのかな？

後でお礼を言いに行ったほうがいいのかしら？

こうして、最後はグダグダになったまま会議は終了したのだった。

あー、長かった。

ポセイドン用にと用意されている部屋に戻ると、私はお行儀悪くも床に座り込んだ。

あー、石造りの床が冷たくて気持ちいいけど、長く座っていたら冷えるな。

「よくやった。アテナのあの顔を見たか。ざまーみる、と言っちゃっただ」

ポセイドンが、それこそ小躍りしそうな程喜んでいる。

「まあ、最後は自分の聖闘士からトドメさされていますからねえ…。さぞやご立腹と言つところでしょう」

蟹座は、私が読んだ漫画の時から所謂『悪』の聖闘士だった。

最後の最後に彼は聖衣に裏切られ、破れてしまっただけねど…。

けど、あれって悪か？

「アテナから見たら悪だろうよ。一般人もろとも技を放つような輩じゃ」

「それとも時と場合によるんじゃないかって感じはするんだけどねー。一般人を盾に閉じこめられたりしてたらどーしようもないだろうし。それに、聖闘士の技って爆弾みたいなものでしょ。無関係な人間避けてくれるって訳じゃないじゃない」

そうなんだよねー。フラムも爆発の一番大きい部分は単体だけど、ある程度の余波は出るんだよ。

それで怪我しないってわけじゃないから、使用にはすごい注意を払わないといけないんだ。

「そもそも、彼がどうしてそんな状況で技を使っているんだろうね？ どうせ、資金集めの国からの依頼でしょ。聖域維持の為に資金稼ぎ。いやあ、どこも大変だ」

聖域維持の為に、正義の名の下に人殺しをするよりサルベージのほうがはるかに平和的でいいと思うけどね、私は。

アテナは下手に地下に手をつ突っ込めないからなあ。

地下のモノは全て冥王の財産だから。
宝石も、金属もすべて地下のもの、冥王のもの。

海はポセイドンの支配化。アテナにあるのは、地上の支配権のみ。

「言っただけじゃよかったのに。人殺しで資金稼ぎをしているどこかより遥かに健全ですって」

テティスがお茶を入れてくれる。

当然私が持ち込んだお茶だ。

「ふふふ。いいな、このミスティカティーと言うのは。小宇宙が回復する」

「いいでしょ。これ大変なんですよー、作るの」

私もお茶を受け取り、お行儀悪いながらも地面に座り込んだまま胡坐をかいて茶を啜る。

「あ、ポセイドン様。会食は今日はあるんですか？」

「ま、あるだろ。中止って言ってきてないし」

その言葉に、ソレントが用意しておいた服を出す。

「フレイ、頼んでおいたカフスを出してくれ」

「了解」

前にソレントから、ポセイドンに相応しいカフスを、と言われて作っておいたのだ。

真珠とグラントツ銀を使ったカフスポタン。

「ほう、美しいな」

「防御力を高めてくれますからね。まあ、念の為ですよ。どうします、軽く何か食べていきますか？」

「ふむ、軽く貰おうか。どうせ、何を食べても味気ないのだ」

「そーでしょーねー。何が悲しくて敵と顔を合わせてにこやかに食事しないといけないんですか」

「しかも、油が辛い。アテナは若いからいいかもしれないが、兄者なんてウンザリとした顔をしているぞ。あれも新たな嫌がらせか？」

「そ、そーいうセコイ真似はしないとしますよ…。多分、ギリシ

「ヤ料理だからじゃないですか？」

「ほら、オリーブ油たっぷりそうだし」

「オリーブと言った瞬間、嫌そうに顔を歪めるポセイドン。まだ根に持つてるのかい。」

「私はオリーブが嫌いだ。だから、フレイの料理は好きだぞ？
アテナなどコレステロールに埋もれてしまえ」

「なんつー呪詛ですか。」

「まあ、どちらしろ苦行ですねえ……。軽食作っておきますか？」

「頼む。フレイは下に泊まるのか？」

「ええ。アイザックも下のロドリオ村に泊まります。あまり、刺激してもなんですよ」

「ならば、朝食は頼むぞ？」

「まあ、頼めば聖域が用意してくれるだろうが、頼むのは業腹だし。」

「いいですよ。時間を言ってください」

「8時ぐらいでよい」

「分かりました。和食でいいですね？」

「和食がいい」

「かしこまりました」

私は備え付けられているミニキッチンに立つと、秘密バッグから次々に材料を取り出し料理を始める。

軽くでいいと言ったので、にゅうめんを作る事にした。

米炊くのも面倒だし、時間もないし。

私は野菜を切り出汁をとり、ちゃっちゃっ作ってポセイドンとテ

テイス、ソレントの2人にも出す。

「あら、私達も?」

「ええ。どうせ警備でロクに食べられないでしょうから。帰ってから
も軽く摘めるように、サンドイッチでも作っておきますね。具はハ
ムとチーズで」

「フレイの作ったチーズは美味しいから嬉しいな」

ソレントの言葉に私は満面の笑みで頷く。

「本当はお酒でも飲ませてあげたいけど、敵地だから無理ね。帰っ
たら1本用意しておくね。何がいい?

「ワイン? 蒸留酒?」

「蒸留酒ってあの変な魚が入ったヤツ?」

テイスの顔が引きつっている。

「普通のもあるよ」

「最初からそっち出しなさいよ。私はビールでいいわ」

「では、私はワインで」

「了解。頑張つてね、2人とも」

私はタルト数種類を箱に入れると、部屋のドアに手をかけた。

「兄者の所に持っていくのか?」

「ええ。約束しましたから、早めに済ませますよ」

「気をつけて行って来い。冥界は気に入ったものは浚っていくので、
気をつけてな」

「嫌な事を言わないでくださいよ」

ポセイドンが言ったのは、ペルセフォネーの神話だろう。
全く昔の事を持ち出して。
けど、心配してくれるのは嬉しいな。

私は足取りも軽く冥王の部屋へと向かったのだった。

フレイと神々の戯れ 4

アテナは自室で怒り狂っていた。

苛立たしげに二ヶを何度も床にカッンカッンと突き続ける。

アテナの側に侍るのは、教皇シオンと教皇補佐であるサガ。

当初、時期教皇にと指名されたアイオロスは、自分は教皇の器にあらずと辞退し、今も射手宮で急の守護をしている。

だが、皆知っている。教皇なんて面倒かつ書類仕事の多い地位から逃げた事を。

教皇ともなれば現場指揮の機会は薄れ、主に各国の首脳との折衝や書類仕事が増えてくる。

どうしても、現場で力を振るう機会は減るのだ。

アイオロスは、それを嫌がりかつて自分を殺したサガに押し付けたのだ。

当初、許されたとしても自分が反逆者であると辞退していたサガだったが、負い目のあるアイオロスに競り負けた。

それから、時期教皇として教皇の補佐をしているのだ。

聖域の為にはまことに良い判断だったと思われるのは、秘密だ。

「アテナ、落ち着きください」

シオンが何もないうちに言う。

大人びているとしても、アテナは14歳。

時々自分が抑えきれず、癩癩を出す場合がある。

星矢たちから昔は癩癩の塊だったと聞いて、嘘だろうと思ったがこの姿を何度か見るたびに納得した。

「デスマスクには後できちんと言い聞かせますので」

「そちらではないですわ」

アテナの機嫌が急降下していった。

「あなたは気付かなかったのですね。シードラゴンの小宇宙に」
「シードラゴンの小宇宙？」

確かに一般人にしては大きかったが、それでもせいぜい白銀クラスの小宇宙しか所持していない、黄金クラスと比べるのもおこがましいほどの小宇宙だった。

「彼女は、私が探していた異世界の娘よ」

絞り出すようなアテナの声に、シオンとサガは驚愕した。聖域の力どころか、グレード財団の力を使って探していた少女がポセイドンの下におり、それどころかシードラゴンの鱗衣を授かっていた。

「絶対、ポセイドンは私が探しているのを知っていながら、シードラゴンにしましたのよ！」

そうじゃないと、タイミング的にあまりにも良すぎますわ。きっと、今回の三神会議にあわせましたのね」

ああ、忌々しいとアテナが天に向かって叫ぶ。

普通に保護されていた場合ならば、引渡しを求めることが出来る。

多少交渉時に聖域に不利な案件を飲まなければならぬかもしれないが、不可能ではない。

けど、相手が海將軍の地位を持っているのならば別だ。海界はシードラゴンを守るだろう。

「忌々しい忌々しい忌々しい忌々しい。シオン、サガ。どうかして、彼女に星矢を診るようにさせてちょうだい。おそらく、ハーデスが星矢につけた傷は、生半可な治療では治せないわ」

事実、聖域で強いサイコネキスを持ち治療が一番上手いムウでも、星矢の受けた傷は治せなかった。

アテナが自らの小宇宙を使い治療に当たっても、容態は芳しくない。悪化する事はないが、治る事はない。

「彼女なら治せると?」

「恐らく。異世界の技術なら治せる可能性があります」

アテナが彼女を保護しようとする理由が分かった2人だった。いや、シオンはある程度勘付いていたので、一人か。

「勅命です。シードラゴンと接触し、星矢の傷を治させなさい」

「はっ」「はっ」

膝をつき、勅命を受ける二人。

それにしても、難しい勅命を受けてしまったと二人はこれから頭を悩ませる事になる。

私はアイザックを引き連れて、冥王一行が与えられた部屋へと向かった。

手には数種類のタルトとワインが入った籠がある。

ワインはく幸福のワインをチョイスした。冥王様が気に入ってくれたらいいけど…。

与えられた部屋の扉をノックすると、先程対応してくれたカモメ眉毛、もといラダマンティスさんが出てきた。

「あの、これお約束していたお菓子と、良ければこれもどうぞ」

おそろおそろ籠を差し出すと、一瞬と惑いつつもそれを受け取ってくれた。

「よもや、こんなに早く持ってくるとは思わなかった…」

さようですか。

少し立ち話をし、頭を下げて別れを告げる。

「機会があつたら、また」

ええ、また。

ラダマンティスさんがお礼にと、黒い石をくれました。

黒曜石みたいだけど…。

「冥衣の欠片だ。ハーデス様にお前に渡すように言われていた」

「ありがとうございます。ハーデス様にお礼を言っていたと言っておいて下さい」

今度、ハーデス神殿に貢物しに行かないといけないね。

やはり、冥界は殺風景な所だから野菜の種なんてどうだろう？
冥界も食べ物に苦労しているだろうから、食べ物系は喜ぶんだと思
うんだ。

特に某世界で手に入れたくオオモロコシなんてどうだろう？

武器に変換も出来るぐらい強い植物だ。

強すぎて他の植物まで圧倒してしまうのが、あの世界の植物の悩み
の種だよなあ…。

世界もモンスターも、何をおいても強すぎるんだ。

貴重なものを貰い、用事も済ませたので一応今日はもう十二宮に滞
在する意味は無い。

ある意味敵地なのでさっさと撤退するに限る。

限るのだが…どうして、魔宮薔薇が毒々しく咲き乱れているのでし
ょうでしょうか？

十二宮を下る為の階段を前にして、私は途方に暮れてしまった。

「ア、アイザック、どうしよう……」

「これは、まさか……」

どうやら、聖域側は私を外に出す気が無いようだ。

「フレイさん、あれを見てください」

気付いたら灯っていた火時計。

これはもしかして…。

「十二宮を突破せよとも言っ気が。聖域の奴らは」

どうやらタダでは返してくれない様子。

「アイザック、十二宮逆突破しなきゃいけないみたい」
「どうしてこんな事に」

下手したら聖戦再び！だよなあ…。

私は、嵩張るだけの鱗衣を脱ぎ、自分が作った鱗衣を着込む。
人目なんて気にしない。どーせ、鱗衣の下に服着てたし。改造版も、
服の上に着込むから問題なしだ。

「いざ！十二宮逆突破ーっ！」

私は解毒剤を口に入れて一気に階段を下っていった。
毒なんて無駄無駄無駄無駄ああああ！！

高笑いをあげながら、私は階段を下っていった。
後ろでは鱗衣を回収したアイザックが続く。

かくして、私の十二宮逆突破が始まった。

そう勢いいさんで双魚宮に駆け込んだが、この宮の主は白いテーブルにレースのテーブルクロスを敷いて、優雅にお茶を飲んでいた。

「いらっしやい。お茶でもどうかな？」

席を勧められたので、言葉に甘えて座ってみた。

苦勞しながらも魔宮薔薇を抜けたアイザックが、私の隣に座る。

魚座のアフロディーテは、私に薔薇の香りのするお茶を入れてくれた。

「ありがとうございます。それにしても、一体何がどうなっているんですか？」

「聖戦、始めるんですか？」

「どうも、教皇たちにアテナの勅命が下ったらしくてね。君の身柄を確保せよ、だそうだ」

ブフー

思わずアイザックと2人、お茶を噴射する。

「もしかして、このお茶に一服盛ったとも思ったのかな？」

「いや、薬は私の得手だから、入っていてもどーともなるからいいんですが…」

あらかじめ万能薬飲んでいたし。

万能薬は服用して一時の間効果が持続される。

だから、先程服用した薬の効果はまだ持続されている。

なので、このお茶に一服盛っていたとしても、無効化出来ている筈だ。

「そもそも、毒を盛るなんて美しくない真似はしないよ。それに…今回の事は少々面白くなってね。アテナも、天馬座が絡むと相応の女性になれるのが困った所なのだが…」

年相応ねえ…。

年相応って言うと、やはり「馬におなりなさい」がスタンダードなのか？

私にとってアテナのイメージは悪い。だって、馬（以下略）だし。

「今回の事は、私はノータッチでいかせて貰うよ。おそらく、宝瓶宮からはそうもいかないだろうけどね」

カミュは頭が固いんだ、だそうだ。

しかも、カミュはアテナへの忠誠心が厚いらしい。

「その場合はアイザックを生贄にして突破するしかないかなあ…」
「フレイ…」

アイザックがまるで捨てられた子犬のような目つきで私を見る。

その目つきは辞めてください。

「いや、私に聖闘士の戦いをしろって方が無理でしょ。一度も戦闘訓練したこと無いのよ？」

「そうだけど…」

やった訓練はゴールドントライアングルの発動訓練のみ。

しかも、たった一度。

アフロディーテは呆れ顔で見ている。

「私は、海底神殿の生活環境を改善するのが一番の使命ですからねー。戦闘能力は、一般人に毛が生えた程度です。鱗衣も動きにくいから普段は着ていませんよ」

「そう、なんだ。それはまた変わった海將軍だね」

「海將軍だから戦わないといけないって言う訳じゃないでしょ。基本的に私は拠点防衛が任務ですからねー」

拠点だつたらあらかじめ色々罾が仕掛けられるし。

直接戦闘しなくても、罾で敵を削りきればいいから楽なのだ。

「一つ、聞きたいことがあるのだがいいかい？」

「なんでしよう？」

「君は、怪我人を癒せるかい？」

「人から情報を聞くのに、タダで聞くつもりですか？」

私の言葉にアフロディーテはそれはもう綺麗な笑みを浮かべ、

「召使いが通る抜け道、知りたくない？」

「レベルにもよりますよ。さすがに死んでいたら、治せませんねえ……」

死人を生き返らせる術は、錬金術にはない。

復活なんかは神の奇跡のレベルだ。

「ならば、呪いは解けるかい？」

「そんなん、神様に頼んでください」

呪い被いなんて、神職関連の十八番でしょう。

「私ができるのは死にかけた人間の襟首掴んで、引き摺り戻す事ぐらいよ。正直それ以上は範囲外だわー」

生きてさえいればドーピングして強く出来るんだけどねー。

「そうか…」

アテナの望みは叶わないか、とボソリと呟く。

「さて、アフロディーテさんの質問には答えましたよ。報酬をくださいな」

私はアフロディーテから、抜け道の事を聞きだした。

「抜け道を封鎖する事にまだ気付いていないと思うけど、早めに移動した方がいいよ。健闘を祈る」

「ありがとうございます。んじゃ、急ごうか。アイザック」

最悪宝瓶宮とその次の宮は抜け道使って飛ばしていきたくないなあ。特に山羊座は厄介すぎる。頭固そうだもん。

アイザックは私を抱きかかえ、教えられた道を一気に下り始めた。うおおおお、上下の動きがキツすぎるうううう。

酔う、酔っちゃううううう。

アフロから教えてもらった抜け道を疾走して、宝瓶宮へ人馬宮まで守護者と争うことなくクリアした私たち。

このまま十二宮突破だぜと思ったのだが、さすがに私たちが抜け道を抜けているのを気付いたらしく、抜け道を物理的に塞いできやがった。

ちっ、メンドクサイ。

まあ、抜け道を抜けているときにアイザックにポセイドンとロドリオ村に滞在中の海闘士に小宇宙通信を送っておいたので、今頃なんらかの行動を起こしているだろう。

特にポセイドン。さっさとアテナを止めてくれ。

正直、今は聖戦なんて起こさずに力を溜めたいので、この成り行きで聖戦を起こすのは良くないんだ。

聖戦を起こすならきっちりと下準備をして、勝算が高くないと挑みたくないんだよ。

ただだけ勝率をあげても、アテナの手にニケがあつたら一発逆転してくる可能性が高いし。

次の聖戦時には、まずニケを何らかの手段を持って封じてからじゃないと、勝率下がるし。

今回のアテナの戦いっぷりから見ても、ニケがないと勝ててない可能性が高いし。

ホント、有能だよな、ニケ。

「フレイは俺の後ろから絶対に出ないでくださいよ。あなたは私が守りますから」

天蠍宮の入り口を見上げながら、アイザックはそう言った。
いやさー、アイザックも頭が固いよねー。

「なに、わざわざ真正面から行くこととするかなあ……」

私はアイザックに<ルフトリング>と<ネコ足の靴>を渡す。

それにしても、現在のアイザックの格好は無茶苦茶シユールだよな
あ…。

私を抱っこし、後ろはシードラゴンの鱗衣を背負っている。そして、
足元は猫の肉球がついたファンシーな靴。

うん、正気を疑うほどにシユールだ。

アイザックのクラーケンの鱗衣と死ぬほど合っていない。

ルフトリングは、姿を見えなくする魔法の道具だ。

コレを装備している間、姿は見えなくなりそれと同時に気配も消える。

ネコ足の靴は、忍び足が使えるようになる靴だ。

この二つをあわせて、小宇宙を最低限にまで抑えて突破する。

「けれど、おそらく待ち構えていると思うのですが」

「馬鹿正直に宮に入る必要なんてないわよ。私たちが通るのはコッ
チよ」

私はアイザックに、上を指してみせる。

しばらく考え、納得した風に頷くアイザック。

わざわざ正直に宮の中を通らなくても、宮の屋根を歩いていけばいい。

その時にバレないように、ネコ足の靴で足音を、ルフトリングで気配を隠す事を忘れない。

まあ、ルフトリングの気配隠し効果は、少し不安でもあるが。

エンデルクの場合、違和感を感じていたからなー…。

かくして、私達は苦勞せずに天蠍宮と廬山に里帰りで守護者不在の天秤宮を突破したのだった。

あと、半分！

それはまさになぎ払われたと言って良かった。

私とアイザックが処女宮の屋根を疾走中、下からビームのようなものが吹き上がってきた。

吹き飛ぶ処女宮の屋根。

うーん…、これの修理代って聖域持ちだよな？

アイザックが私を抱えたまま、壊れた屋根からその下の地面に着地する。

あまりにあまりの出来事についていけず、アイザックにしがみつく私。

屋根が壊れた事による土煙の中から出てくる黄金の騎士。

「私の頭上を通るとは、随分と頭が高い」

頭の上だけに頭が高いとはこれいかに？

アイザックは私と鱗衣を下ろした。

どうやら、戦わないと通れないと悟ったようだ。

うむむむ、困ったなあ…。

今、下手に戦ったら聖戦の可能性が高くなるというのに。

シヤカは思ったよりも好戦的なのかもしれない。

まあ、初対面の人間に「私を拝め」なんて言う人だからなあ…。

ハタから見たらイタイ人だよな。

「フレイ、俺が闘い出したら出口に向かって。あと、半分。フレイなら多分大丈夫だから。下から皆も来ているし、ポセイドン様達も動いてくれている」

どうも、小宇宙通信である程度である程度うちの動きを把握しているらしい。

こー言う時に小宇宙通信は便利だなあ。携帯電話つぱく使える。

「だから、大丈夫。この場合、フレイが掴まるのが最悪だと思うから、俺を置いて逃げる」

ゴソゴソと持ってきていた秘密バッグ（ヴィオラートで作った可愛いくないやつ。くっ、トトリのほうの秘密バッグのほうが1000倍可愛い…）を使い、私の武器を出す。

「フレイ、聞いてた？」

「うん、聞いてた。けど、駄目だからね。行くなら2人一緒だからね」

ブリッツスタッフを右手に、もう片方の手には別の武器を。

「別れは済んだかね？」

「うん、2人でこの宮を出て行くつもりだから。あんたを倒して」
「ふっ、愚かな」

鼻で私をせせら笑うシャカ。
なんか、自称神のイタイ人に笑われるって無茶苦茶腹立つな。

ブリツツスタッフを起動させ、雷がシャカに向かって迸る。

「面白い玩具だ」

その油断が命取り。

「もういっちょ！」

左手に持ったラングレヘルンを使い、氷の塊がシャカのいた辺りに降り注ぐように誘導する。

「追加だ。オーロラボレリアス！」

そこにアイザックの必殺技が追加される。

っーか、失敗した。

「アイザック、寒い」

「少し我慢してください…ってそんなに寒いですか？」

ラングレヘルンに、凍気の小宇宙を持つアイザックの必殺技だ。

それは、絶対零度に近い寒さ。近いって言う辺りが物悲しさを醸し出す。

「シベリア育ちのアイザックと一緒にしないで。しかも、真冬のシ

ベリアでタンクトップ一枚で修行。なんて、罰ゲーム」

寒いのは嫌でござる、嫌でござる。

ああ、<太陽の首飾り>装備してくるんだっただ…。まさか温かいギリシアにいるとは思わなかった…。

「ヤれたと思う？」

「多分無理だろうな！。ヤれたと思って出口に向かいだしたら、後ろからズドンだよ」

アイザックに肩を竦めて言う私。

その辺りは容赦が無いと思うし。

「けど、これで駄目だったら…」

「その場合は、アイザックが時間を稼いで。その間に削るから」

パラリと小脇に抱えていた本を持つ私。

肉体的にヤれないんだっただら、仕方ないよね。

強い自分を恨め、シヤカ。

「ふむ。さすがは、カミュの弟子。見事な凍気だ」

平然と、そう平然と佇む乙女座のシヤカ。

性格は難アリだが、実力は黄金聖闘士でもピカーな男。

サガ・カミュ・シユラの三人がかりでようやく倒せた奴だからなあ。

さすがに、これぐらいじゃビクともしてくれないか。

「今度はこちらからいくか」

仕切りなおしといきましょうかね。

ミロは、自分の下の宮である処女宮から立ち上がる小宇宙に首をひねった。

「なあ、カミュ。お前の弟子降りて来ないんだが…」

サガからシードラゴンの捕獲を頼まれ、多少首を傾げながらも現在自分の天蠍宮で待機していたのだが、一向に降りてこない。

「私の所は、どうやらアフロディーテが侍女用の裏道を教えたらしく、スルーされた」

「アフロの奴、何を考えているんだ…」

全く、アテナの勅命をなんと心得るんだとブツクサと言うミロ。

「その略し方はアフロディーテが聞いたら怒ると思うのだが」

「いいんだよ。んで、当のアイザックとシードラゴンはどうしんだ？」

「なんか、処女宮でシャカの小宇宙が高まっているんだが…」

裏道は人馬宮を通過した直後に気付いたサガによって、封鎖済みだ。現在、山羊座のシユラが待ち構えている筈だ。

ミロは、気分的には隠れ鬼+鬼ごっこと言う感じだなあと場違いな感想を持った。

「おそろくは、なんらかの手段で天蠍宮を通過したのではないか？」
「ど、どーやって!？」

それ以前に、俺スルーかよ!」

まさか、天蠍宮の屋根を通過されたとは思っても見なかったミロであつた。

私の真横を光速拳が通り過ぎていく。
ヤバイヤバイ、マジ強い。

「フレイ!」

アイザックが私の前に立ち、シャカに接近戦を挑むけどシャカは距離を取る。

小宇宙が一気に増大する。

「うげげ。アイザックこつち!」

慌てて結界石を起動させる。

「天魔降伏!」

ガリガリ削られる結界石の防御。

「あー、もう!」

私はく水のカーテンを起動させ、水の壁を結界石の結界の上に更に重ねる。

シャカの表情が一瞬だけ動いた。

「器用な戦い方をするのだな」

「それはどうも」

そこまでして、シャカの攻撃を凌ぐ私たち。

「アテナが望むのは、その力か」

「は？」

独り言のようなシャカの言葉。

今回の事は、アテナが私が欲しい為に起こしたって事はた迷惑な。

「アイザック、後でセイレーンに報告しといて」

「ああ…。今は無理だからな」

「わかってるわよ。それぐらい。さてと、いつまでもシャカの攻撃を受けていても埒が明かないから、そろそろ反撃といきましょうか」

バラリと本を開く。

「なんだ、その本？」

「まあ、嫌がらせのような武器、かなあ…？」

アイザックはさつきと同じく前衛をよろしく。出来ればあまりこちらに攻撃を来ないようにしてくれたら嬉しい」

「難しい事を…」

アイザックの凍気が水の壁を凍らせ、そこからさらにシャカに氷が

迫ってくる。

「見戯だな」

氷を目くらましに使い一気に接近して、殴りかかる。
アイザックの接近戦を、シャカが迎え撃つ。

「んじゃ、いきますか。『なまむぎなまごめなまたまご』」

戦場に場違いな早口言葉が響いた。

不快そうに眉を潜めるシャカ。多少脱力するアイザック。けど、アイザックはすぐに持ち直す。

「隣の客はよく柿食う客だ」

「君は一体何をしてるのだ？」

シャカの問いに私は答えない。

けど、確実に私の言葉はシャカのあるモノを削っている筈。

「『あかまきがみあおまきがみきまきがみ』」

「答えないか。ならば、答えるようにするまで！
神を馬鹿にした報いを受けるがいい！」

だが、このシャカ最大の拳の前にはどんな技も意味は無い。天舞
法輪！！」

短気だな、ホントに。

まあ、馬鹿にされたと思ったのだろう。

「フレイ！」

確かにシャカの技を防がなかったのは痛いのかもしいけど、どうせ長くは続かない。

「まずは君のその口からだ。五感剥奪っ！」

技にかかりアイザックはその場から動けない。
なおも、私は心の声で本を読む。

「（坊主がびょうぶに上手に坊主の絵を書いた）」

「まだ続けるのかね？」

ならば、その五感を剥奪して何も考えられないようにしてやるっ
「やめろー！ー！ー！っ！！！」

シャカが、私の五感を剥奪しようとしてようやくある事に気付いた。

「まさか、君は！？」

「（そのまさかよ、乙女座のシャカ。見事に引っかかってくれてありがとう。これでラストよ）」

私は最後のワードを唱える。

「（かえるひよこひよこ三ひよこひよこ四ひよこ五ひよこ六ひよこひよこ七ひよこ八ひよこ九ひよこ十ひよこ！）」
「くっ…」

ガクリとシャカが膝をつき、天舞法輪が解除される。

私は自分の腰のポーチから不思議な光球をを使い、状態異常を全て回復する。

いやあ、五感剥奪にも効いて良かったわあ。

「何が起こったんだ？」

私たちの会話についていけないアイザック。

「簡単よ。シヤカの小宇宙切れ」

「は？」

「いや、小宇宙切れ。私がさっき読んだ本ってクラウエの写本と言つて、MPじゃなくて小宇宙を削ることが出来るんだよ」

しかも、私が作ったソレの効果は納得のMPダメージ超。

それを5回も叩き込んだのだ。

さらに天魔光臨と天舞法輪を使つて、まさかの小宇宙切れ。

自分の生命力を燃やして小宇宙変換すれば、まだまだ小宇宙を作り出すことは出来るけど、さすがにこんな聖戦でもない戦いの為に命を賭ける事は無いだろ。

それに、私たちは聖域外へと退去中な訳だし。

「……君達の勝ちだ。行くがいい」

シヤカがすつと身を引く。

うひひ、悔しかろう悔しかろう。

私にはんまりと笑うと処女宮を後にした。

処女宮突破！

再びアイザックに抱かれ（疲れてるのに悪いなあ……）、私たちは処女宮と獅子宮の間の階段を駆け下りる。

次に待ち構えてるのは、黄金の獅子。

どうやら、獅子座のアイオリアは私たちが屋根を使って突破しないように入り口で待っていた。

「止まらないで、アイザック」

アイザックは頷くとスピードを落とさずに疾走する。

私は懐から石版を取り出し、アイオリアが攻撃態勢に入る前に投げた。

パリン

石版が割れたとは思えない程、澄んだ音がした。

そして、止まる時間。

それは、音も風も全てが止まった世界。

「フレイ、コレは……」

「時間を止めたの。まあ、持って数分って事だけど。今、この場で動けるのは私とアイザックだけよ」

一瞬にして変わった世界にアイザックが足を止める。

全く、しょうがない子だな。

ついでなので、少し意趣返しをしておこう。

私はアイオリアの体でシェーのポーズをとらせる。

「フレイ、何してるの？」

「嫌がらせ。あ、ついでに額に肉って描いてやれ。あ、髭も」

せつかなので、魔法のインクを使って顔に落書きもしておいた。
このインク、錬金術で作ったせいかとでも消え辛いんだよね。

うひひひ、ざまあ。

アイザックはそれはもう気の毒そうにアイオリアを見た。

シエーのポーズを取った黄金の獅子。しかも、落書きつき（カイザ
ー髭と肉）。

ふふふ、海底神殿を敵に回した恐ろしさ、とくと知るがいい！

妙にみみっちいけどね。

あ、ついでにデジカメで写真とっておこう。

アイザック、こっちなさい。記念写真よ、記念写真。

ちやつかり記念写真も取った私たちは、時が動き出す前にさっさと
獅子宮を後にしたのだった。

獅子宮突破！

次は蟹座。

一瞬蟹と言われたら蟹道楽を思い出してしまう日本人脳な私。

そー言えば、蟹座のヘッドマスクってまんま蟹道楽の蟹だよなあ。
いや、蟹だから蟹なだけだ。

そして、辿り着いた巨蟹宮。立ち上るのは冷気かもとい霊気か。

「フ、フレイ…」

若干顔が青いアイザック。
ふむ…。

「もしかして、幽霊とか苦手、とか」

ビクリとアイザックが一瞬だけ震えた。
あー、なるほど。

「だったら、ここの宮の主は鬼門かも」

「え」

「うん、入れば分かる。入れば」

入ったらそれはもう見事なデスマスクたち。

「つつつつつ！？」

悲鳴をかみ殺すアイザック。

うーん、漫画読んで知っていたけど、これはまたスゴいなあ。
あまりの風景に止まるアイザック。

けど、これぐらいで驚いていたら冥界なんて行ったらどうなるか。
あそこは、冥界と名を打っているだけあって所謂地獄なんだよねー。
なかなかあれはグロイと思うんだけどなー。一回も直に見てないか
らなんとも言えないけど。

星矢達はよくもまあ、平常心を保てたな。

私はアイザックに降ろしてもらった。

だって、アイザック動けないんだもんねー。
床にまで一面の亡者の顔。どれも、苦悶に満ちている。

それにしても、毎日コレ見てるのか？

悪趣味な。いや、案外自分が殺した人を忘れないようにする為とか？

まあ、デスマスクの事は一先ず置いておこう。

アイザックの腕の中から飛び降りて、顔の上に着地する。
ぐにゅと独特の感触が足の裏に伝わってくる。

私はソレを完全に無視して、グミグミ踏みながら前進する。

「アイザックは屋根から行きなさい」

「なら、フレイも一緒に！」

「大丈夫だって。さあ、行った行った」

おそらく、三神会議で見たあの態度が偽りじゃないのならば、**戦闘**
にはならない。

私がああの会議で感じた事。

蟹座の聖闘士は、アテナに傾倒もとい心服していない。

彼は、自分の考えで動いている。

漫画でもそうだった。

彼はアテナの正義を信じて従っているのではない。

ただ、アテナが強いから正義だと認めたのだ。

アテナ≠正義ではなく、アテナ≠強者≠正義なのだ。

あまり違いがないように思えるのだが、大きな違いがある。

それは、アテナが最強の座から滑り落ちたら、蟹座は離反すると言
う事。

いや、なんでこんなのが聖闘士やってるんだ？

「どーも」

デスマスクを踏み越えて、デスマスクに会いに行く。

「ああ、来たか。もう一人は上か」

「ええ。悪趣味な歓迎に耐えられなかったみたいで。まあ、まだま
だ若いですから仕方ないですね」

「外見はお前のほうが若いだろう」

デスマスクの突っ込み。

ちなみに、このデスマスク、聖衣さえ纏っていません。

最初から戦闘する気なんてさらさら無いのだ。

「外見だけはね。けど、あの子15歳よ。まだまだ精神的には未熟
ですよ」

「……まーな」

苦々しい顔のデスマスク。

「さて、どうやら戦う気は無いようですね」

「はっ。お嬢ちゃんの我俣に振り回されるなんてイヤだからね」

やりたいなら勝手にやってな、とせせら笑う。

うわー、アクが強いなあ。これ、アテナは上手く使えるのか？

「それより、シードラゴンの嬢ちゃん、腹減ってないか？」

「減ってます。そろそろ夕飯って時間帯に、十二宮逆突破ですから」
「食ってくか？ つっても、パスタぐらいだが」

突然のデスマスクの食事の申し出に、さすがの私も度肝を抜かれたのだった。

フレイと神々の戯れ5

デスマスクは器用な手つきでパスタを手早く茹でて、その間にソースを作っていく。

何もしないのもなんなので、許可を貰い秘密バッグから野菜を取り出して調理を始める私。

驚いた事に巨蟹宮の台所は、現代風の台所だった。

いや、水道とガスが備え付けられていたんだよ！

ちなみに、海底神殿は私がポセイドンに頼んで水周りだけは現代風になっています。

井戸から水道を引いて、下水道もきちんと整備したんだ。

ガスだけはどうしても対応が出来なかったので、私の鍊金アイテムで代用している状況だ。

「便利だな、その鞆」

「あげないから」

なんて言いつつも、手早く野菜のスープとサラダを作ってしまう。

「ブイヨンどーするかなー」と悩んでいたら冷蔵庫から冷やしたブイヨンを手渡してくれたので助かりました。

「フーか、マメだなイタリア男。」

作ったパスタは三人前。

あれ、三人…？

「入り口で待つてる奴呼んで来い」

あ、アイザックの事忘れてた。
こーいう場合って、小宇宙通信出来ないと不便だよなー…。

私は入り口まで歩いていき、アイザックを呼んでくるのだった。
ちなみに、当然の事ながら死人の顔はそのままですよ。
こう、ブニブニ感が気持ち悪いわあ…。

アイザックが死人の顔を踏むのを嫌がるので、私は空飛ぶホウキを
使ってアイザックを運搬した。
むしろ、ジャンプで飛び越えろと言いたかったよ、私は。

「フレイはよく平気で歩けますね」

「所詮死人だしねー。まあ、踏んでも危害ないし」
「……………」

私の返事にアイザックは口をつぐんだ。
甘いよ、アイザック。こっちは腐った死体と戦った経験があるんだ
よ。

それに比べたら、これぐらい軽い軽い。腐った死体は、生理的嫌悪
感バリバリだからなー。
まあ、少々悲鳴が耳障りだが。

テーブルに辿り着くと、そこには綺麗に盛られた食事があった。
あ、パスタは蟹のパスタか。

「共食い……」

「なんか言ったか？」

ジト目で睨まれる私。

うーむ、顔自体が怖いせいでまんまマフィアだよなー。

性格的には善人ではないが、悪い人でもないと思う。むしろ、一般的には常識人寄りなのではないのか？って言った感じだ。

「さつさと食って、出て行くんだな。そして、二度とくんじゃねーぞ」

「うん、正直来たく無いわ。あ、蟹の Pasta うまー。ハウレンソウを麵に練りこんでるんだ」

「おう。手作りだ」

「マメね」

なんて会話をしつつ、Pastaを平らげていく私たち。

アイザックも最初は恐る恐るしか手をつけなかったのだが、最後のあたりは特に気にせず食べていた。

って、アイザックがこめかみを押さえた。

頭でも痛いのか？

「巨蟹宮に戻ったが、フレイに何かあったのかと聞かれたので、食事していると答えたらすごい勢いで罵倒が…」

どうやら、下に残っている奴らから小宇宙通信で罵倒の嵐だったらしい。

うわっ、小宇宙通信使えなくて助かったかもー。

「」愁傷さまだな、オイ」

デスマスクはニヤニヤと笑っている。

「」うづうづ、フレイ。腹減ったって煩いです…」

「帰ったらメシにするから少し黙ってるって言うておいて。あー、パスタうまい」

自分で作ったスープもサラダも満足の出来る出来だったので、満足の出来る食事だった。

私はナプキンで口元を拭くと、

「ご馳走様。そろそろ行くわ」

「おう。気をつけていくんだな。と言っても、サガとムウぐらいだ。残っているのは」

「あれ、金牛宮は？」

「あいつは里帰り中だ。なので、留守だ留守」

「それは重畳。あ、これ食事の礼。受け取って」

そう言っただけ投げたのは、<ローエンワイン>。

酒飲みの人たち曰く、「正統派のワイン」らしい。

「どこのだ？」

「自作ワインよ。まっ、飲んでみてよ。じゃーね」

そう言うと、私は巨蟹宮を後にした。

さて、次はいよいよ前シードラゴン様とのガチンコ勝負ですか。腹ごなしの運動にはちょうどいいかな？

腹ごなしの運動は、迷宮探索でした。

「また行き止まりか」

「いい加減面倒になってきたわね」

懐中時計を取り出して見てみると、双児宮に入っただけで既に一時間経っていた。

仕方ないか。

「アイザック、どいて」

私はギガフラムを片手にアイザックを壁の前から退避させる。

「道が無いのなら作ればいい。レッツファイア！」

ギガフラム数発を壁に向かって投擲する。

その瞬間、アイザックが私を抱えて後方に跳ぶ。

ドゴオオオオオオン

大気が震え、何か壊れたような音がした。

砂煙が晴れた後を見てみると、見事に壊れた壁が…。

予定していた壁だけでなく、周囲の壁がほとんど消えて見通しはかなり良くなっている。

ちょっと壊しすぎちゃった感じもするけれど。

かなり先の方まで穴が開いちゃっているしねえ…。

この迷宮がただの幻影だったら、さぞかし困った事態に陥っているだろう。

私の予想だが、空間を捻じ曲げて作った迷宮だから大丈夫だとは思っただけ。

「ちょっと壊しすぎちゃったかしら？」

「一発で十分だったんじゃないのかな？」

「まあ、すつきりしたでいいじゃない。これ以上相手の掌の上で踊るなんてごめんだから、今からガシガシ壊していくわよ」

爆弾の貯蔵は十分だしね。

「さーて、いつ出てくるでしょうかね。双子座の聖闘士達は」

出てこなかったら、双児宮を完膚なきまでに破壊して出て行くのみ。

「最終手段はテラフラムかしら？」

うふふと笑いながら、私はメガフラムとギガフラムを両手に構えたのだった。

ドゴオオオオン

連続して起こる爆発音に、カノンは頭を抱えた。

最初はごくごく穏便に迷宮に誘い込み、交渉をと考えていたのだがその考えは脆くも崩れ去った。

迷宮の中に閉じ込めた筈の海闘士が迷宮を壊し始めたのだ。

「まさか、異次元の壁を越えてこちらにまで影響を及ぼすなんて…」

迷宮は双児宮を入りに異次元に作られている。

なので、迷宮のある場所は双児宮であって双児宮ではない。
繋がりはある訳だから、全くの無関係ではない。

今異次元でおきている爆発の余波は、この双児宮にまで及ぶ。

パリン

サガのお気に入りのカップが割れた。

ボタン

ああ、あれは内宮にかけていた絵が落ちたなとカノンは感じ取っていた。

本来の戦いの場ではなく、生活の場である内宮にまで迷宮破壊影響は及んでしまった。

「これ以上閉じ込めておくのは無理だ」

カノンはサガに小宇宙を使った通信を送る。

先程、アテナから緊急の小宇宙通信があったらしい。

どうも、海闘士や冥闘士からの報告がそれぞれの神々にあがり、抗議が来たらしい。

どちらも、海闘士に手出しをするならば聖戦も辞さずとの事。

さすがに、現在の状況で聖戦を起こすと不味いと思ったアテナが、連絡をしてきたと。

「シードドラゴンと接触をしろと命じましたが、どうして戦いになっているのです!?!」

と、アテナの悲鳴交じりの通信に、思わず教皇宮は静まり返ったという。

「そもそも、海闘士に星矢の傷を治させたいのならば、ポセイドンを通じてするのが一番早かっただろうに……」

それを聞いたカノンはボヤかすにはいらなかった。

聖闘士はどれも、戦闘で物事を解決しようとする傾向が強い。

要するに勝った者が正しい状態だ。

まさに、戦女神の聖域だとフレイあたりは鼻で笑うだろう。

破壊されていく迷宮と双児宮を見つめつつ、カノンは自分の小宇宙を聖衣に注ぎ込む。

どのみちこのままでは、迷宮は長くは保たない。

迷宮が破壊される時の余波は、双児宮へかなりのダメージを残すだろう。

その復興をするのは、宮を守る聖闘士な訳で。

サガは次代の教皇と言う事で、教皇宮で執務に当たる事が多いので、結局はカノンに回ってくる事になるのだ。

「頼むから止まってくれ」

自分はただ足止めをして、アテナが来るのを待っていた筈なのに、と外れた思惑を思い溜息をまた一つ落とすカノンだった。

ソレは何もない空間から突如現れた。
黄金色の、双子座の聖衣を装着した人影。

「フレイさん!？」

「どうやら、これ以上迷宮を破壊されたくないよね」

かーなり、迷宮がすつきりしていた。

いやあ、ストレス発散にいいね。破壊活動って。
大体半分ぐらいか、壊したの。

相手は何も言わず、両腕を伸ばし、攻撃態勢に入る。

「甘い! ゴールデン以下略!」

相手の攻撃をGTを使い、異次元へと反らす私。
ふ、また異次元にいらぬモノを捨ててしまった。

その隙を狙ってアイザックが攻撃を仕掛け、双子座の聖衣がカララ
ンと音を立てて崩れた。

「え…?」

思ったよりあっさりとカタがついて、肩透かしでも食らったのか呆
然とするアイザック。

「アイザック、気をつけて。コレ、本体じゃないから。聖衣だけを
飛ばして、介入してるのよ。こっちの空間に」

「そんな事が、可能なのですか?」

「双子座は空間を操る技に長ける聖闘士よ。有り得ない事じゃない。
どうせ、この空間も異次元なんですよ」

カンツと、聖衣の一部分を蹴ってやる。
本当、面白くない。

「ああ、そう言えば双子座の聖衣を用いて干渉をしたって事は、こちらからも干渉できるってことよね？」

ニヤリと笑って、私はラングレヘルンを構えた。

再び、双子座の聖衣が寄り集まって人型を取った。

「第一陣、発射！」

標的は、ヘッドパーツの暗闇部分。

確かあそこから、双子座の聖闘士まで繋がっていた筈だ。

カノンかサガかは分からないけれど、つめたーい思いをして貰いましょうかね。

こっちに介入する余裕がなくなるぐらいにね。

私の攻撃とアイザックの攻撃、両方を食らいさすがに余裕が無くなったのか空間が決壊し、私たちは氷世界へとやってきた。

「シベリア？」

「いや、柱の具合から見ておそらく双児宮だと思っけどー……」

頭にツララをぶら下げたカノン発見。

それにしても、いい仕事してますなラングレヘルン。

「お前ら、鬼か」

「いや、フレイさんはどちらかと言うと外道かと」

「外道とお呼びびつて感じ？」

おほほほと高笑いをする私。

それにしても、アイザックも随分と私に染まってきたなあ。

まあ、教育係兼だからそうならざるを得ないか。

私たちの漫才染みた対応に、ガツクリと肩を落とすカノン（推定）。

私は着ていたシードラゴンのクロースの裾をつまみ、ザールブルグの貴族の令嬢よろしく一礼する。

「はじめまして、元シードラゴン様。現シードラゴンフレイ・ローゼンですわ。用件のみで失礼ですけど、さっさとそこをお退き。裏切り者」

「ぐっ」

「フレイさん、キツイなあ……」

「あら、散々海界を利用してアテナの愛に感動してサラリと裏切った人間なんですよ？」

優しくしてもらえると思うほうが間違ってもんでしょ」

「……………」

カノンは唇を噛んだだけで何も言わない。

余計な言い訳をしないあたりは好感度アップと言った所か。

「対話を求めたい。どうやら、私たちの間違いで非礼な対応をしてしまい、その謝罪もしたい」

「却下します。私の聖域に対する信頼度好感度は0を通り越してマ

イナスです。今までの十二宮の出来事といい、あなたの対応といい対話をする相手とは認めません。味噌汁で顔を洗って出直しておいで」

ハンツとせせら笑い、出口へ向けて歩き出そうとする。

立ち去ろうとする私に慌ててまったをかけるカノン。

「アテナも謝罪を望んでおられる」

「だから従えと？」

私が仕える神はポセイドン唯一人。アテナなんて知ったこっちゃ無いの。そもそも、私は聖域もアテナも嫌いなのよ」

後ろ向きのまま会話を続ける。

「どうして、そこまでアテナを嫌う!？」

人ならば恩人のアテナをなぜ嫌うことが出来る!!」

「私の恩人じゃないのよ。私は異世界の人間。アテナになんて欠片も救われたことは無いわ。それに、自己中な女は嫌いだし、腐った聖域なんてもつと嫌いよ」

結局はそこなんだよねー。

私は、聖域とアテナが嫌いだから係わり合いになりたくない。それに尽きる。

今回だって、会議だけだから顔を出したに過ぎない。

「こんな腐った空間、一時でも居るだけでも反吐が出る。何が聖域だ」

私は吐き捨てるかのように言った。

こんな子供達や大人のの怨念が染み付いた場所なんて大嫌いだ。

「あんたも、いつまで目を閉じているつもり？」

一時期聖域の闇を押し付けられていた癖に。今更双子座の聖闘士として認められたから過去は水に流したって？」

「……………」

「とにかく、私は聖域もアテナも嫌いだから対話に応じない。自分でも子供染みてると思うけど、駄目なのよ。あー言うのは。特に子供が絡むと、どーしても感情的になるの」

錬金術士は常に冷静じゃないといけない筈なのに、子供が絡むと感情的になってしまう。

別に自分の子供が欲しいとは思わない。

けれど、子供を見ていたら保護したくなってしまっただよ。母性が刺激されるって言うか。

とにかく、子供が絡んだら感情的になってしまう傾向にあるのだ。

「だから、アテナは無理。私にとってアテナは鬼門なんだ」

100人の子供を地獄に突き落とし、それを当然と受け止めている女は嫌いだ。

生き残った子供を自分の手足の如く使い、本来彼らが受け取るべきものを横から搾取しといて当たり前前の顔で笑っている女はイヤだ。

「だから、ごめんなさいね？」

私は、アテナを交渉相手に据える気はないの。

アテナが出張ろつとするならば、さっさと海の底へ帰らせて貰っわ。

「ごきげんよう、カノンさん」

私は顔に表面上の笑みだけをぶら下げて、再び一礼してやった。

聖域が腐った理由は説明しなくても、カノンは分かっているでしょうよ。

一時期、その腐った聖域の闇の中にいた人間なのだから。

私は双児宮を出た後、黙々と階段を下った。

カノンからの追撃はなかった。追撃があったら、双児宮の破壊まで視野に入れてテラフラム爆発させてたなあ…。

正直、テラフラムの破壊力は、私の奥の手に相応しいものだからそうそう使うつもりはないのだけれど。

「フレイさん、あの聖域の闇って…」

「あのさー、あんた一時期聖闘士目指してたんでしょ？」

「聖域の歪さに気づかなかった？」

「え？」

私は溜息をついた。

彼は途中で抜けたからまだマシなのかもしれないけど、それでもやはり聖域の空気に染まってしまっていたのだなあ。

「聖闘士の修行って子供の頃から行われるよね？」

「果たして何人が生きて聖闘士になれたのかなあ」

「でも、それは聖闘士を目指すのならば死と隣り合わせなのは仕方ないのでは？」

アイザックがこともなげに言う。
ああ、嫌悪感が湧き出てくる。

「あのさ、アイザックはどこで聖闘士なんて知った？
なんで、聖闘士になろうとした？」
「え？」

アイザックが考え込む。けれど、答えは出ないだろう。

「あのさー、私色々と聖域を調べたのよ。ほら、会社設立の間を縫って」

「なにやってたんですか、貴方は」

「敵を知らないと戦いなんて出来ないでしょ。だから、調べたの。」

そーしたら、聖域がどうやって聖闘士候補生を入手していると思う？」

「入手、ですか？」

アイザックの顔が少しだけ青ざめた。
そう、入手だ。

「聖闘士を代々輩出してる聖域の人間、とかだけならいいんだけど、そのほとんどは全世界から集められているのよ」

「全世界。俺も、そうなんですな」

「アイザックがどうかは知らないけどね、合法手段ばかりじゃないのよ」

「は？」

「あのさ、あなたの弟弟子の氷河君は合法で聖闘士の世界に入ったわ。まあ、それはそれで気に入らないんだけど。それは後で話すから置いておく」

「はあ……」

ざくざくと私の足音とアイザックの足音が、神殿風な十二宮に妙に響いた。

「けど、非合法ツーのもある訳よ。アテナの正義のために、売買や誘拐なんていうね」

「誘拐って……」

「そうよ。アテナの正義の為に犯罪行為を平然としているのよ。何も知らない無垢の子供を浚い、聖域の常識を押し付け、教育していく。まさしく洗脳ね」

私はクスクスと笑った。

だって、コレを知った時は笑うしか出来なかった。

正義を謳った彼らが、子供の人権を踏みじり洗脳して死地に送り出す。

「聖闘士になれず途中で死んだ子供は多い。そして、その子供達の墓はない。作った貰えないのよ？」

「……………」

「酷いとは思わない？」

誰もがそれを当たり前と思っている。これを歪んでいると言わないで、何が歪んでいると言うの」

「…………… だから、アテナと係わり合いになりたくない？」

「それだけじゃないわ。あなたの弟子たちが本来受け取るべきものを、彼女は横から奪っているの」

氷河の話題になって、アイザックの目が細められた。やっぱり、弟弟子は敵対していても特別なんだなあ。

「アテナの今生の名前はね、城戸沙織と言うのよ。日本の財閥城戸

財閥の現当主って言うのは知っているわよね？」

「ええ」

「そんな彼女の祖父が先の当主。城戸光政。これが、あんたの弟弟子と、100人の子供の父親よ」

「はあ！？」

「100人ですか！？」

まあ、確かにびっくりだ。

ゼウスも真つ青な繁殖能力だよなあ…。

ほぼ同じ年代に100人って事は、それ以上子供が居てもおかしくない訳で。

「え、でもそれって…。父親が、自分の子供を聖闘士にしようとしたということですか？」

「そうよー。自分の子供をまるで道具みたいに聖闘士にしようとしたのよ。子供の意思も何もかも無視してね」

「なんですか、その最低親父は」

「全てはアテナの為なんですって。その為には我が子すらも犠牲にするんですって。とんだお涙頂戴物よ。そして、アテナはそれを見ても思っていない」

「は？」

「『おじいさまは私の為に全てを犠牲にされたのです』、よ。本来彼らが受け取るべき愛情、財産を全て横から掠め取ったの。そして、今だもってそれを返却しようとしてない。つーか、ある事を知らせてない」

日本の遺産相続は基本的に遺留分ってのがあから、認知されている彼らは受け取れる筈なんだけど、一切無視しているからなー。

「城戸光政の愛情を一身に受けたのよ、アテナは。子供たちが地獄

に叩き落されている横で」

普通の精神の持ち主だったら、申し訳なく思っただけで色々と贖罪しようものなんだけどね！。

と私がせせら笑う。

あー、そろそろ日が暮れる。

まだ火時計は十分に余裕がある。

少し、歩を緩めたいが後ろからアテナが接近してるからなー…。

「だから、私はアテナと係わり合いになりたくない。傲慢でしょ、彼女？」

「まあ、それが真実ならばそうでしょうね」

100人の子供の上で胡坐をかいて座っている女神を、私は信じない。

「こんな事を平然とするアテナの正義なんて信じてないの。覚えときなさいアイザック。正義とは、普遍のものではないわ。例え悪だとしても、立場や見方が違えば正義となるのよ。アテナの正義は、アテナの正義でしかないの」

それと一緒に理由でポセイダンの正義は、ポセイダンのものでしかない。

「正義なんて不確かな言葉を多用する人間を信じちゃダメよ？」

「ええ、そうします」

長話をしていたら、いつの間にか金牛宮を超え最後の宮が見えてきた。

「あー、戦闘中だ」

「ですね。どうやら、皆が戦っているようです」

ムウ一人を数人がかりの海闘士が倒せないのか……。ムウが強いのか、ヤツラが不甲斐ないのかどちらだ？

最後の宮に辿り着くと（逆突破だからねー）、傷ついた海闘士と多少傷ついたムウがいた。

「みんな、お待たせ」

手をあげて、無事に着いた事をアピールする私。それと同時に苦々しげな顔をするムウ。

「あー、よーやくフレイが帰ってきたー。マジで腹減ったぞ、おい」

カーサが首をコキコキ鳴らして、戦闘態勢を解除する。

「つーか、私としては双児宮ぐらいまで迎えに来れるかと思ったけど、案外不甲斐ないわね、あんた達」

グサリグサリと私の言葉の刃が、皆に突き刺さる。

「コイツ、防御用の技を持っているから厄介なんだよ」

確かにクリスタルウォールは厄介極まりない技だ。

けど、別の方向から攻撃しかけるとか、工夫を凝らしなさいよと思

わないこともない。
人数はこちらの方が多いんだから。

海闘士は海底神殿の柱を守ると言う任務の性質上、他と協力して戦うと言う事はしない。
それぞれ自分の柱を守るだけなのだ。

それを考えると、アイザックが私と共闘出来たのは、やはり聖闘士修行が根底にあつたおかげなんだろうなあ。

「帰つたら課題が増えたわね…って、あれ、人数足りなくない？」
もしかして、宿屋で待っているのかしら？

私の言葉に、みんながあらぬ方向を向く。
えーと、確かバイアンも着いてきていたよね？

「あの、バイアンはどうしたんですか？」
「あー…、牡羊座の技でどっか飛ばされた」

あー、確かそーいう技もあつたあつた。

本当に技が多彩な聖闘士だよな、ムウって。
防御攻撃なんでもござれ。さすがは、先の聖戦時の生き残りを師匠に持つだけはある。

「まあ、おなか減つたら海底神殿に帰ってくるでしょ。さー、皆帰るわよー。こんな所に長居は無用よ」

「子供と同レベルだと考えてねーか？」

「うん」

けど、バイアンも小宇宙は探れるんだから私達の小宇宙が聖域から消えたのは分かる筈だ。

此処でバイアンを待つて居ても、アテナと鉢合わせになる可能性が高いだけで、私が出することは何も無い。

「お待ち下さい。アテナが謝罪をしたいと」

「謝罪は結構。一つ間違えば聖戦を起こしたかもしれない行為を、私は許す気はありません。そもそも、私は聖域とアテナにあまり良い印象を持っていないのですよ。なので、出来るだけ係わり合いになりたくないのです」

詳しくは蟹座と双子座の片割れに聞きなさい、とだけ伝えた。

特に蟹座は気づいてそうだし。

あの人、元々聖域の体制に不満を持っている人だから、きちんと理解してくれてるだろう。

例え私の出した情報が断片だけだったとしても。

まあ、そーいう人だから聖域では異端扱いなんだろうけど。

戦いを主とする組織に、違う思考の人間は組織を乱す元になりかねないからね。

彼が排除されていないのは、一重に聖闘士最高の地位である黄金聖闘士だからだ。

すげ替えが効かないんだよねー。後継者育ってないし。

あの人、先生としても有能だと思うから、面白い聖闘士が育成できると思うんだけど。

伸ばされた手を、言葉で振り払い私たちは金羊宮を後にしようとし

た。

「ならば……、力尽くでもアテナと会って頂きます」

高まる小宇宙に、海闘士達が私を守るような配置にしようとするのを手で制す。

「スターライトエクステイクション！」

バイアンを飛ばした技。確か出口はある程度好きな場所に設定できたか？

出来なくても、出口は分かっている。星読みの丘がある聖域の深部だ。

私は指輪のついた右手を、迫ってくる小宇宙に向けた。指輪が淡く輝き、まるで鏡のように相手の技を反射した。

そろそろ発動してもいい頃だと思っていたけれど、やっぱり発動した。

私が装備していた薄いブルーの指輪はくアルスイープ>>と言い、宝石の魔力を使い攻撃を跳ね返すことが出来る。

ただし、確率的には5割を切っているので、絶対と言うほどではない。

大体三分の一ぐらいの確立だ。

事実、シャカ戦では一度も発動しなかったし。

そして、今回は発動した。

ただ、それだけだ。

これが発動しなくても、〈みがわり人形〉を使用する気満々だったし。

ちゃんと右手は人形を握り締めていたのだ。

「なっ!？」

「貴重な経験よね。自分の技がそのまま返されるなんて、さ」

ニヤリと笑って、ムウに向かって手を振ってやる。

頑張っつて、星読みの丘から戻ってください。

消えていくムウを、最早一顧だにするだけの価値はない。

私はくるりと踵を返し、同僚であり仲間でもある海闘士達に向けて、

「さあ、『我が家』に帰ろうか」

と、言った。

消えたムウに少しだけ呆気にとられていたみんなは、笑って頷いた。

さあ、『家』に帰るか。

アテナへのお仕置きは、ポセイドンに任せた!

三柱の神が、聖域に集っていた。

立ち位置的には、女神に男神二柱が相對する形だ。

椅子はあるけれど、誰も座ってなどいない。

「どついつつもりだ、アテナ。我が配下に手を出すとは」

「シードラゴン、フレイさんに少し聞きたい事があったものですが。どうやら、手荒になってしまったようですね」

困ったものです、とアテナが微笑んだ。
花が零れるかのような笑みだった。

「手荒か。なるほど、確かに手荒だな。知恵の女神の名が泣くな。返上してはどうだ？」

クツリと嗤う冥王。

「まあ、面白い事を。ねえ、ポセイドン。フレイさんと一席設けてもらえないかしら？」

彼女に頼みたいことが…」

「断る。アレからも、くれぐれもアテナと関わり合いになどさせないでくれと頼まれてな。中々手荒い対応だったようだな。アレは戦闘が苦手だ」

アテナの眉間に皺が寄った。

「苦手？　ウチの黄金聖闘士を前にして一步も引かなかった彼女が戦闘が苦手ですって？」

自分自慢の黄金聖闘士と互角に戦った人間が戦闘が苦手だと言う。まるで、自分の聖闘士が戦闘が苦手な相手に後れを取ったのが、弱いように感じて不機嫌になるアテナ。

「苦手だよ、あの娘は。本人曰く、道具が無ければ私など下級の聖闘士の指一本で事足りてしまうのだそうだ」

お前自慢の聖闘士は、その戦闘が苦手な海闘士に悉く弄ばれたようだがな。

ポセイドンが聖闘士の弱さを嘲笑う。

ギリ

空間が軋んだ。

アテナが機嫌を損ね、聖域がソレに反応したのだ。

「アテナよ、フレイが聖戦を望まぬゆえ、聖戦にはせぬ」

ポセイドンの脳裏には、フレイの女性特有の高い声が謳った言葉を反芻する。

『今代は聖戦を起こさずに、力を蓄えましょう。開発を進め、資源を元に世界経済を支配し、人間達を支配下に置きましょう』

フレイは、肉体同士がぶつかり合う戦いではなく、金を用いた冷たい闘争を提案した。

『そして、世界の浄化を進めましょう。どのみち、今のアテナの間を甘やかしている状態では地球は壊れていく一方です。金融を支配して、人間達を管理しましょう』

技術を進め、少しずつ環境への負担を減らす。

少しずつ時間をかけて地球を浄化する。

『事が成れば、アテナは愛している人間の手によって排除されるでしょう。聖闘士がアテナを守ろうとすればするほど、人々とすれ違

うでしょう。その時彼女は自分を愛の女神なんて言っていてられるかしら？」

何もしなくてもアテナを追い詰めれますよ、と事も無げに言い放つ異世界の錬金術士。

人間を滅ぼさずに、世界を浄化する道を少女は示し、ポセイドンはその言葉に同意した。

その意思に従い、異界の娘は世界を駆ける。

本当に面白い駒を手に入れたとポセイドンはほくそ笑む。

「これぐらいでは聖戦は起こさぬよ、アテナ。例えそなたが望んだとしても、な」

所詮アテナとの闘争など、永遠の寿命を持つ神々にとってはほんの暇つぶしのようなもの。

フレイの計画通りに事が運ばなくても、それはそれで良い。

時間は腐るほどあるのだ。

ポセイドンはそれ以上アテナと話すことはせず、交渉は打ち切りとなった。

教皇などは、体勢を立て直されていない状況で聖戦が起きずにぞかしホツとしただろう。

これから、聖域は代替わりへと突入する。

聖闘士の現役の寿命は短い。

大体30歳前後で、人間の肉体はピーク時より徐々に能力が落ちていくからだ。

とても代替わりをしながら聖戦を戦い抜く力などない。

二度の聖戦で、聖域も色々とガタが来ているのだ。

「帰るぞ、テティス、セイレーン」

「はい。ポセイドン様」

腹心2人を率いて、ポセイドンは自らが支配する海底へと帰る。帰ったならば、フレイが食事の用意をしている筈だ。

それは、アテナの腹の探りあいをしながら食べる食事とは違い、配下と触れ合いながら食べる心温まる食事だった。

それを心に思い浮かべ、ポセイドンは海へと還るのだ。

るるるにフレイ

<瀬田宗二郎VS緋村剣心戦>

「所詮この世は弱肉強食。強ければ生き、弱ければ死ぬんだあああああ！」

宗次郎の魂の叫びが、部屋に響いた。

私は宗次郎の叫びを聞いて、痛ましさを覚えたが、イヴァンは違った。

「フレイ姉。なんで、宗は焼肉定食なんて叫んでんだ？」

「は？」

シリアスな空気がこの一言で、瓦解した。

「ちなみに、あんたはなんて聞こえたの？」

「『所詮この世は焼肉定食。強ければ食い、弱ければ食われるんだあああああ？』」

「……………」

一応通訳用にく翻訳こんにやく>使っているんだけど、どうやら品質が低かったようだ。

「うん。とりあえず、黙っていきましょうか？」

私の提案に、由美さん以外にも抜刀斎のツレも深く深く頷いたのだった。

さて、宗二郎と抜刀齋の勝負が終わり、抜刀齋達はいよいよ次の本番の志々雄戦への舞台へと向かった。

私は宗二郎に膝枕をしつつ、薬をほっぺたに塗っていく。ちなみに、由美さんは志々雄の元へと向かってもらった。秘密の通路があるので、予定より早く到達するだろう。

「それにしても、随分とやられたわねえー」

「ええ。負けてしまいました。志々雄さんの弱肉強食の教えは違っただんですね……」

いや、志々雄の教えも間違いではないんだよね。

強い者が勝つのは自然では正しいのだから。

それに、正義なんて時代が変わり価値観が変われば変わるものだ。

「別に間違いじゃないさ。ただ、その教えとは別にお前が弱かっただけだ。正しい正しくないに強さは関係ないんだよ」

「イヴァンさん」

「けど、お前は志々雄に傾倒していたからな。フレイ姉も心配していたし、ここは一回志々雄から離れて見直してみたらどうだ？」

「……………そうですね」

びっくりした。

イヴァンが真面目な事を言ってるよ！

いつも口を開けば、「メシー」や「腹減ったー」としか言わなかったイヴァンが！

うわ、ヤバイ。なんか息子の成長を知った母親の気分だ。

ちよつと、涙が溢れそうだよ。

「それで、志々雄が正しいと思つたらそれはそれでいいんじゃないの？」

「少し、旅をしてみようと思います。そして、見極めたいです」

「おう。いつてこい」

私は丹念に薬を塗り、宗二郎を癒してしまった。

「それにしても、フレイさんの薬は良く効きますね。どうして、志々雄さんの怪我は完治しなかったのでしょうか」

ギクリ

実は完治させたら誰も志々雄を止められなくなると思つて、あえて完治させずに治療を長引かせたんだよね。

具体的に言うならば、常備薬オンリーで治療していました。

おそらく、エリキシル剤を使えば跡形もなく治療は可能だったと思つただけだね。

志々雄一派の薬師としては失格かな、私。

<フレイの実力>

10本刀が集合の時、私も一応端に控えることになっていた。志々雄の容態が急変した時に、ただちに治療を与える為だ。

「なあ、フレイのねーちゃんってどれくらい強い訳？」

会合が終わり、私がお茶を配っていると張がそう聞いてきた。

「あははは。張さんは知らないんですね。フレイさんは激弱ですよ」

宗が笑いながら私の傷をえぐってくれた。

錬金術を習い始めて早幾層。

護衛の為のAILー人形を作り出したりしたが、私自身は弱いままだった。

「センスがねーからな、こいつは」

戦闘センスなんて一般人は持ってねーよ、志々雄。

「そうですね。純粋な腕力ならば、そこら辺のゴロツキにも負けるのでは？」

否定できないのが辛い。

アイテムを使わない私なんて確かにただの手弱女ですからね。

「フレイさんの実力は、その多様な薬と爆薬ですよ。なかなか凶悪な力です」

「人を爆弾と毒薬が大好きな危険人物のよーに言うな、宗！

私の薬と爆弾は自衛の範囲を出てないわ！」

そう、あくまで私が爆弾と毒を持っているのは自衛なのだ。

このテロリスト集団の下っ端には、志々雄の手当てだけしかない私を嫌っている奴も多いのだから。

あー、もうこれだから脳みそ筋肉野郎は！

「って言うか、爆薬と毒が自衛とか言ってる時点で変じゃないの？」

おかまの鎌ちゃんという言葉が痛い！

「変人だつて言われちゃいましたね、フレイさん」

「イヴァンと2人がかりでアジトの中で超巨大な流し素麺をする宗に変人だなんて言われたくないわー！」

私の絶叫が大広間に響いたのだった。

<VS志々雄戦>

宗をアジトから送り出すと、私とイヴァンは決戦の場へと向かった。念の為に、宗には鏡の破片を渡している。

鏡といっても、現代のような鏡ではなく金属を磨き上げた鏡だ。

しかも、破片。おそらくパツと見では何の価値もないと思うだろう。けれど、このアイテムはある道具と連動しており、その鏡を通して現在の風景を見る事が出来る。

一応、私の知り合いには全員持たせているんだけどね。

緊急時に血を垂らせば、鏡が血色に染まり緊急事態が分かるようになっている。

志々雄の野望の始まりには、結果的にだが私も手を貸してしまっている。

あの日、あの時私が志々雄を助けなければ、宗二郎が人斬りになることもなかったし、志々雄に殺される人もいなかったのだろう。

責任と言う訳ではないが、終わりを見届ける義務があると思う。

特設の決戦会場ともいえる場所に着いた時、抜刀斎は倒れていた。

ああ、彼では志々雄に勝てなかった。

現在は、元新撰組の斉藤一が戦っているが、おそらくあの怪我では勝てないだろう。

「ほう、お前は逃げなかったか？」

斉藤を倒した志々雄が、私へと声をかけた。

「始まりが私なのならば、見届けるのが義務と言うもの」

「てつきり、宗二郎が離反した今、これ幸いにとお前も居なくなるものかと思っていたのだがな」

クククと志々雄が笑う。

ああ、やはり私が宗に拘っていたことに気付いていたんだな。

「お前は俺が嫌いだからな」

「ええ。嫌いですよ」

彼の言う弱肉強食が嫌いだった。

確かに自然の世界ではそれは正しいだろう。

けれど、私達は知性のある生き物だ。

ならば、もう少し助け合って生きてもいいのではないのだろうか？

お互い足りない部分を補い、手に手を取って心安らかに生きるとい
う選択肢はないのだろうか？

彼の語る世界は、なんて寂しい世界なのだろう。

「だから、止めたかった」

「だから、俺の治療をしなかった、か？」

うーん。マジで鋭いな。

エリキシル剤を使えば、志々雄の火傷を跡形もなく無くす事は出来ただろう。

けれど、そうしたら本調子の志々雄には誰も適うことができなくなってしまう。

志々雄の言葉に由美さんと方治が驚いた顔をする。

「気付いてたんだ？」

「気付いたのはつい最近だがな。ふん、とんだ獅子身中の虫と言う訳だ」

「そこまで私を信頼してなかった癖に」

薬師である私の薬には毒薬があると知っている志々雄は、決して私の作った食べ物を食べしようとはしなかったしね。常に毒殺を警戒していやがった。

「確かにな。そう言う事はお互い様と言う訳だ。何を狙っているか知らないが、時間稼ぎはそろそろいいか？」

「あははは。ホント、イヤになるぐらい鋭いね」

私は一方後ろに下がり、イヴァンが私の前へと出る。

「てめーとも一度戦ってみたかったよ、イヴァン」

「俺は戦いたくなかったよ、志々雄さん。けど…」

イヴァンが一気に間を詰めて切りかかる。

キンキンと刀と剣の打ち合う音を聞きながら、私は素早く抜刀斎の元へと向かいバッグから<エリキシル剤>を取り出す。

「お、おい」

「抜刀斎の治療をするから黙っていなさい！」

言いたくないことだが、身体能力はイヴァンが高くても、技術では志々雄が上だ。

大分技術的に成長したと思うのだが、まだまだ適わない。

この世界での一部の人間戦闘技術と言う奴は、私達の世界より卓越しているんだよね。

なので、アトリエ世界では一流と評されたイヴァンの技術はこちらでは並みレベルだ。

人外ばかりだよ、ホント。

一応、イヴァンには火耐性の装備を身につけさせて、志々雄の剣が発する炎の無効化はしている。

これで多少は保つ筈だが、そう長くはないだろう。

私は慎重に傷にエリキシル剤をかけていった。

意識があれば内服させるのが一番なんだけどね。

「お、おい」

「黙ってて」

見る見る間に傷口が消えていく。

後は彼が目を覚ますのを待つばかり。

強制的に叩き起こしてもいいけれど、ここは彼にかけてみますか。

運命論者ではないけれど、もし志々雄が負ける運命ならばきっと彼は起きるだろう。

そして、志々雄を倒すのだ。

ならば……。

「イヴァン、治療は施したし、撤退するわ」

「了解！」

私は逃走用に作っておいたくかんしゃく玉と煙幕として使用できるくけほけほ玉の二つを利用して、志々雄の視界と聴力を奪い、フレイのアトリエを足元に起動した。

ソレと同時にイヴァンが私の方へと移動し、アトリエの扉を開き落下する。

素早く扉を閉めてしまい、扉を消す。

これで逃走完了だ。

後は、由美さんに渡しておいた鏡の破片で様子を見守らせて貰おう。

けど、とりあえずは飲み物の一杯が欲しいな。

常に切りかかれるかもと言う緊張感の中で、喉渴いちゃったんだよね。

< 志々雄戦の終了後 >

志々雄と抜刀齋との戦いは、抜刀齋の勝利で終わった。
私が怪我を癒したとは言え、ギリギリの勝負だった事は言うまでもない。

最後は抜刀齋の手でと言うより、志々雄の自滅に近かったが。
まあ、彼は満足だろう。
自分の思つがままに生きたのだから。

私は京都の甘味屋で餡蜜をいただきながら、とある一行を待っていた。
た。

ついでにある人と待ち合わせしていたのだが。

旅装束の四人が、私のいる店の前を通つたのを見て、私とイヴァンは会計を済ませて席を立つ。

そして、四人組の後を付いて行く。

しばらく行くと、その中の一人が人通りの少ない所で歩みを止めた。

「某達に何か用でござるか？」

「あれ、やっぱり気付いてたんだ」

ポリポリと頬をかきながら、抜刀齋一行の前に姿を現す私とイヴァン。

「そなた達は…」

「どうも、抜刀齋さんとそのご一行」

「志々雄の十本刀！」

「え!？」

うーん、やっぱり私達の情報ってそこまで回っていないか。

「正確には志々雄の薬師してたフレイ・ローゼンですよ。さて、今

回はお礼を言っておこうと思ひまして」

「礼、だと？」

安慈と戦った相良左乃助が訝しそくに声をあげた。

「ええ。あなた達のおかげで、宗に別の道があると気付かせることが出来ました。私達がいくら言っても宗は考えてくれなかったんですよ」

力が全てだと思っていた宗二郎に分からせるには、それ以上の力を持って当たるしかなかったんだよね。そして、私達には力が不足していた。なので、宗二郎に気付かせてくれた抜刀際に礼を言っておこうと思つたのだ。

「礼には及ばぬでござるよ。用件はそれだけでござるか？」

スツと抜刀斎の目つきが変わる。

これだから、剣術馬鹿は後が困るんだ。

「後はコレ。私が作った薬。それと、これはオマケ」

私はそう言つて、常備薬の入った器と、鏡の欠片を投げ渡した。鏡の欠片は組紐を使って、根付けっぽくしている。

「もし、困ったことがあつたらその欠片に血を垂らすといい。私に異変が分かるようになってる」

「はあ!？」

ツンツン頭の少年が胡散臭そくに、欠片を見る。

「嘘だと思うなら信じなくてもいいよ。用件はそれだけ。二度と会わない事を祈っているよ。抜刀齋」

「一つ聞かせて欲しいでござる。フレイ殿は、どうして志々雄の元にいたでござるか？」

「相良から聞かなかった？」

私が志々雄の元に居たのは、宗二郎が心配だったからよ。子供の時に志々雄に出会ってしまったから、宗は大きく歪んでしまったからね」

もし、私が志々雄を助けなければ宗二郎は歪まなかったのかも思ったら、いてもたってもいられなくなっただけだ。

志々雄に人生を断たれた人間が数多くいる中での、ほんの一人の歪み等些細なものかもしれないが。

所詮は自己満足だ。

「ただ、それだけよ。じゃあね、抜刀齋。長くいたら怖い糸目のおにーさんに捕まっちゃうし」

斉藤一はしっこそうだ。

当分の間、アトリエ内に籠ってほとぼりが冷めるのを待つに限る。

さて、日本刀に興味を持って鍛冶師の所に見学に行ったレオンと合流したら、さっさと引っ込みますかね。

私はひらひらと手を振って、抜刀齋一行と別れた。

異空間でストーカー

トントントン

最近『フレイのアトリエ』に閉じこもりっぱなしで、まともな時間感覚が失われていた私に、そのノックは大きく響いた。

現在、『フレイのアトリエ』の入り口は空間の狭間と言う場所に固定している。

よーやく、入り口を異次元の狭間に固定する術を覚えたんだよ。
viva、シードラゴンの能力。

なので、当然ノックをするならば空間の狭間にいるわけで…。

「イヤだなあ、厄介な客だよなあ、きつと…」

私は渋々ドアを開けて、思わず閉めた。

なんで、どーして、某少年漫画忍者モノの四代目火影様が困ったよ
うな笑顔で立っているのかしら？

「あのさ、開けて貰えないかな？

開けて貰えないなら、壊していい？」

「だ、駄目です！」

誰が修理すると思ってんだ、こんちくしょー！ーっ！！

私は、渋々ドアを開けた。

「いやあ、助かったよ。頑張つて、禁呪を使って九尾を自分の息子

に封印したのはいいけれど、気付けば変な所いるし。もう、どうしようかと……」

「はぁ……」

多分、屍鬼封神だっけ？

たしか、そんなの使って封印したんだよね？

ううん、私も大分記憶があやふやになってるや。

「それで、死んだ筈なのにお腹は減るし……。あ、このお茶美味しいね」

「まあ、茶ぐらいどーぞたらふく飲んで下さい。でも、確かに貴方は死んでいると思いますよ。だって、透けてますし」

そう、よくよく見たら四代目火影は透けているんだ。

おそらく、漫画の通り彼が命を賭けて九尾をナルトに封印したのは間違いないわけだ。

667

「みたいだねえ……。ああ、でも死んでもおなかって減るんだねえ……」
「みたいですねー。多分、未練が無くなったら成仏出来ると思うんですけど……」

「未練…未練かぁ……。やっぱり、子供の事かなあ……。里は、三代目火影が無事だろうから、安心はしているんだけど」

「子供さん、ですか」

「そう。ボクと奥さんの愛の一粒種。ナルトって言うんだけど……って、写真がなああああい!？」

そりゃあ、魂だけの存在だから写真なんてなかるうよ。

むしろ、持っていたらスゴイ。

どよよよーんと一気に落ち込んでしまった四代目をほったらかし

にして、水鏡を作動させる。

うーん、適当に世界を写しているけど、やっぱり当たらないなあ…。

「なにそれ？」

「あー、外部からの情報を仕入れるカメラみたいなものかと思っただけです。音は聞こえないから映像だけなんです…。やっぱり、私の知らない世界は無理っぽいなあ…。媒介があればなんとかなるかもしれないけど…」

何度か、私の渡った事のある世界が映し出される。

あ、星矢の世界じゃん。アテナ、聖戦負けてるし。うわっ、海王様
高笑い中。

なんて愉快的な画像を見ていたら、いきなり赤い液体が水鏡に混じり
こんだ。

「ちよっ、なに!？」

「媒介って言ったから、僕の血を使っただけけど？」

片手にはクナイが握られている。

い、いつの間に…っ！か、写真は持ってなかったのにクナイは持っ
てたんだ…。

血が水鏡の水と混じりあい、風景が変わっていく。

うわ、どうやら正解だったようだ。

けど、死人のくせに血って流れるんだあ…。

「うん、木の葉の里だ」

嬉しそうに若干破損状態が残る町が現れた。

うーん、文明的にはザールブルグより進んでいそうだけど、和風だなあ…。

「ナルト、ナルト、ナルトを探して!」

しょうがないので、里の中を色々と見て回ってやる。

すると、すぐにナルトは見つかった。

金髪は結構目立つからね!。でも、この世界の髪の毛ってスゴイよね!。

ピンクとかいたし。

一人の小さな男の子が、一人でブランコに乗っている。

「ナルト、うわっ、おっきくなっただなあ…!」

おい、四代目。

そのハンサムな顔がやに下がってますよ。

私は呆れ顔で見つつも、ちょっとアングルを変える。今まで上から見ていたのを、高さを同じにしたのだ。

「髪の色は僕に似てるけど、全般的にクシナ似かな」

「ふーん…」

日が暮れだして、子供達が親と一緒に帰っていく。

けれど、ナルトは一人つきり。

四代目の顔が、痛ましげなものに変わる。

ついでに、迎えに来たお母さん連中を写す。

私では何を言っているか分からないが、四代目はきつと読唇術が使えるので何を言っているのか分かるのだろう。

確か、私の記憶ではナルトの子供時代は不遇だった筈だ。

「なんで、ナルトが…どうして、三代目は！
きちんと、ナルトが英雄になれるようになって…、里を救ったのはナルトでもあるのに！！」

「三代目さんとやらは、なんとかしようと思っても、町を襲った化け物を封じられた子供なんて、色眼鏡つきで見るでしょうよ。だって、封じられたとはいえ敵が近くにいますよ？」

「心中も穏やかじゃないだろうし…」
「そ、そんな…」

ガツクリと膝をつく四代目。
うーん、ちよつと気の毒すぎたかなあ…。

それから四代目は映る映像一つ一つに喜んだり、怒ったり、泣いたり忙しかった。

「ナルトくん、よくまっすぐ育ったわよねえ…。それに、あれぐらの年の子供は悪戯ぐらいしても普通でしょうに」
「うん」

ナルトくんが影分身の術に失敗するたびに、こうだよ、こう！と私の前で聞こえもしないのに、印を結んで術を発動させる四代目。いや、危険の少ない術だったらいいけど、火遁なんか使われたら爆発物の多いこのアトリエなんて一発で吹き飛んじゃう。

「うわっ、この教師サイテー。イルカ先生、さいこー。うおっ、なにこの渋いヒゲ！三代目も渋くていいけど、これは格別」

ジュルリ

「アスマ、逃げてー。超逃げてー！！」

「四代目、あなたの弟子って…」

「至らない師匠ですいません。カカシイイ、お前ってヤツはああああ」

悶絶する片手にエロ本を持つ男の師匠だった男。

堂々としているからイイってもんじゃないよ、青年。未成年がいるんだから、隠せ隠せ。

なんて事をしつつ、ナルトくんのストーキングをしてました。

流石に、大蛇丸が出てくると強張った顔をする。

「あー、やっぱナルトくんじゃ、カマヘビの相手は無理なの？」

「今のナルトでは逆立ちしても無理だ…。逃げてー、逃げてー」

中忍試験では、本当寿命が縮まりました。

助けに行こうと、四代目が水鏡の仲に飛び込んで頭打つし。

おかげで、水鏡が乱れて一時的に追跡不能になるし。

さすがに、強力 暗黒水を使って一時的に行動不能にさせて、なんとか時間はかかったけど復旧は出来ました。

おかげで、二次試験の予選は終わってしまったけれど。

温泉でのぞきをしていた男が、この四代目の師匠だったり。

「弟子も師匠もオーブンスケベかよ…」

ジトリと疑いの眼差しで四代目を見る私。
ブンブンと首を振って否定する四代目。

そして、三代目火影の死。

「まさか、三代目もあの術を使うなんて…」

絶句する四代目に、私はふと思い当たった。

「もしかしたら、アトリエ来るんじゃない？」

「え…」

2人で水鏡からアトリエ唯一の外部の出入り口に視線を向けた。

「まさか…」

「ねえ…?」

トントントン

今回はずいぶんと早いな、オイ。

まあ、亜空間の中じゃ時間はあつて無きが如しだからなー…。

私が扉を開けると、そこには先程まで忍び姿で戦っていた三代目火

影、その人。

「一人追加」

「一体外の亜空間ってどーなってんのよ？」

職業選択の自由を行使せよ！

私達は日本の一般的な家に住んでいた。

左隣の住人は、旦那が単身赴任らしくほとんど姿を見ない。

けど、息子はちよつと弱気だが可愛らしいし、奥さんも若々しく美人だとしても大雑把で朗らかな人だ。

ただ、大雑把過ぎてザルと言うより、ザルの底自体が無い人ではあるが。

息子が母親の突拍子も無い行動に苦勞しているのが忍びなく、時々ま手助けはしてあげている。

イヴァンもアスランも色々と気になるらしく、何かと面倒を見ている。

本当にいい人なんだけどね。

けど、少しは常識を考えて行動して欲しい。

確かにこの並盛では、常識外の所は多いのだが。

ちなみに、お隣の苗字は『沢田』で、奥さんの名前は奈々。息子の名前は綱吉と言う。

旦那さんの名前が家光だと知ったとき、思わず綱吉君の子供の名前は吉宗かと思ってしまうたのは秘密だ。

それは、朝一番にお隣の綱吉君が我が家に駆け込んできたことから始まった。

「フレイさん、イヴァンさんたすけてー！」

基本的に平和なこの世界では暇を持て余したアスランは、大学進学を決意し、見事国立大に入学。

卒業後に就職して、今日は早出らしくもう家を出ていた。

イヴァンもアスランに触発されて、数年後そこその大学に一芸入学を果たした。

いやさ、騎士をしていたアスランにはある程度の教養があったけど、イヴァンにはソレがなかったので大学受験に一度失敗したんだよね。大検はかろうじて受かったんだけどさ。

大検に受かった後、習ったこと全て忘れたのにはガツクリしたけどさ。

なので、剣道とか空手とかの教室に叩き込んで、武術を習わせ、大会に出場させたのだ。

うん。さすが実戦で鍛えた腕でした。

サラリと全国大会で優勝を搔っ攫っていきました。

その後、その功績を盾にそこそのレベルの大学に入学出来たんだよね。

いやはや、なんとかなるものだ。

とにかく、今は綱吉君だ。

駆け込んできた綱吉君は、なんか妙に疲れ果てていた。

「おはよう、綱吉」

「おはよう、綱吉君」

丁度朝食の時間だったので、私とイヴァンは朝食中だった。

「あ、おはようございます」

ぺこりと頭を下げる綱吉くん。
うん。いい子いい子。

私は綱吉君の為に緑茶を入れてあげる。

この世界に来て何が嬉しかったかというと、整った家電製品と水周り。そして、米味噌醤油だったりする。

この世界から帰るときに樽ごと持って帰りたいよ。自分でも作れるけど、結構面倒なんだよね……。……。

「ありがとうございます」

綱吉君は一気にお茶を飲んで、綱吉君専用の湯呑みを机の上に置いた。

うん。一応興奮状態は冷めたみたいだね。

「それで、今回はナナさんは何をしたのかな？」

今までナナさんが起こしてきた事柄を思い返す。

捨て猫を拾ってきて猫屋敷にしたり、詐欺に引っかかって身包み剥がされそうになったりとした事が最近のナナさん事件簿だ。

「母さんが家庭教師を雇ったんだ」

そう言って私に差し出されたのは、一枚の手書き紙。

『お子様を次世代のニューリーダーに育てます。学年、教科は問わ
ず』

と書かれている。

「そんなに成績悪かった？」

「真ん中ぐらいだよ！」

そう。散々私達が鍛えたおかげか、原作ではダメツナと言われている綱吉君は平凡な少年になっていました。

何をするにも中庸。

うん。いい言葉だ、平凡って。

「だよな？ だったら、高校受験を視野に入れたのかしら？」

「勉強は出来たほうがいいぞー。俺みたいに苦労する」

「……………」

苦労したのは、あなたに勉強を教えた私達だと言いたいよ、イヴァン。

あなた、食べ物に関しては記憶力ずば抜けているのに、勉強に関してはすぐに忘れるんだから！

ウンウンと頷くイヴァンにちょっとした殺意を芽生えさせながら、私は紙をゴミ箱に捨てた。

「んで、綱吉君はどうしたいの？」

家庭教師がイヤなら、ナナさんにちゃんと行った方がいいわよ」

「言っただよ！」

「って言うか普通の家庭教師だったら納得したさ！」

来たのは赤ん坊でしたってオチか。

確かに普通の精神を持っていたら、家庭教師が赤ん坊なんて耐えられないよね。

「しかも、俺をマフィアのボスにするって！」

「なるの？」

「なりたくないよ、マフィアのボスなんて！」

オレ、普通のサラリーマンになって普通に結婚して普通に死ぬのが夢なんだから！」

「何の起伏も無い人生計画だな」

「別にいいでしょ。綱吉君の望みだし」

父親が毎日家にいないのは結構イヤだったらしく、自分はそういう大人ならないと決めているみたいだし。確かに家庭環境は劣悪だよな。

「それじゃあ、この家に居てもいいわよ。どうせ、しょっちゅう入り浸っていたし、部屋も余ってるんだから」

「ホント!？」

「うん。ナナさんには後で言いに行くわ」

それに、いくらアルコールノと言ってもこの家には簡単には入れない。

私達に危害を加える恐れのある存在は、シャットアウトなのだ。

実はこの家、アトリエとリンクしているんだ。

最近ようやくそーいう事が出来るようになったよね。

まあ、調節とかに時間がかかるので、多用は出来ないけどさ。

「綱吉君。言い事を教えてあげるわ。日本国憲法第22条1項目って何だと思っ？」

「え？」

いきなり私が憲法の話を出したので、不思議がる。

「職業選択の自由よ。マフィアのボスなんて押し付けてくる無粋なやからにはそう言っておげなさい」

綱吉君は日本国籍持ち。

ならば、憲法においてある程度の自由が保障されている。

なので、それを前面に押し出しなさいとアドバイス。

「綱吉、学校はいいのか？」

「あら」

時間を見ると8時20分を回っていた。

「うわ、遅刻だ！」

鞆を引っつかんだ綱吉君。

「イヴァン、自転車で送ってやって」

「おー。任せろ！」

朝食を終えていたイヴァンが立ち上がり、玄関へと向かう。

最初はバイクの免許でも取らせようかと思ったんだけど、バイクと自転車の速度がほぼ同じだったのだ。

ならば、バイクなんて要らないよねーと自転車を買い与えておいた。イヴァンはソレを使って大学に通っている。

「いつてらっしゃーい」

さ、朝食の片付けとその他諸々をってしまったら、お隣に行きますかね。

当分の間綱吉君を預かりますって言わなきゃいけないし。

BASAフレ!

バタバタバタバタ

私は廊下を疾走していた。

手には一枚の書類と数枚の小さな紙。

書かれてあるのはほとんどが数字の書類だ。

途中一枚ハラリ紙が飛んだのをキャッチする。

目的地にたどり着き、手が塞がっている私は足で扉を開ける。
横にスライド式の扉だから出来る事だ。

「ぐおーら、バカ親！ なんだこの書類！

てめー、金何に使いやがった!？」

作業場と言って過言でないこの部屋には、沢山の鉄製の部品が転がっていた。

その中にたむろする汗臭い男達。

その中でも一際目立っているのが、私達の雇用主だ。

銀色の髪に左目は眼帯で隠し、紫色を基調とした格好をしている。

顔は、まあ整っているのではないか？

私にしてみたら、人間は顔より性格と経済力だ。

見苦しい顔でなければ、大した差はないよ。親父以外は。

渋い親父は、世界の宝です。中々一般人には理解されないんだけどね。

「なについて新しい重騎の設計案と、買った材料の支払い」

「ふざけんなー！」

新しいの作るときは言えって言ったでしょー！
勝手に作っても予算なんてないわよ！」

私の絶叫が城中に木霊した。

ここは四国。鬼が住まう地。

そして、私達が流れ着いた地。

いやはや、今回のトリップはビックリよ。

何回もトリップしたので、大分慣れたつもりだったんだけど、いきなり海の中にトリップはびっくりした。

慌てて運良く所持していたくエアドロップで溺れるのを回避したのはいいのだが、視界の全てが海でした。

私の場合、陸地に辿りつく前に体力が無くなります。

さて、どうしようとして三人で悩んでいたら、運良く船が通りかかって救助されました。

その船の持ち主で、私がバカ親と言ったこの男、長曾我部元親だ。得体の知れない私たち三人を拾った男は、人の良いことに私達の身の振り方まで相談に乗ってくれた。

この地の貨幣も、常識も無い私たちは長曾我部の人々に色々と教えていただきました。

んで、その恩を返す為に私達は、元親と雇用契約を結びました。

幸い古文漢文が得意だった私は、この世界の文字が理解できましたので、会計のような事をやっているんだけど、この国むっちゃくちゃな赤字経営です。

どれだけ赤字かと言うと、兵士達に食事を取らせるのにも四苦八苦する経済状況です。

こういう場合、兵士の数を減らしたりするのがセオリーだと思うのですが、この戦国乱世の世の中、悪戯に兵の数を減らすわけにはいきません。

なので、私が作った回復薬などを高値で売り捌こうしたのですが、この世界おにぎりやお酒で体力や気力が回復するというとんでも設定です。

しょうがないので、単価はいいのですが調合に時間のかかる布類をメインに出荷しております。

後は、＜白い土＞を使った陶器等も中々の売り上げですね。

あと、同じ酒でも日本酒や焼酎ではなく、ワイン関連も売ってみました。

尾張の大名が面白がって買われましたけどね。

いえ、日本史を学べば絶対に名前が出てくる有名人だったので、びっくりしましたけど。

あと、遠い奥州の大名も珍しがって買っていかれました。毎度どうもありがとうございます。

そんなこんなで、コツコツと貯めていた金をコイツは一気に使いやがった。

「このまま戦になったら、兵士達にボロボロの装備で戦闘をさせなきゃいけないじゃないかー！」

「フレイ姐さん、俺達はコレで大丈夫ですから」

「姐さん言うなー！」

ゲシリと私を姐さん呼ばわりした、兵士兼作業員に蹴りをぶち込む。兵士を沈黙させた後、元親に向き直ると、

「ふぬー」

と、意味不明な言葉を発して、手をブンブンと振り回して元親の胸板をポカポカと叩く。

本当は頬つぺたにでも、コブシを捻じ込んでやりたいのだけど、いかんせん身長が違いすぎる。

何を食ったらこんなに身長が高くなるんだ？

「どうせ、戦になったら俺が突っ込んで終わらせるからさ。ほら、見てみな。この新型重騎をよ！」

そう言っつて、私に重騎をみせる元親の笑顔は、とても一国の主とは思えないものだった。

実際人間的魅力と言う点に関して、元親は卓越していると思う。つて言っつても、私が良く知っているのは隣国の毛利ぐらいなんだけどね。

それは、ほぼ無給なのに兵士達が元親についてきている事からも伺える。

いやもう、私に来る前には食事すら事を欠いていたらしいよ。

たまに舟で海に出て、魚を取ってそれだけを食べる生活をしていたらしい。

よく、病気になるなかつたな、ソレ。

いまでは、稗や粟だけどころちゃんと二食食べられると言って泣いて喜んでいたもんなー。

私としてはせめて麦。出来ればきちんとしたお米を食べさせてあげたいんだけどね。

四国に色々と挺入れをして、田畑の拡張に努めているんだけど、土地的に山が多くて中々進まないんだよね。

まあ、一朝一夕に出来ることではないので、コツコツとしていつているが。

とにかく、そんな嬉しそうな顔をされたら何も言えなくなってしまう。

私は、肩を落として元親に、

「来月から小遣い四分の三カットね」

「うえっ!?!」

来月、新しい木騎の設計を……」

「却下。さすがにこれ以上使われると、食事も出来ないわ」

ホント、今回ギリギリでしたのよ。

これ以上使われたら、一ヶ月水だけ生活になっていた所だ。

いや、アトリエ内の食料を出せばいいのだけれど、そーしたら調合に差しさわりのあるから出来るだけしたくないんだよね。

一応ベルグランドもを田畑に埋めて育ててみてはいるけど。栽培できたらいいいよね。痩せた土地でも多分大丈夫だし。

「次、勝手に作ったら一生小遣い抜きにしてやるからね」
「……はい」

小遣いを盾に取った私の言葉に、元親は力なく頷いた。

「うん。それで、新型重騎の説明をしてくれるのでしょうか？
かかった費用の価値はあるのでしょうかね？」

無かったら廃棄処分よ、と言う私の言葉に、それでも嬉しそうに元親が重騎の機能説明をしてくれる。

これが、この世界での私の日常である。

BASAフレ！（後書き）

簡単アイテム説明

エアドロップ：水中でも呼吸が可能となる飴。炭酸が効いています。

BASAフレ！2

4日間ばかり寝ないで仕事をした私は、ようやく布団に倒れた。長年慣れたベッドとは違う感触に、イヴァン達は慣れなくて四苦八苦していたが、私は懐かしい感覚がして好きだった。

シーツは最近少し増えた侍女の方々が適度に洗濯をしてくれてるし、布団も天気がいい時は大体干してくれている。

太陽の香りがたつぷりとする布団に包まれて、私は睡魔に身を任せた…… 筈だった。

「四国一番つえー男の名はなんだー!？」

「……アニキー!」「」「」

時間的には2時間と言った所か。まだまだ寝足りない風情の私は、四国の空の下に響き渡るアニキコールで叩き起こされた。

すぐに終わるだろうと思っていた、アニキコールだが今日は中々にしつこい。

何度も寝返りをして寝ようとするのだが、寝られない。

いい加減煩いのにキレて

「てめーら、うるせーぞ!」

と、窓を開けて怒鳴った。

実はこの長曾我部邸は、私が見つけたガラスをはめ込んだ窓を使っていたりする、とてもお金がかかっている風な建物だ。

長曾我部の仕事の一つに海外との貿易があるのだが、海外の商人の人たちもふんだんに使われているガラスに目を見張る。この時代、ガラスはまだまだ高価な品なのだ。それを、領主の館とはいえ窓ガラスにしているのだ。そりゃ、びつくりだ。

「おう、フレイ起きたのか？

寝坊だぞ」

「私、朝方まで仕事していたんだけど？

んで、4日ぶりに寝ようかって……なに、戦？」

元親や配下の人たちが戦装束だった。

「ああ。いつもの如く毛利との瀬戸内海の覇権争いだ」

「あー。懲りないね、あの人も」

瀬戸内海は四国地方の覇者である長曾我部と、中国地方の覇者である毛利との勢力争いの場なのだ。

これまた長曾我部の仕事の一つに、瀬戸内海を通る商人の護衛がある。

長曾我部の庇護下にある商人を襲うのは、毛利であり、毛利庇護下の商人を襲うのは長曾我部だ。

お互い目障りなのだ。

ぶつからないわけがない。

「へー、イヴァンたちも行くの？」

「アスランは留守を頼んだ。イヴァンとミルカッセは連れて行く。レオンは、来ないだろう？」

「ああ。確かに、レオンは来ないよね。インドア派だもの。今頃、

何か作ってるんじゃないの？」

新しい刀を作りたいと言って、私から鋼を貰っていったもの。結構な量を渡したので、当分は鍛冶三昧だろう。

なんでも、私にぴったりの短刀を作ってくれるらしい。

刀紋を桜の花びらに仕立て上げるらしい。

実は結構楽しみなんだよね。

出来れば、包丁で実現して欲しかったんだけどね。

「だろ？ フレイは来るだろ？」

「仕事終わったみたいだし」

「いや、ようやく仕事が終わったから寝たいんだけど」

布団が呼んでいるんだ。

お日様の匂いが呼んでいるんだ。

「船で寝ればいいさ」

そう言うと、元親は私を窓から引きずり出して連れて行く。

「せめて、パジャマのまま戦場に立たせるのは勘弁してください…」

…」
史上初！パジャマで戦場に立つ女にはなりたくない。

元親は配下の人間に、私の秘密バッグと戦支度一式を持たせると、私を引きずって船へと向かった。

睡眠不足だったら、船に酔いやすいんだよね。

先に、酔い止め飲んでいよう……。

「お空はこんなに青いのに、どーして私はここに居る。」

思わず歌を歌ってしまった。

現在、旗艦の船尾にいます。

元親は自分の武器に乗って相手の船に突貫したし、イヴァンはイヴァンで乗り慣れたくフライングボードに乗って突貫した。うん、なんか戦闘時の行動って二人ともよく似ているわ。

ミルカツセは、私が作った常備薬の入った袋を片手に、戦場を駆けずり回っております。

たまに、自兵以外を助けていたもするけど、その辺りは見ない振り見ない振り。

どうせ、いつもの小競り合いなんだし。

ほら、あれだ。

大将同士のスキんシップと言っちゃつだ。

もしくは、肉体言語。

ふむ。そう考えてみると、智将と呼ばれる毛利元就も中々に漢^{オトル}なのかもしれない。

だから、お互いに本陣突撃なんてしてくるんだと思う。

「なんで、私の前に来るかな」

「本陣を制するのは当たり前のことだ。長曾我部の弱点も言えるお前を手に入れば、四国は思いのまま」

確かに、政治的には私とアスランが居ないと四国は滅びる可能性が大きいでしょう。

滅びなくても、発展は難しいかも。

輪刀を構える毛利に、私は米神の辺りを軽く揉んだ。
心なしか、頭痛がするよ……。

「大人しく元親と遊んでいれば良いのに」

「あの筋肉馬鹿とマトモに勝負できるか」

「ですよー」。

元親の武器は船の錨だ。

そんなものを自由自在に振り回す元親相手に、いかにも華奢な感じのする毛利では太刀打ちは難しいだろう。

いつもいつも策を使って五分と五分に持ってきているし。

その辺りは流石智将と言った所か。

「だからって、私のところに来なくても……」

「ふん。戯言は良い。いくぞ」

「こなくていいです」

私は、靴の踵を三回鳴らす。

ブワンと靴に秘めていた魔力のスイッチが入る。

切りかかってきた毛利の輪刀を避けて上に跳ぶ。

通常ではありえない高さを跳んで、私はマストの上に着地した。

これぞ、オリジナルアイテム<ジャンピングブーツ>。

<弾む石>と<グラビ石>を使って作った靴なんだけどね。弾む石の跳ねる力とグラビ石の空に浮かぶ力の相乗効果で、高く跳ぶ事ができるんだ。

このままだと、下から毛利の攻撃を食らいそうなのでそのまま次の船に跳ねて逃げる。

作戦名『因幡の白兔』だ。

ぴよんぴよん跳ねながら、船から船へと乗り移っていったら、途中で元親に会った。

「そつちに毛利行かなかったか？」

旗艦に行ってみたら、もぬけの殻だったんだよ」

「うん。来た来た。なんか私を人質にするなんて言っていたから、逃げてきたよ」

少し待つと毛利も船から船へと飛び移り、私を追ってきた。

おお、義経の三艘跳びを実際にする人が存在するとは。

「ちつ、合流したか。だが、勝負はここからよ！」

「はっ、俺が怖くて逃げた田舎もんがー！」

「中国地方も四国地方もどっこいどっこいの田舎具合じゃないの？」

ブンと錨を振る元親に、輪刀を巧みに操って攻撃を反らす毛利。

私はそろりそろりと気付かないうちにその場を離れる。

こいつらのような婆娑羅者の戦闘に巻き込まれたら、命が幾つあっても足りない。

「日輪に捧げ」

「うげっ!？」

あれは、毛利の必殺技だし。

私は慌てて懐からく時の石版を取り出して投げつけた。

カコーン

と、半分陶酔状態だった毛利の額に時の石版が当たり、毛利の時間が止まる。

その間に元親が武器を跳ね飛ばし、更に私が生きてる縄でグルグル巻きにする。

そこまで終わると、時の石版の効力が切れて、毛利の時間が動き出す。

「くっ、またしてもお前の道具に負けたか！」

「はーっ、はっはっはっ、ざまーねーな、田舎もん！」

お前はほとんどなにもしていないだろう。

なんか毛利に対して凄く偉そうでムカついたので、後ろから海に蹴り落としておきました。

凄く油断していたのか、私如きの蹴りで海に簡単に叩き落される元親。

それを見て、元親を鼻で笑う毛利。

私は、縄を解いて毛利を立たせると輪刀を返す。

「よかるう。この一ヶ月の間はこの航路はお前のものだ」

「はいはい。では、本日の戦闘はこれで終わりと。みんなー、せんとーしゅーりょー！」

私が大声を言うと、それまで剣を交えていた兵士達が剣を納めて帰り支度を始める。

うん、ホント恒例行事になってきているな……。……。

まあ、兵士の訓練には丁度良いからいいのだけれど。

イヴァンとミルカツセも、服を血に染めて戻ってきた。

イヴァンは思いっきり戦えたせいかな、随分とすっきりしている。うん、ホント昔に比べて随分とやさぐれたね！。

「あれ、フレイ。長曾我部さんは？」

ミルカツセがキョロキョロと元親の姿を探す。

身長が高いので、目立つんだよね。元親は。

その姿が見えないのが不思議だったんだろう。

「ああ、あそこ」

私が指差した場所には、縄梯子を使って登って来ている元親と、それを晒いながら持っていた采配で突き落とそうとする毛利の心温まる光景だった。

これで、この2人は幼馴染だというのだから良く分からないものがある。

どういいう子供時代だったのか……。

「2人とも飽きませんね」

「お互いまだまだ子供って奴よ。はー、帰って風呂入ってさっさと寝よ」

長曾我部邸は、温泉の水を引いて常時入れる風呂があるんだよね！。さすが、道後温泉の地だわ。

私は一回大あくびをして、血なまぐさい甲板に座って、マストによっかかる。

そして、目を閉じ陸地に戻るまでしばしの間眠りについた。

BASAフレ！3

カコーン

鹿威しが鳴る庭園の中にある東屋で、私と男は向き合っていた。

男は畳の上にある茶碗を茶筌で泡立て、私へとその茶碗を差し出した。

私は見よう見真似の作法で飲み干し、茶碗の口を拭って相手へと返す。

そして、横に置いていた木箱を男へと差し出した。

「赤色のお菓子でございます」

「……死国屋、卿も悪よな」

「いえいえ、あなた様ほどでは……ぷっ」

さすがに耐えられなくなって、吹き出してしまふ。

するし、今まで我慢していた反発か、笑いが止まらなくなってしまふ、畳の上で悶絶する私。

どこの悪代官と越後屋の会話だと突っ込みたくなった。

いや、頼んだのは私なんだけどな。

「お久し振りです、松永様。お頼みになられた品のお届けにあがりました」

気を取り直して、起き上がり乱れた衣服を整え、ぺこりと頭を下げる。

松永様こと、松永久秀は私のお得意様だ。

「茶番はもういいのか？」

「ええ。どうもありがとうございます。ご確認はなさらないので？」

私から受け取った箱を、そのまま茶室の入り口に來た部下らしき男へと手渡す。

「卿のアレの品質は良く知っているからな」

「お支払いはいつもの通りで？」

「ああ。帰りに受け取るがいい」

「毎度！ さて、商売話は終わった所で、お茶をもう一杯所望してもよろしいですか？」

笑いすぎて喉が渴いたので、お茶を所望した。

「毒を盛られるとは思わないのか、卿は？」

「あなたはそんな無駄なことはしませんよ。貴方の火遊びにぴったりの玩具を提供出来る限り、貴方が私を殺す理由は無い」

あくまで、私と松永久秀は商売の相手なのだ。

「違うない」

なんだかんだ言いつつ、松永久秀は私に二杯目のお茶を渡してくれた。

私は、懐から茶菓子を取り出して食べながら飲む。

最初の茶菓子は全部食べちゃったからね！。

「それにしても、卿も存外薄情だな。この玩具が誰に使われているか分かっているだろうに」

「ああ。そう言えば最近は一つ目の竜にご執心でしたね。確かに、主君は親しいみたいですが、それが私の商売と何の関係が？」

シレつと言い返しておく。

それに、そもそも私が金策に走るのは元親のせいもあるのだ。

あの男は何度言っても、重騎に金を突っ込むのをやめないのだ。

まあ、なけなしの良心があるので、後日傷薬を贈る事にしよう。

「竜が貴方如きで死んだら、彼もそこまでの男だったということ。鯉が竜にならずに死んだと言う事でしょう」

さて、お茶も飲み終わったのでそろそろ帰りますかね。

早く帰らないと、松永久秀の火遊びに巻き込まれてしまう。

<燃える砂>を大量購入したからな！。

きっと彼流の趣向を凝らした舞台で、独眼竜は踊らされるのだろう。

ご愁傷様。

<<おまけ>>

四国に帰ると、珍しく元親が帰ってきていた。

今回は九州の方へ行くって言っていたけれど、どうしたのだろうか？

船を見てみると、どこかとやりあったのか、明らかな闘争の跡。

首を傾げながらも、屋敷に入りいつもの皆の溜まり場所となっている私の部屋へと向かう。

「イテツ！」

「ミルカツセ、もう少し優しく……」

「知りません！」

「ただいまーって、うわ、珍しくこっぴどくやられたみたいね」

私の部屋には前身傷だらけの元親が、ミルカツセに薬を塗って貰い、包帯が巻かされている姿があった。

「今回は早かったな、フレイ」

「今回は、配達が一軒しかなかったから……って珍しくこっぴどくやられたみたいね」

「ああ。チツ、あの狂信者め……」

松永から受け取った報酬を部下に渡して、金蔵へと入れてもらう。

ちなみに、嵩張らないように砂金で支払って貰っている。

いやぁ、火薬って良い値段で売れるのよねー。

「狂信者って、九十九島の辺りに本拠地を構えているザビーよね？」

私の元居た世界にはフランススコ・ザビエルが宗教伝来をした事を、日本史の時間で習った。

この世界では、ザビーと名乗り愛を広めるために伝来したらしい。

しかし、彼の愛ってとっても歪んでいるんだよね。

いやはや、この戦国BASARRAの世、歪まない方がおかしいのかもしれないが。

「いつものつもりで避けていたんだが、今回は出力が思ったよりも

強くてな…イタタタ」

ミルカツセもまた宗教者だから、ザビーの行いが我慢できないんだろっなあ。

ザビーとの小競り合いの時に、一番に飛び出していくのは実はミルカツセだし。

まあ、彼らはウチの民にも色々と被害を齎しているので、そろそろ共同でガツンと一回メた方がいいからねー。

今度、遠征を予定しておくか。

ひれに、ザビー城は金目のものが多いからねー。

良い収入になるんだ。

「……へー、出力がねー」

そう言えば、ザビーからく燃える砂を卸したな。

あははは、ちよっとサービスしすぎたか。

うん、これは黙っていよう。

いやあ…いいお金になったものだから、つい……。

「フレイ、近いうちに九州に打って出るからね」

「了解。目的地はザビー城でいいのね？」

「おう！つて、反論しないのか？」

「民も色々と被害受けているからね。ここら辺で一発ガツンとメてくださいな。さーて、留守の間の仕事を片付けましょうかねー。アスラン、留守の間何か変わった事なかったー？」

火薬の出所を探られたら色々とヤバいので、仕事と称してアスランの所に逃げた私だった。

BASAフレ！4

安土方面の商いを終えた私は、堺から船に乗った。

そこから淡路を通って瀬戸内海に入る予定だ。

大阪に近いので豊臣の勢力圏内だが、陸を通るよりはるかに安全だからだ。

日本の海は私達にとってはなだらかな道。

瀬戸内海は私達の庭って訳だ。

「姐御、密航者ですぞ」

「は、密航者？」

船は普段元親が乗っている船より、小型船だ。

荷物は私が行けば秘密バッグから簡単に取れるので、私だけが乗ればいいから小型船で十分なのだ。

それでも、漁業で使う船ではなくきちんとした西洋風の帆船だ。

だって、そっちの方が早いからね。

小回りも効くし。

元親が私の為にと自分の兵の中から、船の運用に長けた兵をつけてくれた。

おかげで、船の運転には何一つ心配していない。

ちなみに、この小型船。私の意見をかーなり、取り入れて作った特別船だ。

ちなみに、部品は錬金術で使う部品を一部使っていたりする。

だって、トトリで船の部品作れるのだから。

おかげさまで、海竜と戦えるだけの耐久力を持った船が出来上がった。

いや、この世界海竜なんていないけどさ。

「とりあえず、引きずり出しておいで……って連れてきたみたいね」

「いってーて。おい、ちょっと間違えたただけだって」

「ごちゃごちゃ言うな。密航しておいてなんて言い様だ」

連れてこられたのは大男って言うてもいいぐらいの、美丈夫でした。長い髪をポニーテールで纏め、背中にでっかい剣を背負っている。髪には羽が挿されていた。

信長公ぐらい渋味と凄味が出たイイオトコだったら、良かったのになあ……。

くそう、イイオトコがいるにはいるのだが、売約済みが多すぎるわ。

「こんにちは、密航者さん」

「え、船長って女の子」

「はいはい。この船の責任者は私ですよ。んで、密航者は基本的に手足を縛ってドボンなんですけど」

ただの密航者ならそうなる。

基本的にその辺りは私の裁量なのだ。

今、この船でのトップは私だからね。

「なあ、この船北に行くのだから？」

「いいえ。四国です」

「……マジ？」

「マジです。間違えたのならば下ろしましょうか？」

「どつやってだよー…」

見渡す限り海・海・海。

「根性入れて泳げば、丸1日ぐらいで陸地に着くのでは？」

そんなに陸地から離れていないし。

大型船でもなければ、そんなに陸地から遠く離れるわけにはいかな
いからね。

「勘弁してください」

男は平謝りに謝る。

「ま、いいですよ。働かざる者食うべからず。この船に乗るのだっ
たらきちんと働いてくださいね」

「分かった。まあ、マツねーちゃんから逃げられたからいいか」

「えーと、まずはウメさんに仕事貰ってくださいね」

私はそう言つとウメさんと呼んで、男を預けた。

「俺、慶二ってんだ。おめーさんは？」

「フレイですよ。四国のフレイ。短い間ですがよろしく」

そう言つと、私は持っていた書類に目を落とした。

売り払った品物と、四国では中々手に入らない絹織物の計算をしな
いといけないんだよね。

面倒だけど、商売をしていたらそのあたりは避けて通れないからな
あ……。

手をヒラヒラと振って、私は書類に集中する。
海では火は基本的に使えないので、昼間の今しか仕事が出来ないんだよね。

明かりはうつすらと光るくほたる石を使ったものがあるので、最低限はあるけど仕事が出来るほどではないし。

「えーと、絹織物が櫃で10箱と…」

ちなみに、この絹織物は海外への輸出用だったりする。

四国で流通しているのは、実は綿なんだよね。

農民がボロボロの麻を着ていたのを見た私は、綿の種を元親に言って手に入れてもらい、それを錬金術を使って増やしたのだ。

なので、四国で流通しているのは正確には綿もどきなんだよね。

けど、綿とほとんど変わらないので重宝しています。

ちなみに、綿と言うのは戦国時代には重要な物資だったりする。だって、船の帆って綿製が一番だったんだよね。この時代。

当然元親達の船は綿製だ。

ちなみに、服は私の作った生地を使ったものを使用している。

これは、長曾我部軍全体がそうだ。

下手な鎧より防御力が高いものね。錬金術で作った布って。

「そー言えば、慶二の服は一部に絹を使ってたわよね…」

パツと見て、気づかない人もいるだろうが、商売をしている私や一部の船員は気付いただろう。

慶二の服が絹を使っていたことに。

船倉にいたせいで汚れてしまっていたけど。

絹と言うのは、当然支配階級や裕福な商人しか着る事が出来ない代物だ。

私も、元親が何枚か着物を仕立ててくれているので、ありがたく貰ったがはつきり言つて着ないんだよね。

仕事をしていたら汚してしまいそうで、怖いんだよ。

絹だよ、絹！

小市民な私には綿で十分だ。

その代わりに織り方をちよつと工夫してもらっているけど。

ピピンに色々と聞いていたんだよねー。

おかげで、色々バラエティに富んだ綿織物が出来た。

「面倒なことにならないといいけど…」

おりしも東から風が吹いてきた。

東からの風は凶事だと言われている。

迷信だとは分かるけど、嫌な予感がするのは確かだ。

最近、豊臣の勢力が増してきたと堺の辺りで噂になっていた。

陸地では豊臣が強いかもしれないが、海では長曾我部と毛利が強い。

それは、強力な水軍を持っているからだ。

けど、豊臣は最近船を作ったらしい。

それは話によると、とても巨大な船なのだそうだ。

でかけりゃいいってものじゃないと思うんだけどねー…。

どちらにしろ、豊臣の動きは当分注意して見ていた方が良さそうだ。私の知っている歴史と違うとはいえ、天下人になった男が率いる軍隊だ。

その動きに注目しておくに越したことはない。

まだまだ天下泰平は遠そうだ。

早く平和になって欲しいんだけどね。

そうだったら、もっと商売もやりやすいのに。

ちなみに、四国は天下統一なんて全く考えていなかったりする。

だって、四国一国でも面倒なのに、全国なんて面倒見たくないですわ。

四国は独立が守れて、自分の好きなように技術開発が出来ればいいんだよ。

元親もソレでいいって言ってくれているしね。

BASAフレ！5

船の底にある船室で、ランタンの明かりを頼りに書類整理をしていたら、轟音と共に船が激しく揺れた。

慌てて、墨の瓶の封をして上へとあがる。

瓶の封をしたのは、せっかく終わった書類が駄目になるのを防ぐためだ。

途中で船倉でベルグランドいもの皮むきをしていたらしい慶二が、タバタと包丁片手にやってきた。

うん、持つ獲物違うくない？

「何が起こったんだ？」

「さあ？ とにかく、上に行きましょう」

上に行くくと、船の運用を一切任せているタツさんが、船員達に指示を飛ばしていた。

「申し訳ないです、姐御。奴ら、警告もなしに撃ってきやがって」

私の姿を確認すると、慌てて報告をしてくるタツさん。

「撃ってきた？ 現在どのあたりよ」

「もう少しでウチの勢力圏ですぜ。ギリギリ大阪の領域。おそらくは、豊臣かと」

「ちっ、豊臣か」

豊臣と四国はあまり仲が良いとは言えない。

天下統一を目論む豊臣と、天下なんてどうでも良い長曾我部は敵対

する理由は無い筈なのだが、彼らは全てを自分の配下にしようと考えている。

独自に貿易などをして、毛利との付き合いもある長曾我部は邪魔者に過ぎないのだ。

ほら、軍の運営ってとにかく金食い虫だし。

はたから見たら、四国って貿易で潤っているように見えるし。民達も比較的余裕のある生活してるし。

内実、家計は常時火の車なんだけどね。

「それにしても、デカイわね」

私は遠方から景気良く大砲を撃ってくる船を見て、そう言った。

正直外国船で長期の船旅をする船は見慣れているけど、その私からしてみても豊臣の軍船は巨大だった。

正直、遠近法があると言ってもそれを感じないくらいデカイ。

一瞬、私の目が悪くなったと思ったくらいだ。

私が今乗っているこの船とは天と地にも大きさが違う。

「秀吉…」

慶二が船を睨むように見ている。

どうやら、訳アリのようねー。

「振り切れる？」

「やっつてはみますけど、中々早いですぜ」

そう言うと、タツさんは大声でスピードアップの指示を出す。

「おい、俺をアノ船に……」

「黙ってなさいな」

私はそれだけ言うと、慶二を無視した。

慶二にも言い分はあるだろうけど、今は構っている時間はない。

その間も船は逃げ続ける。

豊臣の船が撃つ大砲を、絶妙に避けながら進んでいく。

「なかなか奴らも素早いすな。振り切れませんぜ、姐御」

「チツ、面倒な。総員戦闘態勢。大砲の準備をして、スピードを緩めて近づけて」

「はっ!? それだったら、アツチの大砲が!」

「黙ってる。オイ、姐御の言うとおりにしろ」

スピードが緩められ、徐々に豊臣の船との距離が狭まる。

大砲は両舷にそれぞれ二砲ずつ積んでいる。

「撃て」

「撃てーっ!」

バンッと軽い音がして、片側から大砲の火が吹いた。

「小型船、撃ってきました」

豊臣の巨大船で、報告を受ける竹中半兵衛と豊臣秀吉。

「あの小型船を拿捕をすれば、長曾我部に対して有利になるよ。秀吉」

「ああ」

半兵衛の頭の中には、フレイがこれまでに行ってきた業績がまざまざと思い浮かんだ。

貧しくて文化も遅れていた四国を、日本一の貿易国へと変えたフレイ・ローゼンの手腕。

そして、フレイ・ローゼンに付属していた武将たちの強さ。

アスランは防衛線において右に出るものはいないし、イヴァンは白兵戦において無類の強さを持つという。伝え聞く所によると、戦国最強と呼ばれる本多忠勝相手に一歩も退かない戦いぶりを示したらしい。

一説には、膝をも付かせたとか言う話もある。

他にも優れた製鉄法を持ち込んだ鍛冶師もいれば、戦場にまで味方の治療をする医者もいる。

その全てがフレイ・ローゼンに繋がっていた。

「君を手に入れるよ、フレイ・ローゼン。君達的能力は豊臣において最も輝くんだ」

フレイが聞いたら鼻で笑いそうな言葉。

けれど、竹中半兵衛には豊臣のため、秀吉のため、それが全てだった。

「小型船の砲撃、命中します」

この船は避ける事など全く考えずに作った。
砲撃されても耐えられるだけの装甲を、がコンセプトだった筈だ。

さほど大きくない弾の一撃、それだけでこの巨大船が激しく揺れる
など誰が考えただろうか。

「一発命中しました。反撃来ます」

「弾の交換急いで。次左舷、撃つわよ」

「お、おい」

「了解」

船が動き向けていた右舷から、左舷へと方向を変える。

その間も距離は微妙な位置を保ったままだ。

相手の速さに合わせて自分達の速さを調整する。

その技量は、優れた船員がいる四国ならではのものだった。

巨大船は中々のダメージを与えられたが、さすがに大きさが大きさを
だ。

一撃では沈まない。

相手からの反撃の砲撃が、私達の方へと放たれる。

けれど、それは一撃も当たることはない。

ちなみに、私達は回避行動など全くしていない。

当たらないのだ。

「なんで…」

「砲門の方角と距離、それに船の大きさの差からしてこの距離じゃ当たらないわよ。けど、こちらの砲撃は全て当たる。ふふふふ、デカけりゃいいってもんじゃないのよ。デカけりゃ」

陸戦と海戦は全くの別物だ。

それを今、豊臣に示してやるう。

「次は二つとも外さないのよ。撃てーっ！」

ドーンと大砲が火を吹いた。

うふふふ、この船の装備されている大砲は全て私作。普通に出回っている大砲より、威力はかなり高い。

私の激通り、今度は二発とも巨大船に命中した。

傾きだす巨大船。

さて、慣れないダメージコントロール上手くできるかしら？

「船足は落ちたわ。全速前身。スピードを上げるわ。総員、どこかに掴まりなさい」

私はポケットに入れていたく風の精霊の息吹を帆へ向けて開放した。

数日後、私達は中国地方の手近な港で、慶二を降ろした。

毛利との商談があるので、彼とはここでお別れだ。

「まあ、色々あったけど楽しかったぜ」

野菜の皮むきも上手くなつたしな、とは慶二の言葉だ。

「それは良かった。次からは、行き先も聞かないで船に乗り込まないようにしなさいよ」

次乗ったら、今度こそ簀巻きにして沈めるわよと言つと、慶二は頭を掻きながら苦笑する。

「なあ、あの船沈んだと思うか？」

「ああ。あれぐらい大きかったら沈むにしても時間かかるわよ。まあ、多分沈んでいないと思うけど」

最後にチラリと見たが、傾斜は途中で止まっていた。

ならば、きちんとダメージコントロールは出来ていたはずだ。

なかなか、船員のレベルは高いものがあるのかもしれない。まあ、ウチには劣ると思うけど。

「そっか」

安心したような慶二の顔。

私はそれを見ないフリをする。

慶二が豊臣とどんな因縁を持っていても、私には関係の無い話だ。

「それじゃあ、二度と会うことが無いように祈るわ」

手をあげて、慶二に別れを告げる。

「俺としてはもう一度会つてもいいと…」

「慶二、見つけましたわよ！ ああ、フレイ様。ご連絡ありがとうございます」

BASAフレ!6

私は慎重な手つきで、風呂敷を解き中から木の箱を取り出した。木の箱は漆塗りの螺鈿細工の一級品。

「さあ、これがご注文の品になります」

箱を開け、恭しく相手に差し出す。

「あ、おお、これが…」

「はい。真田様ご要望のペンデルのラクトソースがけでございます」
うっとり幸村は、私の差し出した木箱に入っている激甘菓子をつつとりと見ている。

ちなみに、ラクトソースならともかくペンデルはなかなか作るのに手間がかかるので、あまり作らないお菓子だ。材料が色々面倒なんだよね。

スツと竹で出来た楊枝を手渡し、皿の上に懐紙を乗せて盛ってる。

それを渡すと、行儀良く楊枝で切り分けパクリと一口。

ホロリと幸村の顔が崩れた。

この、キングオブ甘党め。

「うまい、うまいでござる!」

「それはようございました」

ちなみに、このペンデルのラクトソースがけの金額は、団子で言うな

らば200本分。

幸村の2か月分の小遣いだ。

なんでか知らないが、幸村は小遣い制らしい。

まあ、その小遣いのほとんどは団子やその他の甘味に費やされている訳だが。

「報酬は、これだ。また、頼む」

「ええ。それにしても、前回から一ヶ月程での追加注文は驚きました」

そうなんだよね。前回、幸村からはアップルパイを頼まれたから当分は注文が無いだろうと思っていたんだけど…。

「この間の戦で手柄を立ててな！」

御屋形様に褒美は何が良いと訪ねられて、フレイ殿の菓子を所望したのだ！

「……さようございりましたか」

キラキラと輝く子供のような幸村の笑顔。

菓子なんか頼まずに、もっと別なもの貰えよ。

「…か、あんた蘭丸と同レベル…」

「フレイ殿は、どうしてこのような美味なものを沢山作る事ができるのか…。よろしければ、某の領地にも店を出して欲しいものだ」
「申し訳ございません。さすがに、我が身は一つですので、四国と甲斐と同時には無理です」

ある意味御得意様だけど、さすがにそれだけの為に甲斐に移転はで

きない。

そもそも、私は長曾我部の領地経営にも関わっているのだ。それを全て投げ出して、甲斐に店を開くのは出来なくもないが辛い。つか、面倒だ。

「ふむむ。いい案かと思っただが…」

無理に決まってるだろ。

ただでさえ、一国の経営でも大変なのに、それ以外にもアトリエ経営なんて出来るか！

アトリエ経営舐めるな。

「ならば、幸村。簡単な話があるぞ！」

スパンと襖を開け放ち、唐突に現れたのは甲斐の国主武田信玄。私の好みとはちょっと離れるけど、マッチョなオヤジ様です。

個人的には同じマッチョでも、島津様の方が好みです。むしろ、島津様なら嫁希望。

「お、御屋形様。い、いつから」

「最初からだよ、旦那。死国屋さんとはさすがに2人つきりに出来ないでしょ。扱っている品が品だし」

「確かに当店は、毒物・爆発物も商っておりますからねえ」

暗殺などに気を使う支配階級では、私が変な動きをしないように見張りも必要でしょう。

まあ、現在甲斐と四国の関係はすこぶる良好故に、害を加える気はさらさらなのだが。

「猿飛様も毎度ご贔屓にどうも」

「あの毒物つてどーやって作ってるの？って言いたいよね。解毒方法が死国屋の解毒薬しかないなんて、なんて毒薬……」

「あれは、純粋な毒物を抽出したものですからねえ……」

私が猿飛氏に渡した毒物は<純粋なる毒>と言う調合品。

その実体は蛇の肝とその他の毒物からなる、毒のハイブリッドだ。けど、その毒物より強力な暗黒水があるって知ったら、果たしてどうなる事やら。

ちなみに、毒物なんて物騒なものを売ったのは、この世界の技術では毒物の解析が出来ないと知っているからだ。

むしろ、錬金術で作った毒物を解析できたらスゴイや。

毎回微妙に材料が変わっているせいで、毒の成分も微妙に変化しているだろうし。

「しかも、最近松永久秀に火薬を卸したでしょ？」

竜の旦那が苦労してみたみたいよ？」

「おほほほ。さすが、名高い忍びの猿飛様。よくご存知で」

私も特に隠していないが、本当に良く知っているな。

「最近、自分がなんていわれているか知ってる？」

騒乱の影に、死国屋アリだっさー」

「まあ、広告料を払わなければいけないかしら？」

お互い笑顔で牽制しあう。

ちなみに、猿飛氏にとって私は、大事な主を悪の道（甘味道）に引き込む悪人なのだ。

まあ、なんでも扱うと言っても、やはり戦国乱世。物騒なものほど売れ行きがよいのは当たり前。

一応回復薬とかも売っているんだけどねえ…。

この世界の有名な大名ともなれば、バサラなる不思議な技が使えるのが当たり前だし。

むしろ、力があるから大名（国主）をしていられるとも言つ。

「幸村よ、フレイの甘味が毎日食べたくば良い方法があるぞ！」

「なんでござりましょう、御屋形様ああああ」

妙なドツプラーつけんな、幸村。

「フレイを娶るが良い」

娶るねえ…。

唐突な信玄公の発言に、猿飛氏が眉を潜め、幸村が呆けた顔をした。次の瞬間、

「は、はれんちいいいいいい！！！」

と絶叫する。

あああ、耳を押さえるのが遅れた。

キンキンする…。

「何を言う、幸村。フレイを娶れば、毎日フレイの手料理を味わえるぞ？」

年の頃も丁度良い。似合いの夫婦雛になるだろうよ」

どちらかと言うと、私が齎す莫大な利益の方が大きくないですか？確かに嫁として嫁いだのならば、当然旦那様に加勢するのは当たり前の話となりますが。

「私への縁談なら、元親様を通してくださいませ。それに、私にはお慕いする方がいますゆえ、出来ればごめん蒙りたいです」
「ふむ、誰じゃ？」

幸村は確かにまだ未熟な所はあるが、将来的に有望じゃぞと押し売りをしてくる。

いや、確かに才能はあるし、意欲もある。顔も、まあカッコカワイイので、もてるだろう。

その女に免疫が無い所とかがなければ。

「島津義弘様でございます。私、自他共に認めるオヤジ趣味です。真田様ぐらいの年には食指が動きません」

むしろ、無理。

まだ、信玄公が私を娶ると言ったほうが、可能性は高いと思う。

「オヤジ趣味…」

猿飛氏の頬が引きつっている。

いや、でも事実だしなあ…。

「なら、ワシに嫁ぐか？」

「おほほほ、愛妾のかた全て手を切ってから言ってくださいませ」

それに、微妙に趣味じゃないしー。

「はれんちーはれんちー」

どうやら、私と信玄公の会話に頭がパンクしたのか、幸村は壊れた

蓄音機のようにひたすら破廉恥を連呼している。

でも、これぐらいの会話でこの反応。

私の事抜きにしても、大丈夫なのか？と心配になるな。

後日、本気で釣りがきを信玄公は四国に届けた。

幸村と自分の分。

キレたイヴァンとアスランが、武器を担いで出陣しようとするのをミルカッセと2人で止めていたら、元親がいつの間にかいなかった。

いや、私まだ結婚なんて考えてないんだけどねえ…。

むしろ、オヤジ以外は結婚したくない。

信玄公は、ほらまずは身辺整理してくれないと、無理だわあ…。

屍を越えるだど？むしろ踏み抜けと言いたい1

私はその風景を見て、一言呟いた。

「なに、このド修羅場。いや、この場合はある意味虐待だろ、オイ」とあえず、この世界の友人のドタマを後ろから殴り倒し、赤子を救出した。

全く、何を考えてんだ。

赤ちゃんにミルク代わりに自分の血を与えようとするなんて。

「聞いてんの、氷の」

「あの、氷の皇子様はその気絶なさって」

チツ、神の癖に案外情弱だな、オイ。

「いえ、そのフライパン…」

「え、便利でしょ？」

料理によし、武器によしの最高の品よ」

真名姫の顔が思いつき引きつっていた。

いつもの如く、扉を適当な場所に繋がたら、出てきたのは平安時代。ここそと町を見て、似たような衣装を作って見学に行ったら、人相の悪い男にに捉えられた人魚姫がいたので捕獲、もとい救出してみた。

ご飯をあげて色々聞いてみたら、どうやこの町は京と呼ばれてい

る町で、どうも文化的には平安時代に酷似していた。

けど、違ったのが夜になったら時々物の怪と言う化け物が出る事があるぐらいか。

一瞬、この人魚もそーいった物の怪の一人かと思ったら、真名姫は苦笑して、

「私はこれでも神なんですよ」

と教えてくれた。

物の怪は倒したら死ぬが、神は基本的に不死らしいし。

しかも、真名姫の場合は人魚の肉は不老不死の素だとして、狙われ毎度毎度肉を抉り取られる日々らしい。

うわーい、大変だなあ。

もしかして、今回私が殴り倒した奴らもそーいう人だったのかもしれない。

多分そうだ。悪人面だったし。

どこの世界も似たような輩は出てくるようだ。

「まあ、いいや。これからは二度と人間に捕まらないようにするのよ」

「はい。ありがとうございました」

適当な川に真名姫を逃がして、私は京の町に戻った。

とりあえず、アトリエを開いて生活しましょうかね。この世界に飽きるぐらいまでは。

それからなぜか何度も何度も真名姫は人間に捕まり、その度に遭遇すれば助けてきた。

そして、いつの間にか真名姫が人間に囚われることもなくなり、ある場所に住み着いてた。

その場所が、この氷ノ皇子の住処の水道だったのだ。

私は、真名姫を通して氷ノ皇子と友人になった。

この皇子、体の所々が氷で薄ら寒いような人なのだが、優しい人だった。

うん、優しすぎて今回のような事になったのだが。

なんでも、此処に子供が捨てられたらしい。

それが、この赤ちゃん。

「朱点と名付けた」

「名付ける前に、自分が子育てに向くか考えなさい」

本気で後ろ頭をもう一度ドツイたるか。

そもそも、こいつは面倒だからと自分の食事もまともに食べないような自堕落な部分があるんだ。

そんな奴が子育てだと？

「子育て舐めんな。乳の代わりに血を与える阿呆に子育てできるか！」

朱点と名付けられた赤子に、自作の哺乳瓶とミルクを与えながら皇子を睨みつける私。

皇子はどうして怒られるか分かかっていなかった。

そうだよ。男だもんね。分かる訳がないか。

「真名姫、当分滞在させて貰うわ。じゃないと、期間的にはこの子が健やかに育って、親離れするくらいまでは」

「はい、よろしく願います」

「フーか、ここ子育て用品なんて何一つないわよね。まずは、オムツと服か」

「だったら、私が縫いますね」

「うん、生地はこれを使って」

ポンと投げ渡したのは国宝布。真名姫は目を丸くしていた。

「絹のような手触り……。こんないいんですか？

京の帝の子供でもこんな立派な布はお持ちじゃないのですの……」
「構わないわよ。幾らでも作れるから。とりあえず、これでおむつと衣服を縫ってあげてよ」

後は、皇子にベビーベッドの一つぐらい作らせるか。

無駄に器用で力があるんだから、それぐらいはして貰おう。

こうして、私の子育ての日々が始まったのだった。

実はこの子が後にこの世界を大騒動に導く存在だなんて私は知らなかった。

いや、知ってても育てただろうけど。

朱点は非常に聡明な子だった。
聡明すぎて、子供の悪戯もたいそう性質が悪い。

今回は京の子供達と一緒にあって、寺院の神様の像に落書きをしたとの事だ。

一応アトリエの出口をたまに京にも移していたので、朱点の引き取り保護者は私という事になっている。

呼び出された私は、寺院の坊さんに頭を下げて、更には朱点が壊したらしい仏具の弁償もした。

まあ、弁償した物品の金は後日皇子から接收しておこう。

元々の引き取り主はアイツだし。

そして、帰宅した朱点は現在おしおき中だ。

「ちょ、いい年した少年に半尻で尻叩きは犯罪だって！」

「古今東西、悪い事をしたおしおきはコレだって決まってるのよ！」

生きてるナワに縛られて半分糞虫状態の朱点を膝に乗せ、服をめくり、バチンバチンと叩き上げていく。

「うわーん、ごめんなさーいーい」

朱点が泣きながら謝ってくるが、

「はい、嘘泣きご苦労様」

「ちっ」

やっぱり、嘘泣きだったか。

まったく。悪い事をしたら皇子も真名もきちんと怒らないから、こーいう事するんだってば。

皇子は大人に対するように諭して終わらせるし、真名は真名で悲しげな顔で見つめるだけだ。

駄目だ、この2人。完全に子育てには向いてない。

子供が悪い事したら、キツチリと目くじらを立てて叱るぐらいでちょうど良いのだ。

それで、子供は自分がした事が悪いことだと実感するのだから。

「ホントに痛いつて、フレイ姉さん！」

「はい、あと94回ね」

「百叩き!？」

「今晚は尻が痛くて寝れなくなると思いなさい」

「ごめんなさああああい！」

本気で泣きの入った朱点だった。

その日、朱点は尻が痛くて寝れなくなった。

ちなみに、私の手も痛くて湿布、張りました…。

まったく。悪戯するなら、バレないようにやりなさいよね。

屍を越えるだと？むしろ踏み抜けと言いたい2

イヴァンとアスランからSOSが来たので、2、3日程度居ないから告げて、戻ってきたら都が劇的 microfurther になっていました。

そして、私が居なくなって云年以上経っているのが判明。

更には朱点童子なる化け物の親玉が突然現れて、京を滅ぼしたと知った。

「ウチの子と名前が一緒なんてイヤになっちゃうわ。さっさと、皇子の所に向かおう。ああ、まさか時間の流れにこんなに差があったなんて……想定外もいい所だわ。」

お土産、これっぽっちで足りたかしら？ ねえ、イヴァン？」

「俺的にはフレイ姉が、こんな所で子育てしてた方がビックリだよ。これで何回目だよ。子育て」

「えー……」

指折り数えてみる。

「アイルーの子供も子育てに入るのかしら？」

「どちらかと言うと、あれはペットだろ」

なるほど、って違う。

今回は暇だったからと言うので、イヴァンも付いてきた。

ちなみに今回の一件の後始末は全部アスランに押し付けたいらしい。

ご愁傷様です……。

「まあ、いいや。とにかく、私の友人の氷ノ皇子つとヤツの所に行くわ。多分そこに皆が…って、なんで魔物っつーか、物の怪がいのよ?」

確かに物の怪は多少住み着いていたとしても、どれもこれも気性の大人しいのばかりで、襲ってくるどころか会う事すらも稀な奴らばかりだった筈だ。

なのに、入ってきた瞬間目の色を変えて襲ってきた。

「何か変、変だわ」

「いや、魔物が闊歩している時点で変だろう」

突っ込みはいいのよ。私は慌てて、覚えている道順を辿って氷ノ皇子の所まで向かった。

「ちょっと、皇子。何事よ、これ」

「フレイ、なのか…?」

真名姫と氷ノ皇子が私を見た瞬間、死人を見るような目で見られた。え、もしかして故人だと思われていた?

確かに十年近く帰ってなかったけど…。ゆ、行方不明者の搜索って確か7年じゃ…。

「なんで生きていたら教えてくれないんですか!

フレイさんが居れば、朱点も…」

ホロホロと流れた涙が、瞬く間に宝石となって散っていく。

ああああ、マーメイドの涙。しかも、おそらく高純度の出来立てほやほやの一品がああああ。

「朱点、そう朱点はどうしたの!？」

「朱点なら、地獄に……」

ペタンと私はその場に座り込んだ。

「地獄……死んだの……?」

悪戯者だった朱点の事だから、死んで地獄に逝ったのだと思った。あああ、悪い子じゃなかったのに。

「なに、フレイ姉の養い子って亡くなったの?」

「フレイ、この男は?」

「私の弟。あの時この子ともう一人兄がいるんだけど、そっちからSOS 手伝いの要請の事よ が届いてね。それで向かったんだけど、まさか時間の流れが全く違うとは思わなかったわ」

私の説明に、どうやら私の変わらないっぷりに納得がいったようだった。

いや、私はある程度年取ったら若返っているだけなんだけどさ。

一応道士としての修行も積んだから元々年が取り辛いんだけど、それでも年は取るからね。特に肌なんてそれが顕著に現れるから、定期的に若返りをしてるのだ。

「朱点なら生きています。私たちが朱点と名付けた養い子は、朱点童子、もしくは黄川人と呼ばれている」

「朱点童子が朱点……。って言うか黄川人ってどこから……」

そこで初めて私は、黄川人がどういう生まれでどういった経緯で氷の皇子の所に来たのかを知ったのだ。そして、神々の企みも今初めて知った。

「双子の姉が天界の最高権力者……。完全に神々の玩具ね」

神々の思惑に踊らされて、家族を失った子供。それが朱点、もとい黄川人だったと言う訳か。

「フレイがいなくなった後、私はあの子が力を欲しているのを知り、それを与えた。そして、封印され、もう一人の朱点童子に解かれた。そして、もう一人の朱点童子があの子を倒す為に、地獄に向かった。彼らは強い。おそらくあの子は……」

再び泣き始める真名姫。

あああ、勿体無いからそんなに泣かないで。

私は音もなく立ち上がり、ポーチの中から色々取り出し服の中に収納していく。

「フレイ？」

声をかける氷ノ皇子を無視して、私は準備をする。

「イヴァン、ちょっと手伝って」

「はいはい。護衛すればいいんだよね？」

私はその言葉に頷いた。

「まさか、フレイさん……」

真名姫がようやく私が何をするのか思い至つたらしく、驚きを隠せない表情をした後、少し待ってくださいと色々と薬つばい物を持ってきた。

「とりあえず、私が持っているだけの薬です。フレイさんの薬ほどではないと思いますが、役に立つと思います」

「ありがと、真名姫。皇子、子供が悪い事をしたら殴ってでも改心させるのが親って言う者だと思っわ。」

私はあの子を生んではないけど、育てたのは私よ。あの子にミルクを飲ませ、字を教え、育ててきたわ。

だから、親の責任として殴ってでも連れ戻してくるわ」

そして、迷惑をかけた方々に謝罪行脚だ。

ちなみに、天界は除く。

あれは、自業自得というものだ。

イヴァンも居るのだ。

勝機は十分にある。まだまだ子供に負ける訳にはいかない。

私は口を開けたまま固まっている氷ノ皇子をビシリと指差し、

「そして、あんたも後で正座で説教よ。全く、子育てを甘く見るなとあれ程言ったでしょう！」

子供に余計な力を持たせるんじゃないわよ。

返事も聞かず、私は地獄に向かって一步踏み出した。

月城家の戦いはいよいよ大詰めを迎えていた。短命と、種絶の呪いをかけられて100年近く。彼らと朱点童子黄川人の戦いは大詰めを迎えていた。

「あはははは。まったく、たいしたものだよ。君達も」

鎖に捕縛された初代当主の母、お輪。

彼女は子供である初代当主を助ける為、朱点童子に捕縛された。

その彼女を朱点童子の元から助け出し、朱点童子を倒し自分達にかけられた呪いを解く。

その為に今まで何十人も一族の者が、その短すぎる命を使い、繋ぎ成してきた目的。

それが、今ようやく果たされようとしていた。

「ホント、馬鹿だよね。神に利用され」

ズン

ここまでに至る道である地獄道に小さな音が響いた。それが始まりだった。

ゴオオオン

最初に異変に気づいたのは、黄川人だった。

自分を倒しうる可能性を持っているのは、自分と同じ存在である月城家の子供たち。

神では倒せなかった自分を唯一倒しうる可能性を持つ、もう一人の『朱点童子』。

神は黄川人の敵ではなかった。
数多の神を捉え、魔物の中などに封印した。

今、彼を倒せる者は自分の目の前に居る筈なのに、それなのに感じる確かな威圧感。

それは地に底のここまで響く音と共に、次第に大きくなっていった。

そして、月城家の4人もまた遅れながらも気付いた。

黄川人は今、事態が自分が考えていなかった方向に転がりだしたのを認めた。

意識の半分を此処から地獄道へと移そうとした矢先の事だった。

そして、最大の音がお輪が囚われている壁を突き破って、この場所に高々と響いたのだった。

黙々とあがる煙に、いきなり捕縛を解かれその場にへたり込むお輪だが、意識はしっかりしているのか目はキツと黄川人を睨みつけている。

「到着了。やっぱり、ダンジョンは最短距離ね」

「相変わらず力技だなあ……」

この場所に漂っていた緊張感を粉碎して、赤と黒が地獄の最奥にやってきた。

屍を越えるだと？むしろ踏み抜けと言いたい3

地獄道は本当に地獄みたいな場所でした。

いや、よもや冥界以外の場所で地獄を見る事になるとは思ってもなかったわ。

その地獄道の道は、なかなか厄介だった。敵が多いし、変に入り組んでいるし。

最初は真面目にダンジョンら挑んでいたんだけど、途中でイラついて敵諸共壁ごと吹っ飛ばす事に決めた。ちなみに、潜ってから1時間後の事だった。

ゴアアアアアン

何の感慨もなく、魑魅怨霊どもを吹き飛ばし、その屍を足で踏みにじってここまでやってきた。

「そろそろ最奥かな。それにしても、フレイ姉の養い子って悪趣味だよ。なに、このダンジョン」

ぺしぺしと壁を叩くイヴァンに、私は肩を竦めた。

「普通の事違ってちょっと変わった子なのよ。けど、いい子よ。頭は良いし、天邪鬼だけど優しいのよ。とーりーっても分かり辛いけど。氷ノ皇子の髪をバキリと折りまくった時なんか、私に毛生え薬を頼むような子よ？」

気が利いて可愛い子じゃない。

「それ、優しい違うだろ…。うん、さすがフレイ姉。受け入れ幅が半端ない…」

「誉められたら照れるわ。って、ここが最後ね。イヴァンちょっと下がってねー」

気持ち悪い内臓のような壁に、ギガフラムを投げた。

ズガアアアン

見事壁に人が楽々通れるだけの穴が開いた。

まだ漂う煙の中、まずは安全の為にイヴァンが入り、次に私が入る。

「到着了。やっぱり、ダンジョンは最短距離ね」

「相変わらず力技だなあ…」

イヴァンの苦笑交じりの言葉を私は黙殺した。

私たちが通ってきた壁には黒髪巫女服姿の推定20代後半の女性と、小さかった朱点を大きくしたような少年。

そして、そんな彼らと相對している青い揃いの衣装に身を包んだ年若い少年達。

これが、真名姫から聞いた月城家の人々か。

「あ、貴方達は」

「あーと、ちよつと子供を捜しに」

「子供？」

「うん。真名姫から此処にいるって聞いていたからね。ねえ、朱点」

私は朱点を見た。

朱点はまるで死人でも見たような目で、私を見ていた。

「嘘だ」

「朱点」

「嘘だ！ フレイは、姉さんは消え、僕はまた捨てられたんだ！」

朱点の目がギリリと不倶戴天の敵を見るような目つきになる。

それに呼応して、身の危険を感じ取ったのか月城家がおのこの武器を抜き放ち、イヴァンもまた私の前に出ようとす。

それを私は手で制した。

「ちゃんと帰ってくるって言ったでしょ。まあ、思ったより時間はかかったから遅刻は認めるけど」

「数十年単位だとすでに遅刻ですらないよ」

「そもそも、私は朱点に全部を話した事はないけれど、嘘は言ったことはないわよ。嘘は」

私の言葉に月城家が「ああ、黄川人のあの詐欺師のような喋りは育ての親の譲りか」と納得していた。

「確かに、そうだけど…」

「全く、帰ったら好きだった饅頭屋は潰れているし、氷ノ皇子のボケは治ってないし、散々だったわよ」

「いや、饅頭屋だけでなく京自体が黄川人に潰されて、いえなんでもないです」

横から口を挟んできた男を一睨みで黙らせ、私は朱点に言う。

「もう、十分に暴れたでしょ。そろそろ帰るわよ」

「帰る…?」

「そうよ。土産としてお菓子もちゃんと買ってきたのよ？」

「あんたが食べるだろうと思って、大量に買ったし、生菓子だから早目に食べないと腐るでしょ」

「そこなの?」

ガクリと肩を落とした朱点から怒気が消えた。

「フレイ姉さん」

離れていた朱点が、私の方へとやってきてギュウっとしがみつく。

「姉さん、僕もう子供じゃないんだ。だから、姉さんなんて……」

「フレイ姉!」

「ちっ、逃げる!」

「逃げてええええ」

朱点が動こうとした瞬間、ドロリとした液体が朱点の手を焼いた。私が後ろ手に放ったく液化溶剤だ。それが朱点の腕に当たっていた。

慌てて朱点が私から距離を取る。

抱きしめるまで普通だった朱点の右腕が、醜くも鋭い爪を持った腕に変化していた。

いやあ、つい液化溶剤使っちゃってしまい一瞬やりすぎちゃったかな?と思っただけど、案外正しかったかも。

生半可な薬剤じゃ、ダメージ与えられなかったわ。

ちよっと見ない間に逞しく育っちゃってまあ。

「あのさ、あんたを育てたのは誰だと思ってんのよ。反省しているフリ、弱っているフリをして悪さをするのは朱点の常套手段じゃない。育ての親を甘く見るんじゃないわよ」

まったく。昔と全然変わってないんだから。

真名姫は騙せても、私は騙せないわよ。

「ホント、良く分かるよね」

「そりゃーね。付き合い長いし。分かったなら、さっさと帰るわよ」

「大人しく、帰ると思う？」

ニヤリと朱点が嗤う。

「いやーね。分かってるでしょ。力尽くでも連れて帰る」

私がフライパンを構え、イヴァンが私の前に立つ。

「なに、その男。旦那でも紹介しに来たの？」

面白くなさそうな朱点。

「これ、弟」

私がイヴァンを指差せば、

「よろしくな、フレイ姉の養い子」

イヴァンが片手を挙げて朱点に挨拶をした。

「それじゃあ、いっちょやりますかね！
派手な兄弟喧嘩ってやつを、ね！」

私が投げたメガフラムが、戦闘開始の狼煙となった。

屍を越えるだど？むしろ踏み抜けと言いたい4

こう勇んで戦闘に入ったのはいいけれど、戦闘自体はあっさりと終わってしまった。

イヴァン+猫二匹による無双祭り状態でございました。

傷だらけで蹲る朱点と、側で武器を構えている私達を月城一族の方々は呆れ顔で見ている。

この位置的に考えたら、朱点って多分ラスボスよねえ…。

此処いかにもラストダンジョンって感じだし。

「動くなよ、フレイ姉の養い子。下手に動いたら斬るから」

首筋にピタリと剣を当てるイヴァン。

我が弟ながら容赦ないなあ。

「ふっ、姉の偉大さを思い知ったか」

此処でゲームのように勝利ポーズなんかしてみたらいいかもしれないなあ。

手早く終わらせられて上機嫌な私に、にゃん太の無常な一言。

「最初にメガフラムを投げてから何もしてないにゃー」

「おだまり」

ごすりと、戦闘中では全く振るわなかったフライパンを、にゃん太の頭上に振り下ろした。

「ぶにゃ！」

毎回思うんだけどさ、敵の攻撃を軽々と避ける猫にしては、私の攻撃は毎回毎回見事に食らってくれるわよね。

マスターからの攻撃は食らわなければならぬ、なんて不文律でもあるのだろうか？

「朱点、もういいでしょう？」

「まだだ、まだだ！」

「チツ！」

イヴァンが慌てて剣を引く。

朱点が、剣に構うことなく突進してきたんだ。

あのままでは、朱点がクビチョンパになってしまう。いや、もしかしたら朱点の生命力を考えるとそれでも生きているかもしれないけど。

私の方へ。

「あはははは、油断大敵だよ、姉さん！」

長く鋭い爪を振りかざし、般若の如き表情で私に迫る朱点。

私は何もせずただ、腕を広げた。

「フレイ姉！？」

イヴァンの攻めるような声が耳に痛い。

けど、育ての親としてここは譲れない。

朱点の顔が驚きに染まり、爪が私の肉体目掛けて切り裂こうとした。

「はあはあはあ」

朱点が自分の右腕を、左腕で掴み無理やり止めた。

「なんで、避けたり迎撃したりしないんだよ！

姉さんは、そんなの簡単に出来るだろう！？」

泣いてなどいないのに、朱点の聲がまるで泣き声のようだった。

私は頬をポリポリと搔いて、

「あのさ、一応育ての親の一人な訳よ、私は。親が子供を信じてやらないでどうすんのよ？」

朱点に私が傷つけられる訳ないでしょ、と笑って言っていると、朱点の顔は泣きそうだった。

ああ、そういう所は昔と変わってないなあ。

この顔だと泣きたいのを無槍我慢している顔だ。

「一度も母さんって呼ばせてくれないくせに」

「だって、どう見ても母さんって年齢じゃないでしょ、私」

私の外見年齢は、私が錬金術を始めた年　すなわち、15歳
にほぼ固定済みだ。

その状態で、朱点の母と言っても説得力は皆無だ。

赤ちゃんの頃ならともかく、子供は成長が早いからなあ。

「なんだよ、それ」

不満げな朱点に私は笑う。
ポスリと、朱点が私に体を預けてくる。

「本当に、なんなんだよ、もう。姉さんが消えて、やっぱり僕は捨てられたんだって思って」

「うん」

「気が付いたら、全てが憎く見えて」

「うん」

「暴走してた」

朱点がポツリポツリと私が居なくなつた後の話をしてくれた。

ううん、どうも私が育てた子つてのは、私に対する依存が大きくなる傾向がある。

イヴァンもいつまで経っても完全に姉離れをしてくれないし。

ルークもイオンも、錬金術士としての腕はその辺りの錬金術士に及ばないくらいの凄腕になつたと言つのに、いつまでも私にべつたりだし。

まあ、ルークはイオンに比べれば幾分かマシなんだけど、イオンはねえ…。

なんで、あんなに黒くなつたんだろ？

やっぱり、オリジナルの元の素質のせいか？

確か、ヤンデレっぽかった筈だし。

そつと朱点の体に手を回し、そつと抱きしめる。

朱点の精神状態も良くないし、さっさと連れて帰って精神を安定させてやりたい。

「帰ろう、朱点」

「はい、姉さん」

朱点はもうイヤとは言わなかった。

私は朱点を抱きしめたまま、気合で抱っこする。

「つか、成人ではないとは言っても私とほぼ同じぐらいの身長がある少年を抱き上げるのってマジキツイです。」

けど、そこは姉としてのプライドでカバー。

「ああああ、腰やる腰やる。ぎっくり腰がきそううううう。」

「イヴァン帰るよ」

「はいよつと。にゃん太、にゃん吉、撤退するって」

「了解にゃ」

イエッサーとばかりに、二匹は撤退用の煙玉を投げた。

もくもくと湧き上がる白い煙に乗じて、私はアトリエを召還し、ドアを開けて中へと滑り込む。

それに一人と二匹も続き、パタンと扉を閉じてしまえばそこには最早私達の姿は無い。

煙が晴れた後、呆然としている月城家とお輪の姿があった。

「そう言えば、私達の呪いってどうなったんでしょ？」

「あああああ、黄川人に逃げられたっ!？」

「わ、私はまだ化け物を産み続けなければいけないのか？」

一人卒倒し、四人は自分達の呪いが解けていない!! 目的が果たせていない状況に狂乱した。

屍を越えるだと？むしろ踏み抜けと言いたい5

黄川人逃亡後、にわか崩れだした地獄から月城家＋一人は命からがら逃げだした。

そして、屋敷に帰宅後地獄であつた事を、残っていたメンバーと話合つて頭を抱えた。

月城家の人々としては、朱点童子を倒したら呪いが解けると思っていたのだ。

それが、当人はいきなりやってきた人間（しかも黄川人の育ての親らしい）と手に手を取つての逃亡。
そして、行く方知れず。

数日経つて、京の付近に溢れていた怨霊は、徐々にその姿を減らしていった。

怨霊を産み続けていたお輪が、救出後一匹の怨霊も産んでいないからだ。

「私達の呪いってどうなつたんでしようね…？」

お輪は救出でき、呪いは解けたが、自分達の短命と種滅の呪いは解けているかどうか怪しい。

だって、一人死なないと分からないし、誰かとヤツてみないと分からない。

しかも、種滅の方は分かるまでに一ヶ月近く時間がかかる。

今日明日と分かるわけではない。

「イツ花、神様はどう言ってるの？」

「その、天界の方も朱点童子がいきなり消えてしまつて困っている

ようでした…」

そりゃーそうだろう。ラスボスがケツまくって土壇場で逃亡するなんて誰も考えない。

こうして、見事に八方塞になり、一応目的を果たしたとも言えなくもない開放感で、一族全員だらーんと気が抜けてしまった状態になった。

事が動いたのは、イツ花を蔵の整理で必要でなくなったアイテムを持たせて京の町に売りに行かせた日の事だった。

まるでイツ花が居ない間を見計らったように、月城家の門扉が叩かれた。

外には、貴族の女性が着るような外出着を纏った二人の女性と、護衛らしき武士の姿。

ちなみに、この時代の女性の外出着は薄いベールな様な物で顔を覆うことが出来る仕様で、顔はうつすらとしか分からない。

けれど、染めといい品といい、絹を使っているのであろうか、艶々と美しい艶を出していた。

一人が桃色、もう一人が蘇芳色だった。

「あの、月城家のお宅はここですらしいのでしょうか？」

布越しに聞こえてきた声は、淑やかだがどこかで聞いたことのあるような声だった。

「え、ええ。ここが月城家ですが何かご用時でも？」

時々、京の帝から怨霊退治などの依頼が届くこともあるし、公式試合への招待も来ることもある。

大体イツ花が在宅時に来るので、イツ花が対応すのだが、今日は留守なのでたまたま近くに居た当主の初花が対応した。

「こーいものですけど、お時間ありますか？」

僅かにベールを割って見せてくれた顔は、地獄道の奥で黄川人を浚ってくれた人物の顔。

「あ、あなたは!?!」

「お宅にかけられた呪いと、その他についてお話し合いに来たのですが。ほら、朱点もちゃんと挨拶しなさい!」

「ちわーっす」

よっ!と暢気そうに片手を挙げた、仇敵の姿に初花は口が引きつらずにはいられなかった。

この場で話すのもなんだからと、慌てて一族の主だった人間を集めて仏間で話し合う事になった。

ちなみに、この仏間。壁にずらりと今までの当主の写真が飾られている。

この世界、平安時代ぐらいの文化レベルとおもいきや、写真とかどう考えても江戸時代レベルの文化があるんだよねー。

まあ、そこそこの値段はするみたいけど。

京の都の復興に莫大な投資をしている月城家からしてみたら、その

程度の金額は全く痛くもないらしいのだが。毎回、当主が変わるたびに写真を撮り続け、ずらりと並んだ歴代当主の写真の前での話し合いでした。

ちなみに、私には無茶苦茶居心地が悪いです。

いや、自分の馬鹿息子のせいで被害を蒙った被害者の方々の写真ですから…。

あ、そうそう。色々話し合った末、朱点を正式に息子としました。ちなみにザールブルグにも私の息子として届け出ました。これで、実質共に私の息子です。

これを機会に朱点と言う名を、黄川人と改めました。

最初は全く別の名前に使用可と思ったので、黄川人が慣れているからこれでいいよと言ったのでこれになりました。

私は朱点でも黄川人でもどっちでも良かったのですが、元々朱点童子と言う言葉自体がどうもあまり言い意味ではないようだったので…。

朱点童子って言うのは、神と人間との間の子を指すようで…。さすがにわが子に、そんな名前をつけません。

ちなみに、黄川人を朱点と名付けたのは氷ノ皇子なので、二三発ドツいておきました。

どうも氷ノ皇子はその辺の気配りが下手なのよ。

朱点もとい、黄川人を大事にはしているみたいだけど。

私が正式に黄川人をうちの子にすると言ったら、大反発ですよ。

ええ、さすがにウザイので私と真名姫で黙らせましたけど。現在、

魔法の鎖でがんじがらめにして、吊るしています。

まったく、反対するぐらいなら黄川人が非行に走り出した時点で止めなさいよ、と言いたい。

ほんつつつきで不器用すぎるぐらい不器用なんだ。

黄川人を愛しているくせして、表に出さないんだから。

さて、私が居心地の悪さでムズムズしているのに比べて、黄川人は全員の写真をじっくりと見て、

「ああ、いたいた。こいつが確か鬼の朱点童子から僕を解放してくれた奴だったっけ？」

なんて思い出しては、私に説明してくれている。

ああああ、ますます肩身が狭くなる。

「えーと、イツ花が居ないせいで、すいませんけど水ぐらいしか出せないんですが。煎餅でもあればよかったですけど…」

「いえ、構いません。今回は、ウチの馬鹿息子がした後始末と謝罪に來ただけですか。ほら、黄川人。さっさと呪いを解きなさい」

「はいはい。えっと、君が現在の当主だっけ？」

「え、ええ」

現在の当主は、私達を迎え入れてくれた女性のようで、名前は初花ちゃんと言っらしい。

御年1歳1ヶ月の、若い女性です。

いや、頭では呪いのせいで人より早く成長するって分かってはいたんだけどねえ…。

実際目にするとかやっぱりびっくりするわ。

黄川人が初花ちゃんの額に手を当てて、少し動かす。

「ほら、解けた」

「ほん、とうに…?」

「うん。これで君達月城の人々は普通の人間と変わらないように老いて、人間との間に子供を残せるようになる」

黄川人が少しバツの悪そうな顔をする。

「やっと、やっとこれで終わるんですね…」

ホロリと初花ちゃんが涙を零し、後ろにいた月城家の面々もお互いに抱きしめ合って涙を流す。

中には、これで河童や鯀と交神しなくて済むと泣いてる女性達がいるが。

河童？鯀??

とにもかくにも、これで彼らを長年苛んでいた呪いが解けたのだ。

「さて、うちの黄川人が今までお宅の一族にしてしまった事は、大変申し訳なく思っています」

床に両手を着き、頭を下げる。

よーするに土下座をしたのだ。

黄川人がやってしまった事の被害を考えたら、京の町全体に土下座をしないといけないんだけどねえ…。

さすがにそれは無理っばいから、一番被害にあった月城家の方々に謝罪しに来たのだ。

「いえ、その、私達も色々とは何があつたかは聞き及んでいますから。主に朱点…黄川人からヒントも貰いましたし。確かに恨んでいないとは言えませんが、その黄川人の気持ちも分かりますから…」

コクコクと頷く月城家の人々。

結局月城家も黄川人も、神々の企みの被害者と言う点は一緒なのだ。

その言葉を貰つて、ようやく私は土下座から頭を上げた。

ちなみに、黄川人も横で強制的に土下座させた。

「ああ、知っていたらしたんですね」

「はい。私達が何の為に生み出されたか、最初は知りませんでしたけど、徐々にですが…」

神と交わり子を残すときに、口の軽い神などが時々サラリと言う言葉もヒントになったという。

歴代の月城家の人々は、すれを全て書き残していったらしい。

その、子孫達に役に立つようと日記を書く人が多いらしくて…。

怖い、怖いよ月城家の人々。

閨で言った言葉を全て残していったなんて…。

神様も大変だわ。軽々しくピロートークも出来やしない。

「黄川人も、神の被害者ですから…けど、お業さんには会つて」
「会う必要なんかないよ。僕の母さんは、フレイ母さん唯一人だ」

ベタリと私の背中に張り付く黄川人。

ああ、もうこの子は。

「今はまだ。けど、いずれ連れて一度会いに行きます。どうやら、お礼をしにいく人はまだ残っているみたいですし」

「ええ、私達も、まだ終わってないと思っっているんですよ。私達を利用してくれた方々に一発ぶち込みに行かないといけませんから」

「どうやら、現在イツ花ちゃんがないのはそのせいだったりするらしい。」

「なんでも、天界の昼子を一発ドツキ倒しにくらしいのだ。」

「利用されっぱなしと言うのも癪なんです。呪いも解けた今の戦力が多分、月城家最高の戦力ですから、今しかないんです」

「これからは神と進んで交わることがなくなり、能力的には落ちていく一方らしい。」

「あら、そちらは昼子ですか。私は、夕子の方なんですけどね。ああ、いいものをあげしまようか」

「ジャラリと取り出したく魔法の鎖」。

「ちなみに、色は禍々しい黒をチョイス。」

「隙を見てこれを投げてください。上手く効けば相手の能力は半減します。ちなみに、氷の皇子で実証済みですので、安心して使えますよ。それと、首尾よく倒せたら、こちらをどうぞ」

「そう言っつて、彼女に手渡したのは所謂メレンゲパイだ。」

「そう、TVとかで罰ゲームに顔で受ける白いアレだ。」

「私的には罰ゲームなノリで作った一品だ。」

「これを顔に叩き込んで差し上げたら気持ちいですよ。味もいい加減マズイですし」

「ありがたくいただいでいきますね」

精神ダメージも大きい。特に自分の顔に自身があればあるほど、ギヤップに笑える一品だ。

にこやかに受け取る、初花ちゃん。

さて、謝罪も受け取ってもらえだし、呪いも解けたし、これで用は済んだ。

京に何の用もない。

昼子へのお礼参りは月城家がするらしいので、夕子へのお礼参りが終了したら、この世界にも早々に足を踏み入れることもなくなるだろう。

イヴァンなんかは、

「立つ鳥跡を濁しまくって退去だね」

と笑っていた。

いや、事実過ぎて何も言えない。

お輪さんにも会ったのだが、彼女は何も言わなかった。

彼女は、果たして知っていたのだろうか？

昼子の企みで、甥を倒す為に人と交わり朱点童子を産み、その結果怨霊どもの母となってしまった彼女。

ただ、お互いに頭を下げあって、全てが終わった。

月城家を退去した後、平和になった京の町で暢気に団子を食べながら黄川人と話す。

「行こうか、黄川人。まずは、もう一人のおじさんに挨拶だね。あと、ルークとイオンと、後私の友達と…」

「何人いるんだい、母さん？」

「んー……、いっぱい」

「……交友関係が広いことで」

面白くなさそうに団子を頬張る愛息子の姿を、微笑ましいと思いつつ私も黄川人と同じく団子を頬張るのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4971t/>

とある錬金術士と異世界の話

2011年12月17日11時46分発行